

ふしぎのくにのありん  
すちゃん ～ALINCE IN  
UNDERGROUND LARGE  
GRAVE OF NAZARICK～

善太夫

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

——仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。——

何故か5歳児位の女の子『ありんすちゃん』として復活したシャルティアによる、ほのぼの的日常を描いた1篇1500文字程のショートストーリー連作です

※ありんすちゃんが踊ります

※最新話投稿については活動報告をご確認下さい

※031おまけ『薔薇は夕日に輝く』ラキユース・アルベイン・デイル・アインドラはありんすちゃん本編ではなく、ラキユースが書いた薄い本の内容な為、ほのぼのしていません。ありんすちゃんも登場しないのでご注意ください。

※この二次作品は原作小説が読了されている方を対象として書かれたもののため、原作未読の方には楽しめない箇所がありますのでご注意ください。

ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

ありんすちゃんがキーノを助手に難事件に挑んでいく『ありんす探偵社へようこそ』もよろしく

# 目次

001 ありんすちやんはじまる | 2

002 ありんすちやんとポンコツうさぎ

| 6

003 ありんすちやんハンバーガーにな

る | 11

004 ありんすちやんぼくじょうにいく

| 15

005 ありんすちやんミルクをのむ

21

006 ありんすちやんとベッドとひみつ

| 24

007 ありんすちやんおめいばんかいす

る

008 ありんすちやんカルネむらにいく

| 29

009 ありんすちやんチャルメラになる

| 32

010 ありんすちやんしつぼうされる

| 35

39

011 ありんすちやんとダメいぬ

44

012 ありんすちやんいもうとになる

48

013 ありんすちやんすやすやねむる

51

014 ありんすちゃんつめをきる

55

015 ありんすちゃんかめんをかぶる

59

016 ありんすちゃんイタズラする

63

017 ありんすちゃんとバイコーン

67

018 ありんすちゃんのかましい

71

019 ありんすちゃんだいかつやくする

75

020 ありんすちゃんていこくにいく

81

021 ありんすちゃんとジルクニフ

87

022 ありんすちゃんはげます | 92

023 ありんすちゃんいすになる※挿絵

あり | 95

024 ありんすちゃんかつさいされる

99

025 ありんすちゃんとザイトルクワエ

104

026 ありんすちゃんがいっぱい

109

027 ありんすちゃんとペンギン

0 2 8	ありんすちやんとエクレアだん	114	る	143	
0 2 9	ありんすちやんりょうりをする	118	0 3 4	ありんすちやんほしがる	147
0 2 9	ありんすちやんりょうりをする	122	0 3 5	ありんすちやんとエロフおう	
0 3 0	番外編・魔法少女いびるありんすちやん	128	0 3 6	ありんすちやんおにになる	
0 3 1	おまけ『薔薇は夕日に輝く』ラキユース・アルベイン・デイル・アインド	132	0 3 7	ありんすちやんときようふのかくれんぼ	155
0 3 2	ありんすちやんメモをとる	139	0 3 8	ありんすちやんはんぶんこおる	159
0 3 3	ありんすちやんもぐらたたきをする	163	0 3 9	ありんすちやんみつごになる	
0 4 0	ありんすちやんありんすちやんに	168			

なる

172

041 特別編・名探偵ありんすちゃん

047 ありんすちゃんときえたおやつ

202

く消えた三吉君の行方く(プレイアデス

く犯人はマーレく

208

な日 より)

176

042 ありんすちゃんふたたびみつごに

214

なる

187

043 ありんすちゃんまたまたみつごに

049 ありんすちゃんメイドみならいに

219

なる

191

044 ありんすちゃんおうこくへおつか

050 ありんすちゃんまたもやメイドみ

225

いにく

194

045 ありんすちゃんあちやんになる

051 ありんすちゃんりゆうおうこくに

229

198

046 ありんすちゃんゆうかいされる

235

052 ありんすちゃんとハロウイン

053	番外編	ジルクニフのクリスマス	240
054	ありんすちゃんサンタクロースになる	245	
055	ありんすちゃんいなくなる	249	
056	番外編	ふしぎのくにのアイズちゃん	253
057	ありんすちゃんをあかずきん	260	
058	ありんすちゃんをあかずきん	264	
059	ありんすちゃんをあかずきん	290	
060	ありんすちゃんのおおそうじ	267	
061	ありんすちゃんおとしだまをあげる	274	
062	番外編	名探偵ありんすちゃんと消えたルプー	277
063	ありんすちゃんスカウトされる	282	
064	ありんすちゃんモモンをみはる	285	
065	ありんすちゃんおやつをたべる	290	



066 ありんすちやんかしこくなる

293

067 ありんすちやんのすぺしやるカ

レー | 299

068 ありんすちやんむくちになる

305

069 ありんすちやんのバレンタイン

デー | 309

070 劇場版 ふしぎのくにのありんす

ちゃん?? | 315

071 ありんすちやんせがのびる

320

072 特別番外編 ルベドでありんす

325

073 ありんすちやんのへいぼんないち

にち | 330

074 ありんすちやんはるがくる

334

075 ありんすちやんがんばる | 339

076 ありんすちやんとひみつかいぎ

343

077 ありんすちやんチャイナドレスを

ひろう | 348

078 ありんすちやんあなにおちる

354

079 ありんすちやんプーさんになる

087	ありんすちやんとアウアウちゃん	392
086	ありんすちやんこまらす	387
085	ありんすちやんひきこもる	382
084	ありんすちやん07211919	377
イ		
083	ありんすちやんとからっぽのヨロ	373
082	ありんすちやんとオツパイ	370
081	ありんすちやんとおふろ	365
080	ありんすちやんねぼける	360

093	ありんすちやんのがーるずとーく	429
092	ありんすちやんあこがれる	422
091	ありんすちやんのたなばた	416
ゴー・オン		409
090	ありんすちやんのショー・マスト	405
う		
089	ありんすちやんときんのはくちよ	401
とマーレとおしり		396
088	ありんすちやんとスポイトランス	

094 ありんすちやんとねむれないよる

434

095 ありんすちやんとコキユートス

439

096 ありんすちやんおえかきする

443

097 ありんすちやんはみた

447

098 ありんすちやんしょうせつをかく

452

099 ありんすちやんとパッド

456

100 ありんすちやんとルビクキユ

459

101 ありんすちやんとみつめ

465

102 番外編・“美姫”ありんすちやん

469

103 ありんすちやんぶきをもつ

480

104 ありんすちやんテニスをする

486

105 ありんすちやんアイドルになる

491

106 ありんすちやんきがえる

496

107 ありんすちやんとふしぎなダン

ジョン

500

108 ありんすちやんとたくさんのラン

- ス  
 109 ありんすちゃんはえる 508  
 110 ありんすちゃんはんせいする 504  
 111 ありんすちゃんねつきをする 538  
 516  
 112 ありんすちゃんとおわらないふゆ  
 113 ありんすちゃんとマーレとさんに 570  
 んのエルフ 522  
 114 ありんすちゃんまたしてもメイド  
 になる 532  
 115 ありんすちゃんスイーツになる 565  
 116 ありんすちゃんとエロさいあく 559  
 117 ありんすちゃんふたたびせいおう 552  
 542  
 118 ありんすちゃんまたしてもせいお  
 うこくにいく 547  
 119 ありんすちゃんVSヤルダバオト  
 120 ありんすちゃんカリンシヤにいく 570  
 121 ありんすちゃんとかいほうぐん 565

- 1 2 2 ありんすちゃんまたまたせいおう  
 こくにいく ————— 574
- 1 2 3 番外編 ジルクニフとリユロ  
 580
- 1 2 4 ありんすちゃんまたまたまた  
 せいおうこくにいく ————— 584
- 1 2 5 特別編・ありんすちゃん理解テ  
 ーブルゲーム ドラマCD 人間理解テ  
 ーブルゲーム より ————— 591
- 1 2 6 ありんすちゃんおもいだす  
 596
- 1 2 7 ありんすちゃんダイエットする  
 603
- 1 2 8 ありんすちゃんたちしよんする  
 609
- 1 2 9 ありんすちゃんとメロン — 616
- 1 3 0 ありんすちゃんのあけおめ  
 621
- 1 3 1 ありんすちゃんのひなまつり  
 625
- 1 3 2 ありんすちゃんけししょうをする  
 630
- 1 3 3 ありんすちゃんツインテールにす  
 る ————— 634
- 1 3 4 ありんすちゃん、ゆかたをきる  
 638

- 1 3 5 ありんすちやんとにじいろのみず  
たまり ————— 641
- 1 3 6 ありんすちやんとしやつくり  
645
- 1 3 7 番外編 ティラの忍者修行  
650
- 1 3 8 ありんすちやんとパスワードスーツ  
655
- 1 3 9 ありんすちやんスライムになる  
661
- 1 4 0 たいまにんアリンズ ————— 666
- 1 4 1 ありんすちやんスーパーロボット  
たいへん ————— 672
- 1 4 2 ありんすちやんはりきる ————— 677
- 1 4 3 ありんすちやんねぼうする  
682
- 1 4 4 ありんすちやんリベンジする  
688
- 1 4 5 ありんすちやんとドラゴンのは  
697
- 1 4 6 ありんすちやんとなぞのメモ  
702
- 1 4 7 ありんすちやんのりょうりたけ  
つ ————— 706
- 1 4 8 ありんすちやんのおしょうがつ  
712

〈最終話〉アリンズ・ウール・ゴウンよえ

いえんに ————— 717

A l i n c e / s t a y n i g h t

723 おまけ編 もしもありんすちゃんが高

の四十二人目だったら…… ————— 732

おぼろど せいおこくのせいき した

736 はたらかない細胞 ————— 742

特別編 亡国の吸血娘(五さい)【前編】

747 特別編 亡国の吸血娘(五さい)【後編】

756

ご注文はうなぎですか? ————— 763

(祝)アニメ四期&劇場版聖王国編制作決

定 ————— 768

かんぜんしんさくげきじょうばんありん

すちゃん ————— 772

オーパードロード劇場版聖王国編公開記念

ありんすちゃん再放送を見る ————— 775







# 001ありんすちゃんはじまる

スレイン法国との遭遇戦において、カイレ様と相討ちとなつたシャルティアは、法国の至宝『ケイ・セイ・コウク』によつて洗脳されてしまいました。

アインズはシャルティアの洗脳を解く為に『星に願いを』を発動させようとはしますが、シャルティアの洗脳はワールドアイテムによるものとわかり、指輪では解除出来ない事を知ります。

やむなくシャルティアを一度滅ぼして改めて復活する事により、洗脳の呪縛から解放する事にしたアインズは激戦の末、シャルティアを倒します。

かくて玉座の間に一同が会し、いよいよシャルティア・ブラッドフォールンを復活させる事になったのでした。

※ ※ ※

ナザリツク第十階層へ玉座の間——。居並んだ各階層守護者、各領域守護者、そしてアインズ、守護者統括アルベドが固唾を飲んで見守る中、いよいよシャルティアの復

活が行われます。

使用されたユグドラシル金貨は総額5億G。その黄金の山が溶けるように形を変えていきます。

アインズの目の前で溶けた金貨が人の形となり……やがて銀髪の少女の姿、いや、一糸もまとわらない幼女の姿になりました。

幼女はゆつくり瞳をひらくと一言、「ありんちゅ?」と言葉を発しました。

「……シャルティアよ。私ができるかね?」

アインズの問いかけに対してシャルティアはまたしても「ありんちゅ?」と答えました。

(……いやいや、そんな事言っていないよ……どうしちゃったのよ、これ……しかも幼女だよな?)

「アインズ様、畏れながら……シャルティアに何らかの異変がおきたかと」

頭を深くたれたアルベドが緊張した面もちで発言しました。

「……うむ。どうやらそのようだな。……何かが復活に足りなかったのかもしれないね。

……ユグドラシルとは違う、という事は考えたくはないが……」

アインズには全く訳がわからず、本当ならば大声で叫びたかったのです。しかしな

がらアンデッド特性により、強い感情は強制的に沈静化されてしまうのでした。

アインズはそんな我が身が好ましくもあり、疎ましくも感じるのです。

「……これは、アインジユちやま。チャルチェア・ブラドホルン御身の前にでありんちゆ」

少女、いや、幼女の姿のシャルティアが平伏します。

(……このシャルティア、案外かわいいかも……とりあえず舌つ足らずながらちやんと喋れるようだな。……もしかしたら以前より賢いかもしれないぞ?——いかん、いかん)

「——あーゴホン。……シャルティアよ、一体何が起きたのか覚えている事を申ししてみよ」

シャルティアが舌つ足らずの言葉で語る話によれば、どうやら王国のセバスと合流する為にナザリックを出発するあたりまでの記憶しかないらしいとの事でした。したがって、何者がシャルティアを洗脳したのかはわかりませんでした。

幼女になったものの、しっかりと受け答え出来ていた為、これまで通りに階層守護者を任せる事として、玉座の間から退出させました。

「……まるで5歳児、といった感じだな……」

既に退出したシャルティアの姿を思い出しながらアインズは溜め息をつきました。

「……金貨は間違いなく5億Gあった……何が足りなかったのだろうか？ ……それともこの世界はユグドラシルとは違うのだろうか？」

アインズはふと、守護者達NPCが皆、シャルティアのように5歳児位の幼児になった様を想像してしまいました。

——ナザリック幼稚園——それはアインズにとっては耐え難い苦痛を産みそうな世界にしか思えませんでした。

※ ※ ※

何はともあれ、残念美少女『ありんすちゃん』はこうして誕生しました。いろいろ失敗もしてしまいましたが、それは5歳児位の女の子のする事、少々大目に見て下さい。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 002 ありんすちゃんどポンコツうさぎ

ありんすちゃんの仕事はナザリックの第一階層から第三階層の守護です。

とはいっても子供になってしまったありんすちゃんには良くわからないみたいです  
ね。

とりあえずしもべのヴァンパイア・ブライド二人に手を引かれながら見回りをしまし  
た。

でも、ありんすちゃんはすぐ飽きてヴァンパイア・ブライドに抱っこをせがみます。  
抱っこに飽きると今度は肩車をねだります。いやはや、見回りにならないですね。

でも、ありんすちゃんは大体5歳児くらいの女の子なので仕方ないですよね。  
肩車は普段見れない景色をありんすちゃんに見せてくれます。

——あれあれ？

茂みの向こうにピヨピヨとウサギの耳が動いています。

「おもしろそうだから行ってみるでありんちゅ」

ありんすちゃんはヴァンパイア・ブライドに肩車されたままウサギの耳を追っかける  
ことにしました。

※ ※ ※

ナザリックの戦闘メイド、ナーベラル・ガンマは焦っていました。

アインズ様が冒険者モモンとしてエ・ランテルに向かうの際に同行する筈だったのに、  
ついつい寝過ごしてしまっただけからでした。

魔法発動——へらビットイヤー、ラビットフット、ラビットテール

「アインズ様は……さすがにもう、いないか……」

急がなくては……ナーベラルは頭の中で言い訳を考えながら全速力でアインズの気配を追うのでした。

（……いつもより30分多く眠ってしまいました……これではダメだ……いつもより30分遅く目覚めました……これでは同じ……春眠暁を覚えずとは良く言ったものでして不覚にも30分程多く睡眠をとってしまったようです……言い訳してみても無理……いつそ誠に申し訳御座いませぬ。寝坊しました。かくなるうちは命をもって償い……

！ え？ ——

「！」

「！」

突然現れたありんすちゃんどぶつかりそうになったのです。

「——シャルティア様、ど、どちらに？」

「ナーベはどこに行くのでありんちゅ？ わらわも行きたいでありんちゅ」

「申し訳ありませんが、私はアインズ様のお供として、あの……急いでおりますので……失礼しま——」

（……もしかしてシャルティア様を言い訳にしたらアインズ様もお叱りにならないのでは？ ……素晴らしい考え。子供になったシャルティア様相手ならきつとお許しくださるに違いない）

ナーベラルはにこやかにありんすちゃんに話しかけました。

「……あの……コホン。……その……よろしければ、シャルティア様もご一緒されますか？」

ありんすちゃんは力強く頷きました。

「わかりました。シャルティア様、ではこれより私がシャルティア様を抱っこして差し上げますね」

ありんすちゃんを抱っこしてナーベラルはアインズを追いかけたのでした。

※ ※ ※



ナーベラルからのメッセージを受け取ったアインズはエ・ランテルの宿屋で待つていました。

やがてナーベラルと一緒にありんすちやんがやってきました。

「——え？ シャルティアが何故？ えええ？」

アインズは動揺を隠しながらナーベラルに問いかけました。

「……ナーベよ。何故シャルティアが一緒なのだ？ シャルティアにはナザリックの守護をさせていたのだが？ これは一体どういうこと——」

ナーベラルは額を打ちつけながら答えました。

「申し訳ありません！ 実はシャルティア様がアインズ様にどうしてもお会いしたいとおっしゃいまして、断りようなくお連れ致しました。……つきましては道中遅れ誠に申し訳ありません」

「——いや、だからここではナーベとモモンなんだって……アインズ様とか言つて誰かに聞かれたら面倒……」

「……ナーベよ。ここでは私は冒険者モモンだ。それ以上でもそれ以下でもない」

「もうし訳ありません。アイ、モモンさ——ん」

「わかればよろしい、いや、よいのだ」

アイNZはありんすちやんを覗き込みました。するとありんすちやんはそんなアイNZの気持ちなど知らぬ気に、幸せそうにすやすやと眠っています。

(……………おいおい……………どうするのよ？ 幼児を連れた冒険者つて……………こんな所を誰かに見られたりしたら何と思われるか……………困ったぞ……………)

途方に暮れたアイNZが天を仰いだ瞬間、ありんすちやんが小さくしやみをしました。

「……………くちゅん！」

途端に魔法が発動してありんすちやんの姿は消えてしまいました。

※ありんすちやんが挿絵を描いてくれました

## 003ありんすちゃんハンバーガーになる

ナザリック地下大墳墓ダミー兼倉庫建設現場——アインズの命でアウラの指揮の下、大勢のシモベ達が働いています。

折しも昼休み。

アウラの前には大きなハンバーガーが置かれていました。

「おっしよくじい〜おっしよくじい〜楽しいた〜のしいおっしよくじい〜♪」

楽しそうに自作の歌を歌いながらハンバーガーを両手に持ち、かぶりつく——

そこにありんすちゃんが突然現れました。どうやらくしゃみをした時に魔法——〈グレートレポーターテーション〉——が発動してしまったみたいです。

「ちよつと、シャルティア。なんでアンタがここにくんによ？ あたしはアインズ様の命令で仕事しに来てただけど？」

アウラは頬を膨らませてありんすちゃんにくつてかかっってきました。

「ひい……なんだシャルティア様……驚かさなくてくださいよ。もう——」

驚きのあまり首が落ちそうになるユリ・アルファ。でも、ありんすちゃんは落ち着い

たものです。

だって、アウラはいつだってありんすちゃんの可愛らしさに妬んでイジワルするんです。

「……せっかいですからシャルティア様も何か召し上がられますか？　ボク……私がお待ちします」

見事にアウラのハンバーガーに挟まっているありんすちゃんにユリは尋ねました。

「オレンジジュースが飲みたいでありんちゅね」

「あたし、ハンバーガーもう一つ。大至急」

不機嫌そうなアウラの声が続きました。

すぐにあるんすちゃんの前にオレンジジュース、アウラの前に新しいハンバーガーが用意されます。ありんすちゃんはオレンジジュースを一気に飲むとすぐさまおかわりをねだりました。その後さらに二杯もおかわりしました。

アウラはそんなありんすちゃんにイジワルな事を言います。

『飲み過ぎておねしよしちゃうぞ』ですって。

でもありんすちゃんは気にしません。

おねしよなんてする筈がありません。ありんすちゃんは知っています。おねしよするのは赤ちゃんだけです。

ありんすちゃんはプリプリ怒っているアウラを後にナザリックに帰りました。

※ ※ ※

——ナザリックに帰って、翌朝——

目覚めたありんすちゃんはベッドの中がひんやりしているのに気付きました。

——なんと、ありんすちゃんはおねしょしてしまっただけでした。残念ながら、アウラが言った通りになってしまったみたいですね。

大変です。この事をアウラが知ったらきつとみんなに言いふらすかもしれません。そうなればありんすちゃんは皆から『おもらしちゃん』と呼ばれてしまうかもしれません。

ありんすちゃんはブルブルと頭を振りました。それだけはなんとしても防がなくてはなりません。

そこでありんすちゃんはシーツとパンツをこっそり洗う事にしました。

そういうえば『洗う』と『アウラ』ってなんだかにてますね。綺麗に洗ったら干します。

ありんすちゃんはパンツをはいっていないのでスースーしますが仕方ありません。と、ありんすちゃんの鼻がムズムズして——

「くちゅん！」

ありんすちゃんとパンツは消えてしまいました。今度はどこに飛ばされてしまったのでしょう？

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 004ありんすちゃんぼくじょうにいく

ありんすちゃんが目を開けると、周囲の景色は見慣れないものに変わっていました。ありんすちゃんは右手を見、左手を見、またまた右手を見てみましたが、しつかりつかんでいたパンツはありませんでした。可愛らしくレースで飾られた真っ白のお気に入りのパンツ。

ありんすちゃんは小さくため息をつきました。お気に入りのパンツが無くなって残念な気持ち、それに、やっぱりパンツがないとスースーするのが気になります。このままだと風邪をひくかもしれない。風邪をひかなくてもまったくしやみでどこかに飛ばされてしまうかもしれない。

ありんすちゃんは周りを見回すと、どうやらパンツの替わりになりそうなものを発見しました。

あたりの木々にひらひらと布のようなものがたなびいていました。長いもの、短いもの。幅も様々です。何百もの布、羊皮紙の原材料が木の枝に架けられていて、ひらひらとたなびいていたのです。

ありんすちゃんはジャンプして一枚の布を手にとると器用にくるくると巻きつけま

した。

これで大丈夫。

風邪なんかひきません。

え？　ありんすちやんはアンデッドだから風邪をひくはずがないですって？

でも、ありんすちやんはまだ5歳児位の小さな女の子なんです。もしかしたら、もしかしたんですが、もしかしたら風邪をひいちゃう事だつてあるかもしれない。

もしかしたら、ですが。

「これわこれわ……ナザリック地下大墳墓階層守護者のシャルティア様でいらっしやいませんか。あいにくデミウルゴス様わナザリックにお戻りになられていましてこちらにわ、いらっしやいませんが……」

ありんすちやんに男が声かけてきました。

「デミウルゴチュ？」

ありんすちやんは『ス』を『チュ』と言ってしまいます。仕方ないですよ。だつてまだ5歳児位の女の子なのですから。

そうそう、そういえばデミウルゴスが確か聖王国の国境近くで牧場を運営しているとかいう話を聞いた記憶がありました。なんでもナザリックで使うスクロールの材料の羊皮紙を得るためにナントカ羊を飼育しているとか……だつたようでした。



「よろしければ、このプルチネツラめがご案内致します」

ありんすちゃんは道化師（プルチネツラ）の後を付いていく事にしました。

※ ※ ※

やがて大きな看板が見えてきました。

『聖王国両脚羊牧場』

「ここわ、スクロールの材料になるアペリオンシープの繁殖場です」

何やら大きな檻がいくつもあつて牧場っぽくない気がしましたが、ありんすちゃんにはよくわかりませんでした。

「デミウルゴス様わ慈悲深く愚かなものたちにも分け隔てなく愛情を注いでおられます……実に美しき愛……」

感極まつて言葉が途切れたプルチネツラの眼からは涙が流れていました。

しばらく歩くと大きなサイフオンのようなものがありました。中には赤い液体が入っています。ありんすちゃんが顔近づけると球体のガラスにひしゃげて写ります。

なんだか面白いですね。

「これわ、デミウルゴス様が皮を剥ぐ時に流れる血をムダにするまいとして作ったもの

です。こうして一滴もムダにすまいという、これこそ、まさに真実の愛とイウべきでないでしょうか……」

ありんすちやんが写つたガラスに手を伸ばして触れた途端、ガラスは粉々になりありんすちやんは赤い液体でずぶ濡れになってしまいました。……だんだん、だんだんと視界が赤くなつていきます。……ありんすちやんが覚えていたのはそこまででした。

※ ※ ※

——気がつくとありんすちやんは真つ赤な湖に浮かんでいました。

「やれやれ……シャルティア。困つたものだね。これではまた一からやり直さなくてはならないよ」

ありんすちやんが見上げるとデミウルゴスが空を飛んでいました。

「〈血の狂乱〉とはね。シャルティア、済まないがこの事をアインズ様に報告させてもらうよ」

ありんすちやんはイヤイヤとかぶりをふりましたがどうしようもありません。

その後、ありんすちやんはしばらくナザリックから出る事を禁止されてしまいました。

※ ※ ※

竜王国のアダマンタイト級冒険者「クリスタル・ティア」の「閃烈」セラブレイトは前線にいました。竜王国に侵攻してきたビーストマンとの戦いは一段と激しさを増していたのでした。

「陛下、きつと私がお守りします」

幼さの残る竜王国女王、ドラウデイロンの面影を思い出しながら心を奮い立たせます。

先ほど届いた可愛らしい手紙を何度も読み返し、この戦いが終わったら得られるであろう名声と褒美に胸を踊らせるのでした。

セラブレイトは懐から白い布を出すと広げました。縁がレースになった純白の布は手紙が届けられた際に一緒に置かれていた大切なもの。

セラブレイトにとってドラウデイロンの信賴の証であり幸運のお守りであったのでした。

「ああ……陛下……この命に変えても……」

布切れに顔を埋めながらセラブレイトは女王ドラウデイロンへの更なる忠誠を誓う

の  
で  
し  
た  
。

※ありんすちゃん<sup>が</sup>挿し絵を描いてくれました

## 005ありんすちゃんミルクをのむ

「……わらわのせいじゃないんちゅ。知らないでありんちゅ」

グビグビ、ガコーン。プファ!

ありんすちゃんはジョッキのミルクを一気に飲み干しました。

ありんすちゃんはデミウルゴスの牧場をダメにしてしまった為、当分の間ナザリックから出る事が禁止されてしまったのでした。

そんなある日、第九階層の大人びた雰囲気のショットバーのカウンターにありんすちゃんの姿がありました。

(まったく。やれやれ……)

カウンター内でグラスを磨きながらキノコのようなバーテンダー——彼は副料理長でした——はそんなありんすちゃんを見ないようにしていました。

見た目は小さな女の子であっても彼女は階層守護者であるのどうかつな事は言えませんが。

ただただ時間が過ぎてそのうち姿を現すだろうありんすちゃんのシモベを待ち続けるのでした。

ありんすちゃんはおかわりしたミルクを一息に飲み干すと、またもおかわりを頼みます。

「あの……シヤルティア様、今日はそれくらいにしておかれては？ ……それに、そろそろ迎えがお見えになるのではないですか？」

「おむかえ？ ……そんなの来ないでありんちゆ。今日はとことん飲みたい気分なんでありんちゆ……朝まで」

ありんすちゃんの眼は心なしか座っているようでした。

副料理長は慌てました。

彼はこのシヨットバーの洗練された雰囲気を大切にしています。言葉にはしませんが、客にもそんな雰囲気を大切にして欲しいと思っています。ですがそんな願いもありんすちゃんには通じません。

まあ、ありんすちゃんは5歳児位の女の子に過ぎないので仕方ありませんよね。

仕方なく副料理長はありんすちゃんにおかわりのミルクを出してあげました。

ゴツゴツゴクビと一気にミルクを飲み干すとありんすちゃんはカウンターに突っ伏してしまいました。

グズグズと鼻を鳴らしているのでどうやら泣いているようです。

このままでは本当に、朝まで動かないかもしれません。そうなれば一晩中ありんすちゃんの世話をさせられてしまうかもしれません。

いやいや、一晩ならまだ良い方かもしれません。それどころかこれからずっとこんな事が、毎晩毎晩続くかもしれません。副料理長は悪寒に震えながら決断しました。

そう、なんとかしくなくてはならないのです。

「シャルティア様……：そういえば近頃アウラ様マーレ様の第六階層に新しく村が出来たのをご存知ですか？」

ありんすちゃんは顔をあげました。

「村？ でありんちゆか？」

「なかなか面白いですよ。是非一度見に行かれては如何でしょう？」

「ふーん。面白いでありんちゆか……」

どうやら副料理長の目論見は無事に達成出来そうでした。

あとは明日出掛ける為に今晚は早く帰って寝た方がよいと言ってくるめるだけです。

副料理長は深くため息をつくとありんすちゃんの説得に適した言葉を探すのでした。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

〜

## 006 ありんすちやんとベッドとひみつ

副料理長の努力も虚しくありんすちやんはカウンターで眠ってしまいました。

「はあ……どうしたものだろっね。まったく……」

磨いていたグラスを片付けると副料理長はため息をつきました。

昨日までならシャルティアのシモベが迎えに来たのでまかせてしまいましたが、今晩はどうやら本当に、迎えはなさそうです。

「シャルティア様……起きて下さいませんか？お願いします。……シャルティア様？」

ありんすちやんは死んだように無反応でした。

え？ ありんすちやんはアンデッドだから当たり前？ ……そんな事を言つてし

まった話が進まなくなるので、ここは突っ込まないようにお願いします。

よろしくお願いします。

一向に起きる気配がないありんすちやんの対応にすっかり困り果てた副料理長は、思わず天を仰いで祈りました。

「たすけて……かみさま……」



きつとその声が届いたのに違いありません。まさにその瞬間、勢いよく扉を開けて救世主が現れたのでした。

「やほー！…こんばんは！ 頼まれていた果物持って来たよ？ ……あれ？ シャルティアじゃん？」

副料理長は思い出しました。第六階層に新しく植えたりリンゴ、桃、ミカンが食べ頃になったら知らせて欲しい旨、アウラのシモベに頼んでいたのです。それをわざわざアウラ自ら、しかも果物を持って来てくれたという訳です。

「これはこれはアウラ様。わざわざお持ちくださるとは誠にありがとうございます」  
副料理長の瞳にはキラキラと光るものがありました。

「そんな事よりどうしたの？ シャルティア？ また寝ちやつたんじやないの？」

副料理長はアウラにこれまでの経緯を説明するのです。

「ふーん……あつそ。仕方ないなあ、シャルティア。邪魔ならあたしの家に連れて行ってあげようか？」

副料理長は渡りに船とばかりに、頷くのです。そしてアウラを静かに拝むのです。

かくしてありんすちちゃんは眠ったまま、アウラに背負われて第六階層に運ばれていきま

※ ※ ※

夜中にふとありんすちゃんは目覚めました。自分の部屋でなくアウラとマーレの部屋でしたがありんすちゃんは気がつかなかったみたいです。

マーレはハンモックで、アウラはありんすちゃんと一緒のベッドでぐつすり寝ています。安心したありんすちゃんはまた眠りに落ちました。

※ ※ ※

おやおや？ 五分も経たないうちにありんすちゃんがまた目を覚ましました。

どうしたのでしょうか？ ありんすちゃんはアウラを揺さぶりだしました。アウラを起こそうとしているのでしょうか？

アウラはぐつすり眠っていて、一向に目覚める様子がありません。そのうちゴロンとアウラは転がってありんすちゃんが寝ていた位置に移動しました。

ありんすちゃんは何やら一仕事終えたように満足げな様子でアウラが寝ていた場所に滑り込むとスヤスヤ眠り始めました。

※ ※ ※

「あー！ ウツソー！ えーな・ん・で？」

翌朝アウラの素つ頓狂な叫び声で皆起こされました。

「……………ん？ お姉ちゃん……………どうしたの？」

「……………いや。な、なんでもないから……………だ、大丈夫……………大丈夫だって！」

ありんすちちゃんはゆっくり起き上がりました。

と、いきなり、アウラはありんすちちゃんを突き飛ばしてベッドから落とすとシーツを丸め抱えて部屋の外に走っていききました。

アウラが赤い顔をして戻ってきたのはそれから二時間後でした。何があったのかをいくら訪ねてもアウラは答えませんでした。

でも、ありんすちちゃんにとつて嬉しい事にそれ以降アウラのありんすちちゃんへのイジワルがバツタリ止まったのでした。

ミルクを飲み過ぎた後でそのまま眠るのはやめましょう

# 007ありんすちゃんおめいばんかいする

「シャルティア、ほら……これが新しい村だよ。えへへへ」

ありんすちゃんはこの前のシヨットバーで副料理長の話を思い出していました。話の通りにいつの間にか畑や果樹園や集落が出来ていました。

「ほら、面白いでしょ？ さてさて、整列！ アインズ・ウール・ゴウン！ バンザーイ！」

——芸をするマンドラゴラ——

——様々な異業種の新しい住人達——

——そしてアウラが建てた山小屋風の建物の数々——

アウラはやたらと人懐っこい表情でありんすちゃんを連れ歩きました。

いつもならありんすちゃんにイジワルしてばかりのアウラが、です。

昨晚、ありんすちゃんが寝ていた間に何かあったのでしょうか？ ありんすちゃんには全く心当たりがないんですけれども。

そうそう、アウラにいつもと違う所がもう一つありました。マーレがアウラを呼ぶ時に明らかにドキッとするんですよね。

「おね（ドキッ）ーちゃん？」

「お姉ちゃん？」

「な……なんだ。マールか……な、なにかな？ ……アハハハハ……」

明らかにおかしいのですが、ありんすちゃんには気にならないみたいです。

仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なんですから。

「そうだ！ シャルティア、私からアインズ様に許してもらおうようにお願いしてあげよう。ね？」

アウラの申し出はありんすちゃんにとってまさに願ったりでしたので早速お願いする事にしました。

アウラはありんすちゃんに顔を近づけると小さな声で続けました。

「だから……良いよね？ シャルティア、昨日の事は誰にも言わないでね？ ね？」

ありんすちゃんはなんの事かわかりませんがアウラの勢いに負けてコクリと頷きました。途端にアウラは笑顔になると踊るように歩き出しました。

ええつと。なんでしたか。こういうの。確か『名譽返上』とか『汚名挽回』っていうんでしたっけ？ 良かったですね。ありんすちゃん。これでようやくミルクを煽る毎日にサヨナラ出来ることでしょう。副料理長もきつと、ありんすちゃんの謹慎がとけた事を喜んでくれるでしょう。違った理由で……

※ ※ ※

いよいよ明日から自由に外出出来るようになったありんすちゃんはウキウキしながらお風呂で足をのびしました。二人のヴァンパイア・ブライドが代わる代わるありんすちゃんの髪をとかします。

湯船の中でありんすちゃんは両手を眺めながらぼんやりと思うのでした。

(そろそろちゆめを切らなくちゃでありんちゆ)

ヴァンパイア・ブライドにタオルでくるまれながらもありんすちゃんはあれこれとも  
の思いにふけていました。

ベッドに横たわって天井をぼんやりみながらも。ありんすちゃんはその夜はぐっす  
りと、本当にぐっすり眠ったのでした。

幸せそうな笑顔を浮かべながら。

## 008 ありんすちゃんカルネむらいく

朝になりました。

大きく伸びをしたありんすちゃんは勢いよくベッドから跳ね起きました。

さてさて何処に出掛けましょう？　まずは洗面台で顔を洗いました。石鹸をこすつて細かな泡を作ります。そして滑らかに出来た泡をまんべんなく顔に広げて優しく丁寧に洗うのです。最後に綺麗に洗えたか鏡を覗いてチェックします。

と、いきなり後ろから声が聞こえてきました。

「いやいや、オハヨーっす。シャルティア様、今日から謹慎解けておめでとっす」

振り返つてみると戦闘メイドの一人、ルプスレギナが満面の笑みで立っていました。

「ルプチュレギナ？　どうしたんでありんちゆか？」

（『ルプスレギナ』って言いにくいでありんちゆね）

そうなんです。ありんすちゃんはどうしても「す」が「ちゆ」になつてしまふんですよ。

「そうだ、シャルティア様あ、これからカルネ村に行かないっすか？　ちよつと面白い事が起きそうな気がするんすつよね」



ありんすちゃんも面白い事は大好きです。ありんすちゃんはカルネ村に行くルプスレギナについて行く事にしました。

※ ※ ※

カルネ村はナザリックに比較的近くにある小さな村です。ナザリックがこの場所に転移して始めてアインズが交流を結んだ村で、アインズの命令で交流の為、ルプスレギナ・ベータが時折訪れているそうです。

馬車を走らせながらルプスレギナはカルネ村の様々な話をしてくれました。

現在、カルネ村には『人間のエンちゃん』『ンフィー』『ゴ布林さん達』などが混在していて賑やかならしいですね。

「可笑しいのがゴ布林さん達の事なんすつけど、男女でみた感じあんま違わないっすよね。んで、ゴ布林同士ならばつきりわかるかって思ったら意外や意外、ゴ布林さん達でもたまに間違えてるんすよ。笑っちゃいますよね」

しばらくするとありんすちゃんは眠たくなってきました。仕方ありません。そろそろお昼寝をする時刻なんですから。

だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なんですから。

すやすや眠るありんすちゃんとお構いなしに話し続けるルプスレギナを乗せて馬車は山道を進んでいくのでした。

※ ※ ※

いつの間にか馬車が止まっていました。

ルプスレギナの姿はなく、馬車の中はありんすちゃん一人だけでした。どうやらとつとつに目的地のカルネ村に着いていたようです。

充分にお昼寝を済ませたありんすちゃんは胸をワクワクさせながら馬車を降りたのでした。

「あなたは誰？ 何処から来たの？」

ありんすちゃんが声のした方を見るとありんすちゃんよりは大きな、でもやはりまだ幼さが残る女の子がこちらを伺っていたのでした。

「あなたはだれでありんちゆか？」

「人に聞く時は自分からまず名乗るのが礼儀だってお姉ちゃんが言った」

女の子は胸を張って答えました。

## 009ありんすちゃんチャルメラになる

カルネ村で馬車を降りたありんすちゃんを待ち受けたのは十歳位の少女でした。

ありんすちゃんはちよつとビックリしたのでとつきに自己紹介が出来ずにまごまごしていました。だって相手は十歳位、ですがありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なんですから。

「仕方ないわね。いい？ 私はネム。ネム・エモット十歳よ」

「わらわはチャルチエア……で、ありんちゅ」

ありんすちゃんはネムの勢いに押されて小さな声で答えました。

しかも名前をちよつとだけかんでしまいました。

「チャルメラ・デ・アリンチュちゃんか。変わった名前ね。……あなたの事はこれからチャルメラちゃんって呼んでいい？」

え？ ネムってこんなキャラだったかですつて？ 本編では大概エンリと一緒にしたからね。でもンフィーの事を『ンフィー君』と呼んだりして結構したたかだと思いますよ。

ありんすちゃんはネムに手を繋がれて歩き出しました。

しばらく行くと、向こうから一匹のゴブリンと弓矢を持った女の人がやってきました。

「ジュゲムさーん。ブリタさーん」

名前を呼ばれた二人はネム達に手を振り返しました。

「おやおや？ こんな所にいたっすか？ 馬車の中にいなかったから探しちゃったっすよ」

不意に背後から声をかけられたありんすちちゃんとネムは思わず飛び上がりました。

「びっくりした！ ルプスレギナさん。……チャルメラちゃんは知り合いなんですか？」

「チャ？ ……ああ……男胸さんなら友達っていうか、今はおもちゃっていうか……まあ、そんな感じっすね」

ルプスレギナと話しているありんすちちゃんとネムのもとにジュゲムとブリタもやって来ました。

「チャルメラちゃん、こちらはジュゲムさん。ブリタさん」

「よろしく」

「——！」

握手を交わすジュゲムとは異なり、ブリタの身には明らかに異変が現れました。

握手をしようとなりんすちゃんに手を差し出した途端、まるで石像になったののよう  
うに全身が硬直してしまったのです。

「ああああ!!!」

突然、糸が切れた操り人形のようにその場へたり込むブリタの周りには水溜まりが出  
来ていました。

「あらあら？　ブリタさん、お漏らしつすか？　しょうがないつすね」

ブリタは何が起きたかわからない、という表情を浮かべていました。

それもそうです。

可愛らしい、5歳児位の女の子にしか見えないありんすちゃんがかつて出会った吸血  
鬼のシャルティアだなんて思うはずがありません。でも、身体が、もしくは魂があのだ  
怖を覚えていたのでしょうか。

しばらくするとブリタが落ち着いてきたので駆けつけたエンリに預け、とりあえず風  
呂に連れて行ってもらいました。

ありんすちゃんは大人でもおもしろいという事を学びました。

※ ※ ※

——その夜のナザリツク地下大墳墓第六階層——

「大人になってもおもらしちゆるんでありんちゆね……」

「——あーあー何を言ってるのかなーシャルティア。きーこーえーなーい」  
この話題はアウラにとってなぜか禁句だったようです。

※ありんすちゃん挿絵を描いてくれました

## 010ありんすちゃんしつぼうされる

カルネ村から帰って来てしばらくありんすちゃんはナザリックでのんびり過ごして  
いました。

もちろん仕事もちやんとやっています。

いつものように二人のヴァンパイア・ブライドに抱かれて巡回をしていると、バタバ  
タと慌ただしくルプスレギナがやって来ました。

ルプスレギナはありんすちゃんの前で立ち止まるといきなり土下座をしました。

「シャルティア様、これからアインズ様にお会いするのですが、シャルティア様も一緒  
していただけませんか？」

ルプスレギナはいつもと異なり真剣な表情で頭を下げています。

しかしながらありんすちゃんはすぐに答えませんでした。ありんすちゃんは知って  
います。

魅力的な女性——熟女——というものは相手を焦らすものだという事を。

え？　ちよつと違うって？

まあ、気にしないでください。

ありんすちゃん機嫌をとり、ようやく同行する事になったルプスレギナはホツとしてアインズの執務室に向かうのでした。

※ ※ ※

アインズの執務室に緊張した面持ちのルプスレギナと一緒に、訳が分からずキョロキョロしながらありんすちゃんが入ってきました。

ルプスレギナはアインズ様からの突然な呼び出しを受けてから、同僚達のいろいろ噂を小耳にしていただけに緊張が極限にまで達しようとしていました。

（叱られる……アインズ様に間違いなく叱られる。食堂でアインズ様を『絶対最強無敵ドクロキング』と呼んでしまったからだろうか？ ……でも、あの時はシズが来て最後まで……もしかしたらあの事？ ……いやいや……心当たりがありすぎ——）

メイド達の話ではあのアルベドすら現在謹慎中なのだそうですから、ルプスレギナには不安はありませんでした。

ルプスレギナは直立不動で最敬礼しようとはしましたが、アインズはそれを右手で制し、口を開きました。

「ルプスレギナよ。私に何か話すべきことがあるのではないか？」



ありんすちゃんはアインズの脇にナーベラルとアウラがいることに気がつきました。アウラは何やらありんすちゃんを睨んでいます。人差し指を口にあてたり顔の前で指を振ったりしてきます。ありんすちゃんはアウラの意図が分からずアインズ達の会話を聞いていませんでした。

※ ※ ※

「——愚か者が！」

アインズの怒鳴り声にありんすちゃんは身を縮めました。あまりの恐怖にありんすちゃんは耳をふさぎます。あまりの怖さにちよつぱりそそうをしてしまいました。

そろそろと手を離すとまたもやアインズの怒鳴り声がありました。

「——！ お前には失望したぞ！」

ありんすちゃんはびつくりして、更にそそうをしてしまいました。ほんのちよつぱりだけ、ですが。

それできつとアインズに失望されてしまったのに違いありません。アウラが泣き出しそうになるありんすちゃんをあやしなから部屋隅に連れていきました。

アインズはそんなありんすちゃんに気をかけながらも目のルプスレギナへの訓戒

を続けるのでした。

※ ※ ※

全員が退出し、ただ一人となったアインズは溜め息をつきました。

シャルティアが復活した時に消費した金貨は間違いない五億Gありました。しかしながらカウントされたのは5億枚でなく一枚足りない4億99999万9999枚。

一体何があったのでしょうか……

※ ※ ※

静かに頭を抱えてうずくまるアインズの事を書棚の陰から見守る一人の領域守護者がいました。

彼は思い出していました。

あの日、何故か眷属の数が一匹足りなくなっていたことを。

てつきりいつもの天敵戦闘メイドの胃を満たしたのかと思っていました。どうやら深刻な事態を産んでしまったようでした。

「……………」

高貴な身分に相応しい、優雅な身のこなしでマントを翻すと自らの領域の階層へ帰っていききました。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 011ありんすちやんとダメいぬ

ルプスレギナは目を覚ましました。

頭が包帯でぐるぐる巻きになっていて、酷くズキズキします。

何だかいろいろな事があったようななかったような……大事な事を思い出しそうな忘れてしまったような……ハッキリしない、気持ちが悪くモヤモヤしていました。

ふと見ると側にありんすちやんを抱いたユリ・アルファがいます。

「ルプス、具合はどう?」

「ルプチュゲリナ大丈夫でありんちゆか?」

ありんすちやんも心配そうです。

「あははは。いいつすよ、ルプーで。シャルティア様、いや……チャルメラちゃんもありがとーつす。なんかアインズ様に怒られた夢みちやいましたつすよ」

能天気なルプスレギナの言葉にユリは激しく激怒しました。

あの、至高の方々のまとめ役、ナザリック地下大墳墓の絶対的支配者たるアインズ様の激怒を受けたのに関わらず、このルプスレギナの脳天気さ。

このままにしておいてはルプスレギナだけでなくプレアデス全員にアインズ様のお

叱りを受けるかもしれないのです。

ユリのお説教は昼まで続き、いつしかありんすちちゃんは眠ってしまったのでした。

※ ※ ※

ルプスレギナとありんすちちゃんがアインズの執務室に行ったあの日に一体何があったのでしょうか？

「まじ、アインズ様、ばねえつす。あそこまで物事を考えて行動しているとか、化け物なんて言葉じゃ言い表せないつす」

「ゴインー」

ナーベラルの容赦ない一撃はルプスレギナの意識と記憶を奪ってしまったのでした。

殴る時に力が入りすぎてしまったようで、ルプスレギナの頭からは大量の血が吹き出してしまいました。

大変です。

5歳児位の女の子とはいえ、ありんすちちゃんはついこの間血の狂乱でデミウルゴス牧場を壊滅させてしまっています。

この場を急いでなんとかしないとまたもや惨劇が、しかもナザリック地下大墳墓の第

九階層で起きてしまいました。

ナーベラルはルプスレギナの頭を両手でガシツと掴むと急いで引きずっていきました。

幸いにもありんすちゃんは緊張と疲れが押し寄せて眠っていましたから、そんなに急がなくても大丈夫だったみたいですが。

眠ってしまったありんすちゃんを迎えにユリ・アルファが呼ばれ、その後エ・ランテルに戻るナーベラルに頼まれてルプスレギナの面倒を見ていた、というわけです。

※ ※ ※

ありんすちゃんが目を覚ますといつの間にかルプスレギナのベッドに寝かされていてユリの姿はありませんでした。

「んじゃ、行きますっか」

何処へ行くのだろうとありんすちゃんが不思議に思っていると、ルプスレギナが明るく言いました。

「カルネ村に行くすつすよ。汚名返上つてやつつすよ」

かくてありんすちゃんはルプスレギナと一緒に再びカルネ村に行く事になりました。

※ ※ ※

ちなみにその後の本編にて王国でのゲヘナでナーベラルにルプスレギナが再会した時――

「久しぶりつす。ナーちゃんがアインズ様にドナドナされてから会ったのはこれが初めてつすよね」

どうやらルプスレギナの記憶から一部の記憶――アインズの執務室でナーベラルと会っていた事――が消去されていたようです。

極めて原始的な記憶消去法ではありませんが……

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 012 ありんすちゃんいもうとになる

ありんすちゃんはルプスレギナに連れられて再びカルネ村にやってきました。

そうそう、ありんすちゃんはこの前来たときにネムからクマさんのワンポイントがついた可愛いパンツをプレゼントされていたので、そのパンツをはいていきました。

カルネ村では入り口でネムがブリタと待ち受けて、ありんすちゃんに手を振っていました。

「チャルメラちゃん。ルプスレギナさーん」

ありんすちゃんは駆け出しました。

目の前に行くとネムは自分のスカートを捲り上げて笑いました。

「おっそろーい」

見るとネムも同じクマさんパンツをはいていました。

ブリタは何だか具合が悪そうに青い顔をしています。

もしかしたらお腹を出して寝ちゃって風邪をひいちゃったのかもしれないね。ありんすちゃんもたまにありますよ。



「ありやりや。将来レディーになりたいんだったら感心しないっすね」

「……ごめんなさい」

ネムは顔を真っ赤にして俯きました。

「どうやらネムはルプスレギナの言うことは素直に聞くみたいですネ。」

「チャルメラちゃん、行こっ」

ネムはありんすちやんの手を掴むと駆け出しました。

「やれやれ、しようがないっすね」

※ ※ ※

ネムはありんすちやんを村の外れに連れてきました。

そこには小さなテントがあつてネムは中に入ります。

テントの中には小さな椅子、本、ランプ、マグカップが置かれた小さな机があります。

「どうやらネムの秘密基地みたいですネ。」

「チャルメラちゃん、あなたは今日から私の妹にするから。私の事をお姉ちゃんって呼

ぶの。ね？」

「わらわのお姉ちゃんでありんちゆか？」

ありんすちゃんの脳裏にダークエルフの双子が浮かびましたがすぐに追い払いました。

まごまごしているうちにありんすちゃんはネムの妹という事にされてしまいました。集会所に行くともう会議は終わっていて、村人がそれぞれ帰っていく所でした。

「お姉ちゃん」

ネムがエンリに駆け寄りそのまま抱きつきます。

「私ね、チャルメラちゃんを妹にしたんだよ。だから私も今日からお姉ちゃんだよ」

「これでネムさんも大人の仲間入りっていう事ですね」

カイジャリが楽しそうに話に加わります。

「ネム。それは良かった。……本当に」

エンリは上機嫌でありんすちゃんⅡチャルメラちゃんを抱きしめるネムを眺めながら、久しぶりにほのぼのした気持ちを味わっていました。ルプスレギナの話ではしばらくありんすちゃんが泊まっていくらしいのです。

父母を亡くしてから健気にもおとなしい『よい子』だったネムが少しでも年令相応の子供らしくいられたら、と姉らしい気分になりました。

賑やかに家に向かうエンリ達から離れた木陰に佇んだ人影がポツリと呟きました。

「あー村、滅んでくれないかなあつすね」

## 013ありんすちゃんすやすやねむる

しばらくの間、ありんすちゃんはカルネ村に滞在する事になりました。

アインズに失望されたと思ひ込んでいたので挽回しようと必死です。それに……激怒したアインズの怖かった事……チビってしまったのは内緒です。

絶対に内緒ですよ？

村の外れにはルプスレギナがいました。

「ルプー？ どうしたでありんちゆか？」

「おはつす。いや、もう夕方つすけど。そういや私もチャルメラちゃんつて呼んでいっすか？」

困ったありんすちゃんはいやいやをしましたでしたが、ルプスレギナには通じなかつたみたいです。

「今日あたりなんか楽しくなりそうな気がするつすよ」

ありんすちゃんも楽しい事は大好きです。

もしかしたらありんすちゃんの歓迎パーティーとかあるのかもしれないね。だつてありんすちゃんはとてもとても可愛い女の子なんですから。

楽しい事を待っていたありんすちゃんはお昼寝も我慢して待ち続けました。次の日も次の日も。

でも、そのうち眠くて眠くて我慢出来なくなつて熟睡してしまいました。

え？ アンデッドのヴァンパイアが眠くなるのはおかしいですって？

だってだってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なんですから。

ありんすちゃんは村がざわつくのをよそに熟睡してしまいました。

※ ※ ※

村の外では大事件が起きていました。なんとカルネ村をモンスターが襲つてきたのです。

エンリ、ンフィーレア、そしてジユゲムらゴブリン達は村人を指揮して応戦しています。

ルプスレギナはどうやらナザリックにちゃんと報告したみたいですね。

「さてつと。汚名返上にはもつてこいつすね。あとはギリギリのピンチ作つて格好よくルプー姉さん登場、つていきたいっすね」

※ ※ ※

一方ありんすちゃんは どうしているでしょうか？

村の真ん中にある、ひとときわ大きな建物——集会所にありんすちゃんはいました。  
ネムやリイジーらと一緒に避難している村人と一緒です。

ピンク色の可愛らしいタオルケットにくるまれてスヤスヤと眠っていますよ。  
仕方ないですよね。

だつてありんすちゃんは まだ5歳児位の女の子に過ぎないのですから。

え？ いい加減この言い回しがくどい？

申し訳ありませんがこれを無くすとこの作品のアイデンティティが崩壊する恐れがありますので我慢して頂けたらと思います。

※ ※ ※

一方ルプスレギナは……

「やっぱ、こうんフィーちゃんがエンちゃんの危機に颯爽と登場なんかしちゃって『僕の命はエンリりのものさ。エンリ、キミを愛してる！』って妙なフラグ立てて、でも次の瞬

間に呆気なく倒されて絶対絶命！　　って所でジャーン！　ルプー姉さん登場！　　っていきたいもんすね。さてさて……」

ルプスレギナはアインズの言葉を思い出しました。確かはつきり言っていました。そう、「モンスターに襲われるなら仕方ない」と。

そうなれば手軽なモンスターがンフィー達を襲えば良いのです。彼らの手に余る、丁度良いモンスターが……

ルプスレギナは不可視化したまま村を観察すると西側にウロウロ所在なげにしているトロールに気がつきました。邪悪な笑みを浮かべるとルプスレギナはトロールにそつと近づいていきました。

※ ※ ※

ありんすちゃんが目覚めた時には全てが終わっていました。「いやー、なんとか汚名返上出来たつすよ。最高つすね」  
ありんすちゃんにはなにがなんだかわかりませんでした。

## 014ありんすちやんつめをきる

ありんすちやんは朝から少し緊張していました。

アインズの命令でこれから守護者や戦闘メイドらとり・エステイーズ王国へ行く事になったのです。

ピクニックに行くのではないんです。

戦争に行くんです。

ありんすちやんは興奮して昨日はよく眠れませんでした。

ナザリック守護者、戦闘メイド、シモベ達、それにありんすちやん。その他に応援部隊もいるらしいですよ。凄いですね。でも、やっぱりありんすちやんが主役だと思います。

それは、ありんすちやんが一番可愛いからです。

一足先に王都で準備していたセバスが出迎えます。

「これほどのメンバーが揃うとは……アインズ様に感謝の言葉を申し上げなくては……ん？」

デミウルゴス、マーレ、ソリュシヤン、エントマ、ありんすちゃん。順に挨拶するセバスがありんすちゃんに少し驚いたみたいでした。

ありんすちゃんは張り切っています。

デミウルゴスが次々に指示を出します。今回はデミウルゴスが責任者です。いよいよありんすちゃんの番です。張り切っていたありんすちゃんは胸を張って命令を待ちました。

「——シャルティア。君は遊軍として遊んでいてくれたまえ」

ありんすちゃんは喜びました。遊ぶのは得意ですから。多分、守護者の誰よりも遊びが得意かもしれません。ありんすちゃんは張り切って遊ぶ事にしました。

ありんすちゃんは堀の上をバランス取って歩いてみたり、あちこちの倉庫を開けて覗いてみたりしました。疲れたら昼寝して、夕方にまた遊びました。

いつの間にか綺麗な炎が王都の一角にあがっていたので、ありんすちゃんは見物しにきました。たしかゲヘナの火とかいった気がします。

すつかり夜になりました。そのうちありんすちゃんは一人で遊ぶのにだんだん飽きてきてしまいました。

ありんすちゃんもつと楽しそうな事はないか探してみました。ふと見ると闇夜に目立つ白い鎧を着た少年が向こうを走っています。そうだ、鬼ゴッコをしよう。ありん



すちちゃんは閃きました。あの白い鎧にペタペタと手形を付けたらきつと楽しいですよ。きつと。

※ ※ ※

白い鎧を追いかけようとするありんすちちゃんはいきなりとうせんぼされて戸惑いました。見たことがない、ワカメみたいな髪の男がびつくりしたような顔をしています。

「——シヤ、シャルティアだよな? ……いや……シャルティアの子供? いや……妹? ……もしかしたら親戚の子供か? はたまた、他人のそら似……それは無いよな……」

その男、ブレイン・アングラウスは戸惑っていました。遠目でシャルティアだと思っただ女がよく見たら5歳児位の女の子だったのですから。

ありんすちちゃんには記憶がありませんでしたが、ブレインは以前、シャルティアと対戦して泣きながら逃げ出した事があるのでした。

「えつと……あの……(ど、どうする? 俺……)」

しどろもどろの状態で戸惑うブレインに対してありんすちちゃんが命令しました。

「邪魔でんちゆよ。そこからどくでありんちゆ」

「……あ……は、はい……」

ブレインは動揺しながらありんすちゃんに道をあげようと思いました。と、足がもつれて尻餅をついてしまいました。

「それは何でありんちゆか？」

ありんすちゃんが拾い上げたのはブレインのポケットから落ちた爪切りでした。

「……つ、爪切り……だが……」

ブレインの頭の中で瞬時にいろんな考えが駆け巡るのです。

（この女の子はやはりシャルティアと関係があつて、近くにシャルティアがいるかもしれない。ここはクライムのための時間を稼ぐ為になんとかすべきだろう……しかし、どうしたら……）

ブレインはありんすちゃんに思わず言いました。

「……あの……良かったら爪を切りませんか？」

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 015 ありんすちゃんかめんをかぶる

今日もみんなで王都に行きます。

今回はみんな仮面を被っていくみたいです。

ありんすちゃんも仮面が欲しかったのにデミウルゴスはくれませんでした。

ケチンぼです。

ありんすちゃんは仮面が欲しくてたまらなくなりました。

ルプスレギナもアントマもユリもソリユシャンもシズも仮面を貰っています。

ありんすちゃんは面白くありませんでした。

ありんすちゃんは仮面がなきゃ行かないとだだをこねてみましたが、デミウルゴスは

あつさりとありんすちゃんを置いていっちゃいました。

「……デミウルゴチュのばか」

ありんすちゃんはデミウルゴスの悪口を言ってみましたが気は晴れません。手に入らないとなんだかとても素敵に思えて諦められません。

ありんすちゃんがお面をつけたらどんなに似合うでしょう？ だってありんすちゃん

はとってもとても可愛いからです。

ありんすちやんの頭は仮面の事で一杯だったのですが、そんな時久しぶりに、本当に久しぶりにくしやみが出ました。

「くちゅん！」

ありんすちやんはまたしても何処かに転移してしまうのでした。

※ ※ ※

「きゃっ！」

ありんすちやんが転移した先は誰かの頭の上だったので、丁度ありんすちやんの頭と相手の頭がぶつかってしまったのでした。

その相手——赤いフードと漆黒のロープを着た金髪の女の子——は完全に気絶してしまっていました。

年齢は十四歳位でしょうか。ありんすちやんは5歳児位なので随分お姉さんですね。

ありんすちやんは全く悪くありません。これは事故です。もしかしたらこの女の子がわざとありんすちやんが転移した場所にいたのかもしれない。

ふと、ありんすちゃんは女の子のすぐ側に素敵な物が落ちていたのに気がつきました。なんと！ ありんすちゃんが欲しかった仮面が落ちています。デミウルゴスの仮面とはデザインが違いますが、これはこれでカッコイイ仮面だと思いました。真ん中についた朱い宝石が綺麗です。ありんすちゃんはさっそく仮面をつけてみました。

とつてもお似合いです。ありんすちゃんは可愛いので何でも似合っちゃいますね。

ありんすちゃんはクルリと回ると人差指ですをあごに当ててポーズをとりました。完璧です。仮面は最初からありんすちゃんの物だったみたいだにフィットしています。

「……こんな所にいた……急ぐぞ……」

ありんすちゃん是不意にやって来た女性に手をつかまれました。

「ボスが待ってる。いくぞ」

ありんすちゃんはそのまま連れていかれてしまいました。

※ ※ ※

なんだかんだでありんすちゃんはモモンとナーベと一緒に王都リ・エステイーズの中央に来ていました。誰もありんすちゃんだという事に気がつかないようです。

ありんすちゃんは楽しくなりました。

そのうちデミウルゴスが戦闘メイドと一緒に現れました。みんな仮面をつけています。

ありんすちゃんはもう羨ましくありません。

だつてありんすちゃんも素敵な仮面を持っていますから。

おやおや？ 誰一人としてありんすちゃんだとは気がつかないみたいですね。ありんすちゃんはナザリックでお留守番しているはずなので、まさか王都に來ているとは思えないのでしようね。

アインズとデミウルゴス、ナーベラルとルプスレギナ・ソリュシヤン・エントマ、ありんすちゃんはユリ・シズと対します。

ありんすちゃんが仮面を外して正体を教えてあげるとみんなビックリするでしょう。ユリはビックリしすぎて首を落としてしまうかもしれません。

そんな事を想像しながらワクワクして仮面を外そうと――

「くちゅん！」

なんと！ ありんすちゃんはまたまた転移してしまいました。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 016 ありんすちゃんイタズラする

ありんすちゃんが転移したのは小さな小屋の中でした。

中に小さな机と二つの椅子が置かれています。

「……誰かいるでありませんか？」

ありんすちゃんは礼儀正しく声をかけました。

本当は家人の許可がないと家に入ってはいけないという迷信があるんですけれどね。

「あ……あれ？ ……ど、どなたですか？」

見るとマーレがびつくりしてこちらを見ています。どうやら仮面をしているのでありんすちゃんだと気がつかないみたいです。

ありんすちゃんはいたずらを思い付きました。

「マーレ、お姉ちゃんのアウアウでありますよ。わからないでありませんか？」

ありんすちゃんはマーレをからかってみました。

「なんだ。お、お姉ちゃんだったんだ……仮面をつけてたから、あの、わからなかったです」

マーレはなんて素直なんでしょう。

ありんすちゃんの言うことを信じて姉のアウラー——ありんすちゃんはアウアウと  
言っつてしまいました——だと信じています。

本当に仮面つて凄いですね。よく仮面をつけただけで正体がわからないなんて事が  
設定上おきますが、あれは嘘じゃなかったのですね。さて、どうしよう……

ありんすちゃんは完全に信じきった様子でこちらを見るマールに質問しました。

「マールはここで何をしているんでありんちゆか？ お姉ちゃんに言うでありんちゆ」  
「えっと、あの、アインズ様とデ、デミウルゴス様が、あの、ここで……」

その時入り口の扉が壊れて二人の人物が入ってきました。

「まず、この部屋は安全なのだな？」

「大丈夫でございます……ん？」

「——！」

アインズとデミウルゴスはありんすちゃんに気づいて身構えました。

「……これは!？」

「……蒼薔薇の？」

（——たしかイビルアイとか言ったな。なんであの子供がここにいるんだ？ しかも一  
人？ ……）

アインズ様もデミウルゴスも混乱していますね。二人共完全にイビルアイだと思い



込んでいて、正体がありんすちちゃんだとは思いませんね。  
やりました。

ありんすちちゃんのいたずらは大成功です。

おやおや？ 大変です。

どうやらいたずらの度が過ぎてしまったのかもしれないですね。

二人共怖い顔をしてありんすちちゃんを睨んでいます。ただならぬ殺気を感じてありんすちちゃんは泣きそうになりました。

(……そうでありんちゅ！ 仮面をはずちやないと……)

あわててありんすちちゃんは仮面を外しました。

「アインジュちやまあ！ うわーん！」

「——シヤルティア？」

「……？ ……」

「えーお、お姉ちゃんが、シヤ、シヤルティアさんに？ え、えつと、えつと……ええー  
！」

「——マール？ ……ちよつまっ——」

動揺したマールはうつかり魔法を発動してしまいました。

※ ※ ※

王都に合図の地震が起きました。

「地震だア。マール様ガヤツタミタイ」

「これは何かのサインなの？」

「そうっすよ、ナーちゃん。悪いんすけど、ちょっと怪我してもらっすよ」  
かくして王都をゆるがすゲヘナは終盤へと移行していくのでした。

※ ※ ※

その夜、お風呂でありんすちゃんはパンツを洗っていました。あまりにも怖かったのでそそうをしてみましたからです。

仕方ないですよ。だってありんすちゃんは5歳児位のまだ小さな女の子なので  
から。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 017ありんすちやんとバイコーン

——ナザリック地下大墳墓第六階層——そこにアウラ、アルベド、そしてありんすちやんがいました。ありんすちやんはとつてもワクワクしています。

「では、始めるわ——来なさい。私の騎獣」

アルベドが発動したスキル、騎獣召喚で姿を現したのは馬よりは少し小さいながら迫力が凄まじい漆黒の魔獣でした。

「おお！ 普通のバイコーンとは違う！ 角も身体も立派だね」

「そうよ。まさにウォーバイコーンロードとでもいうべき存在。残念ながら空を飛ぶのは無理ね」

「とつてもちゅよそうでんちゅね」

アルベドはありんすちやんに答えるかわりに頭を撫でました。アウラは興奮した様子で訊ねました。

「で、なんて名前なの？」

「……そうね。トップ・オブ・ザ・ワールド……とでも付けようかしら」

「チヨプオバールト？ でありんちゅか？」

「……」

「まあまあ。じゃあ次いつてみようよ!？」

アルベドはバイコーンに向き直り鎧に足を掛けひらりとまたがりました。するとバイコーンがよろめきだすのでした。

「アウラ! シャルティア! 私のバイコーンの様子が変なの」

「と、とりあえず降りなよ、アルベド!」

アルベドが飛び降りると疲れきったようにバイコーンがへたり込んでしまいました。

「きつと重ちゆぎたんでちゆよね」

ありんすちゃんが得意げに解説します。そうです。ありんすちゃんは5歳児位の女の子にしか見えませんがとてもとても、とても賢いんです。

大事な事なのでもう一度言います。

ありんすちゃんはこう見えて、とてもとてもとても賢いんです。

「アウラ、あなた魔獣と会話なんか出来ないの?」

「無理無理。てか、ずっと前にあたしの能力は全て話したじゃん」

さてさてどうしたものでしょう?

「そうだ。デミウルゴスなら何かわかるかもしれないんじゃない?」

アウラが名案を思い付きました。

「残念だけどデミウルゴスはアインズ様のご命令で現在外で働いていないわ。余程の事でなければ相談は無理ね」

三人は途方にくれるのでした。

しばらくしてからありんすちやんが口を開きました。

「きつとアルベドが重たちゆぎたんでちゆよね」

アルベドはせっつかくのありんすちやんの指摘をあたかも聞こえなかったかのように無反応でいます。

なんという事でしょう！

賢いありんすちやんの意見を無視するとは！ ありんすちやんはひとりブンブンしながら頬を膨らめますのでした。

「……ひまだねー」

「……そうね」

膨れているありんすちやんには全く触れず、二人は空を見上げていました。

※ ※ ※

部屋に帰ってからありんすちやんは以前にアインズ様から貰ったペロロンチーノの

百科事典——エンサイクロ・ペディア——を広げてみました。

「バ……バイ……バイコ……あつたでありんちゅ」

ありんすちゃんはバイコーンの項目を声に出して読み始めました。

「えつと……の……。……を……。……に……。……して、……。……は……。……を……。……ると……。……われている。???’」

残念ながらありんすちゃんにはひらがなだけしか読めませんでした。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

※ありんすちゃんが挿し絵を描いてくれました

## 018ありんすちちゃんのかしましい

ナザリック地下大墳墓第九階層のアルベドの私室——かつてナザリック地下大墳墓を作り上げた至高の四十一人に与えられた私室と同じに作られた一室にありんすちちゃん、アルベド、アウラの三人の姿がありました。

「アウラ、さつきからあまり機嫌が良くなさそうだけれど、眠いのかしら？」

アルベドが慈母のような微笑みを浮かべながらアウラに問いかけました。質問に答えたのはアウラではなくありんすちちゃんでした。

「アウアウはおねむでありんちゅ。わらわはモンブランが食べたいでありんちゅ」

そう言いながらもありんすちちゃんは両手にしっかりとマカロンを持っています。アウラは二人をあきれたように見ながら話し始めました。

「まったくいい気なものだね。……あのさあ、この間デミウルゴスから言われたんだよ、あたし。『アルベドとシャルティアが問題を起こさないようにアウラがしっかり手綱を握っていてくれたまえ』だってさ。これっておかしくない？」

早速ありんすちちゃんが答えました。

「たじゆなってお菓子、食べてみたいでありんちゅ」

「馬鹿ね、シャルティア。手綱よ手綱。確かにおいしいわね。手綱を握ってもらうならアインズ様よ」

アウラは憐れみを含んだ眼差しを二人に送るのでした。

「そういう事じゃなくて、あなた達の面倒をみるのがあたしの役割だって思われているの。なんで？」

「やっぱりモンブランが食べたいでありんちゅ」

アルベドはありんすちゃん頭の頭を撫でながら言いました。

「確かにおいしいわね。小さなアウラには荷が重いから私がその役割を担ってあげるわ」

アルベドはこれ見よがしに胸を張ると豊かな双丘がアウラの目の前でプルンと揺れました。

「あのさあ、嫌味が通じないの？」

「モンブランが食べたいでありんちゅ」

ありんすちゃんは足をバタバタさせ始めました。どうしてもモンブランが食べたいみたいですわね。

「おっきい栗の、乗った、モンブランが、食べたいでありんちゅ」

アルベドとアウラはそんなありんすちゃんを無視して会話を続けました。



「嫌味なの?」

アルベドの表情は穏やかでしたが、金色の瞳は少しばかり冷たい光りを放っていました。

「……もういいよ。ところであたし達を呼んだのは何の用だったの?」

「実は……内密にしたい相談事があるの」

アルベドは声を落として語り始めるのでした。要約するとアルベドの唯一の神器級マジックアイテムである鎧「ヘルメス・トリスメギストス」の性能についての相談がしたいという事でした。

「——シャルティアはマジックアイテムの能力を解析する魔法を使えたわよね? この鎧にかけて——?」

アルベドがありんすちちゃんに振り向くとなんとありんすちちゃんはテーブルにうつ伏せになって眠ってしまっていました。

仕方ありませんよね。ありんすちちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

※ ※ ※

「……で、結局何が問題なわけ?」

頬杖をついたアウラがジト目で尋ねました。

「私の鎧、三層になっていてダメージを受け止めるのだけれど、それぞれの層が破壊されても少しも露出度がアップしないのよね。せっかくだから少しずつ肌が露出していくべきじゃないかしら？」

「……あーあー。さいですか」

アウラはすやすやと眠っているありんすちやんを眺めながら、ふと、自分も居眠りしてやろうかと思うのでした。

※ありんすちやんが挿絵を描いてくれました

## 019ありんすちやんだいかつやくする

その日ありんすちやんはお昼頃に目が覚めました。なにやらシモベ達がざわついています。

第一階層や第二階層のスケルトンやエルダーリッチ達がやたらと張り切っています。ありんすちやんは自分の守護階層の見回りをしてみました。今回はなんとありんすちやん一人で見回ります。いつもだったらシモベの二人のヴァンパイア・ブライドと一緒でないと見回りしないのに不思議ですね。

実は先日、アウラとアルベドから一人で階層の見回り出来ないとありんすちやんがからかわれたからです。

「なに、シャルティアアつてもしかして自分の階層の見回り、一人じゃ出来ないの？ そんなのまるで赤ちやんじやん」

「……おぎやー。……ちよつと言ってみただけよ。別に意味はないわ」

よりにもよつて、ありんすちやんを赤ちやん扱いしたんです。

許せませんよね？

アウラなんか、アウラなんかこの間おねしよしたシーツを第六階層の片隅で干してい

たつてマーレから聞いちゃいましたから。ありんすちゃんはおねしよなんてしません。

そりやたまにシーツが濡れていた朝があつたかもしれませんが、寝ぼけてちよつとお水をこぼしちやつたのに違いありません。

ありんすちゃんは気持ちを入れ替えて見回りに集中しました。

ふと見ると恐怖公が眷属を並べてフォーメーションの練習をしていました。

「——違うぞ、違う。この動作の次は第一班がこうズササササつとまず足下をすくう。で、第二班が視界を奪いつつ顔面を制圧。そう、もつと素早く。で、第三班第四班が衣服の隙間から侵入。でこの時に悲鳴を上げるから第五班が口から……」

恐怖公はありんすちゃんに気がつくと恭しくお辞儀をしました。

「これはこれは我が領域の階層守護者、シャルティア・ブラッドフォールン様。どうぞ我が眷属をご覧下さいませ」

たくさんのゴキブリ達がずらりと整列してありんすちゃんにお辞儀をしました。

ありんすちゃんは恐怖公とその眷属がちよつと苦手です。正直なところ、出来るだけ近づきたくないのが本心でした。そこでありんすちゃんは適当に挨拶してその場を去りました。

ひと通り見回りをして、お風呂に入ったら今度はお昼寝をします。え？ お昼まで寝

ていたから必要ないですって？

とんでもありません。睡眠不足はお肌の大敵なんですよ？

え？ いつもだつたら「だって、ありんすちやんは5歳児位だから仕方ない」というですって？

気まぐれでちよつと変えてみました。

さてさて、ありんすちやんが再び目を覚ましたのは夜も更けた頃でした。夕方から一眠りすれば当然ですよ。ありんすちやんは第一階層に行つてみました。

何だか騒がしいので近付いてみると冒険者達がスケルトンと闘っています。戦闘メイト達が見物しながら声援を送っています。

「ルプー、みんなずいぶん楽しそうでありんちゆね？」

「一緒に見物するっすか？ 面白いですよ？」

「アア、アンナ時二飛ンジャイイ的ジャネ？」

ありんすちやんも応援してあげる事にしました。ありんすちやんはあまりにも興奮してしまったので階段の手すりから大きく身を乗り出してしまいました。

「——危ない！」

冒険者の盗賊がありんすちやんを助けようと振り向いた瞬間にスケルトンの一撃が見事に当たりました。

「ば馬鹿者しや……」

緑の冒険者が気を取られてこれまたスケルトンの一撃。次々と冒険者達はまるでドミノ倒しのように地に伏していききました。

「ナザリック・オールドガーダーの出番までいかなかったわね」

「セツヤク出来テ良カッタジヤナイノ」

「やったつすね。シャルティア様、大活躍つすよ」

ありんすちゃんは張り切つて第二階層に向かいました。

※ ※ ※

第二階層には他の冒険者達がいきました。

どうやら落とし穴に落ちそうになつています。ありんすちゃんは棒でカブトムシみたいな冒険者をちよんちよんと突つついてみました。

カブトムシは脇の下を突つつかとヘンな声を出すので面白くなりました。

ツンツンツン

「あふん。あふ、あふん」

……ツンツンツンノツツン

「……あ、あ、あふん、ふふん」

ありんすちゃんは指揮者のように棒を構えて——それぞれ、それ。

たまらなくなつたカプトムシは向きを変えました。

ありんすちゃんからだとお尻が突つつきやすそうですよ。

ツンツンツンツン……ブスツ?

「あふあふあふん。んへ? あ——」

カプトムシは暗闇に落ちていつてしまいました。穴の底で恐怖公がありんすちゃんに感謝のお辞儀をしました。周りに眷属達も並んでいます。ありんすちゃんは自らの活躍をアインズ様に報告しようと第九階層に向かいました。

※ ※ ※

第九階層にアインズ様はいませんでした。メイド達の話では他の階層守護者達と一緒に第六階層に行っているらしいとの事でした。

ありんすちゃんをのけものにしてみんなでケーキでも食べているかも知れませぬね。

ちなみにありんすちゃんが好きなケーキはモンブランです。もちろんてっぺんの栗を一番最初に食べます。

ケーキの事を考えながら、ありんすちゃんは第六階層に到着しました。

コロッセウムの前に来るといきなり扉が開きました。みるとアウラが扉を開けたところでした。

「——アルシエ！ 逃げてえ！」

「うん。ぎつどみんなもぎでね」

ありんすちゃんがコロッセウムに入ろうとしたら中からロケットみたいな勢いで飛び出してきた女の子と正面衝突しました。

女の子はありんすちゃんが倒れたのを見てびっくりして 抱き起こしました。

「——おお？ シヤルティアがアルシエを捕まえた！ お見事お！」

アウラが叫んでいます。本当はありんすちゃんの方が捕まったような感じなんです  
が。

今夜はありんすちゃんが大活躍の夜でした。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました



## 020ありんすちやんていこくにいく

今日のありんすちやんははアインズ様に頼まれてバハルス帝国に使者として行く事になりました。

お供はアウラとマールレの双子のダークエルフです。

もちろんありんすちやんは一人でちやんとお務めを果たせますが、双子がどうしても連れて行って欲しいとだだをこねるので仕方なく連れて行ってあげる事にしたのでした。ありんすちやんはとても優しいですね。

マールレはドラゴンを持っていきます。

アインズ様はマールレにありんすちやんをドラゴンに載せるように命令しました。

アインズ様の前では双子のダークエルフも子犬みたいに大人しいものですね。ありんすちやんの出発をアインズ様はわざわざ見送ってくれました。

バハルス帝国に着くとそのまま王城を目指します。

王城の前の広場みたいな所にドラゴンは舞い降りました。

さて、いよいよありんすちやんのお仕事です。

まずはアウラがマイクを使って話します。

「あーあー。聞こえますか？　あたしはアインズ・ウール・ゴウン様に仕える、アウラ・ベラ・フィオーラです！」

「……ありんちゆ」

「この国の皇帝がアインズ様のお住まいのナザリック地下大墳墓に不屈きな奴らを送り込んできたのでアインズ様はお怒りです！」

「……でんちゆ」

「皇帝が謝罪しないとこの国を滅ぼします！」

「……でちゆよ！」

「手始めにこの広場のみんなは皆殺しにします！」

「……殺ちまちゆ」

「マールー！」

マールーが杖を地面に刺すと大きな地震と共に地割れが出来、広場にいた兵士達を飲み込んでしまいました。

「はい。皆殺しにしました。次はこの城を壊しちやいます。——と思っただけど皇帝も死んじやうので止めてあげます」

「……あげまちゆ」

「早く皇帝出てきて下さい！　でないとこの都市を壊しちやいます！」

「……ありんちゅ」

バハルス帝国皇帝、ジルクニフは窓から顔を出して震える声で叫びました。

「ジルクニフ・ルーン・ファーロード・エルニクスは私だ……話し合いをしたい……の  
で、こちらまで来てもらえるだろうか！」

ジルクニフは語尾だけ勇ましく叫びましたが、国民の多くに皇帝がビビっちゃつてい  
る事が丸わかりでした。

応接室に使者達を待たせてジルクニフは深く深呼吸をしました。初戦ではドラゴン  
に大地震という天災級の荒技に度胆を抜かれたものの、所詮相手は子供達です。

したたかなバハルス帝国皇帝、鮮血帝ジルクニフにかかればまさに赤子の手をひねる  
ようなものです。

（まずは、ご使者殿を観察して、出方次第で臨機応変に探りを入れていくか？ とりあえ  
ずあれだけ慎重に手配したワーカー達と何故このジルクニフを結び付けたのかを探ら  
ないと……）

扉を開くとジルクニフはとびきりの笑顔をアインズ様なるものの使者達に向けまし  
た。

しかし、……そこに使者達の姿はありませんでした。

部屋の中にはジルクニフのメイドだけがいて、困ったような顔で答えました。

「皇帝陛下、あの……」使者様方はお手洗いに行かれました」

ジルクニフは部屋の中でメイドと三人、使者達の戻るのを待つことにしました。

……待ちました。

……ジルクニフは使者達の戻りを待ちました。

が、使者達はいつまで待っても戻って来ませんでした。

※ ※ ※

「……一体何だったんだ？」

翌日、ジルクニフは執務室で頭を抱えていました。

「……まあ、このままなにもないという訳にはいくまい……さて、どうしたものか……」  
ジルクニフは誰に言うともなく呟いていました。そして腕を組み、考えを巡らせるのでした。

（しかしながら……いったいアインズ・ウール・ゴウンとは何者なのだろう？ ……あのように一方的に力を誇示されては帝国としても無視する訳にいかない。もしかしたらそれが狙いか？ ……だとすれば相当な策士だといえよう。それに使者として子供達を選んだ事も、こちらの油断を招く狙いだったのかもしれないぞ……うーむ、アインズ・

ウール・ゴウン、恐るべき相手だ……」

ジルクニフが考えに耽っていると、なにやら広場が騒がしくなりました。

窓から見下ろすと今まさに一匹のドラゴンが、昨日と全く同じ光景を再現することく、舞い降りて来る所でした。

背中には昨日の三人の子供達——いや、アインズ・ウール・ゴウンの使者達が乗っています。

「……まるでデジャヴのようだが？ ……いや違う……これは悪夢だ……」

「あ、あのー聞こえますか？ ……ほ、僕はア、アインズ様の使者として来ました」

「……きまちゆた」

「皇帝は、あの、すぐにアインズ様に謝りに来て下さい」

「……ありんちゆ」

「……あの、とりあえず、この広場のみんなは死んでもらいますね」

「……ちぬでんちゆ」

マーレが杖を突くと広場に地震が起き、昨日の出来事がビデオで見るかのように再現されました。

「やーめーてーてー!!」

ジルクニフの絶叫しは折から起こる凄まじい地鳴りにかき消されてしまいます。

た。傷跡が生々しく残る広場の亀裂が再び口を開け、兵士達を飲み込んでしまうのでし

## 021ありんすちやんとジルクニフ

バハルス帝国の王城にドラゴンに乗ってやって来たありんすちやんとアウラ、マーレの三人は広場にいた帝国兵士達を魔法で生き埋めにしてしまいました。慌てて顔を出した皇帝、ジルクニフの懇願によりありんすちやん達はひとまず皇帝と会見する事になりました。

「さて、ご使者殿。私がバハルス帝国皇帝、ジルクニフ・ルーン・フアード・エルニクスである。……先だってフィオーラ殿が言っていた件だが、私には全く心当たりが無いのだから？」

ムツとしたアウラを制してありんすちやんが口を開きます。なにしろアインズ様から今回の任務の責任者に指名されたのはありんすちやんなのですから。

「ナジャリックにワーカーが泥棒しに来ちゃでありんちゅ。皇帝の命令でありんちゅ」  
ありんすちやんの鋭い指摘にジルクニフは動揺しました。

「なにを……いや、言いがかりだ。私は知らぬ……なにか誤解されているのであろう」  
(ワーカー達を送り出す計画は慎重に進めたから私の関与を示すものは何もないはずだ。……きつと口から出任せに決まっている)

ジルクニフの心の中の葛藤を見抜くようにありんすちゃんが可愛いらしく小首を傾けました。

「アインジユチャまに謝罪しないでありんちゆね。じゃあ帝国はおちまいにするでありんちゆ」

ありんすちゃんはそう言うのと立ちあがりました。両隣のダークエルフも立ちあがり、少女のダークエルフが黒い杖を振り上げました。ジルクニフは慌てました。と、同時に理解するのです。この魔導国の使者には駆け引きが全く通じないという事を。彼らは自分達がそこにいる事にお構いなしに王城もろともこの場にいる全員を抹殺しようとしている事を。そして、そこにはジルクニフ側の釈明を微塵も許さないという事を。

「す、すまなかつた。謝る。いや、是非とも謝罪させて下さい！ この通りだ」

ジルクニフが必死に懇願するとありんすちゃんはニッコリしました。

「しようでありんちゆか。しよれならこの城壊すのはやめるでありんちゆ」

ジルクニフは安堵しました。と、同時になんとか主導権をこちらで手に入れられないか目まぐるしく頭を回転させるのでした。

「では、アインズ殿に謝罪にナザリック地下大墳墓とやらに行くとして……準備等々でみつか、いや、十日程待つて頂けないだろうか？」

ジルクニフはありんすちゃんの瞳をじつと見つめながら訊ねました。ありんすちゃ



んは顎に人さし指を当てて悩む素振りをしてみせます。ジルクニフは今こそ好機とばかり言葉続けました。

「その、アインズ殿にプレゼントを用意したりしないとならないのでね」

プレゼントという言葉に明らかな反応をありんすちゃんが示したのを見て、ジルクニフはほくそ笑みしました。しかし、次の瞬間、ジルクニフのささやかな希望は隣のダークエルフの少年によつてうち壊されてしまいました。

「あのさあ、アインズ様から『すぐ来るように』伝えろつて言われているんだよね。『すぐ』が何日後かはそつちが決めて構わないけど」

ジルクニフは苦虫を噛むような気持ちを味わいました。どうやら子供達にしか見えない使者を寄越したアインズは相当な策士と思われました。

「準備などもろもろ整えて三日後までにはそちらを伺おう」

ジルクニフは絞り出すかのような声で答えました。国内では鮮血帝などと呼ばれている自分が年端もいかない子供達相手に手も足も出ないという屈辱……

「じゃあアインズちやまにちゆたえるでありんちゆ。しよう言え、生き埋めの人たち、掘り出しゆの手伝つてあげるでありんちゆか？ まあ——」

ありんすちゃんは両手をパンと打ち合わせるとニッコリと笑みを浮かべました。

「——おせんべいみたいにペツタンコでありんちゆかもしれないでありんちゆね」

ジルクニフはようやく反撃の機会を得たかのようにニッコリと微笑みました。「それはありがとうございます。ではお願いしてもよろしいですか？」

※ ※ ※

ジルクニフは後悔していました。あの会見の最後に余計な頼みなんかをした事を。ありんすちゃんにはジルクニフの言葉に対して素直に頷きました。それからすでに三時間――

「マール、もうちゅこし盛り上げるでありんちゅ。出てきたでありんちゅ」

マールが魔法で隆起させた地面からありんすちゃんが遺体の一部を次々に取り出します。それを一つ一つジルクニフが受け取ります。

「顔が半分でありんちゅね。あとは足でありんちゅ。この鎧は三角に潰れちえておもちゃろいでありんちゅ」

「ほらほら、皇帝。しつかり持つ！ さつきから頭を二つ落としたじゃん。あんたの部下なんだから大切に扱いなよ？」

「…………ハ…………ハイ」

ダークエルフの少年に叱られて、ジルクニフは慌てて兵士の成れの果てを拾いました。無惨な光景に付き合わされて手も足も震えが止まりません。

(…………まさに地獄だ…………)

ジルクニフ自身が頼んだ事である為、今さら嫌味だったなどと言いつける事も出来ません。

まだまだ終わりが見えないこの地獄の責め苦にジルクニフはただただ涙ぐむだけでした。

※ありんすちやんが挿絵を描いてくれました

## 022ありんすちゃんはげます

ありんすちゃんはとつてもご機嫌でした。

アインズ様の命令であるバハルス帝国への使者という大任をちゃんとやり終えたからです。

城から慌てて飛び出して来た皇帝ジルクニフの真っ青な顔……思い出しただけで笑っちゃいます。

「是非ともお願いですからアインズ・ウール・ゴウン閣下に謝罪させて下さい。お願いします」と何度も頭を下げていました。ありんすちゃんはその時、ジルクニフ皇帝の頭のとつぺんがうつすらと地肌が見えていたのに気がつきました。

そして今日はバハルス帝国から皇帝自ら謝罪にやってくる日なんです。

第十階層の玉座の間にはアインズ、アルベド、階層守護者達、周囲には沢山のシモベ達が並んでいます。

ありんすちゃんとアウラ、マーレの3人は玉座の間ではなく、手前の廊下に面した小さな中庭のテーブルにいました。

ありんすちゃんはバハルス帝国の皇帝が簡単にごめんなさいしないだろうと考えて、

アウラとマーレと作戦会議をしているのでした。

だってありんすちゃんだっておねしよは絶対絶対認めませんから。

仕方ないですよ。

ありんすちゃんはなんだかんだ言っても、まだ5歳児位の女の子なんですから。

「やつぱりさあ、インパクトが大事だよ。シャルティア、あたしんこのシモベを動員して道すがら廃墟にしていくのってどうかな？　ぺんぺん草も生えないつての、やつてみたいんだよね。あたし」

「……や、やつぱり僕はあの、ドラゴンが良いと思います。……こ、今度は、あの、二匹で行ったら凄いいんじゃないかな？」

「やつぱりガルガンチャをアインジュしやまにお借りんちゆて、一気に行くのが面白いでありんちゆね。城にガルガンチャがパンチするとガラガラでバラバラになるでありんちゆ」

ありんすちゃん達が夢中になって話し合っているテーブルの近くでは、バハルス帝国皇帝ジルクニフが真つ青な顔をしていました。

もしかしたらありんすちゃん達の計画が「ごめんなさい」をする勇気の励ましになってくれたかもしれない。

ジルクニフに付き添ったバジウッドも真つ青な顔をしています。ジルクニフは悪魔

にでも会ったかのように見開いた目でありんすちゃん達を凝視しながら考えます。

（——いかん。これはいかにぞ。このままではあの子供達はきつとやる。間違ひなくやるぞ。絶対にだ。……どうする？ どうしたら良い？ 考えろ。考えるんだ）

やがて意を決してアインズとの接見に臨んだハバルス帝国皇帝ジルクニフはさらに心をへし折られながらもなんとかなザリツクとバハルス帝国の同盟に向けての第一歩を進める事になりました。

そして、それはジルクニフの果てしない抜け毛の恐怖との闘いの始まりであった事はいうまでもありません。

結果的にみればジルクニフを精神的に追い詰めたありんすちゃん、励ましはバハルス帝国にとってまずは存続の道を勝ち取る事になったといえます。

とはいえ、三人——ことさらガルガンチュアで暴れたかったありんすちゃんは特に——残念で仕方なかったのですが。

## 023 ありんすちゃんいすになる※挿絵あり

ありんすちゃんはナザリツクの外に建てられた大きな丸太小屋にやって来ました。

今度ナザリツクの遠征軍をコキユートスが率いる事になり、リザードマン達との戦いの拠点として使用される事になった、アウラが建設中の要塞です。

中ではデミウルゴスがいろんな動物の骨を組み合わせてアインズの為の仮の玉座を作っている最中でした。

フンフンと鼻歌を歌いながら楽しそうです。ありんすちゃんも何かお手伝いしたくなるのでした。

「デミオルチュチュ、それは何でありんちゆか？」

「これはだね、シャルティア。アインズ様に座って頂く為の玉座なのだよ」

得意気にデミウルゴスはありんすちゃんに白く輝く玉座を披露します。人間やモンスター、動物……様々な生き物の様々な箇所を骨を見事に組み合わせて作られています。どの骨も綺麗に磨き込まれていてまさに芸術品とも言うべき出来でしたから、デミウルゴスが得意になっていたとしても不思議はありません。

あまりの美しさにありんすちゃんは思わず溜め息をつきました。

「……きれいでありんちゅね。デミオルチュチュは工作が得意なんちゅね」

「ありがとう。シャルティア。だがね、今のままではアインズ様に座って頂くのに何か足りないというか、相応しくない気がするのだよ。何かもう一つアレンジが出来れば良いのだがね」

ありんすちゃんには難しい事はわかりません。ただ、リボンを付けたら可愛いいな、と思いデミウルゴスに提案してみました。

「ふむ。リボンですか。ふむふむ……なる程。シャルティア、ありがとう。君の意見を参考にして赤をワンポイント使ってみたら良いかもしれないな」

さすがはありんすちゃんですね。ナザリック随一の知恵者とも言われるデミウルゴスよりありんすちゃんが賢い事が今まさに証明されたのです。

ありんすちゃんは大得意でした。

「ふむ……そうだ、シャルティア。この椅子の背のこの窪みに入ってみてはくれまいか？」

ありんすちゃんはデミウルゴスの指示するまま、椅子の背もたれ部分の窪みに身体を合わせてみました。すると驚いた事にまるでそうする為にこしらえたかのようにピッタリとありんすちゃんがはまりました。

「ありがとう。シャルティア。君のおかげでどうやら完成出来たようだよ」



こうしてありんすちゃんは椅子——白骨の仮玉座の一部——になったのでした。

※ ※ ※

部屋に入ったアイNZは真つ先にその白い玉座に気がつきました。

これ見よがしに人骨——それも頭蓋骨を含めた——を沢山つかい、何故か解らないが背もたれの真ん中にシャルティア——ありんすちゃん——がピツタリとはまっている白い玉座と、その側には恭しく会釈をしているデミウルゴスの得意そうな顔がありました。

（あれに座れという事なんだろうな。人骨、しかも頭蓋骨がこつちを見てるし……趣味悪いよな……それともこの世界の美的感覚では普通なのか？普通なのか？……それにシャルティア。何やってんの？意味判らないんだが？）

心の動揺を隠してデミウルゴスに促されるままにアイNZは白い玉座に腰掛けるのであります。もし、仮に失態を犯した守護者がいて、その守護者に罰を与えるという名目でその守護者に腰掛ける事が出来たら白い玉座を使わずに済んだのでしょうか。

ありんすちゃんは後ろからアインズ様の背中を揉み揉みします。

確か『まつさあじちえあー』というんですよね。

「……アインズ様、ちよつと外の空気を吸ってきます」

俯いていたアルベドが唐突に部屋から出ていきました。

——と、建物の外でまるでダンプカーがマンモスと正面衝突したかのような音がしたかと思ったら——メキメキメキ——とアウラが建てた丸太小屋が全壊してしまいました。

※ ※ ※

その後、リザードマン達へは戦闘が一週間後に変更になったという布告があつたとの事です。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 024ありんすちゃんかつさいされる

今日もありんすちゃんは張り切っていました。とうとう戦争に参加する事になったからです。

せつかく守ってあげたのだから城塞都市エ・ランテルをアインズ様にプレゼントしてくれば良いのとありんすちゃんは思います。ですが、お馬鹿なり・エステイーズ王国はケチンぼで言うことを聞かないのでアインズ様は懲らしめる為に戦争をすることになった、という訳です。

こう見えてありんすちゃん、以前ではナザリックでも上位の強さでしたから戦いには自信があります。たぶん。王国の兵隊なんてちよちよいのちよい、です。

アインズ様が一マイルをお供に馬車で戦場となるカツツエ平野に向けて出発してからしばらく経ちました。

これからがいよいよありんすちゃんの出番です。戦場へ転移魔法——〈ゲート〉——でデスナイトとソウルイーターの軍勢を送り出すのです。

「げーちよー！」

ありんすちゃんは語尾を噛んでしまいました。

「げーちよ!!」

力一杯言ってみました、駄目でした。

「げーちよ! げーちよ! げーちよ!」

「げーちよ! げーちよ! げーちよ! げーちよ! げーちよ! げーちよ! げーちよ! げーちよ! げーちよ! げーちよ!」

駄目です。いくら繰り返しても転移しません。

「……ありがとうシャルティア。もう充分だよ。今回はパンドラズ・アクターに替わってもらおうとして、君には他の事を頼むとしようか」

ありんすちゃんはデミウルゴスに連れられて第二階層にやって来ました。

そこにある恐怖公の領域、通称エントマのおやつの間の前にありんすちゃんを立たせてデミウルゴスが言いました。

「いいかな? 戦端が開いたらここで小さくしやみをして欲しいんだ。出来るだけ多く、ね」

ありんすちゃんは力強く頷きました。

※ ※ ※

水晶に映った戦場ではアインズが腕をひとふりして超位魔法——〈黒き豊穡への貢  
——を発動させました。

王国軍左翼七万の軍勢は糸の切れたあやつり人形のように転がりました。  
やがて木のようなものが生えて黒い仔山羊が生み出されました。

——今です。ありんすちゃんはくしやみをします。

黒い仔山羊に追われて王国兵が逃げ惑います。

その頭上からありんすちゃんのかくしやみでテレポートしてきた恐怖公の眷属が黒い  
雨となつて降り注ぎます。

黒い仔山羊がグチャグチャグチャグチャグチャグチャグチャグチャグチャグ……

黒い雨がカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサ……

グチャグチャグチャグチャグチャグチャグチャグチャグチャグチャグチャグ……

チャグチャ……

カサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカ

サカサカサ……

グチャグチャグチャグチャグチャグチャグチャグチャグチャグチャグチャグ……

チャグチャ……

カサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカ

サカサカサ……

黒い仔山羊から逃げ惑う人達がありんすちゃんの黒い雨に包まれていきます。

こうして見ると逃げまどう人間がまるでゴミのようです。ありんすちゃんはますます頑張つてくしやみをして黒い雨を降らせるのでした。

最後にしたくしやみでありんすちゃんは転移して黒い仔山羊の上のアイنز様の膝の上にいました。

アイنزはありんすちゃんを膝の上から優しく降ろし、立ち上がるとゆっくり仮面をはずして言いました。

「——喝采せよ。……我が至高なる力に喝采せよ」

アイنز様とありんすちゃんに万雷の拍手が寄せられるのでした。

※ ※ ※

ありんすちゃんのくしやみで転移した恐怖公の眷属——Periplantaf  
uliginosa (和名 ゴキブリ) ——の一部は火星に達して、そこで独自の繁殖  
をしていきました。

後に彼らが地球を脅かす存在になろうとは、誰にも想像出来ませんでした。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 025 ありんすちやんとザイトルクワエ

トブの森の奥深くにある貴重な薬草を採取するという難解なクエストを引き受けた『漆黒』のモモンことアインズは、途中でドライアードのピニスンと出合いました。そしてピニスンの案内により、かつて七人組により封印された『世界を滅ぼす』という魔樹——ザイトルクワエの元にたどり着きます。

同行したアウラのスキルにより目覚めたザイトルクワエを見上げながら、アインズは守護者達に対プレイヤー戦闘の訓練を実践させる事にするのでした。

「コキュートス、マール、デミウルゴス、ご苦労」

〈ゲート〉により到着した守護者達にアインズがねぎらいの言葉をかけました。

「アインズ様がお呼びとあらば、即座に」

「デミウルゴスノイウトオリダ。アインズ様、ゴメイレイヲ」

「……あの……アインズ様のお役に、あの……立ってみせます」

アインズは満足そうに頷いてみせました。離れた場所でハムスケと一緒に様子を見ていたピニスンが騒ぎだしました。

「何あれ？ いつの間にか増えたよ？ どこから現れたのかな？」



「うるさくしない方が身のためでござるよ。あの方達は普通ではないのでござる」

やがて再び〈ゲート〉が開かれアルベドとありんすちやんが現れました。

「アインズ様、おそくなり申し訳ございません」

「よい。アルベドよ」

と、アインズはアルベドの隣にありんすちやんがいることに気がついて、一瞬ギョツとしました。ありんすちやんは既に真紅のフルプレートにスポイトランスを持ち、やる気満々です。

「……その……アルベドよ。シャルティアはナザリックで待機すべきだと思うのだが……」

「申し訳ございません。どうしても言い張りまして……」

ありんすちやんは鼻からフンスと息を吐きながらスポイトランスをブンブン振っています。それを見てデミウルゴスは静かに肩をすくめてみせました。

「……ゴホン。……では本題に移ろう。今回、階層守護者達に集まってもらったのはお前たちのチームとしての戦闘能力を確かめたい。それと、全員の力が見たいから決して本気を出すな。私は後ろで見させてもらおう」

※ ※ ※

「一番さいちよにいくでありんちゅ！」

ありんすちやんがトテトテと駆け出しましたがたちまちの内にコキユートスとアウラに追い抜かれてしまいました。

「わら……わたちがさいちよでないといやでありんちゅ！……う、うわーん！」

コキユートスとアウラがザイトルクワエに攻撃しているのを見ながら、とうとうありんすちやんが泣き出してしまいました。仕方ありませんよね。ありんすちやんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

「大変だ。あの子供危ないよ！ お母さんは助けようとしないの？！」

興奮して叫ぶピニスンを含ムスケが宥めます。

「あの子供は実はとても強いでござるよ。それにあの女性はシャルティア殿の母親では無いでござる。決してそのような事を言っではいけないでござる。命が……」

コキユートスとアウラは途中で攻撃を止めてありんすちやんを宥め始めました。そこにアルベドがやって来て二人に言いました。

「コキユートス、アウラ、あなた達はアインズ様のお言葉を思い出しなさい！ アインズ様は私達守護者が協力して戦う事をお試しになっているのだから」

「うん。アルベドの言う通りだね。……それと我々守護者はアインズ様よりワールドア

アイテムをお預かりしていますが、それを敵に奪われない為にも関係は必要ですね」

「デミウルゴスも加わって論じます。マーレがアルベドとデミウルゴスに訊ねました。」

「……あ、あの……するとぼ、僕たちは、……どう戦えば？」

「合体攻撃でありんちゅ！」

アルベドやデミウルゴスが答えるより先にありんすちやんが叫びました。

※ ※ ※

「……うーん。どうしたのかな？ なんだか揉めているみたいだけど……世界の危機だ  
というのに何をしているんだよ！」

ピニスは苛々しながら守護者達を見守りました。

「うわっ！ 何をするんだろう？ 女の人とシッポの男の人の上に昆虫みたいな人が  
乗った。今度はダークエルフの二人が両側にぶら下がったぞ？ ……あー危ない。

小さい子供がてっぺんに……」

「うーん……それがしにも全くわからないでござるよ」

強情なありんすちやんの意見を受け入れて完成した？ ナザリック階層守護者の合

体形態『ふあいなるあたくモード』になった守護者達はヨロヨロしながらザイトルク

ワエに向かいました。てっぺんのありんすちゃんは大喜びです。

「やってられるかー!」

『右足』のアルベドか思い切りコキュートスを投げます。コキュートスはアウラマーレを左右に飛ばし、さらに頭上のありんすちゃんをザイトルクワエの頂点に飛ばします。ありんすちゃんはスポイトランスを構えてロケットのように飛んでいきます。

「うわー! 凄い! あの子供が大きな槍を突き刺す度に魔樹が少しづつ萎んでいく!」

ピニスンとハムスケが呆気に取られる内にどんどんザイトルクワエは刈り込まれていき、さらにあらゆる攻撃を受けて萎んでいきます。てっぺんにあった薬草はありんすちゃんのスポイトランスで風ぎ払われた後、デミウルゴスの手に無事収まりました。

「うーん……じゅいぶんちっちゃくなつたでありんちゅね」

百メートルもあつたザイトルクワエはもはや一メートル程の高さになり、魔樹の面影はなくなっていました。マーレが養分いっぱい雨を降らすと、なつくようにキューキュー鳴いて甘えます。結局、ザイトルクワエはナザリック地下大墳墓の第六階層でピニスンが世話をする事になったそうです。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 026ありんすちやんがいっぱい

アインズ・ウール・ゴウン魔導国が建国され、アインズは悩んでいました。  
(……この国をどうしていきたいか、か。……なかなか難しい問題だな……)

階層守護者達はアインズの言葉に盲目的なだけにこの基本方針だけはアインズ自ら決めなくてはならないのです。

着替えを済ませて執務室へ向かう途中も考えています。

執務室でのアルベドやエルダーリッチ達と打ち合わせの最中も考えています。

「アインズ様。アウラ様とマール様です」

「おはようございます！ アインズ様」

「お、おはようございます、アインズ様」

アウラがアインズに抱き上げて貫おうとVの字に手を上げてピヨコピヨコしている時も考えています。

アウラとマールをそれぞれ膝に載せてあげた時も考えています。

アルベドがアウラを妬んで『おぎゃー』と言い出した時はさすがに考えていません

した。

アルベドが腰掛けられるようにマーレをどかした途端、膝の上にあるすちゃんがいきました。

ありんすちゃんはスヤスヤ眠っています。

アルベドは行き場の無い怒りに身を震わせましたがさすがにありんすちゃん相手には怒りをぶつけられません。

空気を読んでアウラがアインズの膝を譲ってあげたのでなんとか事なきを得られる事になりました。NPC達のやり取りを前にしながらもアインズは考えていました。

アインズは気分転換に久しぶりにパンドラズ・アクターに会いにいく事にしました。パンドラズ・アクターが冒険者モモンとして生活している館の前で、アインズはハム

スケ小屋からアンデッドの気配を感じて様子を見ました。

するとそこには熟睡しているハムスケとトゲが丸くなったデス・ナイトに挟まれて一緒に眠るありんすちゃんの姿がありました。

やっぱりありんすちゃんはスヤスヤ眠っています。

アインズは起こさないように静かにモモン——パンドラズ・アクターの住居へ向かいました。

「至高の御身、私の創造主であらせられるアインズ様には、ご機嫌うるわしく——」

アインズは長くなりそうな挨拶を止めさせて要件を切り出しました。

「——で、何か問題はあるか?」

パンドラズ・アクターはひとしきり宝物庫に時々帰りたいたいと感情的に訴えた後、アインズの悩みと同じ指摘をしました。

「多くの人間たちがこの国をどのよう導いていかれるのか疑問に思っています。争いに駆り出されはしないか等と不安に思っています」

「……話したいところだが、まだ考えている最中だ。今後守護者各員と相談の上で話そう」

アインズはモモンの屋敷を出ると空を見上げました。

そこには青い空が浮かんでいました。

「飛ぶ」

慌てる従者をよそにアインズは空に浮かび上がりました。

ふと側の木に大きな鳥の巣があり、卵に並んでありんすちやんがスヤスヤ眠っています。す。

その後も街を巡回するデス・ナイトの肩の上で、またまた、荷物を運ぶソウルイーターの荷車の上でスヤスヤ眠っているありんすちやんを見かけるのでした。

まるでありんすちやんの大量発生みたいです、実はありんすちやんが寝ぼけてアイ

ンズの行く先々に転移していたのでした。

そんなありんすちゃんを見ている内にアインズは閃きました。

「——そうだ。ハムスケ、動物、アンデッド。かつてのギルド、アインズ・ウール・ゴウンのように種族の垣根がなく、様々な種族が共存できる国をつくろう」

アインズは晴れ晴れした表情でスヤスヤ眠るありんすちゃんを抱き上げるのでした。ただ寝ていただけなのにアインズの悩みを解決するヒントになってしまふなんて、さすがですよね。ありんすちゃん。

でも、まだ5歳児位の女の子なんですよ。

おやすみ。ありんすちゃん。良い夢を。

※ ※ ※

おまけ『ありんすちゃんききいっぱっ』

※ ※ ※



ある日、ありんすちゃんは夜中に目が覚めました。

そして小さくくしやみをするると周りの景色が変わりました。

どうやらまたもや転移しちやったみたいですね。

ありんすちゃんがいたのはとてもフカフカナベッドで、部屋の内装もゴージャスでした。

ふと見ると誰かベッドの中にいます。

なんとびっくら。

アインズ様!!!!!!——と思ったら——アインズ様のぬいぐるみでした。

よく見るとあたり一面アインズ様だらけです。

ありんすちゃん!んはアインズ様のぬいぐるみを抱きしめるとウツラウツラして……またもや寝入ってしまいました。

## 027 ありんすちやんとペンギン

ありんすちやんは第九階層に迷いこんでしまいました。

うろろうろしていると向こうからペンギンが歩いてきました。ナザリツクの執事助手をしているエクレアですね。どうやらありんすちやんとは仲良しみたいです。

「これはこれは。シャルティア様。今日も私と一緒にナザリツクの叛逆活動をされますかな？」

「はんぎやくでありんちゆね」

ここで本来のシャルティアならばバーで飲んだくれるか目がザツパンザツパンするところですが、なにしろありんすちやんはまだ5歳児位の女の子なのでから訳わからずにはしゃいでいます。

さて、いよいよエクレアの日課のナザリツク支配作戦の開始です。

まずは至高の方々の住居がある第九階層のトイレ掃除です。

ありんすちやんはエクレアのような柔らかな羽根がないので雑巾とトイレタワシを持ちます。

まずは男性トイレです。

小便器の中を磨く時にエクレアもありんすちやんもスツポリ中に入り込んでしまします。

ありんすちやんが磨いた場所は必ずエクレアがチエックします。

高い場所を磨く場合にはエクレアとありんすちやんはエクレアの部下に抱え上げてもらいながら磨きます。

え？ 全部部下にやらせた方が早いのでは、ですって？

実は……私もそう思います。

ですがエクレアにとつては大切なナザリック支配の為の作業らしいですよ。だから部下に任せておけないそうです。

小便器では排水の所の『尿だまり』まで綺麗にピカピカにします。

「——隊長。おしっここのやちゅおわりまちゅた」

ありんすちやんがエクレア隊長に敬礼して報告します。

「ふむ。ご苦労様。これで本日のナザリック支配度が10%上昇した。次のターゲットは大便器である。気を引き締めて当たるように」

「らじや」

勇ましくありんすちやんは大便器に向かいます。

気を抜くと吸い込まれそうになるのでありんすちゃんは足元に力を込めて踏ん張ります。トイレタワシを両手で握りしめ、まずは着水。この時に45°の角度にしないと反撃を受けてしまいます。

無事に着水させられたならば壁面に押し当てて上から下にこすり下げます。

大変です！

ありんすちゃんはうつかり下から上へこすり上げてしまいました！

水ごとトイレタワシが水面から勢いよく飛び出してありんすちゃんはビショビショです。

どうにかこうにか格闘の末に男性トイレをピカピカに磨き上げたナザリック支配叛逆部隊は場所を女性トイレに移動します。

女性トイレは全て大便器ですから、なかなかの強敵です。

しかも『おしゆれつと』なる機能があるので危険です。

前回、ありんすちゃんはうつかり『びで』というボタンを触ってしまいとんでもない目にあつたのでした。

ありんすちゃんは慎重にトイレタワシを構えます。

——そして、慎重に着水。

今度は間違えずに上から下へ……うまくいきました。

ありんすちやんはやれば出来る子なんです。

時間をかけてピカピカに磨き上げたトイレを見渡しながら、エクレアはナザリック支配への道がまた一歩前進したな、と思いました。

ありんすちやんの加入で効率も二倍になったはずだけど、前より効率が悪くなった気がするのには単に気のせいだろう。そのうちアルベドやデミウルゴスも仲間に引き込んでさらにトイレの輝きを増すのだ、と心に誓うのでした。

※ありんすちやんが挿絵を描いてくれました

## 028ありんすちゃんどエクレアだん

ナザリツク地下大墳墓第九階層にありんすちゃん、部下に抱えられたエクレア、そしてもう一人の姿がありました。エクレアが二人の前に立ちます。

「あー、えーコホン。今回、我がナザリツク反逆団に新たに新人が加わりました。彼は帝国から出向している人間に過ぎないので戦力として頼りないが、本人のやる気を見込んで特別に我がエクレア団の入団を許可するものとする」

「えーと……はじめまして。私はロウネ・ヴァミリネンです。この度、同志の中に加えて頂きまして誠にありがたく存じる次第にあります」

緊張のあまり直立不動の姿でロウネが挨拶をしました。エクレアは部下に抱えられました。まま、面倒くさそうに指示を出します。

「じゃ、ロウネはシャルティア隊員に任せる、という事で」

「らじゃ、でありんちゅ」

エクレア隊長の命令にありんす隊員は元気に返事をします。ロウネはありんすちゃんがまだ5歳児位の女の子なので思わず慌てました。彼の目にはエクレアを抱えている部下の方がありんすちゃんよりも格上に見えたからです。

「あの……こちらのシャルティア様はいささか幼すぎるのでは……」

「こう見えてシャルティア隊員はナザリックでもなかなかの強者なんだ。しかもかつてアインズ様と戦った事すらある。ガチンコでな」

ありんすちやんは得意げに胸を反らせました。ロウネにはこの少女と魔導王が戦う様子が全く想像出来ないので呆気にとられるばかりでした。そんな新米隊員のロウネはエクレア隊長の声で我に返りました。

「では、諸君。今日もナザリック制覇の為、反逆活動に勤しむとしよう」

エクレア隊長の音頭で隊員二名はオーと力強く拳を突き上げるのでした。

※ ※ ※

トイレ掃除に追われた一日がようやく終わり、第六階層の居住区に用意された自室に戻ったロウネはベッドに横たわりました。

(陛下の指令にあつたダークエルフの少女との接触は、取り巻きのエルフによつてほぼ不可能みたいだが、どうにか魔導国内の反乱勢力に加わる事が出来たぞ。あのエクレアにシャルティア……見ためはペンギンと少女に過ぎないが恐るべき強者みたいだ。しかも、よく判らないがああ魔導王と争つたらしい。この情報をもつと集めれば、皇帝陛下

下もご満足頂けるに違いない)

※ ※ ※

翌日もエクレア団が反逆活動に動んでいると、デミウルゴスを通りがかりました。

「これはデミウルゴス様。如何ですか？ そろそろ私のナザリツク反逆の力添えを戴けませんでしょうか？」

「反逆しゆるでありますちゅ」

デミウルゴスは優しくありんすちゃんの頭を撫でながら答えました。

「そうだね。考えておくよ。……そうだ、その反逆活動を是非とも頼みたいのだからね。第五階層で『綺麗なもの』『バラバラなもの』『グチャグチャなもの』を整理して欲しいのだが、頼めるかね？」

「まかちえるでありますちゅ」

やたらと張り切るありんすちゃんを先頭にエクレア団は第五階層に向かうのでした。

※ ※ ※



「うーん……これは大変でありんちゆね」

「部下を大勢呼ばなくては……この際、恐怖公の力を頼るしかないか……」

「……仕方ないでありんちゆね」

呆然として言葉を失ったロウネをよそにありんすちやんとエクレアは淡々と相談を進めていました。

数え切れない死体の山を前に恐怖公の眷属達の力を借りれば作業が楽になるのはわかっていましたが、ありんすちやんはちよつと気が引けてしまっていました。自分の階層の領域守護者ではありますが、ありんすちやんは恐怖公とその眷属が苦手なんです。仕方ありませんよね。ありんすちやんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

尚、その後ロウネは自室に籠って二度と外に出てくる事はありませんでした。

## 029 ありんすちやんりょうりをする

ナザリツク地下大墳墓第六階層にありんすちやん、アウラ、ユリ、ナーベラルが集まっています。野外キッチンが用意されていて、どうやら皆で料理に挑戦してみるみたいですね。

「うーん……やっぱり駄目だね。あたしもただの消炭みたいに真っ黒焦げになっちゃった。……やっぱりユリみたいに料理スキルが無いと無理なのかなあ？」

「ただ、食材の肉を焼いてステーキにするだけです、無理みたいですね」

アウラが作った消炭料理を前にして、思わずユリはため息をつきました。以前、アイズが一般メイドに試させてみた時も皆、やはり消炭のように真っ黒焦げにしてしまつたそうです。この結果はたとえ階層守護者といえども同じのようです。

「次はわら……わたしがやるでありんちゅ」

フンスと鼻から息を吐きながらありんすちやんがキッチンに向かいました。ありんすちやんはやる気満々の様です。

「……いやいや、シャルティアも無理だつてば。あたしで無理なんだからシャルティアにはできっこないよ？」

ありんすちゃんはキツとアウラを一睨みして肉を取ります。フライパンにバターを敷いてやさしく肉を乗せます。ここまでは順調です。しかし……肉に熱が通り出した瞬間……ジュンと音がして真っ黒焦げの消炭になってしまいました。

と、さつきから一人黙って料理の様子を観察していたナーベラルが口を開きました。

「この間、アインズ様と冒険者をしていた時、敵をへっインマキシマイズマジック・チェイン・ドラゴン・ライトニングで倒したのですが焼けた死体がとても美味しそうな匂いでした」

「ちよれでありんちゅ！ ナーベ、お肉を魔法で焼くでありんちゅ」

アウラもうなずいています。

「うんうん。試してみようよ？」

「……あの……それは料理とはいえないのでは？」

若干一名、気乗りしない者がいましたが、ナーベラルはキッチンフライパンに乗せられた肉を前にして魔法を発動させました。

※ ※ ※

「うーん……やっぱり人間でないと駄目でありんちゅね」

ナーベラルのへツインマキシマイズマジック・チェイン・ドラゴン・ライトニングで焼かれた肉はまたしてもただの真つ黒焦げの消炭になったのでした。

「うーん……人間かあ。丁度この階層に一人いるけど、アインズ様から危害を加えるなつて厳命されているんだよね」

ぼやくアウラの隣でありんすちゃんが顔を上げました。どうやら心当たりがあるみたいですね。

「わたちに任せるでありんちゅ」

ありんすちゃんは魔法へグレーターテレポーションを発動させました。次の瞬間、ありんすちゃんの足元には一体の氷漬けの死体がありました。

「たくちゃんあるからいくつでも持つてこられるでありんちゅ」

ありんすちゃんはどうかやら第五階層に氷漬けになっている死体の事を思い出したみたいです。これで実験が出来ます。ナーベラルは今度は死体に向かって魔法を発動させました。

※ ※ ※

「うーん……やっぱり生きていないと駄目でありんちゅね」

結局、人間の死体でも同じように真っ黒焦げの消炭になってしまいました。

「生きてる人間かー……やっぱりこの階層にいるのが丁度良いんだけどねー……かといつてシモベを焼くのもね……あ、そうだ。丁度良いのがいた」

アウラは突然自分たちの住居に戻ると鳩が三羽入った籠を持って来ました。

「これは帝国のネウロ……だっけ？ ……今第六階層に住まわせているんだけど、持って来てた鳩を逃がしちやっただよね。で、すぐにあたしが回収しておいたんだ」

早速、ありんすちゃん、ナーベラル、アウラはそれぞれ魔法やスキルを利用してそれぞれこんがりと美味しそうな鳩の丸焼きを作りました。アウラはファイヤボールやライトニングなどの魔法を覚えていない為、スキルで魅了して鳩に自らグリルに飛び込ませました。

こうしてありんすちゃん達は『丸焼き』という料理を覚えました。アインズは大喜びでしばらく食堂で『ありんすちゃんの丸焼き料理』が続いたという事です。

※ ※ ※

第六階層の自分用の住居に閉じ籠っていたロウネ・ヴァミリネンはひたすら書き物をしていました。

（陛下に伝えなくては。魔道王打倒の獅子身中の虫、ナザリック地下大墳墓の反逆勢力の存在——エクレア団——についての情報をなんとしても伝えなくては……）

ロウネは三通の手紙をしたためると小さく折って小さなリングに挟みました。それを三羽の鳩の足にそれぞれ着けて放しました。青空に向かって飛び立っていく鳩の姿を目で追いかけているが、ロウネは満足気に頷くのでした。

※ ※ ※

それから数日後、ロウネは相変わらず引きこもり状態でしたが、気力が回復してきたので夕食に出された鳩の丸焼きをペロリと平らげたそうです。

尚、臨時料理人となって丸焼き料理を作っていたありんすちゃんでしたが、残念ながら臨時料理人をクビになってしまいました。ありんすちゃんがカボチャの丸焼きを作ろうとして畑をすべて焼いてしまったり、焼き魚を作ろうと生け簀を三つも丸焼きにしてしまったからですって。

仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子に過ぎないのですから。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 030 番外編・魔法少女いびるありんすちゃん

王国のアダマンタイト級冒険者、蒼の薔薇のマジックキャスター　イビルアイ、そしてイビルアイから奪った仮面をつけたありんすちゃん。

ゲヘナの時に全く見分けがつかなかった事からありんすちゃんはアインズ様の密命で王都に潜り込んでスパイをする事になりました。

名付けて『魔法少女いびるありんすちゃん大作戦』です。

なんでも魔法少女にはペットのお供が付きものだというコキュートスの強い主張でエクレアがお供する事になりました。

※ ※ ※

まずは準備をしましょう。ありんすちゃんは大切にしまっておいた仮面を取り出します。あのイビルアイが気絶した時に手に入れた仮面です。

ありんすちゃんは仮面をつけるとクルリと回ってみせます。……あら不思議。誰が見てもどこから見てもイビルアイそのものです。



かくてありんすちゃんとエクレリアは王都に潜入するのでした。

今回のターゲットは蒼の薔薇のリーダー、ラキユースです。

ありんすちゃんは何が何でもラキユースの弱みを握らないといけません。

まずは何気ない会話から探りを入れます。偽物とバレないように、さり気なく、さり気なく、です。

「ラキユーチュ、良い天気でちゅね」

「……そうね」

「こんな日はケーキが食べたいでんちゅね？」

「……そうね」

ありんすちゃんは上の空なラキユースに少しムカついてきました。ラキユースはありんすちゃんを赤ちゃん扱っているのに違いありません。

「ガガアランにはおひげがありません？」

「……そうね」

ありんすちゃんは用事を言い訳にしてラキユースにサヨナラを言ってその場を離れてみました。

そして物陰からこっそりと観察していました。

凄いですね。とても5歳児位の女の子とは思えない、名スパイぶりですね。

ありんすちゃんに見張られている事を知らないラキユースは、キヨロキヨロ周囲を伺っていたと思うと一冊のノートを取り出して熱心に何か書き込み始めました。

時折朱くなったりしながら、機嫌良さそうに鼻歌まじりに一生懸命になにやら書いています。これはきつと、アダマンタイト級冒険者ならではの何か重要な情報に違いないですね。

そう思ったありんすちゃんはいきなり飛び出していつてラキユースからノートを奪いました。

「ちよつ？ なにすんのよ？ イビルアイ！ や、やめて！」

ありんすちゃんは素早くノートをエクレアにパスします。

エクレアは死に物狂いで逃げます。

ラキユースはまるで鬼のような形相で追ってきます。

しかしエクレアは身体の小ささを生かしてテーブルの下を駆け抜けてなんとか追撃をかわしました。

かくしてありんすちゃんとエクレアは王都の重要機密が載っているであろうラキユースのノートをナザリックに無事、持ち帰りました。

デミウルゴスはノートを広げると喜びました。

「……………これは実に素晴らしい。この秘密を公開すれば王国は底知れないダメージを受け

るだろうね」

※ ※ ※

数日後、魔導王国ではガゼフとブレインの道ならぬ恋が描かれたラクユース作の薄い本「薔薇は夕日に輝く」が売り出され、空前のベストセラーになったそうです。

——番外編 おわり——

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

# 031 おまけ『薔薇は夕日に輝く』ラキユース・アルベイン・デイル・アインドラ

## ※注意※

この作品『薔薇は夕日に輝く』は王国アダマンタイト級冒険者であり、大衆文芸研究家でもある、ラキユース・アルベイン・デイル・アインドラ氏の作品です。したがってありんすちゃんが登場しません。しかも直接的な表現はありませんが作者（ラキユース女史）の趣味が反映された内容であり、やや薔薇的な示唆に富むと感じる方もあるようなのでご注意ください。

※ ※ ※

リ・エステイーズ王国、首都リ・エステイーズ。北側の城壁から市街へと続いた道に仲良さそうに歩く二人の男の姿があった。

折しも昼の鐘が鳴り、行き交う人々の誰もが昼休みに心をとられている中、男の一人、

ブレイン・アングラウスは真剣な表情でもう一人の男に迫った。

「……頼む。ストロノーフ。お前のレイザーエッジを見せてくれないか？」

対する男——ガゼフ・ストロノーフはまるで少年のような、戸惑いとはにかみを混ぜたかのような複雑な表情を浮かべた。

「……ま、まさか……ここ、ここですか？……こんな街中でアレを出すのはな。さすがに人目  
が気になるし、もつと人目が無い所でない……」

「わかった。では人目に付かない場所で。……そうだ。二人つきり……ならば構わない  
だろ？」

多くの人々が市街へと急ぐ中、二人の男は逆に城壁へと歩いて行った。やがて男達は  
人目の少ない茂みにやって来た。

二人は互いの実力を認めあったライバル同士の武人で、かつては王宮の主催である御  
前試合で剣を交えた事もあった。その勝負は実にし烈なもので、最終的には「四光連斬  
」によって王国戦士長であるガゼフが勝利したのだが、両者の実力差はそう大きくは無  
い。

「……ここなら人目も無い。さあ、見せてくれ。ストロノーフ。お前の全てを」

「……うむ……まあ、待て。そんなに焦るなよ。アングラウス……今、見せるからな……  
うむ」

荒々しい息を吐きながら、ガゼフは剣帯から鞘ごとレイザーエツジを抜き取る。そして目を閉じて何か小さく呟いた後に、カッと目を見開くと一気に刀身を抜き出してみせた。

刀身の煌めきは小さな虹を作り、ブレインは感嘆のため息をついた。

「……アングラウス。貴様も出してみろ。前々からお前の刀なる逸品をまじまじと見てみたかったのだ」

「……そうか……わかった……だが、頼みがある。刀を出すまで後ろを向いていてくれないか？」

しかし、ガゼフは直ぐに答えなかった。じつと見つめる視線が雄弁に疑念を現していた。堪えきれずにブレインは小さく呟いた。

「……見られていると……恥ずかしいんだ」

俯いたブレインの長い睫毛を眺めながら、ガゼフはようやく頷いてみせた。

「了解した。いいと言うまで後ろを向いていよう。男同士の約束だ」

「……すまない」

ブレインは優しく腰のベルトを外すと、両手を刀に添え、そつと慈しむかのように鞘から抜き身を出した。

ふと、その様子をじつと見つめているガゼフに気がついた。ブレインは頬を染めなが

ら恥ずかしそうに呟いた。

「……向こうを向いているって言ったのに……嘘つき……」

「いや、すまない。アングラウス、怒らないでくれ。かわりに俺のレーザーエッジを触らせてやる」

ブレインは興奮に震える手でレーザーエッジの柄を握った。心なしかレーザーエッジも微かに震えているようだった。

「……凄いな……こんなに反っている……光沢も見事だ。これがまさしく王国の至宝か……」

ブレインは吸い付かばかりにして手にしたレーザーエッジを眺めた。柄側から、刃先側から、両面……ありとあらゆる角度から観察した。時折、吐く息が刀身に曇りを一瞬だけ作り、消えた。

「そういうアングラウスのもなかなかの逸品じゃないか。この鋭い切っ先は何でも突き抜けそうだ」

「……ふ……こうして息を吹きかけるとまるで呼吸をしているかのようだ。たまらないな……ストロノーフ、こいつで俺を突いてくれ」

ガゼフはブレインの瞳を見つめた。ブレインの瞳にはガゼフが映っていた。もはや二人には言葉など無用だった。

※ ※ ※

「——むう。やるようになったな？アングラウス。さすがは俺が見込んだ漢」

「まだだ。まだ終わらんよ？ 〃領域いつ〃！！……ふつ。感じるぞ。お前をピンピン感じるぞお！ストロノーフ！お前も来い！」

「……ふ。……なに、甘いぞ！ 〃不落要塞〃！そんな程度じゃイケないな。こちらからもいくぞ！ 〃四光連斬〃！」

「……こいつはスゴいな。イキそうだ……しかし……まだだ。まだ足りん！」

互いの攻撃はそれぞれの着衣を引き裂いていく。凄絶な命懸けの仕合いの爪痕が互いの皮膚に刻み込まれていく。

が、しかし、まだまだ戦いは終わらそうにない。

いつしか互いの着衣は全て引き裂け、隆々たる筋肉の陰影をくつきりと、惜しげもなく晒していた。ただただ、互いの息づかいと剣と剣が撃ち鳴らす音だけが静かに続く。

それはあたかも永遠に続く、神々へ捧げる音楽であるかのようにさえあつた。

二人の男はワルツを踊るかの様に剣戟を競い合い、やがて、ひとつの影となった。



※ ※ ※

いつしか芳醇な時間は過ぎ去り、リ・エステイーズの街並みは夕日に染まっていた。あたりは静寂が支配し、いつの間にか二人の凄絶な戦いは終わっているのだった。

沈みゆく大きな夕日が二人の糸もまとわぬ産まれたままの姿を黄金に輝かした。男達は互いにじつと見つめ合い、そして――

※ ※ ※

「……ブレイン。ブレインだ。俺の事はブレインと呼んでくれ」

「……わかった。ブレイン。……俺の事は今日からガゼフだ」

黄金に染まる二人の男は熱く掌を握り締め、きつい抱擁を交わすのだった。

〈第一部おわり〉

※おくづけ※

次回作はなんと蜥蜴人の兄弟の禁じられた愛情劇『しやーすりゆ☆ざりゆ』？

## 032ありんすちゃんメモをとる

アインズ様のお供をしてドワーフの国に行く事になったありんすちゃんは張り切っていました。

「がんばりまんちゅ」

「シャルティア、張り切るのは良いんだけどさ、アインズ様はシャルティアが様々な体験をして新しい面を見つけて欲しいんじゃないかな？」

一緒に行く事になったアウラがありんすちゃんの気持ちに水を差します。

「せっかくナザリックで最も優れたアインズ様とご一緒出来るんだよ？ 勉強するチャンスじゃん」

「勉強したら良いでんちゅね」

ありんすちゃんはアインズ様の言葉をメモする事にしました。

※ ※ ※

よかろう となりにわがまま そいつたて 高い。いっぱい。ここで止まる。ふ

りようマールが作る。ならば グリーンしくれとトム てぎま 見ている。くり  
 ほうとれす。私のみ あけらら アウラ 触れ。ほんじつは しゆくはく きゆうけ  
 い 立つてる おちつか かくへや たいきせよ。上野 2回 3回 そちら あう  
 シヤルゼべる のこる。ソファア。まずルート。でわ ゼンベル いやな匂い。悪役  
 はつきり ぼんやりだね。大丈夫 べてらん ヘンなおさ もんだい おなら。  
 じっさいメイド おこつてない。そのとり ぼんやり 悪い もしもし もつとちが  
 う こんでんてき 記憶おしら さす。まあ きおく。そのしんば だいじようぶ  
 ゼンベル きおくを ちかん王。ふむ らくに いろいろ どんなこた。どうだ な  
 んでもない。わたしわ ヘンなかんじ おさる おまる。さて よていどり ゼンベ  
 ル カモシカ。かいさん ゆつくり ゼンベル ひつようない そなえよ。

※ ※ ※

アウラが部屋にはいるとありんすちゃんはなにやら一生懸命書いていました。  
 アウラが来た事に全く気がつかない位集中しています。

「シャルティア、何してるの？」

「アインジユちやまのお言葉をメモちているんでありんちゅよ」

「へー感心じゃん。どれどれ？」

アウラはありんすちゃんにメモを見せてもらいましたが、何が書かれているのかよくわかりません。

仕方ないですよね。

だつてありんすちゃんはまだまだ5歳児位の女の子なんですから。

一生懸命アインズの言葉を書き込んでいるのですが、聞き漏らしたり聞き間違えもします。書いている内に話が変わつてよくわからなくなる事もありますよね。

「えつと、あのさ。メモを取るのとはすごく良いことだとは思うけど、これじゃわからなくない？」

アウラはありんすちゃんにイジワルな事を言ってきました。

と、ありんすちゃんのメモ帳から一枚のメモがアウラの足元に落ちてきました。

アウラはそれを拾い上げましたが、明らかに動揺しています。

メモには——マールレ アウラのおねしょ しーつ せんたく——と書いてありました。

「……えへへ……じゃあね。シャルティア。あたしは自分の部屋に戻るから」

急にアウラは部屋を出ていきました。

ヘンなアウラ。

今回もやっぱりありんすちゃんがあしつかりしないとダメみたいですね。  
ありんすちゃん、頑張つて。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 033ありんすちゃんもぐらたたきをする

アインズからの命令でクアゴアたちの捕獲に向かうありんすちゃんとアウラはかつてドワーフの王都であった都市にやってきました。そろそろお昼寝の時間だった為、ありんすちゃんは少し眠かったのですが我慢します。

「クアゴアとはどんな姿なんでありんちゆかね?」

「……うーん? 穴掘って生活しているし、モグラみたいなんじゃないかな?」

ありんすちゃんは笑顔で片手のスポイトランスをブンブン振りました。

「これでモグラたたきしゆるでありますちゅ」

「それじゃ、始めよっか」

アウラは背中に背負っていた大きな巻物を下ろして広げました。するとその能力が起動して、辺りは閉鎖空間に覆われました。ワールドアイテム山河社稷図——特定の一つ以外の脱出方法が無い閉鎖空間に相手を引き込む能力——が今まさに発動したのでした。

※ ※ ※

総数六万を超えるクアゴアたちの軍勢を率いる氏族王ペ・リユロは一抹の不安を感じていました。突然王都を含んだこの巨大な洞窟内がぼやけた霧で覆われたからです。やがて彼らの目の前に赤い鎧の小さな女の子と黒い肌の少女が現れました。

「……私はこの地のクアゴアたちを統べる氏族王ペ・リユロである。お前たちは何者か？」

リユロは二人の前に進み出ました。

「ちやるちえでありんちゅ」

と、いきなりありんすちやんがスポイトランスを振り上げてリユロめがけて突進しようとしたので、アウラは慌てました。

「ちよ、シャルティア！ 待ちなさいってば。アインズ様のお言葉忘れた？」

アウラに制止されたありんすちやんはしばらくキョトンとしていましたが、ポケットからメモを取り出して確認し始めました。

「……危険 デスナイト 全力出すな チエック 一個か二個 しこを回転……」

ありんすちやんは大きな声でアインズ様の言葉を記録したメモを読み上げました。後ろでアウラは呆れて天を仰いでいます。

「回転させたら良いでありんちゅ！」



ありんすちゃんは器用にスポイトランスでリユロを突き上げました。リユロはクルクル回りながら部下達のもとに戻ってきました。

「あいつら何を考えている？ ……親衛隊を、ブルー・クアゴアとレッド・クアゴアたちを集めろ」

リユロは力強く立ち上がり吠えるのでした。

「これからが本当の決戦だ」

※ ※ ※

戦闘ではありんすちゃんが張り切っていました。スポイトランスでクアゴアたちをなぎ払い、まるでモグラたたきゲームを楽しんでいるみたいです。見た目は5歳児位の女の子に過ぎないのですがさすがはナザリックでも最強クラスの階層守護者ですね。あつという間に六万いたクアゴアたちは一万になってしまいました。

「…………おねむ…………ムニヤムニヤ…………」

突然、ありんすちゃんがゴロンと寝転がってしまいました。どうやらお昼寝タイムみたいですね。

「…………ま、いつか…………アインズ様からは一万位に減らせてって命令受けていたから丁度良

いかも。……えっと、じゃあ降参してくれるよね？」

アウラは泣きながら平伏するリュロに尋ねました。リュロの答えは決まっています。た。

「よ、喜んで……こ、降参致します。いや、是非とも降参させて下さいっ！」

ありんすちゃんはグツスリ眠っています。時折ムニヤムニヤ口を動かしている所を見ると、大好きなお菓子でも食べている夢を見ているのかもしれない。

今回もありんすちゃんが活躍しました。きっとアインズ様も大喜びでしょう。良かったですね、ありんすちゃん。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 034ありんすちゃんほしがる

「ちよういえば凄かったでありんちゆね」

ナザリツク地下大墳墓 第六階層の木陰に用意されたダイニングで紅茶を楽しみながらありんすちゃんはアウラの腰に下げられた大きなスクロールを羨望の眼差しで見ました。——山河社稷図——そこに存在する全てのものを閉じ込めてしまう世界級アイテムの一つ——その能力はついこの間のクアゴア達に使って体験したばかりです。

「アインズ様からあたしがお預かりしたんだよ。凄いよねーさすがは世界級アイテムだよね」

「ぼ、僕の『強欲無欲』も、す、凄いんだから……」

マールも負けじと天使と悪魔をモチーフにしたかのようなガントレットを見せます。そんなアウラとマールを眺めながらありんすちゃんはため息をつきました。

「わらわも欲ちいでありんちゆね……」

ありんすちゃん——シャルティアが精神支配を受けた件により、ワールドアイテム対策として各階層守護者はアインズより世界級アイテムを持たされていたのでした。

「マール、片方ありんちゆちやに寄越すでありんちゆ」

ありんすちゃんはマーレのガントレットに手を伸ばしました。もちろんありんすちゃんに相応しい天使のような『無欲』の方です。

「だ、駄目だよ。シャルティアさん。……そうだ。あの、シャルティアさんもアインズ様にお願ひしてみては？」

ありんすちゃんは目を輝かせました。

「うーん……でもさあ、シャルティアさあ、大丈夫？ ……この前スポイトランスを忘れてそうだったじゃん？」

アウラがジト目で水を刺しました。ありんすちゃんは一瞬なんの事かわからず、目をパチクリさせました。

「……もう忘れた？ この前スポイトランスをこの中に置いて出てこようとしたじゃん？ ……あたしが気づかなかつたら忘れていたよ？」

ありんすちゃんは思い出しました。クアゴア達を風呂はらった後、汚れが少し付いちやつたので後できれいにしようと、ほんのちよつとだけ置いておいただけです。決してアウラが言うように忘れていたわけではありません。ちよつとだけ、置いておいただけです。

「アウアウはうるちやいでありんちゆね。わたしはゼーんぜん、忘れていなかつたでありんちゆ」

「……ふーん。まあ、いいけど」

アウラはつまらなさそうに横を向くとティーカップをつまみました。

「あ、あの……シャルティアさんはどんな能力の世界級アイテムが良いかな？」

空気を変えようとマールが口を挟みました。ありんすちゃんはニコニコしながら答えます。

「わたしの可愛さが引き立ちゅアイテムが良いでありんちゅ。可愛いステッキとか服でも良いでありんちゅね。可愛いくないのは嫌でありんちゅ」

「うーん……しゃ、シャルティアさん。それはちよつと……」

さすがにマールも呆れてしまったみたいですね。仕方ありませんよね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのでから。

※ ※ ※

それからしばらくしてアインズが執務室でアルベドとの協議をする為に集められた投書を清書していると……『おいしい ワールドアイテムくだちゃい』『かわいいワールドアイテムがわらわにあいます』『ワールドアイテムたくさん くだちゃい』という投書が出てきたそうです。一体誰が出したのでしょうか？

「……アインズ様、いかがされましたか？」

「……いや……このシャルティアからの投書なのだが……」

アインズはとて不安げな様子をアルベドにみせていました。

「シャルティアにはオーレオールからワールドアイテムを渡しておいた筈なのだがな……」

まさかありんすちゃん、ワールドアイテムを忘れて……いやいや、そんな事はないですよね？

もし、忘れて何処かに置きっぱなしだとしても、仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 035ありんすちやんとエロフおう

ありんすちやんがいつものようにナザリックの見回りをしていると、何だか肌寒くなってきました。

もしかしたらコキユートスが近くにいるのかもしれないと思いましたが、いませんでした。

もしかしたら『冬』が近づいてきているのかも知れませんが、もしも二〇一五年の冬のように長かつたら嫌ですね。

ありんすちやんはひきしぶりにくしゃみをしました。するとありんすちやんはまたまたどこかに転移しちやいました。

ありんすちやんは何やら初めて見る都市の高い建物のテラスにいました。

見るとエロフの男がグラスを片手に等身大の鏡の前に立っています。男は上半身裸で鏡の前で様々なポーズを取ってウツトリとしています。

「……この国が落ちたら、私が法国に行つて奪い返すか。……女であればものにしてやろう。……楽しみだな」

何だかエロい人みたいです。

ありんすちゃんはエロいエルフの王だからエロフ王だと思いました。

やがてエロフ王はありんすちゃんに気がつきました。

瞳がアウラ、いや、マールに似ています。

もしかしたらマールも大人になったらエロフ王みたいになるのかもしれませんが。ありんすちゃんはガツカリです。

「……力を感じる……強者か。……が、しかし……」

エロフ王はありんすちゃんをまじまじと見ています。もしかしたらありんすちゃんの可愛らしさに驚いているのかもしれないよ。

仕方ないですよ。

だってありんすちゃんは5歳児位の女の子にすぎないといっても、将来のお嫁さんにしたいランキングのトップだって言っていましたから。ルプーが。

気を取り直したエルフ王はありんすちゃんに話しかけました。

「お前は一体何者か……?」

「ちやるちえ、ありんちゆよ」

ありんすちゃんは胸を張って答えます。ありんすちゃんの中では「シャルティアでありんす」とちゃんと言えているみたいですが……

「ふむ。名前など良い。見たところ人間種みたいだが……だがまだ子供か……残念だ



な」

エルフ王、いや、もうエロフ王で統一しましょう。この人物、エロい事しか頭に無いようですから。

「……その……ありんちゆとやら……お前には母親がいるかな？」

「……母親でありんちゆか？ うーん……うーん……」

ありんすちやんの生みの親は至高の方の一人ペロロンチーノです。つまりありんすちやんの母親はペロロンチーノといってもよいですよね？

「ペろろんちいのちやまでんちゆね」

「そうか、そうか。ペロロンチーノか。さぞかし美人だろうね。楽しみだ」

何だか一人でもりあがっています。

ありんすちやんはエロフ王の相手をするのに飽きてきちやいました。

ありんすちやんは大きなあくびをしました。

すると周りの景色がぼやけ……ありんすちやんはナザリツクに戻っていました。

エロフ王はその夜、ペロロンチーノという美女の妄想に悶々としたそうです。

※ ※ ※

ナザリツクに戻ってしばらくして、ありんすちはアウラに会いに第六階層に行きました。

あのエロフ王の事後、そういえばエルフが第六階層にいた事を思い出したから見に  
いこうと思つたのでした。

ありんすちはアウラとマールレが住んでいる建物に近づいてみると何やら中から  
キヤツキヤウフフ聞こえてきました。

窓から覗いてみるとマールレが三人のエルフに裸にされている所でした。

ああ、ガツカリです。

だって、マールレにはあんな大人になつて欲しくありませんでしたから。  
ありんすちはプンスカしながら帰りました。

## 036ありんすちゃんおになる

今日はプレアデスのみんなとかくれんぼです。まずはありんすちゃんが鬼になって見つけるんですって。

ありんすちゃんはとつても張り切っています。さて、ゆっくり百数えたありんすちゃんが探しに行きます。

おや、椅子の影に黒いポニーテールが見えていますよ。

あれあれ？ ありんすちゃんは素通りしちゃいます。

気付かないみたいですね。

ありんすちゃん、後ろ。後ろですよ？

ありんすちゃんは口に指を当ててシーと合図しています。

なるほど。次にポンコツ過ぎる人が鬼になるといつまでも見つけて貰えなくなるから、敢えて見つけないですね。

ありんすちゃんの賢さはとても5歳時位の女の子には見えませんね。

次にありんすちゃんは骨を取り出しました。

骨を高く投げると「アウーン！」誰かが嘯みつきました。

ルプスレギナでした。

ルプスレギナを見つけたありんすちやんは今度はお風呂場に来ました。

なんと大きな水溜まりがあります。

ありんすちやんは構わず水溜まりに足を踏み込みました。

あらあら大変です。ありんすちやんは水溜まりに飲み込まれてしまいました。

ありんすちやんは大丈夫でしょうか？

「チヨリユチュン、見つけたでんちゅよ」

なんと水溜まりはソリユシャンだったのでした。

ありんすちやんはもしかしたらかくれんぼの天才かもしれない。

次にありんすちやんが目を付けたのはメイド達の衣装部屋です。

いくつかのトルソに特別仕立てのメイド服が着せてあります。

おや？ 二つばかり他と違いますね？

ありんすちやんはトルソの中に紛れていたシズを見つけました。

もう一人は……頭がないのでわからないですね。

一体誰なんでしょう？

頭を見つけないと見つけた事になりません。

ありんすちやんは落ち着いたものです。

台所に行つて冷蔵庫を開けます。

すると中からゴロンとスイカが転がり落ちました。よく見るとなんとなんとユリの頭でした。

ありんすちゃんはシズに続いてユリも見つけちゃいました。

今度はありんすちゃん、あちこちの箱を開けています。

いくらなんでもそんな小さな箱に入れないと思いますが……

でも、ありんすちゃんは自信満々です。

あれあれ？ いくつかの箱から虫みたいなのが出て来ました。

いつの間にか虫みたいなのは随分沢山になっていきますよ？

それは集まつて、合体して、おやおや？ エントマだつたんですね。

こうしてありんすちゃんはエントマも見つけてしまいました。

楽しくかくれんぼをしたありんすちゃんとプレアデスのみんなは仲良くおやつにしました。

※ ※ ※

その夜、ナザリツク地下大墳墓に戻つたアインズはギョツとして立ち止まりました。

椅子の影に何者かが潜んでいるみたいですが……

「——ナーベラル？　ここで何を？」

「……アインズ様……あの……かくれんぼを……」

ナーベラルつてもしかしたらかくれんぼの達人だったのかも知れませんか。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 037ありんすちやんときょうふのかくれんぼ

今日もプレアデスのみんなと一緒にかくれんぼをします。

おや？ プレアデスが一人足りませんね。

ナーベラルがいませんが、きつとアダマンタイト級冒険者「漆黒」の美姫ナーベとしてモモンと一緒に出掛けているのでしょうか。

今回の鬼はルプスレギナです。

ありんすちやんは隠れる番ですね。

ありんすちやんはどこに隠れるのでしょうか？

ありんすちやんは至高の方々の部屋が並ぶ廊下に真つ直ぐやってきました。

……なるほど。

ここなら乱暴に探す事は出来ませんから、時間稼ぎも出来そうですね。

ありんすちやんは沢山並んだ至高の方々の部屋の一つを開けて入っていきます。まるで最初からここに隠れると決めていたみたいですね。

大きなベッドがある寝室の奥の……あれあれ？ ……奥のクローゼットの部屋に

入っていつちやいましたよ。

大丈夫でしょうか？

部屋の外では鬼のルプスレギナが探しています。

彼女はつい先程食堂で一般メイド達から情報を集めていたみたいですよ。

ルプスレギナって実は賢いのかも知れませんか。

一方、ありんすちゃんは……どうやら小部屋の中で眠っちゃっているみたいです。

仕方ないですよ。

だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なんですから。ぼちぼちお昼寝したくなっちゃったんですね。

ルプスレギナは部屋の外を探して……おや？ 変ですね。

ありんすちゃんが入った部屋のドアを開けないで立ち去っていききましたよ。

ありんすちゃんはラッキーですね。

ありんすちゃんは誰かの部屋のベッドの奥のクローゼット部屋でスヤスヤ眠っています。

沢山のアインズ様に囲まれて……

——ちよつと待った！

……そこはもしかしたら某守護者統括の某アルベドさんのアインズグッズが沢山ある通称『ハーレム部屋』じゃないですか？



「確か一般メイドの立ち入りも厳禁にしていたはず。だからルプスレギナも中を見ようとしなかったのですね。」

「一難去つてまた一難、いやいや、今度はありんすちゃんの生命そのものがピンチです。なんとという事でしょう。」

「よりにもよつてアルベドが戻つて来てしまいました。」

「いつもならアインズの部屋のベッドで裸でゴロゴロしているのに、今日は自分の部屋に戻るみたいです。」

「アルベドは部屋に入り、ベッドに腰掛けます。」

「大変です！ ……ありんすちゃんとは目と鼻の先です。このままアルベドがハーレム部屋の扉を開けてしまえば、スヤスヤ眠っているありんすちゃんが見つかつてしまいます。もし、ありんすちゃんがアルベドのハーレム部屋で寝ている所を見つければ、どうなる事か？」

「もしかしたら今まで続いてきた『ふしぎのくにのありんすちゃん』は今回で最終回になつてしまうかも知れません。」

「これまでご愛顧頂きました皆様、ありがとうございました。」

「今の内にお礼申し上げます。」

「アルベドはハーレム部屋の扉のノブに手をかけました。」

そうだ！ ありんすちゃん、くしやみです。

くしやみでテレポートすれば見つかりません。

アルベドはハーレム部屋の中を見回しました。

——そしてそこに沢山のアインズのぬいぐるみに囲まれてスヤスヤ眠るありんすちゃんの姿を見つけました。

※ ※ ※

アインズはふと胸騒ぎがして部屋の外を出ました。

廊下を通り広間にやって来てふと、暗がりに潜む人影気がつきました。

「ナーベラル……もしかしてまだかくれんぼか？」

椅子の後ろに隠れているナーベラルは弱々しく頷きました。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 038ありんすちゃんはんぶんこおる

ありんすちゃんは寒さで目を覚ましました。

まるで冷蔵庫の中みたいに冷たくて、ありんすちゃんは半分凍ってしまっていました。  
た。

ありんすちゃんは冷たい冷蔵庫の中で見知らぬ人に抱っこされていたのでした。

一体何が起きたのでしょうか？

ありんすちゃんは抱き上げている女の人を見上げて、その顔を見て……なんとこの事  
でしよう？ 顔の皮膚がありません！

あまりのショックでありんすちゃんは気を失ってぐったりしてしまいました。

ありんすちゃんの反応に女の人もオタオタしちやっています。

さてさて、ありんすちゃんが寝ている間に何が起きたのでしょうか？

※ ※ ※

——時間を遡る事数時間前、アルベドがありんすちゃんをハーレム部屋で見つけた所

まで遡ります。

ありんすちゃんはかくれんぼをしていて、アルベドの部屋の秘密の『ハーレム部屋』に隠れているうちにすっかり眠ってしまいました。

そこに部屋の主のアルベドが帰って来てしまったのだから大変です。

なにしろアルベドは自分の部屋の中ですら一般メイドに立ち入りさせないのですから。

アルベドはハーレム部屋でスヤスヤ眠っているありんすちゃんをじつと見下ろしています。

その表情は怒りのあまりに無表情な能面みたいですよ。

やがてありんすちゃんをむんずと掴むとアルベドは荒々しく部屋の外に出ました。

アルベドはありんすちゃんをどうするつもりでしょう？

もしかして恐怖公の領域に？ それとも餓食狐蟲王の巢に放り込まれてしまうのでしょうか？

ありんすちゃんはそんな事態になっているのも知らないでぐっすり眠っています。

せめて、今起きて『ごめんなさい』をすれば命だけは助けてもらえると思いますが……

アルベドは能面のような無表情のまま、第五階層にやって来ました。

氷結牢獄に来ると扉の鍵を開けて叫びました。

「……姉さん！ 私よ。あなたの子供を連れてきたわ！」

「子供、子供！ わたしの子供お！」

部屋の奥から凄まじい勢いでニグレドが走ってきて、アルベドの手からありんすちゃんを奪い取りました。

ありんすちゃんはまだまだ起きません。

仕方ないですよ。

ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なんですから。

こうしてありんすちゃんはニグレドの腕に抱かれた状態で目覚める事になりました。

——半分凍ってしまっていました。

ニグレドはいつもの人形だと思ったらありんすちゃんだったのでビックリ。

お詫びにありんすちゃんの探し物を手伝ってくれるそうですよ。

ありんすちゃんはラッキーですね。

さて、何を探して貰いますか？

かくれんぼで隠れているプレアデス？

いえいえ、ありんすちゃんにはどうしても見つけたい、諦めきれない大切なものが一

つありました。

それは白いレースの飾りが可愛いお気に入りのパンツです。

ニグレドはありんすちゃんのパンツの行方を水晶に映し出しました。そこには初めて見る国の王宮の中が映っていました。

※ ※ ※

竜王国の女王、ドラウデイロンは納まらない怒りに震えていました。

(あのロリコンめ！ ロリコンの変態騎士め！ よくもよくもよくもよくもよくも……)

「どうか陛下、お気をお鎮め下さい。上に立つものがさような怒りに身を任せては……」

「……わかっておる！」

ドラウデイロンは深々と深呼吸をして心を静めようとなりました。

——思い出しても腹立たしい。

彼——セラブレイトは公衆の面前で、よりにもよってパンツで女王たるドラウデイロンの顔を拭いたのである。

「しかし、陛下、いきなりかの者を降格の上謹慎など……冒険者組合も黙っていませんぞ」

「うるさい。うるさい。うるさい！ そんな事はわかっておる！ 追放しなだけマシと思え！」

「しかしながら……かの者は陛下より賜ったハンカチと違ってとの事では……」

「赤じゃ！」

「は？」

「このドラウディロンは赤しか穿かぬわ！」

「……なんと!!……」

かくして竜王国の命数は一気に縮まってしまうのでした。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 039 ありんすちゃんみつごになる

氷結牢獄からなんとかでられたありんすちゃんですが、寒くて寒くてたまりません。どこか暑い所はないでしょうか？

さすがはありんすちゃん。

どうやら心当たりがあるみたいです。

ありんすちゃんは第七階層にやって来ました。  
なるほど。

溶岩の世界の第七階層なら暑いどころか熱い位ですね。

「おじやまするでちゅよ」

ありんすちゃんは礼儀正しく挨拶します。

おや？ 溶岩の川から領域守護者の紅蓮が姿を現しましたよ。

紅蓮はうちわでありんすちゃんを扇いでくれています。

ありんすちゃんはホカホカの焼き芋みたいにアツアツになってきました。

いつのまにかこんがりとキツネ色になっていますよ。

なんだかとても美味しそうですね。



こんどはうつ伏せに寝て、まんべんなくキツネ色に焼きます。

こうしてあつという間に日焼けありんすちゃんの完成です。

せつかくこんがりキツネ色になったのですから、誰かに自慢したいですよね？

ありんすちゃんは礼儀正しく紅蓮にお礼を言ってから第七階層を後にしました。

こんがりキツネ色に日焼けしたありんすちゃんは第六階層にやって来ました。誰かが

やって来た事を感じてマールレがありんすちゃんを迎えにきました。

「あれえ？　なんだか黒くなっていますよねえ？」

ありんすちゃんは得意そうに胸を張ります。

「アウアウとマールレよりも黒いでちゅ。」

「ボ、ボクの方が、く、黒いに決まっています！」

マールレが否定します。

「マールレ、どうしたの？　なんかさあ、あたしだけのけものみたいなんだけど？」

そこにアウラもやって来ました。

「お姉ちゃん、ボクの方が黒いよね？」

ありんすちゃんとマールレ、二人とも同じ位に色黒に見えます。

「……うーん？」

大きな鏡の前にアウラも並んで立ってみます。

こうして三人が並ぶと、みんな同じ位色黒で、まるでダークエルフの三つ子みたいでした。

「……そうだ！ 面白い事をひらめいた！」

なにやらアウラが思いついたみたいですね。

自分の部屋のタンスをひっくり返していたアウラはマーレとありんすちゃんにアウラが普段着ている服と同じものを渡しました。

早速着替えて並んでみると、あらビックリ！ アウラが三人並んでいるように見えません。

ダークエルフの三つ子の完成です。この姿でいきなり登場したらみんなビックリしそうですね。

三人は仲良く手を繋いでナザリックのあちこちへ出かけていきました。

一般メイドのみんなに後ろ向きになった三人からありんすちゃんを当てるゲームをしたら、正解率は50%でした。

みんな観察力がありませんよね。

よく見ればありんすちゃんだけ耳が尖っていないので簡単に見分けられるんですよ。ありんすちゃんは思いました。

そうだ、王都で会った変な仮面の子も日焼けさせたら四つ子になれるかもしれませ

ん。

同じ様な仲間を増やしていくのも面白そうですね。

もっともありんすちゃんは飽きっぽいから明日にはもう別の事に夢中かもしれない  
んが。

仕方ありませんよ。

だってありんすちゃんはなんといいっても5歳児位の女の子なんですから。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 040 ありんすちやんありんすちやんになる

今日のありんすちやんはいつもと少し違います。

何やら思い悩んでいるみたいです。

季節の変わり目で感情が不安定なのででしょうか？

それとも食欲の秋が関係するのでしょうか？

もしかしたらおやつにプリンを食べるかシュークリームを食べるか悩んでいるのか  
もしれませんね。

え？ 違うんですって？

まさか、秋は恋の季節……でもでもありんすちやんにはちよつと早いですよ？

だってだって、ありんすちやんはまだ5歳児位の女の子なんですから。

恋……ではない？

なんだかジェスチャーゲームみたいになってきましたね。

おや？ ルプスレギナが来ましたよ。

「チャルメラ……じゃなくてペタン血鬼航空さん、おはよつす」

あれあれ？　ありんすちゃんが怒っている？

「…………イタタタ…………痛いっすよ。なんすか？　一体？　男胸の残念美少女さん？」  
ありんすちゃんは両手をぐるぐる回してルプスレギナを叩きまくっています。  
なるほど。わかりました。

ありんすちゃんはルプスレギナが付けたあだ名が気にいらなそうですね。きつと。

「うーん…………でもペタン血鬼航空ってフロストドラゴンの空輸会社っぽくて格好いっすよ。略してPV—AIR。格好いいっす」

言われてみたらなかなかありんすちゃんもだんだん格好良く思えてきたみたいですね。  
ね。

さて…………悩み事って何でしょう？

なんと…………ありんすちゃんは自分の名前を上手く言えないのを悩んでいたんですか？

では、ありんすちゃん、『シャルティア・ブラッドフォールン』と言ってみましょう。  
「シャルチェア、ウラドホールル」

あらあら…………ルプスレギナが爆笑して…………酷いですね。

「ぎやはは…………これじゃシャルメラに聞こえるわけっすよ。良くできまちゆたねえっす」

ありんすちゃんも真つ赤っかに怒っています。いくらなんでもこれはルプスレギナが悪いですよ。

「……シャルティア・ブラッドフォールン、良いこと？ 自分の名前を上手く言えないなんて大したことではないの。名前とはそもそも他者が呼びかける為のもの」

ルプスレギナは普段と違う真面目な顔で続けます。

「貴女は復活してから以前のシャルティアではなくなつたのだから、無理にシャルティアであり続ける必要は無いの。どうせなら、そうね。ありんすちゃん、これが今の貴女にピッタリじゃないかしら？」

ありんすちゃんはありんすちゃんになりました。なんだかうれしそうです。

良かったですね。ありんすちゃん。

※ ※ ※

アインズはアルベドを前にして少し緊張した面もちでメモを取り上げました。

「……ゴホン。うーん……『ナザリックのオリジナルキャラクター、〃ナザぽん〃を作つてキャラクターグッズ販売で外貨を稼ぎましょう。』か……うむ……これは是非検討

……」

「問題外です。誰がこんな愚策を……見つけ出して処罰すべきです」

「あ……次に行こう。『ありんすちゃんはありんすちゃんとよんでください』……うむ？

これはシャルティアか？」

「アインズ様、どうぞよしなに」

「……そうだな。それならこれからはシャルティアを“ありんすちゃん”と呼ぶ事にしよう」

かくてありんすちゃんをありんすちゃんと呼ぶ事はアインズのお墨付きとなるのでした。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

041 特別編・名探偵ありんすちやん　　く消えた三吉君  
の行方く（プレイアデスな日　より）

ありんすちやんはアインズ様の執務室にやって来ました。

ありんすちやんがありんすちやんになって初めてご挨拶をするので、少しばかり緊張しているみたいです。

わずかに頬が紅潮してみえますよ。

トントン、トン。扉をノックすると中から一般メイドのデクリメントが顔を出します。

「アインジュちやまにお会いしにきたであります」

デクリメントも何やら緊張した面持ちでアインズ様にお伺いします、と答えて扉を閉めました。

扉の前でありんすちやんは更に緊張してきました。

「……どうぞ。アインズ様のご許可がありましたので、お入り下さい」

フンスと鼻から息を出して思いきり胸を張ったありんすちやんが部屋に入ります。



と、部屋の入り口にいたユリとぶつかりました。部屋を見回すとアインズの他にユリ、ソリュシヤンがいました。

デクリメントは少し怯えた様子で、部屋の中はなにやら不穏な感じでした。

ありんすちゃんはお構いなしでアインズ様の前に進み、口上を述べます。

「このたびはありんちゅちやががありんちゅちやになりましたのであいさちゅでありんちゅ」

ありんすちゃんはありんすちゃんになったお礼の挨拶をします。

微妙な空気の中を察して本当なら気を使うべきなのかも知れませんが、何しろありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子ですから仕方ありませんよね。

シーンと静まり返った中、アインズが破顔しました。

「……そうか。ありんすちゃんだったな。……うむ」

ありんすちゃんは続いて口を開きます。

「アインジュちやま、何かありましたんでありんちやか?」

ありんすちゃんの無垢な瞳がアインズをじっと見つめます。無碍に出来ないアインズはついついありんすちゃんに話してしまいました。

「……うむ。実は、私の三吉君がいなくなってしまうてな。どうやらソリュシヤンが行方を知っているようなのだが」

「アインズ様！ 私がすぐにも聞き出します！」

ユリが両腕にガントレットを装備して構えるのを、アインズが慌てて止めます。

「どうやらここは名探偵の出番です。なんという偶然か、ここには名探偵ありんすちゃんがいるではないですか？」

ありんすちゃんはソリュシヤンに近づき顔をじつと見つめます。

「……チヨリユチャはさんちちくん、ちらないでありんちゆか？」

ありんすちゃんは無垢な瞳でじつと見つめます。

「……じつは……」

純真無垢な瞳で見つめられてソリュシヤンも流石に嘘はつけません。

彼女はポツリポツリと話し出しました。

——ソリュシヤンの話をまとめると、風呂場から三吉君を連れ出したのはソリュシヤンでした。

三吉君がいなくなれば、アインズ様の身体を洗う役目につけるのでは、としばらく三吉君を隠しておこうと体の中にしてしまっていたそうです。その後、うたた寝して目が覚めたら三吉君がいなくなってしまうって行方がわからない、というのです。

「……もしかして食べちゃった？ マジ？」

アインズは思わず眩きます。

ソリュシヤンはスライム形態の体内に取り込んで消化してしまうので、スライムの三吉君も消化されてしまったのでしょうか？

「……なんて事を……ソリュシヤン、覚悟しなさい。これから貴方の中から取り出します！」

ユリがまたしてもガントレットを構えます。

「さて！ 待つんだユリよ。早まるな」

ありんすちゃんはアインズ様の前に進んで申し上げます。

「ここはありんちゅちゃにお任せくだちゃい。きつとちゃんちき君見ちゅけるでありんちゅよ」

「……ふむ。よかろう。ここはありんすちゃんに任せる。ユリ・アルファよ、サポートするのだ」



まずは目撃者探しです。ありんすちゃんとユリは戦闘メイド達の部屋にやって来ました。

——ポリポリ

何やら音がします。音の方を見るとエントマが何やら黒い物を立ちながら食べていました。

——ポリポリ

「エントマ、貴女は三吉君様について何か知らないかしら？」

——ポリポリ

ユリがありんすちゃんのセリフを奪つてしまいました。ありんすちゃんは頬を膨らませて抗議をします。

ありんすちゃんにポカポカ叩かれたユリはありんすちゃんに謝ります。

機嫌を取り直したありんすちゃんは胸を張つて尋ねます。

「エントマは何を食べているんでありんすちゃんか？」

エントマは答える代わりに食べていた黒い、まだカサカサ動く『おやつ』をありんすちゃんとユリの手のひらに乗せました。



——ひどい目にあつたでありんすちゃん……

最初の聞き込みは散々でしたが、それでも有力な情報が得られました。

それは寝入ったソリュシヤンの鼻の穴から三吉君がはみ出していた、というものでした。

もしかしたら三吉君はソリュシヤンから自分の力で逃げ出したのかも知れませんが。

ありんすちゃん、流石です。ソリュシヤンが三吉君を消化してないという視点を最初から持っていたのですから、名探偵の資質が本当にあるかも知れませんが。

ありんすちゃんは腕を組んで考えます。名探偵はこの後に閃いたように犯人の名前を告げると相場が決まっています。ありんすちゃんに出来るでしょうか？

「犯人はルプーでありんちゅ」

どうやらありんすちゃんは犯人がわかったみたいです。

ありんすちゃんと他一名はルプスレギナを捜しました。

ルプスレギナは直ぐに見つけましたが、何かポリポリ食べていたのでありんすちゃんは後にする事にしました。

だって、もしかしたらルプスレギナがアントマと同じ『おやつ』を食べているのかもしれないですから。



ありんすちゃんの推理は外れて、ルプスレギナがポリポリ食べていたのはなんとジャガイモをスライスして油で揚げ、塩を振りかけたものでした。

え？ 三吉君の行方はどうなったか、ですか？

三吉君行方不明事件に於いて、ルプスレギナは真犯人ではありませんでした。

しかし、寝ているソリュシヤンの枕元に落ちていた三吉君を拾ったのはルプスレギナでした。

彼女が三吉君を片手につまんでウロウロしていると、声をかけて「私がアインズ様のお部屋に戻しておきます」と言って三吉君を持ち去った人物がいたのでした。

おそらく、その人物はアインズの部屋に三吉君を戻さずに自分の部屋に持ち帰ったのでしよう。

真犯人に聞けば事件の全てが明らかになるでしょう。

難事件を無事に解決したありんすちゃんは助手と一緒にアインズの執務室に報告しに向かうのでした。



ありんすちゃんと助手一名はアインズの元に戻って来ました。

「アインジュちゃま、真犯人はアル●ドでありんちゆた」

「……うむ。その事なのだから……もう良いのだ」

アインズはいくぶん気まずそうな様子でありんすちゃんに背を向けました。

「あれからすぐに三吉は戻ってきた。この案件は無事解決した、というわけだ」

アインズは何処か遠くを見るようにしています。事件は解決したみたいですね。

でも、ありんすちゃんは納得いかないみたいですよ。

「……真犯人はア●ベドでありんちゆ。真犯人なのでありんちゆ」

アインズはありんすちゃんに向きなおり、頭を優しく撫でました。

「……うむ。ありんすちゃんよ、ご苦労であつた。……そうだな、何か褒美をやろう。何がよいかな？」

途端にありんすちゃんの眼がキラーンと光りました。現金なものですね。

「アインジュちゃまにお願いするでありんちゆ。チョリユチャとニグレドとペチュトレワンワンを許して欲ちいでありんちゆ」

アインズはしばらく目を閉じて考え事をしていましたが、意を決して口を開きました。

「……うむ、わかった。ソリユシャン、並びに謹慎中のニグレド、ペストレーニヤを許す  
としよう」

ありんすちゃん嬉しそうです。とてもまだ5歳児位とは思えませんね。  
今日も大活躍のありんすちゃんでした。

— f i n —





——ふう。

『三吉君』は深くため息をついた。

——今回はもう駄目かと思った。

『彼』がスライム♀だと看破したのはおそらく同じスライム種のソリュシャンだけだ  
ろう。

いわゆる同性が故の嫉妬——アインズ様をめぐる女の戦いで危うく『三吉君』は命を  
落とす所だった。

本来なら単なるPOPモンスターに過ぎない自分が、事もあろうに至高の御方の御寵  
愛を受けてしまったのだから、怨みを買ってしまうのは仕方ないだろう。

——ふう。

最後の彼女——守護者統括というNPC最高の存在——との約束を思い出すと気が  
滅入る。

アインズの元に戻すかわりにこれからアインズの入浴後にどのように御方の身体を  
洗ったかを詳細に報告しなくてはならない。

単なるスライムである彼女にとっては難題である。なにしろ喋る事が出来ないのだ  
から。

——ふう。

彼女のため息は止まる事なく続くのであった。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 042ありんすちゃんふたたびみつごになる

鮮血帝ジルクニフは朝からご機嫌でした。

勢力拡大中の魔導国の評判は今のところ悪くなく、属国となろうとしているバハルス帝国を表立って非難する国は現れません。

それどころか最近では聖王国が魔導国に助力を求めて、魔導王自ら聖王国に向かったらしいのです。

これで聖王国もバハルス帝国同様に魔導国の幕下となればいくらか負担も軽くなるうというものですから。

気分よく王城から帝都を見下ろします。

ふと、広場が目に入った瞬間に嫌な事を思い出して眉をひそめました。

そうです。ドラゴンに乗ったありんすちゃん達が来た時の事を思い出してしまったのですね。

良い気分には水をさされたジルクニフは空に視線を動かします。

すると何やら白いモノがやって来るのに気がつきました。

なんと………！

ドラゴンです。

白い丸みを帯びた身体のドラゴンがやって来て、広場にフワリと降りました。

背中に小さな影が三つ……間違いありません。

魔導国の三人の子供達です。

「……まさか」

ジルクニフは慌てて顔を突き出します。

なにしろあの子供達の事ですから、この前の事をすっかり忘れて、「そういえば帝国に行つて来いつてアインズ様言つてなかったっけ？」とか勘違いしているのではないでしょうか？ それとも別の用事とか？

顔を出したジルクニフに向かって三人がドラゴンの上で立ち上がります。

ジルクニフは驚きました。

三人ともダークエルフみたいに色黒で、しかも三人とも同じ服装でスカートをはいていました。

真ん中の子は少し小さい女の子でしたが、まるで三つ子か姉妹みたいにそっくりです。

真ん中の子が口を開きました。

「皇帝、誰がありんちゅちゃんであらうか？」

ジルクニフはこの間の事を思い出します。

ありんすちゃんというのは多分、少し舌足らずの女の子の事だと思われます。

前回双子のダークエルフと一緒にいた赤い服の女の子の事でしょう。それならば、色黒ですが真ん中の一回り小さな女の子に間違いないことでしょう。

——しかし——

ジルクニフはこれまでのアインズ——魔導王とのやりとりを思い出します。

あの人物が、こんな単純なゲームを仕掛けるとは思えません。

あの、悪夢が具現化したような、深慮遠謀の塊のような男ですから、きつと何か裏に意図するものがきつとあるのでしょう。

ジルクニフは腹を括って真ん中の女の子を指差します。

「……ありんすちゃんは『この子』

」——ではない」

相手の反応をじつと待ちます。

ジルクニフの考えが正しいならば、この中に『ありんすちゃん』という子はいない筈です。

これは引つ掛け問題に決まっています。

もし、仮にジルクニフが不正解したらまたもや悲惨な事態を起こされかねません。

この子供達ならきつとやるでしょう。

更にジルクニフの観察眼は彼等が今回別のドラゴン——白くて太めでメガネをした——で来ている事に気がついていました。

そう。きつと『ありんすちゃん』はこのドラゴンの名前に違いないのです。

シーンとした中で先ほどの真ん中の女の子が口を開きます。

「ブブブブブー！　残念でありんちゆた。ありんちゆちゃんはわたちでありんちゆよ。

……マーレ！」

名前を呼ばれた隣のダークエルフが広場にひらりと降り立ち、静かに杖を振り上げます。

広場の回りの呆気にとられている兵士達は身動きすら出来ません。

「やーめーてー!!」

ジルクニフの悲痛な叫びは地震の地響きに消えていくのでした。

## 043ありんすちゃんまたまたみつごになる

ジルクニフは憂鬱そうに広場を見下ろしました。

地震の跡は塞がっていますが、またしても多くの兵士が犠牲になりました。

ジルクニフは頭をかきむしりながら苦悩しました。

「……何故だ？ 何故なんだ？ 何故、こんなにも不幸なのだ？」

ジルクニフに振り向かれたバジウッドは視線を反らしました。

子供のやる事、と一言で片付けてしまうにはあまりにも残酷でかつ無慈悲と言えます。しかしながら、現在のバハルス帝国としては魔導国を表立って非難する事は出来ません。

せめてあの時——ジルクニフは深く後悔します——下手に勘ぐらないで素直に答えていたら……あんな惨劇は起こらなかつた筈です。

ジルクニフはただただ、髪をかきむしり身悶えするだけでした。かつては鮮血帝等と怖れられていたのが嘘みたいに無力な自分に腹立たしきを感じながら、そして髪をかきむしる事ぐらいいしか出来ない自分を哀れに思いながら。

ふと、または昨日のドラゴンがやってくるのが見えました。やはり背中に三人の小

さな人影があります。

おそらくまたまたあの魔導国の子供達でしょう。ジルクニフは目を閉じると、自らを奮い立たせるのでした。

三人はまたもや同じ服装——今回は男の子に見える格好——をしていました。

きつとまたまた真ん中の女の子が『ありんすちゃん当てゲーム』を言い出す事でしょう。いいさ。今度はちゃんと間違えずに答えてやる、そうジルクニフは思いました。

真ん中の女の子が口を開きます。

「さて、誰がありんちゅちゃんでありんちゅか？ 当てられないちよ罰ゲームでありんちゅ」

ジルクニフは心の中で嘲笑いました。所詮は子供の考える事、それなら簡単です。

これがあの畏るべき魔導王ならば深読みしなくてはならないでしょうが、ここは所詮子供が相手です。ましては前回のような失敗は出来ませんから素直に正解を答えるだけです。

ジルクニフは深呼吸をすると答えを口に——

と、丁度その時に横槍が入りました。

「ちゃんと考えた方が良いと思うな。あたしならね。……だって間違えたら大変だよ？」



確かファイオーラといったダークエルフの姉？ の方です。ジルクニフは一瞬、氣勢を削がれましたが、これはきつとブラフでしょう。正解させまいとする相手の心理作戦に違いありません。

ジルクニフは正解を確信して、ゆっくりと真ん中の女の子を指差しました。「ありんすちゃんはこの子だ」

シーンと静まり返った中、三人は顔を見合わせます。そして満面の笑みでジルクニフを迎えます。

「ピンポン、ピンポーン！ おめでどうでありんちゅ。正解でありんちゅよ」

ジルクニフはホツとして、思わず座り込みました。正解したとはいえ、この子供達を相手にするのはもう勘弁して欲しいものです。

ニコニコしながらありんすちゃんが言いました。

「おめでどうでありんちゅ。マール、お願いするでありんちゅよ」

思わず顔を上げたジルクニフの視界の中で、またもやダークエルフの片方が杖を上げて……

「な——ん——で——!!」

またしてもジルクニフの絶叫は地響きの中にかき消されてしまうのでした。

## 044 ありんすちゃんおうこくへおつかいにいく

今日のありんすちゃんはアルベドに頼まれて王国へお使いに行きます。

お供のアンデッドはありんすちゃんの階層から連れて行きます。身の回りの世話をするのはヴァンパイア・ブライドです。何だかんだでそこそこの大所帯になってしまいました。

ありんすちゃんは最近再びゲートを使えるようになったので、馬車ごとすぐに王国へ行けます。

本当はゲートよりドラゴンで行きたかったのですが、今回は駄目なんですって。残念です。

ありんすちゃんは王国に着くと、ヒルマの館を目指します。館では八本指という人達がいるので、ありんすちゃんはアルベドのかわりに指示を出すのです。

「ありんすちゃん様。ようこそおいで下さいました。皆、揃っております」

ありんすちゃんは胸を張ってヒルマに案内されて館に入ります。あんまりふんぞり返りすぎて倒れそうになったのは内緒です。

部屋の中には痩せた人や痩せて頭が禿げた人達がいきました。どの人もヒルマに負け

ず劣らず痩せています。王国ではダイエツトがブームなのかもしれませんね。

ありんすちゃんはアルベドから渡されたメモを読み上げます。

「これからジャンケンで負けた人は罰ゲームでんちゅ。素直になる部屋にいくでちゅね」

居合わせた八本指の全員が真っ青になりました。ヒルマが震える声で嘆願します。

「……お願いです。それだけはご容赦下さい」

ありんすちゃんには『ご容赦』の意味がわかりませんでした。だってまだ5歳児位の女の子ですから、難しい言葉はわからないのは仕方ないですよね。

「……わかりました」

ヒルマは安堵のあまり、ペタンとへたり込んでしまいました。あの地獄を二度と味わわなくて済むのなら何でもするつもりです。

——どうやら地獄を回避出来た——そんなヒルマのささやかな希望は無惨にもありんすちゃんの次の一言で潰えるのでした。

「では、ジャンケンするでんちゅ。負けたら恐怖公とあそぶでありんちゅ」

「——そんな——」

八本指の誰もが絶望した面持ちで互いの顔を見合わせます。こうなれば仕方ありません。相手は子供とはいえ、あのナザリックの幹部です。反抗しても簡単に殺されてし

まうだけでしよう。

彼らの命懸けのジャンケンも数時間も続けられました。

敗者となったのはやはりヒルマでした。

他の八本指の名前をこの二次小説の作者が知らないのでヒルマになった、なんという事はないと思います。多分。

「……お願いです。お許し下さい。……そうだ、ありんすちゃん様に素敵なプレゼントを差し上げます」

「……プレゼント？　でありんちゆか？」

どうやらありんすちゃんの心が動いたみたいです。

「見てください！　この超合金アインズ様を！　こうしてスイッチを入れると目と下半身が赤く光るんです！　しかも——」

ヒルマはアインズ様をテーブルに置きました。するとアインズ様フィギュアは右手を動かしセリフを喋りました。

「——騒々しい。静かにせよ——」

おや？　ありんすちゃん目の色が変わりました。どうやら欲しくてたまらないみたいです。

私も欲しかったりしますが……ゴホン。

「ふたちちゅでちゅ」

ありんすちゃんはメモを見ながら言います。

「アルベドからアインズちやま人形を持つて帰るとなっているでありんちゅから、ありんちゅちゃんの分とふたちちゅでちゅ」

ヒルマは大急ぎでアインズ様フィギュアを二つ用意してありんすちゃんに渡ししました。

ありんすちゃんは無事にお使いを済ませてナザリックに帰りました。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 045 ありんすちゃんあちちゃんになる

ありんすちゃんはお風呂が大好きです。朝、起きたらまずお風呂、そして各階層を一回りし終えたらまた、お風呂に入ります。

ありんすちゃんが特に好きなのはバスタブ一杯に泡が溢れるなかでバチャバチャする事ですって。

ヴァンパイア・ブライドが二人がかりでありんすちゃんをゴシゴシ洗います。

するとありんすちゃんはピカピカのツルツルになります。身体を洗い終えたら、シャンプーです。ありんすちゃんはまず、頭にシャンプーハットをかぶります。

シャンプーハットがないと泡が目に入ったり、顔があわあわして大変なので、必須なのです。

仕方ないですよ。ありんすちゃんはまだ5歳時位の女の子ですから、シャンプーがちよつと苦手でも。

ヴァンパイア・ブライドはありんすちゃんの頭をゴシゴシ洗います。

ありんすちゃんの頭はその度にグラグラ揺れます。

シャワーで綺麗に泡を流すと、今度はリンスです。

ありんすちゃんお気に入りの花の香りがするヤツです。

大変です！ なんとということでしょう！ リンスの中身が空です！ よりによってありんすちゃんがリンスをしようとしているタイミングでリンスが無くなってしまいました。

なんとということでしょう！

「うひひひひ。ありんすちゃん、リンスが無くなったつすか？ これじゃありんすちゃんじゃなくてリンス無しの『あちちゃん』つすね」

不意に現れたルプスレギナが意地悪します。ありんすちゃん、真に受ける必要はありませんよ？ ルプスレギナの言うことは出鱈目で、ありんすちゃんはありんすちゃんですから大丈夫です。

しかしながらありんすちゃんは所詮まだ5歳児位の女の子、ルプスレギナの言葉を真に受けてしまったようです。

ありんすちゃんが『あちちゃん』になんかなるはずなのに……

可哀相なありんすちゃんは風呂から飛び出して必死にリンスを探します。いやいや、そこらにリンスは落ちていませんよ？ ありんすちゃん。

「そういえば、第九階層のスパにシャンプーとリンスが常備してあったつすね。まあまあ、慌てない慌てない。裸で至高の御方のおわす階をウロウロしたらまずいつすよ？

まずはちゃんと服を着るべきですよ」

ありんすちゃんも恥じらいある乙女です。裸でウロウロ歩き回る変態さんにはなりたくはありません。

ありんすちゃんはヴァンパイア・ブライド達に身体を拭いてもらい、ちゃんと服を着せてもらいました。

これで準備万端です。

珍しく、ルプスレギナがありんすちゃんをスパの入り口に案内してくれました。

「私はここで待っているっすから、ありんすちゃんはさっさとリンスを持って来ちゃって下さいっす。流し場の所に沢山あるっすから」

ああ、後から考えたらルプスレギナが妙に親切過ぎだと疑問に思うべきでしたよね。何しろありんすちゃんの事を『男胸さん』だの『残念美少女』だの『ペタン血鬼』だのと陰口叩いていたルプスレギナです。

疑う事を知らない純真無垢なありんすちゃんはガラガラとサッシを開けて中に入っていきます。

「入るでありんちゅよ」

「——服を着たまま風呂に入るなどというこの痴れ者があ!!」

風呂場のゴーレム達が一斉に立ち上がり、ありんすちゃんを囲みます。まさに絶対絶



命！

ありんすちゃんはこんな事になるなら『あちゃん』になっても良かったな、と今更ながら思うのでした。

## 046 ありんすちゃんゆうかいされる

その日のありんすちゃんはいつになく早い時間に目覚めました。

こういう時ってなにか大事件が起こったりしてしまうのがお約束だったりしますが……それは一通の手紙から始まりました。

大きなあくびと伸びをしながらありんすちゃんはベッドを降ります。ふと見ると足下に一通の手紙が落ちていました。

宛名はありません。ですが、ありんすちゃんの住居ですからありんすちゃんが読んでも構わないでしょう。

早速封を切り、手紙を広げて読みました。

「——ありんすちゃんはとてもかわいいのでゆうかいしました。アウラとマールがこれからずっとありんすちゃんのめいれいをきくならありんすちゃんをかえしてあげます。ほんきです」

なんと！ ありんすちゃんが誘拐されてしまったみたいです！ 犯人の要求を認めなければありんすちゃんの身が危ないみたいです！

ありんすちゃんは大きく口を開けて呆然としています。あまりのショックに我を忘

れてしまったみたいですね。

仕方ないですよ。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子に過ぎませんか。

誘拐事件の当事者になってしまったなんて、私でも気が動転してしまいます。

ありんすちゃんが誘拐されて、ありんすちゃんはどうするのでしょうか？

ん？ あれ？

ちよつと待つて下さい。ありんすちゃんはここにいますが？ ……誘拐されたあり

んすちゃんとは？

大変です！ ありんすちゃんは気がついていません。必死な形相でどこかに走つて

いきます。

ありんすちゃん！ ちよつと待つて下さい！

※ ※ ※

ありんすちゃんは第六階層にやつて来ました。どうやら誘拐犯の要求をアウラとマーレに知らせるつもりかも知れませんがね。

「んー？ どうしたの？ ありんすちゃんじゃん。あたしに何か用かな？」

ありんすちゃんはアウラに手紙を見せます。

「……うわっ！ なにこれ？ ……ただのイタズラじゃない。……あのさあ、まさかとは思うけど……ありんすちゃんつてば、もしかして本気になっているんじゃない？」

ありんすちゃんは興奮して言葉を喋る事が出来ません。激しい身振りで事の重大さをアウラに伝えます。

なんとという事でしょうか？ ありんすちゃんが一生懸命話しているのにアウラはまともに取り合ってくれません。

「……ハイハイ。もう気が済んだかな？ あたしもヒマじゃないからね」

ありんすちゃんはほっぺたを膨らまして抗議します。ありんすちゃんが誘拐されたのはアウラのせいなんですから。

「……だーかーらー……ありんすちゃんはここにいるんだから問題ないってあたしは言ってるんだけど？」

アウラはジト目でありんすちゃんを見ている。

うーん……ようやくありんすちゃんも気がついたみたいですね。ハツとした様子で駆け出して行きます。

今頃やってきたマーレは突然部屋を飛び出してきたありんすちゃんに驚き、アウラに尋ねました。

「……お、お姉ちゃん、ありんすちゃんどうしたの……かな？ ……あ、なんでもないよ」  
アウラがジト目のまま振り向いたのでマールは質問をするのを止めました。

※ ※ ※

ありんすちゃんは自分の階層に走りながら、混乱した頭で一生懸命考えていました。  
あの手紙を出した犯人を見つけたいとありんすちゃんを誘拐させないと、ありんすちゃんは嘘つきになってしまいかもしれません。

どうやら、ありんすちゃんはどうしたら誘拐されるか考え始めてしまったみたいで  
す。

うーん……根本的に間違った方向に行ってしまったとしたかと思えませんが、どうなるの  
でしよう？

ありんすちゃんはシモベ達を集めて手紙を見せました。

「この手紙を出した犯人を見ちゆけるでありんちゆ」

ありんすちゃんを誘拐した、という内容にシモベ達はざわめきます。

一人のヴァンパイア・ブライドがおずおずと手を上げて発言を求めました。

「あの……その手紙は昨日、ありんすちゃん様のご指示で私が書いたものかと……」

「——え？」

……そうでした。アウラとマーレを騙そうとありんすちゃんが誘拐されたという手紙を出そうとしたような記憶が少しあります。

「……ゴホン。……では、これからありんちゅちゃん、ゆうかい大作戦始めるでありますよ」

ありんすちゃんは何事も無かったかのようにヴァンパイア・ブライドに命じます。

「これからアウアウとマーレにありんちゅちゃがゆうかいされたと知らせるでありますよ」

ヴァンパイア・ブライドはありんすちゃんから手紙を受け取ると第六階層へ向かいました。

ヴァンパイア・ブライドはすぐに戻って来ました。

「ありんすちゃん様！ 大変です！ アウラ様もマーレ様も笑い転げてまともに相手をして頂けませんでした」

それはそうですよね。さつきありんすちゃんが大騒ぎしちやっていますから。

「役にたたないでありますね。もういいでありますよ」

ありんすちゃんは恐縮しきっているヴァンパイア・ブライドを許してあげました。

……うーん……でもヴァンパイア・ブライドは何も悪くないと思いますよ。

※  
※  
※

そんな事があつた翌朝、ありんすちゃんはいつものように目を覚ましました。  
ベッドから降りたありんすちゃんは足下に一通の手紙を見つけて……またまた大騒  
ぎするのです。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですか  
ら。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 047 ありんすちゃんときえたおやつ　　犯人はマーレ

おやおや？　ありんすちゃんが空になったお皿の前で難しい顔をして腕組みして  
ますね。どうやら何か事件が起きたみたいです。

ありんすちゃんの後ろには扉が開けられたキャビネットがあつて、そこには『たべる  
な』と書かれた貼り紙があります。

このキャビネットはありんすちゃんが後で食べようと思つて、おやつをしまつておく  
のに使つていたのでした。

では、おやつを食べ終えてまだ足りなくて悩んでいるのでしょうか？

……うーん……どうやら誰かにおやつを食べられちゃったので、ありんすちゃんは  
怒っているようです。

なんと……ありんすちゃんがおやつを食べられてしまったのはこれが初めてでは無  
いのですつて。

それでありんすちゃんは自ら『たべるな』と書いた貼り紙を貼つたのに、またもや食  
べられてしまった、という事のようにです。



一番最初はモンブランケーキでした。ありんすちやんはお風呂上がりに食べようと思いい、とても大きなマロングラッセが乗ったモンブランケーキをキャビネットに入れておきました。そして三十分後にお風呂から上がったありんすちやんがキャビネットを開けるとモンブランケーキのてっぺんのマロングラッセが無くなっていたのでした。

ありんすちやんにとって、モンブランケーキを食べる一番の楽しみである最初にマロングラッセを食べる事が出来ないなんて……イチゴが乗っていないショートケーキのようなものです。

そこで、次にマカロンをキャビネットにしまう時にありんすちやんは『たべるな』と書いた貼り紙を貼っておいたのですが……

ありんすちやんの目の前のお皿は空っぽです。よりによって犯人はありんすちやんが書いた貼り紙を無視して全部食べちゃったのでした。

いくら寛大なありんすちやんだって怒ります。犯人を見つけて懲らしめなくては気が収まらないですよ。

空っぽのお皿を前にしたありんすちやんの頭には二人の容疑者が浮かんでいました。

「ルプーとアウアウが怪しいでありんちゆ。……どちらかが犯人でありんちゆな」

またまた名探偵ありんすちやんの出番みたいですね。前はアインズ様の依頼で無

事に三吉君を見つけたのでした。

ありんすちやんは第一容疑者のルプスレギナを探します。ペタン血鬼航空フロド隊がありんすちやんの指示で動きます。あつという間にルプスレギナをありんすちやんの所まで連れてきました。

「なんか用つすか？　ありんすちやんのおやつを食べちゃった犯人ならルプーさんじゃないつすよ？」

おや？　……聞かれもしないのに自分から容疑を言い出すなんて、怪しいですよね？

……あれ？　……ありんすちやんはルプスレギナの言葉に納得しちやつたみたいですよ。ニコニコしながらノートの内容者リストのルプスレギナの名前に大きなバツを書いてしまいました。ありんすちやん、大丈夫でしょうか？

うーん……どうやら犯人は残ったアウラという事になってしまったみたいです。……大丈夫かな？　ありんすちやん。

ありんすちやんはアウラを犯行現場に呼び出しました。何も知らないでやって来たアウラをとつちめてやるつもりみたいです。

「ヤッホー。お待たせ、あたしにおやつをご馳走してくれるんだって？」

ありんすちやんはアウラに指を突きつけて非難します。どれだけあのマカロンを食べるのを楽しみにしていたか、ありんすちやんの渾身の一筆『たべるな』に込められた

想いなどを蕩々と語ります。

「——ちよ、ちよつと待った！ あたしは知らないよ？ 濡れ衣もいとこだってば」

……うーん……どうやらアウラも犯人じゃなさそうですね。

ありんすちゃんはガツカリです。さっきまでの気合いがしぼんだ風船みたいに抜けてしまいました。

「……うーん。この『たべるな』ってさ『食べるな』って事だよな？」

アウラがありんすちゃんに尋ねます。何をわかりきった事を聞くのでしょうか？

「……あのさ、ラテン語で『タベルナ』って食堂の事だったりするんだよね。もしかしたらこの貼り紙を勘違いした誰かが食べちゃったんじゃないかな？」

……ありんすちゃんはキョトンとしたまま、アウラの言葉の意味がわかりませんでした。

……アウラやマーレの創造主のぶくぶく茶釜はどうやらスペイン語やイタリア語あたりのラテン系の語学の知識があったそうです。アウラやマーレの名前にも女性名詞や男性名詞が使われていて、その為かアウラにも少しばかりの知識があるそうです。

アウラは続けます。

「どうせ貼り紙するなら『食べちゃダメ』とか『盗み食い厳禁』にした方が良いんじゃないかな？」

なるほど……ありんすちゃんは早速アウラの意見をもとに『盗み食い厳禁』の貼り紙を作る事にしました。

※ ※ ※

その夜、マールはリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを発動させてありんすちゃんのキャビネット前にやって来ました。

なんと！ ありんすちゃんのマカロンを食べてしまった犯人はマールだったのですね。

もしかしたらマールは『たべるな』の貼り紙を勘違いしたのかもしれない。

マールはありんすちゃんの新しい貼り紙に気がつきました。……そして……

※ ※ ※

朝になってありんすちゃんはキャビネットを開けてみました。なんとという事でしょう！ またしてもありんすちゃんのおやつは無くなっていました。

残念ながら、せつかくのアウラのアドバイスもありんすちゃんの努力も報われなかつ

たみたいですね。ありんすちゃんはガツカリしています。

……ありんすちゃんが一生懸命書いた貼り紙には『ぬすみぐいげんき』とありました。仕方ないですよ。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 048 ありんすちゃんのおばけたいじ

ありんすちゃんが見回りを終えてのんびりしていると来客がやって来ました。ルプスレギナとシズは何やらありんすちゃんに相談事があるのだそうです。

どうやら三吉君誘拐事件やありんすちゃん誘拐事件、キャビネットのおやつ盗難事件など、数々の難事件を解決してきた名探偵ありんすちゃんの噂は戦闘メイドの間にも広まっているようです。

「今日はありんすちゃんに頼みがあるつすよ。ありんすちゃんはオバケって大丈夫つすか？」

「……………否定。あまりにも非現実的です。……………しかしながら一般メイドの疑念を晴らす必要があります」

うーん……………ありんすちゃんは実はオバケとか幽霊とかつてちよつと苦手なんですよね。夜中にトイレに行くのも一人で行けないのでヴァンパイア・ブライドに付き添って貰っていたりするのは内緒です。おかしいですよね？ だつてありんすちゃんはアンデッドのヴァンパイアの真祖なんですから。

でも、仕方ないのだと思います。だつてありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なん

ですから。

「そんなのじえんじえん、コワくないでありんちゅ、ありん、ちゅ」

ルプスレギナは意地悪そうな笑みを浮かべながら続けます。

「いや……なんか一般メイド達の間で噂があるらしいつすよ。第九階層の最近使っていない旧食堂に出るらしいんすよ」

ありんすちゃんは全然怖くない、という風に胸を張ります。

「……ある晩のことつす。その日の勤めを終えたある一般メイドが一人で旧食堂の横を通りかかったらしいつす。その時に夜食用にカレーパンを五個持っていたそうなんすが……」

ルプスレギナは言葉を切るとシズの方を見ます。なんと……シズもカレーパンが入った袋を抱えています。

「……丁度、旧食堂の横に来た所で何者かの声でしたそうつす。……男とも女とも判別しないかすれた声で……『オイテケー……』……タベモノオイテケー……』って」

「——!!」

ありんすちゃんはほんの少し怖かったので、ちよつぷりそそうしてしまいました。

「と、まあ、そんなわけつすから、行きますよ。ありんすちゃん」

ルプスレギナは明るく言うとありんすちゃんにシズが持っていたカレーパンの袋を

持たせます。そしてそのまま第九階層に連れて行かれてしまいました。

第九階層では一般メイドが何人も待ち受けていました。みんなありんすちゃんを応援しています。

「じゃ、ありんすちゃん、後はよろしくっす」

「……………健闘を祈る」

ルプスレギナもシズも当たり前のようになりんすちゃんを見送ります。どうやらオバケ退治はありんすちゃん一人で行くみたいですな。

「……………うん……………こわくないでありんちゅ。ありん、ちゅ」

ありんすちゃんは本当は行きたくありませんでしたが、成り行きで嫌だと言えませんでした。

ありんすちゃん頑張つて。

※ ※ ※

ありんすちゃんは旧食堂にやつて来ました。胸がドキドキします。とはいえ実際には心臓は動いていませんが。

『……………オイテケー……………タベモノオイテケー……………オネガイ』



怪しい声が聞こえてきました。ありんすちゃんはしっかりとカレーパンの袋を抱き締めます。

そして、恐る恐る声の方を見ると……椅子の陰に隠れた人影がありました。

「!!——」

ありんすちゃんは思わず悲鳴を上げ——

※ ※ ※

——ませんでした。

「なんだ、ナーベでありんちたか」

椅子の後ろには随分やつれたナーベラルがいました。ありんすちゃんはすっかり忘れてしまっていました。おそらくあのかくれんぼからずっと隠れていたのです。

「……シャルティア様あ……お願いです。……私を見つけて下さい……」

なるほど。鬼だったありんすちゃんが見つけければナーベラルのかくれんぼが終わる訳ですね。さあ、ありんすちゃん。「ナーベラル見つけ」って言ってあげましょう。

……おや？ ありんすちゃん、どうかしました？

ありんすちゃんは黙っています。どうしたのでしょうか？

「……出来ないでありんちゅ」

ナーベラルはありんすちゃんの言葉が信じらんない、という顔をしています。

「……もうチャルチエアじゃないから駄目なんでちゅ。今はありんちゅちゃんだから鬼じゃないでありんちゅ」

ありんすちゃんとナーベラルに空白の時間がしばし流れました。

しばらくして、ナーベラルが重い口を開きました。

「……あの……せめて……カレーパンを頂いても？」

## 049ありんすちゃんメイドみならいになる

おや？ 今日のありんすちゃんは何か上機嫌みたいですよ。え？ なになに？  
どこか違うかないか、ですって？

うーん……背が伸びたようにも見えないですし、どこが違うのでしょうか？わかりませ  
ん。

ウソウソ。冗談です。ありんすちゃんは今日、メイドさんの格好をしているんですよ。  
ね。とてもお似合いですよ。可愛い、可愛い。ありんすちゃん最高です。……つておだ  
てればすぐに機嫌が直ってしまうのは、やはり5歳児位の女の子なので仕方ないです  
ね。

ありんすちゃんは今日からメイド見習いとしてプレアデスの仲間入りするそうです。  
それでメイド服にホワイトブルームを付けているんですね。

まずはエントマが先生です。ありんすちゃんは礼儀正しくお辞儀をします。

「お願いしますでありんちゅ」

「ありんすちゃんかあ。じゃあねーよろしくう」

エントマはありんすちゃんを連れて第二階層にやって来ました。

「ここはあ、私のおやつ部屋あ」

自分の階層ですからすぐにそこにはおやつがない事をありんすちゃんは知っています。きっとエントマはありんすちゃんを試しているのでしょう。

「そこはあ、おやつないでありんちゆう」

ありんすちゃんは飲み込みが早いですね。すぐにエントマの口調をマネしています。

エントマはありんすちゃんの意見を無視して『おやつ部屋』から黒いモノをつまみ上げてポリポリ食べ始めました。

「貴方も食べるう？ 美味しいからあ」

ありんすちゃんの目の前に『おやつ』を突き出します。エントマはワサワサ動いている『おやつ』をありんすちゃんの口に入れようとしてきます。

ありんすちゃんは逃げ出しました。

※ ※ ※

次の先生はシズです。ありんすちゃんはお辞儀をしました。

「ありんちゅちゅ、でありんちゅちゅ」

うーん……エントマの口調が少し移ってしまっただかもしれませんね。

「……………妹の物言いみたいだけど許す。かわいいから」

シズはどこことなく落ち着きが無いように見えました。

ありんすちゃんは目をキラキラさせてシズをじっと見つめます。一体シズは何を教えてくれるのだろうか？ という期待に満ちているのですね。

「……………これから第六階層に行く。魔獣のお世話」

シズはありんすちゃんを連れて第六階層に向かいました。

第六階層に着くと、シズはポケットからシールを取り出してありんすちゃんに渡しました。丸いシールには一円と書かれてあり、とても可愛いもので、ありんすちゃんはそのエプロンに貼ってみました。

「……………これから魔獣のお世話。可愛らしい魔獣にお気に入りシールを貼る」

これならありんすちゃんにも出来そうです。沢山シールを貼って、早く一人前のメイドになりましょう。

一時間もすると第六階層はシールを貼られた魔獣だらけになりました。ありんすちゃんもシズも大満足です。

シズはモコモコした魔獣に抱きついてその感触を楽しんでいます。ありんすちゃんも真似して抱きつこうとした瞬間――

「あー！ またシールだらけにして！ ……剥がすの大変なんだからね？ ……あれ？

ありんすちゃんも一緒なんだ」

ありんすちゃんが起き上がると困った表情をしたアウラが腕組みして立っていました。

「アウアウ、魔獣のお世話でありんちゅよ」

「うーん……魔獣達は嫌だつてさ。まあ、あたしに言わせると余計なお世話なんだけどね」

シズは相変わらず魔獣に抱きついていきます。

しばらくするとユリがやって来て、アウラに謝りながらありんすちゃんとシズを連れだしました。

※ ※ ※

「今度はユリが先生でんちゅね。お願いしまちゅ」

ありんすちゃんは礼儀正しくお辞儀をします。

「それではボク……ゴホン」

「ぼく？ でありんちゅか？」

「……ゴホン。えー、それではメイド見習いのありんすちゃんには歩き方の練習をしてもらいます」

ありんすちゃんは頬を膨らまして抗議します。歩く練習なんて、ありんすちゃんをバカにしていますよね？

やれやれ、といった風でユリは手を振ります。

「……わかりました。それ程言うならありんすちゃん、歩いてみて下さい」

ありんすちゃんは口を真一文字にして、歩き出しました。緊張して何だかロボットみたいにごちなく、その上右手と右足、左手と左足を同時に振ってしまいました。

「……これでは立派なメイドにはなれません。まずは真つ直ぐ歩く練習から始めなくては」

ありんすちゃんの練習はその後三時間に及びました。

さすがにそれだけ練習すればありんすちゃんの歩き方だつて随分洗練されたものになった事でしょう。

さあ、ありんすちゃん。練習の成果を披露しましょう。

「……あれ？ ……ありんすちゃん……三時間前と全く変わりません。相変わらずロボットみたいにギクシャクで、やはり手足が同時に動いちゃっています。相変わら

さすがにユリもありんすちゃんに教えるのを諦めてしまったみたいです。

一人落ち込んだユリを後にありんすちゃんは部屋を出ます。  
さあ、次は誰が先生でしょう？ ありんすちゃん、頑張つて。

※ ※ ※

ソリュシヤンがありんすちゃんの元を訪ねてみると、ありんすちゃんのメイド服が脱ぎ捨てられており、ホワイトブリムも床に落ちていました。ありんすちゃんの姿は何処にもありません。

「……………いない？ ……ありんすちゃん様？」

ありんすちゃんはメイド服を脱ぎ捨てた後、お風呂呂に入ってからベッドで眠っていました。どうやらメイド見習いにもう飽きてしまったみたいですね。

やれやれ。仕方がないですね。ありんすちゃんはなんといつてもまだ5歳児位の女の子なのですから。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました



## 050ありんすちゃんまたもやメイドみならいになる

さて、今日のありんすちゃんは何をしているのか、覗いてみましょう。

おや？ ありんすちゃんは着替え中ですね。どういう気まぐれか、またしてもメイド服を着ようとしています。

あらあら。先にホワイトブリムを付けた頭で着ようとしたので、頭が引つかかって出て来ないですよ。ありんすちゃん、落ち着いて。一旦頭を戻してホワイトブリムを外した方が……ああ……そんなに暴れても無理ですって。

激しい物音でようやくヴァンパイア・ブライドが駆けつけて来ました。ヴァンパイア・ブライド三人が寄つてたかつてありんすちゃんにメイド服を着せようと悪戦苦闘しています。

ようやくメイド見習いのありんすちゃんに変身ですね。

「……ようやく支度出来ましたね。……わん」

顔の真ん中に継ぎ目がある犬の頭をしたメイド、ペストーニヤ・S・ワンコが顔を覗かせました。

ありんすちゃんはスカートを摘まんで優雅にお辞儀をします。

「今日はお願ひするでありんちゆ。ワン」

ペストーニヤもお辞儀で返します。

「よくお似合いですよ……わん」

この前より何だかありんすちやんのやる気が感じられますね。まあ、前はユリ以外、あまり良い手本ではなかったみたいですが。

とりあえず今回、どういう気まぐれかまたまたメイド見習いを体験するみたいですね。

「それでは、まずは姿勢と歩き方の練習をしてみましよう。……わん」

うーん……前回ユリが匙を投げてしまいましたから、ちよつと心配ですよ。大丈夫でしょうか？

なんと！ 意外にもありんすちやんはちゃんと歩いていきます。姿勢良く、上品でなんとなく気品すら感じられます。

ありんすちやんはやれば出来る子なんですよ。まあ、普段は全くやる気がないみたいではありませんが……

「良く出来ました。……わん。……一旦、お茶にしましょうか」

「……わん」

あきらかに語尾を忘れたペストーニヤにありんすちやんは気がつかないみたいです

ね。それともワザと気づかない振りをしていられるのでしょうか？

ありんすちゃんはペストーニヤからメイド長の仕事についての色々な話を聞きました。一般メイドの間の噂話には都市伝説まがいの話もあつてついつい時間を費やしてしまいました。

「おや、ペストーニヤはここにいましたか。……そろそろ仕事に戻るべきですね」

ありんすちゃんとペストーニヤが声の方を向くと、そこにはセバスがいました。よく見るとツアレも一緒にいます。

ありんすちゃんはちょうどセバスの噂話を聞いた後なのでびっくりしました。

「セバチュ、チュアレと出来てるんでちゆよね？ ……アチチチなんでありんちゆ」

慌ててペストーニヤがありんすちゃんの口を塞ぎます。しかし、セバスはすべて聞いてしまいました。

セバスは少し顔を赤らめながらも、何事もなかったかのように悠然と背を向けました。

「……ゴホン。お茶が済みましたら仕事に戻りなさい。……その、ありんすちゃんもです」

「……出来てるのは赤ちゃんでありんちゆか？」

ありんすちゃんは思わずセバスに疑問を尋ねてしまいました。セバスの背中が凍り

ついたように見えましたが……仕方ないですよ。ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なので、そんな気遣いなんて出来るわけがないのですから。

翌日、セバスからありんすちゃんのメイド見習いは中止になったとの報告がありました。

せつかくやる気になっていたありんすちゃんはがっかりです。まあ、どうせすぐに立ち直ってしまうでしょうが。

## 051ありんすちゃんりゅうおうこくにいく

ありんすちゃんは朝から物思いに耽っているみたいです。やたらとため息をついたり、ぼんやり考え事をしています。

もしかしたら恋の病とか？ まさかね……

ありんすちゃんの周囲だと少年なのはマーレだけですが……もしかして？ ……そうなるもありんすちゃんとアウラは姉妹になりますね。

おと……どうやらありんすちゃんとアウラの両名から抗議が来たようなので、違うみたいですね。

ありんすちゃんは窓から顔を出して外を眺めながら、何処かに消えてしまったレースの飾りのお気に入りの真っ白なパンツの事を思い出していたのでした。

すると、風に乗った小さな葉っぱがありんすちゃんの顔に止まり、ありんすちゃんの鼻をくすぐります。

「くちゅん！」

ありんすちゃんは何処かにテレポートしちゃいました。

※ ※ ※

ありんすちゃんが飛ばされてきたのは何処かの王宮の中でした。ありんすちゃんはすっかり忘れてしまっていますが、以前、ニグレドに見せてもらった白いパンツの在処——竜王国の女王、ドラウデイロンの寝室——に転移していたのです。

ありんすちゃんが起き上がると、高級そうなネグリジエを着た少女がおりんすちゃんの下で気絶していました。どうやらこの少女の上に転移してしまっただけですね。

お気に入りのパンツの事を考えていたおりんすちゃんは、もしやと思い女の子のネグリジエを捲り上げてみましたが、彼女の下着は残念ながらおりんすちゃんではなく赤い下着でした。

ありんすちゃんはがっかりしました。ふと、ベッドの脇を見ると女の子の服が綺麗に畳んで置いてあります。ありんすちゃんはニコニコしながらその服——女王ドラウデイロンの服——に着替えました。

部屋の片隅のクローゼットに気絶したままの女の子を押し込むと、なに食わない顔をしてベッドに潜り込みます。

「——陛下！　いかがなされましたか？　……何やら大きな音がしましたが……」

扉を開けて竜王国宰相が駆け込んできました。ありんすちゃんを見ても、入れ替わっ

た事に気がつかないみたいです。

「おはようでありんちゅ。食事にするでありんちゅね」

「は、はい……陛下……ですが、その前に」

宰相はありんすちゃんの顔に自分の顔をグツと近づけて言葉を続けました。

「『閃烈』のセレブレイト殿の謹慎をそろそろ解いて頂けないでしょうか？ かの者なしでピーストマンの進攻は抑えられません。……法国から援軍を送るとの言質を得てはありますが、このままでは援軍到着の前に滅亡してしまいます」

ありんすちゃんは何だか厄介な時に入れ替わってしまったみたいですね。これはこつそり帰った方が良さそうですね？

「……びーすとまんでありんちゅか？ 面白そうですね？」

ありんすちゃんの瞳が好奇心でキラキラしています。そういえばありんすちゃん、こういう厄介事が大好きなんでしたね。

「良いでありんちゅ。食事したらびーすとまんやちゅけてくるでありんちゅ」

宰相は目を剥きました。彼はあくまでもありんすちゃんをドラウディロンだと思っていますから、いよいよ黒鱗の竜王の始原の魔法が使われると考えたのでしょう。

「……陛下……それでは……よろしいので？」

ありんすちゃんには宰相の考えなどわかるはずもないのですが、面倒くさくなつてき

たので適当に相槌をうちました。

さて、竜王国内では上から下への大騒ぎです。とうとう竜王国女王、黒鱗の竜王ドラウディロン女王が始原の魔法を用いてピーストマンに鉄槌を下す、というニュースは瞬く間に広がっていきました。

「では……生け贄の住人はいかほど必要でしょうか？」

食事をしているありんすちゃんに宰相が尋ねました。ありんすちゃんは面倒くさいので両手を広げてみせました。

「じゅ……十万ですと……いや、かくなる上は仕方ないでしょう。わかりました。手配いたします。これも国の存亡の為、致し方ない事でしょう」

ありんすちゃんは食事を終わるとお風呂に入りました。宰相は始原の魔法を使う為のお清めの儀式だと思ったみたいでしたが。

「陛下。『閃烈』セレブレイト殿が謁見を申し出ております。お会い頂くのが宜しいかと……」

ありんすちゃんは鷹揚に頷くと、玉座の前に一人の騎士が進みでて来ました。

「陛下。ご尊顔は拝し誠に幸せに存じ上げます。此度は陛下直々の親征との由、お許し賜れるならばこの身をお側に……」

セレブレイトが額を打ちつけると、懐から一枚の布切れが落ちました。なんと！ あ



りんすちゃんのお気に入りのおパンツではありませんか！

ありんすちゃんはパンツを拾い上げるとセレブレイトを下がらせます。ようやくパンツを取り戻したありんすちゃんは踊るような足取りで玉座に座り直します。

「びーすとまんやつちゆけてやるでありんちゅ」

※ ※ ※

戦場に着くとありんすちゃんは真紅のフルプレートに身を固めました。手にはスポイトランスを持っています。

遠くからみるとスポイトランスが大き過ぎて、スポイトランスがありんすちゃんを持つているように見えますが……おそらくフルプレート同様に今のありんすちゃんのサイズに合わせる事が出来る筈だと思えますが……まあ、なんだかんだでありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子に過ぎないので仕方ないですよね。

ありんすちゃん一人に対してピーストマン軍はその数三万。ライオンやヒョウなどの頭を持つ彼らは小さなありんすちゃんを見て笑いました。

ありんすちゃんはお構いなしに駆けていきます。スポイトランスを振るうとたちま

ち百人ものビーストマンが飛ばされました。まるで落ち葉を竹ぼうきで掃くように、ありんすちゃんも次々にビーストマンをスポイトランスで掃除していきます。

ほんの三十分足らずで三万ものビーストマンは綺麗に掃除されてしまいました。子供になったとはいえ、かつての階層守護者最強のありんすちゃん、流石ですね。それともビーストマンが弱すぎたのか……

一斉に勝どきが響く中、舞い上がっていたビーストマンの抜け毛がありんすちゃんの顔に留まりました。

「くちゅんー」

ありんすちゃんの姿は消えてしまいました。

※ ※ ※

その後——寝室のクローゼットからドラウディロンが見つかりましたが、彼女は気絶したままで何も覚えていませんでした。人々はきつと始原の魔法を使った後遺症だと噂するのです。

尚、生け贄として選ばれた人々は何事もなく帰る事が出来たそうです。

## 052ありんすちやんとハロウィン

バハルス帝国皇帝、ジルクニフ・ルーン・ファーロード・エルⅡニクスは苦々しい思いで城下を見下ろしました。帝国では折からハロウィンの飾り付けが溢れていて、あたかも異界の国であるかのようにでした。

「陛下、ハロウィンは嫌いでしたっけ？」

帝国四騎士の一人、*“雷光”*バジウツド・ペシユメルがおどけるように声をかけました。ジルクニフはそんなバジウツドに気がつかないかのように城下を見下ろし続けています。街中にはカボチャやガイコツの飾りが溢れ、それらをじつと見つめ続けながらボソツとジルクニフは呟きました。

「……ハロウィンなんてクソ食らえ、だ。なんであんな奴らを崇めるようなイベントなど……」

「……魔導国、ですか？ ……気持ちはわかりますが、あんなバケモノ相手にしちや命がいくつあってもどうしようもないですよ」

「……わかつている」

アインズ・ウール・ゴウン魔導国——属国化を決めたもののアンドレッドは生者に対し

て憎しみを抱くものだという。いつ、その歯牙が帝国に向かうかわからない……ジルクニフは頭をかきむしりながら苦悩するのです。

——いまましい。なにがハロウインだ——意味がない事はわかっていっているもの。ジルクニフにとってはアンデッドの祭りのようなハロウインが恨めしく思えるのです。気分転換に視点を空に向けたジルクニフは、雲の彼方に小さななにかを見つけました。

「まさか……な……」

ジルクニフはついドラゴンの姿を思い浮かべてしまっていました。——厳密には、ドラゴンの背中に乗った魔導国の三人の子供達の事を苦々しく思い出していました。

「へ、陛下！……ありや……まずいですぜ？」

バジウツドの言葉より先にジルクニフはその小さな姿がドラゴンであると確信していました。

※ ※ ※

ありんすちゃんはアウラの声で目覚めました。

「おはよーありんすちゃん。今日はハロウインだよー」

アウラは絵本に出てくる魔女の格好をしていました。その後ろのマーレはフランケンシュタインの怪物でしょうか？

「はろいん、でありんちゆか？ 何でありんちゆか？」

アウラは腕を組んで答えました。

「うーん……なんか、トリックオアトリートって言うってお菓子を貰うイベントらしいよ？ ……あたしもよくわからないんだけど、仮装してイタズラしまくるお祭りなんだってさ。それって面白そうじゃん」

ありんすちやんは飛び起きました。瞳をキラキラさせています。ありんすちやんはお菓子もイタズラも大好きですから。

ありんすちやんはアウラが用意してきたカボチャのお化けの衣装に着替えます。マーレは何故かずっと後ろを向いていました。

「で、どこに行こうか？」

アウラはありんすちやんに尋ねました。ありんすちやんに思い浮かべられるのはそんなに多くはありません。

「帝国がよいでありんちゆね」

「う、うん。それならボ、僕のドラゴンで……」

「決まった！ 早速出発しよう」

かくして急遽、アウラ、マール、ありんすちゃん三人はバハルス帝国に出かけるの  
でした。

※ ※ ※

帝国へはもう何回も来ているので慣れたものです。行き慣れたルートを通り、あつと  
いう間に帝国の上空にきました。街並みはすっかりハロウィン一色で飾られており、三  
人の子供達を喜ばせました。

手慣れた様子でマールは帝国の王城のそばの広場にドラゴンを降ろします。以前に  
地震を起こさせた事を警戒してか兵士達は遠巻きにしています。

「トリックオアトリート！ お菓子くれないとイタズラしちゃうよ！」

アウラがマイクで叫びました。慌てたのは皇帝ジルクニフです。あの子供達のイタ  
ズラでまたしても多くの兵士を失うだろう事は明白です。なんとしても防がなくては  
なりません。

「お菓子だ！ 王宮のあらゆるお菓子をありつたけかき集めて運び出せ！」

兵士達もまだ先日の惨劇を忘れていませんから必死になって働き、広場にあつという  
間にお菓子の山が出来ました。

「アインズ・ウール・ゴウン魔導国の方々！ どうぞお召し上がり下さい！」

ジルクニフは皇帝の威厳すらかなぐり捨ててドラゴンに向かい平伏しました。バジウツドら配下もならいます。

「わかった！ それじゃあ——」

ニコニコした三人の子供達が拍手をします。それを見て安堵したジルクニフの笑顔が次の瞬間に凍りつきました。

「じゃあ、お礼に——マーレ！」

フランケンシュタインの怪物の仮装をしたダークエルフが黒い杖を振り上げました。

「な、なんでー!？」

折から起こる凄まじい地響きにジルクニフの絶叫はまたしてもかき消されてしまうのでした。

※ありんすちやんが挿絵を描いてくれました

## 053 番外編 ジルクニフのクリスマス

バハルス帝国皇帝、ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルⅡニクスは苦々しい思いで城下を見下ろしました。帝国では折から街中にクリスマスソングが流れていて、まさにクリスマス一色でした。

「陛下、クリスマスは嫌いでしたっけ？」

帝国四騎士の一人、*“雷光”* バジウツド・ペシユメルがおどけるように声をかけました。ジルクニフはそんなバジウツドに気がつかないかのように城下を見下ろし続けます。街中にはクリスマスのイルミネーションが溢れ、それらをじつと見つめ続けながらボソツとジルクニフは呟くのでした。

「……クリスマスなんてクソ食らえ、だ。なにがサンタクロースだ。なにがクリスマスプレゼントだ……」

「……お悩みは魔導国、ですか？ ……気持ちはわかりますが、あんなバケモノ相手にしちゃ命がいくつあってもどうしようもないですよ」

「……わかっている」

アインズ・ウール・ゴウン魔導国——属国化を決めたもののアンデッドは生者に対し



て憎しみを抱くものだという。いつ、その歯牙が帝国に向かうかわからない……ジルクニフは頭をかきむしりながら苦悩するのです。

——いまましい。なにがクリスマスだ——ジルクニフはついこの間のハロウィンに起きた惨劇を忌々しく思い出していました。

(来る。……きつと奴らはやって来る)

ジルクニフには確信がありました。こういう一般的には幸福の象徴ともいえるイベントを悲惨なものに変えてしまう悪魔のような子供達——双子のダークエルフと舌足らずな女の子——が乗ったドラゴンが今にも現れてくる気がするのです。

(……既に四回だ……二度ある事は三度あるとはいうが、もう四回だ……)

頭をかきむしりながらジルクニフは苦悩します。そしてこの苦悩から解放される事は恐らくないだろう、と確信するのです。

「どうだ？ ドラゴンはまだ見えないか？」

ジルクニフのせっかちな叫びに物見の兵士は大きくかぶりを振ります。いち早く彼らの訪問を見つけた所で打つ手はありません。だが、このまま何もせずに手を拱いて蹂躪を待つのは癪だったのです。

(今日はクリスマス・イヴ。彼らはきつとやって来る。ニコニコと満面の笑みを浮かべながら……これも全てあの忌々しい魔導王の差金だろう)

夕方になってもドラゴンはやって来ませんでした。しかしながらジルクニフの心は穏やかではありません。いつ来るともわからない恐怖に心はすっかり憔悴していくのでした。

イライラする気持ちをメイド達にぶつけて自己嫌悪に陥ったり、沈みゆく夕日を眺めながら訳わからず涙ぐんだり、それでもドラゴンはやって来ませんでした。こんなに苦しい思いをするならばいつそのことドラゴンに現れて欲しいとすら思ってしまう程、ジルクニフは追い詰められていくのでした。

「……来ませんか? ……ドラゴン」

バジウツドが気の抜けた声を出しました。ジルクニフはそんなバジウツドを忌々しく思いながら吐き捨てるように「わかっておる」と答えます。

どうやら今日災難が訪れる事は無いかもしれない。だが——ジルクニフはまざまざとアインズ・ウール・ゴウン魔導王が嘲笑う様を幻視するのです。

(まだ、安心は、出来ない……今日はあくまでもクリスマススイブ。本番はクリスマススの明日かもしれないな)

夜になりました。

「陛下。及ばずながら警護しますから、そろそろお休み下さい」

バジウツドの進言を聞き入れてベッドに横たわってみたものの、ジルクニフの五感

敏感に研ぎ澄まされたままでした。

イライラしながら部屋を歩き回ってみても当然不安は収まる筈はなく、扉の向こうから漏れ聞こえてくる脳天気ないびきを聞くにつけてジルクニフの感情はもはや爆発しそうでした。

と、不意に甘い香りがしたと思つた瞬間、ジルクニフは気が遠くなりました。

※ ※ ※

翌日の昼過ぎにようやくジルクニフは目を覚ましました。枕元に大きな靴下が飾つてあり、中になにか入っています。

そつと覗き込むと靴下の中にカツラと頭皮を叩くマッサージブラシとクリスマスカード——メリークリスマススゝアインズ・ウール・ゴウン魔導国くと書かれていた——が入っていました。

サンタクロース？ いや……間違いはない。あの魔導国の子供達の仕業に間違いありません。ジルクニフは思いました。

——これはアインズからのメッセージなのだ——

かつてジルクニフはイジャニーヤによる魔導王暗殺の可能性を臣下に聞いてみた事がありました。それをアインズは知っていたのでしよう。

きっと、アインズはバハルス帝国皇帝たるジルクニフの生命を奪う事は簡単に出来るのだぞ？ という無言のメッセージを靴下に託したのだ、と……ジルクニフは心の底から戦慄するのです。

## 054ありんすちゃんサンタクロースになる

ありんすちゃんがお昼寝をしているとアウラとマールレがやって来ました。

「やほー。ありんすちゃん、クリスマスだって知ってる？」

「くるします？　でありんちゆか？」

ありんすちゃんは誰かの首を絞めるのかな？　と首を傾げます。

「ち、ちがうよ……クリ、クリスマスだよ」

マールレが持っていた絵本——クリスマスのもえのよる——を広げて綺麗な挿絵をありんすちゃんに見せました。

赤い服のふとつちよなお爺さんがトナカイのそりに乗ってプレゼントを配っています。雪が降っている街中は綺麗に飾り付けられていました。

「綺麗……」

ありんすちゃんは飾り付けられたモミの木の挿絵に見とれます。この絵本を眺めているとなんだかワクワクしてくるのです。

エヘン、と咳払いをしてアウラが口を開きます。

「この太った老人はサンタクロースっていつてクリスマスイブの夜に子供達にプレゼン

トを配るんだってさ」

ありんすちゃんは瞳をキラキラさせました。

「じゃあ、サンチャクロスをやつつけてプレゼント奪うんでありんちゅね?」

ありんすちゃんは手をグルグル回してやる気満々です。

「ち、ちがうよ……ありんすちゃん」

マールが慌ててありんすちゃんを止めます。不思議そうなありんすちゃんにアウラが言葉を続けました。

「うーん……それも面白そうだけど、今回はあたし達がサンタクロースになろうかってね」

アウラはそう言うと赤いサンタクロースの衣装を取り出しました。ありんすちゃんは大喜びです。

ありんすちゃんとマールは可愛らしいミニスカサンタさん、アウラはトナカイです。みんなとても似合っていますよ。

アウラは既にプレゼントも用意していました。アインズ様に相談したら大喜びでいろいろ用意してくれたそうです。

絵本ではトナカイのそりに乗って煙突から家の中に入るみたいでしたが、ありんすちゃんたちはゲートの魔法で室内に入って、アウラのスキルで眠らせてしまいますから

完璧です。みんなきつと、朝に覚めてプレゼントを見つけて大喜びする事でしよう。

小さなサンタクロース達は始めにカルネ村に行きました。ゲートでカルネ村に姿を現したありんすちゃん達は、気配を消したアウラのスキルによって村人達をすべて眠らせてしまいます。

それから担いできた袋からプレゼントを取り出しました。エンリには安産のお守り——中には二十丸に線が書かれた紙が入っていただけでした——、ンフィーにはウンケルという名前のポジション、ネムには木彫りの熊さんです。

「……あれ？ ハダカだねー」

「……は、裸で、な、何をしているのかな？ ……ぼ、僕わからな……」

「子供を作ってるんでありんちゅね」

エヘン、とありんすちゃんは胸を張ります。

「ありやー……このゴ布林達は覗き見しているみたいだねー」

「ぴーぴんでありんちゅよ」

エンリ、ンフィー、そして別の家で寝ていたネムにプレゼントを配り終わると他の村人とゴブリンの為に大きな七面鳥とケーキを集会場に置いていきました。

これでカルネ村での任務は完了です。

次は帝国の皇帝です。ありんすちゃんはあらかじめ第五階層の氷づけの死体の中か

から見つけてきたカツラと、アインズ様から渡された頭皮マツサージブラシを持って行きます。小さなサンタクロース達はゲートで直接帝国の王城内に転移していきました。

ここでもアウラがスキルを使ってみんなを眠らせます。

「皇帝だねー」

「落書きしたいでありんちゆね」

「だ、ダメだよ……ぼ、僕はやめた方が……」

「——眼がみっちりになったでありんちゆね」

目が覚めたらジルクニフ皇帝は大喜びする事でしょう。ありんすちゃん、良い事をしましたね。

メリークリスマス！

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました



## 055ありんすちゃんいなくなる

さてさて、今日のありんすちゃんの様子を見てみましょう。この時間だといつものように第一階層から第三階層の見回りをしている事でしょう。

おや？ ありんすちゃんが飛び出していきます。大声でワンワン泣きながら外に行ってしまいました。いったい何があったのでしょうか？

第一階層には取り残されたシモベ達が呆然としています。もしかしたらプレイアデスの誰かに意地悪でもされたのでしょうか？

そういえば原作でシャルティアはルプスレギナから『残念美少女の男胸さん』だの『ペタン血鬼』だのと陰口を言われていましたが……『プレイアデスな日』ではユリとシズが通りすがりに『階層守護者のボディに一発きつい物をお見舞い』していたりとシャルティアの扱いが可哀相なんですよね……

……なにがあつたのかわかりませんが、ありんすちゃんはいなくなってしまうました。

ありんすちゃんがいなくなってしまうましたので『ふしぎのくにのありんすちゃん』はどうやらこれでお終いになりそうです。今までご愛顧下さいましてありがとうございます

いました。ありんすちゃんに代わってお礼申し上げます。

いぎ終わるとなるといろいろと心残りが出てくるもので、もつとありんすちゃんを活躍する話を書けば良かったとか、ありんすちゃんの魅力をもつと出せたら良かったなどの反省が出てくるものですね。

「あれ？　ありんすちゃん、いないねー？」

どうやらアウラがありんすちゃんの姿が無い事に気がついたみたいです。

「まあ、夕方になつたら戻ってくるかなー、たぶん」

「……も、戻ってこなかったらどうしよう？」

平然とした様子のアウラに対してマーレは不安なようです。

「——おやおや？　ありんすちゃん家出つすか？　しょうがないおチビさんつすね」

「ほつとけばあ？」

今度はルプスレギナとエントマもやって来ました。なんだか段々大事になってきてしまいましたね。これではアインズ様の耳に入るのも時間の問題ですね。

※ ※ ※

「——なんだって！」

執務室でありんすちゃん失踪の話聞いたアインズは思わず叫びました。瞬間的にかつてシャルティアが洗脳された一件が思いおこされましたが、直ぐに思い直すのでした。

(……まあ、ナザリック内で洗脳されるなど起こり得ないだろう。元はシャルティアとはいえありんすちゃんは所詮、幼児に過ぎないから何か気に食わない事があったのかもいけない。……こんな事ならば普段からもう少し気を配っておけば良かったかな……)  
「アインズ様、すでに姉の二グレドに行方を探させておきました」

「……うむ」

二グレドの魔法を使えばありんすちゃんの居場所はすぐに判明する事でしよう。

「ありんすちゃんは現在トブの大森林を移動中で、監視の為にシモベを何体かつけておられます。……いかがなさいますか？」

(このまますぐに連れ戻すのは容易いだろう。しかし少しそつとしてあげた方が良くかもしれないな)

「わかった。しばらくそつと見守っておくように。……連れ戻す時は私自ら行くとしよう」

アルベドは了解すると執務室を出ていきました。

※ ※ ※

「絶対に許さないでありんちゅ」

ありんすちゃんはプンスカしながら走っていました。絶対に帰るもんか、謝られても許さない、固く結んだ口元にありんすちゃんの強い意志が現れています。

この様子だと当面ありんすちゃんは戻ってきそうにありませんね。

ところで……ありんすちゃんが戻らないので『ふしぎのくにのありんすちゃん』はこれで本当にお終いかもありません。もしくはアインズが主役で『ふしぎのくにのアイズ』が始まるかもしれません。

ありんすちゃんが無事にナザリツクに戻ってきてくれる事を願うとしましょう。

たくさん泣いて、スッキリしたら何食わない顔できつと戻ってくるでしょう。何といてもありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子に過ぎないのですから。

## 056番外編 ふしぎのくにのインズちゃん

唐突ではありますが、ある朝インズが目覚めると5歳児位の女の子になっていました。

そもそもインズはアンデッドであり、睡眠を必要としません。ですからいつものようにインズ番のメイドに注視されながら、ベッドに横たわり『部下に信頼される上司とは』等のタイトルのハウツー本を読みふけていた筈なのですが……どうやらいつの間にか眠ってしまい、目覚めたらそうなっていたのでした。

「おはようございます。インズ様」

インズ番の一般メイドのインクリメントが声をかけてきました。

「……うむ」

インズはそつと枕元に手を入れてみました。大丈夫、『部下に信頼される上司とは』はまさしくそこにありました。どうやら眠りかけた時にとっさにしまったようでした。

インズはさり気なくボックスにハウツー本をしまい、小難しい本『古代ヨーロッパにおける地政学的分析と検証』を枕元にしまいました。次にベッドから降りようとしたが、背がかなり小さくなっていて足が届きません。インクリメントは慣れた様子で

アイنزの足元に踏み台を置きます。

「……コホン……うむ、ご苦労」

アイنزはチラチラとメイドの表情を伺いましたが、特に変化は見られませんでした。どうやらアイنزが小さくなっている事を変だとは思っていないようでした。

「……衣装は任せる」

途端にインクリメントの瞳が妖しく光り始めます。アイنزは心の中で（ああ、お前もか）と小さな溜め息をつきました。

「アイنز様。本日は紫をテーマにしてみても如何でしょうか？ ……何でも昔から高貴な色とされてきているそうなのでアイنز様の御身を飾るのに相応しいかと……」

鏡を見たアイنزは深く溜め息をついたのでした。アイنزの衣装はいわゆるゴシックロリータでまとめられていて、まるでビスクドールのようなようでした。それでいて顔はガイコツなのですから違和感があり過ぎました。

（……似合うのか？ これ）

アイنزの心の声とは裏腹に居並ぶ一般メイド達からは賞賛の声ばかりが聞こえてきました。

やれ「実にお美しい……白玉の肌に紫の映える事」「まさに王者としての威厳そのもの」お尻がむずかゆくなる思いをしながらアイنزは「うむ……ご苦労」とねぎらう事

で精一杯でした。

少しずつ落ち着いてきたアインズはふと不思議な感覚があるのに気がつきました。それは自分自身が『女の子』になってしまったという感覚があつて、少女趣味な服装をする事に抵抗感が全くないことでした。

もともとガイコツである自身の身体には性別を示す性器などないので性別の違いなど大してなさそうなものですが明らかに『女の子』であると感ずるのです。法医学的に見れば骨盤の形状から男女の区別がつくのでしようが……アインズはふと5歳児位の子になったシャルティアの事を思い出すのでした。

アインズの記憶ではたしかシャルティア——ありんすちゃん——がナザリックを飛び出した後から記憶がありません。そしていきなりアインズは女の子として目覚めたのでした。

「……………うむむ……………これはいったい?」

アインズは控えている一般メイドに尋ねました。

「……………インクリメントよ。私はいつからこの身体なのか?」

インクリメントは最初のうちは意味がわからないという顔をしていましたが、ようやくアインズの意図を理解すると答えました。

今ひとつ要領を得ないインクリメントの話をまとめると、どうやら『この世界』のア

インズはシャルティアの洗脳を解く為に『星に願いを』を発動させるが失敗してしまい、あろうことか少女化してしまつたらしいのでした。

「……………なん……………だ……………と……………それではシャルティアは？ ……シャルティアの洗脳はどうなつた？」

「おそれながら……………シャルティア様ははまだあのまま……………」

※ ※ ※

「……………なんだこれは？ ……なんなんだ？」

表情はわからないがインズ様はかなりお怒りのようでした。私は心底震えました。

「……………つまり、ありんすちゃんのかわりに私が少女になる、と？ ……くだらん！ だらからお前はいつまでたつても評価が黄色止まりなのだ」

「も、申し訳ありません」

私はインズ様の足元に土下座しました。いつそのことインズ様の靴でも舐めてしまおうかと思いましたが止めておきました。

「そもそも……………だ。お前は単なる二次作者に過ぎん。しかも読者も少ない作品だ。……………なんというタイトルだつたかな？」



「『ふしぎのくにのありんすちゃん』にございます」

「その『ふしぎのくにのありんすちゃん』だがな……私の出番が少な過ぎではないか？  
読者もそう感じていると思うぞ？」

「わたくしの出番も少ないように思います」

横からアルベドも口をはさみました。

「おそれながら魔導王陛下、主役はありんすちゃんでございます……」

「なんとという事を！ ……おのれアイنز様の御前で……」

「よい。アルベド。……そもそもありんすちゃんをナザリックから飛び出していかせたのは作者であるお前自身ではないか。……それならばその責任は私が少女化する事ではなくお前自身がとらなくてはならないのではないのか？」

「……そうでありんちゅ」

私は眼窩の奥で暗く光る赤い光りに射すくめられて言葉を返せませんでした。思い返せばただ『プレイアデスの日』を読みたいが故にオーバードの二次小説を書き始めただけだったのにこんな事になるとは……

「餓食狐蟲王の所に連れて行け」

アイنزは冷たく言い放つと玉座から立ち上がりました。私は目の前が真つ暗になり、力なく跪くのです。まさに絶体絶命——

「まちゆでありんちゆ」

その時まさに天使の声が聞こえてきたのでした。

いつの間にかありんすちゃんがアインズの側に立っていました。ありんすちゃんは思慮深い瞳で私をじっと見つめていました。

「アインズちゃま、この者はさくちやでありんちゆから助けてほちいでありんちゆ」

今度はアインズの瞳をじっと見つめました。純真無垢な瞳がゆっくりアインズの怒りを溶かしていきます。

「……うむ、善太夫の処分はありんすちゃんに委ねるとしよう……それにしても何時戻ったのかね？」

「おやつが食べたくなつて帰ってきたでありんちゆよ」

しっかりと知っているようですがやはりありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なんですよね。アインズは思わず破顔しました。

「さて……がちよくこちゆおうのお家になりたくなかったら、ありんちゆちゃんの言う事きくでありんちゆね」

私は力強く頷きました。

「……まずは……もつと更新するでありんちゆね。それからもつと面白くするでありんちゆね。ありんちゆちゃんがもつともつと活躍するでありんちゆね……」

ありんすちゃん  
の要求を聞きながら私は思わず叫んでいました。

「すみません。餓食狐蟲王の所へ連れて行って下さい」

へふしぎのくにのアイズちゃん おわり

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 057 ありんすちやんのあかずきん

第六階層のコロッセウムには戦闘メイドのルプスレギナ、ユリ、シズ、階層守護者のアウラが集まっています。みんなありんすちやんからの呼び出しを受けてきたのですが、何をするのか誰も知りませんでした。

誰もが顔を見合わせながら戸惑っていると、ありんすちやんがやって来ました。何か思いついたように得意気な表情を浮かべたありんすちやんは唐突に口を開きました。

「あかずきんちゃんでありんちゅ」

見るとありんすちやんは真紅のフード付きのコートを着ていました。胸元に揺れるボンボンがとても可愛らしく似合っています。なるほど、ありんすちやんはあかずきんちゃんになりきっている訳ですね。

「フンス」と小鼻を膨らませて得意そうに胸を張るありんすちやんでしたが、観衆達はただ戸惑うだけでした。

ありんすちやんはまたもや「あかずきんちゃんでありんちゅ」と胸を張りますが誰も喝采してくれません。

仕方ありませんよね。そもそもナザリックの舞台では『あかずきんちゃん』はおろか

『グリム童話』自体もほとんど知られていないのですから。

ありんすちやんは顔を真つ赤にして手にしていた一冊の絵本を投げ出します。その絵本は童話『あかずきんちゃん』でした。絵本の表紙の赤い頭巾の女の子を見てようやくなんとなくありんすちやんの意図に気がついたアウラがありんすちやんに尋ねました。

「ふーん。なんか前にマールレが読んでいたかも。……で、あたし達が集められたのと関係あるのかな？」

ありんすちやんは勢い良く叫びました。

「あかずきんちゃんの劇をするでありんちゅー！」

「えー？！」

かくしてナザリック演劇部のあかずきんちゃん上演が決定されたのでした。

まずは配役を決めます。主役のあかずきんちゃんはもちろんありんすちやんです。

ありんすちやんは次々に役をふっていききました。ルプスレギナはオオカミ、お婆さんはユリ、獵師はシズです。

最後にアウラが残ってしまいました。ありんすちやんは一生懸命考えてようやく一つの役を思いつきました。

「アウアウはイジワルままははでありんちゅね」

「えー？ なにそれ？ あたしの役おかしくない？ ……イジワル継母って出てくるのは他の話じゃなかったっけ？」

「……良いんでありんちゅー！」

アウラはすぐさま胸元の金のドングリでマールを呼びます。

「……あれ？ お姉ちゃん。どうかしたの？」

「マール、イジワル継母ってあかきんちゃんの話に出てこないよねー？」

状況が今ひとつわからないマールの声は寝起きの様にボンヤリしていました。

「うーん……イジワル継母が出てくるのはシンデレラ、じゃないかな？」

短くマールに礼を告げてドングリの発動を切ると、アウラは勝ち誇った表情でありんすちゃんに詰め寄りました。

「ほーら？ マールに聞いたけど『あかきんちゃん』には継母って出てこないよ？」

「……でてくるでんちゅ……でてくるでんちゅよ……うわーん！」

アウラに問い詰められてありんすちゃんは泣きながら飛び出して行ってしまいました。

どうやらありんすちゃんがナザリックを飛び出していったのはこういう事情があったのですね。

まあ、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なんですから、それも仕方ありません

んよね。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 058 ありんすちやんのあかずきん ふたたび

ありんすちやんの隣にマーレ、前にはアウラ、ユリ、シズ、ルプスレギナが並んでいます。先日泣きながらナザリックを飛び出していったありんすちやんは満面の笑みを浮かべていました。気まずそうな面もちのアウラとは対象的です。

「これからあかずきんちゃんの映画をさちゆえいするでありんちゆよ」

「えー。あの、ありんすちやんはこれからあかずきんちゃんの映画を撮影したいみたいです」

胸を張ったありんすちやんの言葉をマーレが通訳します。ありんすちやんは今日も真紅のフード付きのコートを着ていますから主役のあかずきんちゃんはありんすちやんが演じるのでしょうか。

「まず、イジワルままははがアウアウでありんちゆ」

「えー？ あたしがイジワル継母って……そもそもあかずきんって話には継母は出てこない……」

いけません。ありんすちやんの顔がみるみる真っ赤になってきました。唇を尖らせていかにも不満げです。このままではまたもや前回と同様の事態が起きてしまいそう



です。

「——しー！ お、お姉ちゃん、ダメだつて。アインズ様がありんすちやんのわがままに付き合つてやれと……」

ありんすちやん脱走事件でいささかショックを受けたアインズは日頃からありんすちやんと仲がよいアウラとマールに諭していたのでした。とはいえ、アインズのショックは餓食狐蟲王と同衾させられた私に比べたら……ゲフンゲフン……いや、なんでもありません。

アウラとマールに代わる代わるおだてられたありんすちやんは忽ち機嫌を戻しました。

まあ、所詮はまだ5歳児位の女の子に過ぎないのですから仕方ありませんよね。

結局、前回と同様にルプスレギナがオオカミ、ユリがお婆さん、シズが獵師となり、オオカミのルプスレギナは森であかずきんちゃんを待ち受ける事になりました。

「で、では、シーシーのあ、あかずきんちゃんがイジワル継母にイジメられるシーンから……い、いきます」

監督兼カメラマンのマールがカメラを回します。イジワル継母役のアウラが口汚くあかずきん役のありんすちやんをイジめます。

「あんたつてホントグズだよね？ そんな事じゃしようがないんじゃない？ 少しは成

長しないと……」

アウラはなかなかの演技達者ですね。イジワル継母になりきってありんすちゃんをイジめる演技を続けます。なんだかありんすちゃんが可哀想に思えてきました。

……おや？ ありんすちゃんの瞳が潤んできています。ありんすちゃんは今にも泣き出しそうです。ありんすちゃんもなかなかの演技力ですね。

——違いました。ありんすちゃんは演技ではなくて本当に泣き出してしまいました。ありんすちゃん、これはお芝居なんですって……ダメです。ありんすちゃんはまたもやワンワン泣きながら飛び出して行ってしまいました。

仕方ありませんよね。なにしろありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なんですから。

結局、ありんすちゃんはその日は帰って来なかったらしいです。まあ、私はまたまた餓食狐蟲王の所で過ごした為、直接は知りませんが。

※ ※ ※

「んふふふ……完全不可視化で驚かせてやるつすよ。伊達にカルネ村で村人を驚かしまくってない所をバッチリ見せるつす。……あー早くありんすちゃん来ないつすかね」

## 059ありんすちやんのあかずきん みたび

ありんすちやんの隣にマーレ、前にはアウラ、ユリ、シズが並んでいます。先日泣きながらナザリツクを飛び出していったありんすちやんは満面の笑みを浮かべていました。まるで前回の事がなかったかのようですね。

「これから改めてあかずきんちゃん映画をさちゆえいするでありんちゆよ」

一列に並んだメンバーを眺めながらありんすちやんは小首を傾げました。

「ルプーがいなくてんちゆね……変わりにベスチヨ……ワンワンにするでありんちゆ」

あれ？ ルプスレギナはどこかで……うーん……何か忘れているような……いよいよ改めて撮影開始です。

前回の反省を生かして、今回はイジワル継母は無しになりました。お母さん？ のアウラに挨拶してあかずきんのありんすちやんが出かけます。

この先の森でオオカミと出会う筈ですが……大変です！ ありんすちやんは綺麗な蝶々を追いかけて道をそれていっちゃいました。

すかさずアウラが魔獣を呼んで監督兼助手兼カメラマンのマーレと一緒に追いかけます。

ありんすちゃんはクルクルとまるで踊るような足取りで蝶々を追いかけます。きつと頭の中は蝶々の事で一杯でしょうね。

仕方ありませんよね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子に過ぎないのですから。

蝶々を追いかけている内にありんすちゃんは小さな小屋の前にやってきました。どうやらずいぶん近道をしてしまい、ありんすちゃんはオオカミに出会う事なく無事にお婆さんの家に着いてしまいました。

「……か、カット……」

「カートツ！ ダメじゃん。ありんすちゃん、オオカミに会わなきゃあかずきんじやないじゃん？」

マールレを押しつけてアウラがダメ出します。今更森に戻るのには面倒だ、という事で小屋の近くであかずきんとオオカミの出会いのシーンを撮ることにして、ベストニーヤを呼び寄せる事にしました。

さて、撮影再開です。オオカミがあかずきんに尋ねます。

「あかずきんちゃん、どこに行くのかな？ ……わん」

「お婆あちゃんのお見舞いいくでありんちゅ」

「森の向こうに綺麗なお花が一杯咲いていたから、摘んでいけばお婆さんが喜ぶと思い

ますよ」

「——『わん』を忘れてるよ?」

「……………わん」

助監督のアウラがとつきにベストーニヤに指摘したので事なきを得たみたいですね。

話はこの後ありんすちやんがお花を摘んでいる間にオオカミがお婆さんを飲み込んでしまうシーンがあるのですが、ありんすちやんが飽きてきた為端折る事になりました。

ベッドでお婆さんのユリになりましたオオカミのベストーニヤが、やって来たあかずきんのありんすちやんを招き入れます。

「お婆あちゃん、お口が大きいでありんちゆね」

「お前を食べる為だよ! ……わん」

ベストーニヤの顔の継ぎ目が裂けて開きます。中からはうねうねと触手が伸びてきてありんすちやんを捕まえようとします。

「……………ジャーン。獵師登場」

突然扉を開けて入ってきたシズが両手の銃を構え、撃ち始めました。ベストーニヤはありんすちやんを食べる事が出来ずに倒れました。

「……………か、カット……………」

「カート！　んー良いねえ！　……良い演技だったんじゃないかなあ？　お疲れ様」

「またしても自称助監督のアウラが仕切ります。まあ、何にせよ無事に撮影は終わりました。ありんすちゃん良かったですね。」

「唯一残念だったのはカメラの中にフィルムを入れ忘れていた事でしたが……とりあえずめでたしめでたし。」

※ ※ ※

「うーん……なかなかありんすちゃん来ないっすね……どんだけ待たせるんすかねっす……まさかこれが放置プレイってヤツっすか？」

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 060ありんすちゃんのおおそうじ

年末です。ありんすちゃんは朝から張り切っています。顔にはマスク、頭にはバンダナでほっかむりしています。片手にはハタキ、もう片方の手にはチリトリを持っていきます。今日はこれから家の大そうじをするんですって。

ありんすちゃんの住居はナザリツク地下大墳墓の第二階層にある死蟻玄室という部屋なのですが……いくつもある部屋がいささか散らかっていました。あちこちに脱ぎ散らかした服や食べかけのお菓子やオモチャが散らばっているのです。

今日はこの散らかった部屋を綺麗に片づけてしまおう、と気合いを入れているのです。た。

「やほー。ありんすちゃん、なんかスゴいね？ ……もしかして大そうじなの？」

唐突にアウラがやってきました。

「年末でありんちゅから大そうじするでありんちゅ」

ありんすちゃんは胸を張って答えます。

「……ふーん。あつそ。……そういえばあたし、ルプスレギナを探しに来ただけど、ありんすちゃんは見なかった？」

ありんすちゃんは首を傾げます。

「……ルプーでありんちゆか？ ……見ないでありんちゆね」

うーん……何だか大切な事を忘れているような気もしますが……気のせいでしょう。多分。

「……ま、いつか。どうせどこかで遊んでいるんでしょ。……ありんすちゃんは大そうじ頑張って」

「……アウアウは大そうじしないでありんちゆか？」

「うーん……あたしんところはいつも綺麗にしているからね。大そうじなんて必要ないかな」

アウラが立ち去った後、ありんすちゃんの鼻息が荒くなつたみたいです。どうやらアウラが大そうじをしない事で変な優越感が生まれてきたみたいです。

「張り切って大そうじでありんちゆ」

ありんすちゃんは積み上げられた衣類の山を片付け始めました。片方だけの可愛らしいカラフルなハイソックスを引つ張り出します。ありんすちゃんのお気に入りだったので、また、片方だけ見つかった時の為に取っておいたのです。

「うーん……これは捨てられないでありんちゆ」

ありんすちゃん、捨てないと結局片付かないと思いますよ？



結局ありんすちゃんは衣類の山を右から左に移動させただけでした。

ありんすちゃんは次に絵本やマンガが散らばった所を片付け始めました。

「おもちゃろいでありんちゆね」

おやおや？ ありんすちゃんたら、ベッドに寝そべってマンガを読み出してしまいました。これでは大そうじは進みませんね。

どうやらありんすちゃんが眺めているマンガは丸山こがね原作 深山フジン作の『オーバードーロ』みたいですね。なかでも吸血鬼ティルシヤアがブラインをやつつけるシーンがお気に入りみたいで、何度も何度もページを戻して読んでいます。

「ブライン、泣いているでありんちゆね」

こんな事でありんすちゃんは大そうじ出来るのでしょうか？ 少し心配になってきました。

で、結局ありんすちゃんの大そうじは終わりませんでした。あれからマンガを読みふけているうちにいつの間にか眠ってしまいましたので。

仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子ですからね。

## 061ありんすちやんおとしだまをあげる

バハルス帝国皇帝、ジルクニフ・ルーン・ファーロード・エルⅡニクスは苦々しい思いで城下を見下ろしました。帝国では折から新年を祝う民に溢れていてまさにお祝い一色になっていました。

「陛下、新年早々に苦虫を噛んだような顔ですが……そんなだと幸運を逃がしますぜ？」

帝国四騎士の一人、*“雷光”*バジウツド・ペシユメルがおどけるように声をかけました。ジルクニフはそんなバジウツドに気がつかない振り続けるのでした。

新年です。昨年に魔導王国の領国になると申し出てからまだ具体的な動きはありません。しかしながら臣下として年始の魔導王国詣ではなくてはならないでしょう。その際いきつと無理難題を押し付けてくるに決まっています。そう考えていました。

街中の民はそんな皇帝の苦しみを全く知らずに新年を祝っているのです。それがジルクニフにとって腹立たしくもあったのでした。

「こんな話をしていると、また来ませんかね？ あのドラゴンが……」

バジウツドののんびりとした発言にジルクニフの胃がキリキリと痛みすのでした。

（来る……きつと来る……忘れていたのではない。思い出したくなかったのだ。魔導王国の子供達が新年早々やつてくるに違いない）

「……あ？　ありや……陛下、まずい。ドラゴンが来ますぜ」

ジルクニフは固く目を閉じました。こうなつてしまえば次の展開は見えていきます。あの、たどたどしい話し方の少女が『ありんすちゃん当てゲーム』を持ちかけます。正解しても不正解でも連れの双子のダークエルフの一人が地震を起こして兵士を飲み込ませます。これの繰り返しです。

やがて広場にドラゴンが降り立ちました。いつぞやの白い太めで眼鏡をしたドラゴンです。背中にはやはり三人の小さな影が見えました。間違いありません。きつとあの恐るべき魔導王国の子供達です。

「皇帝、いるでありんちゆか？　出て来るでありんちゆ」

女の子が口を開きます。きつと次のセリフは『誰がありんちゆちゃんか当ててるでありんちゆよ』だろうとジルクニフは思いました。

「……初詣でありんちゆからカツラを取った頭みちえるでありんちゆ」

ジルクニフの顔がみるみるうちに朱色に染まりました。なんとという屈辱でしょう。大勢の民の目の前で恥ずかしい秘密を大声で叫ぶなんて……それもまがりなりにも皇

帝である自分に対して、です。

しかしながら、ジルクニフに拒否する事は出来ませんでした。ゆっくりとカツラを外すとチヨロチヨロとした毛だらけとなった寂しい頭を窓から突き出しました。

だって仕方ありませんよね？ 彼の髪がドンドン抜けてしまったのも、全てはあの忌々しい魔導王国のアインズのせいなのですから。

充分にジルクニフの『初日の出』を堪能した子供達が叫びました。

「それじゃあ、皇帝にあたしたちからお年玉だよ？ ……マーレー！」

ドラゴンから黒い杖を持ったダークエルフが降りました。きつと魔法で何か禍々しいモノを降らすつもりです。ジルクニフは空を見上げました。もしかしたら隕石でも降って来るかもしれない……と思っていた瞬間――

凄まじい地響きがしてまたもや地震が起きました。

「……どこがお年玉なんだよ？ ……やーめーてー！ー！」

ジルクニフの悲痛な叫びは地響きに消されて届く事はありませんでした。

## 062番外編 名探偵ありんすちちゃんと消えたルプー

今日もありんすちちゃんは二人のヴァンパイア・プライドに連れられて階層の見回りをしていました。

ふと、外の様子が気になって地上に出てみるとログハウスに戦闘メイド達が集まっています。

「どうちたでありんちゆか？」

ありんすちちゃんの問いかけにユリが答えました。

「あ、ありんすちちゃん。……実はログハウス当番なのにルプスレギナが来ないんですよ。どこかで見ませんでした？」

ありんすちちゃんは口元に人差し指を当てて小首を傾げます。ちなみに45。よりちよつと狭い43。位に傾けるのが一番ありんすちちゃんの魅力をアピールする角度なんですつて。

「わかりました。名探偵ありんちゆちゃんにまかせるでありんちゆ」

久しぶりに名探偵ありんすちちゃんの出番がやって来ました。ありんすちちゃん良かったですね。

ありんすちゃん目は目をつぶり考えます。きつとありんすちゃんの灰色の脳細胞が今まさに事件を解決しようとしているのに違いありません。

ぐぐぐ……

突然ありんすちゃんのお腹が鳴りました。

「お腹へったからお昼にするでありんちゅ」

ありんすちゃんはさつさと食堂に向かうのでした。仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

食事を終えて満足そうなありんすちゃんにユリが尋ねました。

「……で、ルプスレギナの居場所は……？」

ユリ以外の戦闘メイド達は業務に戻ったらしく、姿がありませんでした。ありんすちゃんはユリを連れて屍鑑玄室にきました。そこには既にヴァンパイア・プライド達が待ち構えていてありんすちゃんをパジャマに着替えさせました。

「食べた後はお昼寝するでありんちゅ」

スヤスヤと寝息をたてはじめたありんすちゃんを眺めながらユリはただただため息をつくのでした。

(こんな時に、せめて末妹の手が借りれたら……)

ユリは唇を噛みました。末妹ならばたちどころにルプスレギナの居場所を見つけら

れる事でしょう。しかし、末妹の力を借りる為にはルプスレギナがない事をアインズ様に報告しなくてはなりません。今の段階ではそこまで大事にしたくない、それがプレアデスの総意でした。

焦るユリの気持ちが伝わったのか、パチリとありんすちやんが目を開きました。そしてムクリと起き上がりました。

「……おちっ」

トコトコと部屋から出ていくありんすちやんの姿を見送りながら、ユリはまたもやため息をつくのでした。

※ ※ ※

ありんすちやんに連れられてユリは第六階層にやって来ました。ありんすちやんの推理では『犯人はアウラ』だそうです。

「……えー！ 知らないよ？ あたしは関係無いんだけど」

アウラは自らの疑惑を否定しました。これで捜査は振り出しみたいですね。

「……うーん。ルプーはあかずきんちゃんの時はいたでありんちゆから……」

あれ？ ありんすちやん、赤ずきんの撮影でルプスレギナがいなくてペストーリヤに

代役を頼んだのではありませんでしたっけ？

「あ、そういえば……うーん。でも違うかな？」

アウラが何か思い出したみたいです。

「先週位から森のあたりになにやら出るらしい、というような事をシモベ達の間であつたような、なかつたような……」

名探偵の瞳が光りました。

「それでありんちゅ。きつとルプーのお化けでありんちゅ」

早速、ありんすちゃん、アウラ、ユリの三人は森に向かうのでした。

※ ※ ※

森に着くと声が聞こえてきました。

「あかずきんちゃん……遅いつすよ……どんだけ……待たせるんすか……」

「ルプスレギナ？ 貴女なの？」

ユリが辺りを見回しますが、ルプスレギナの姿はありません。

「……ルプーはいないでありんちゅね。残念でありんちゅ」

ありんすちゃんが重々しく断言しました。アウラも同意します。



「残念だったねー。このままずっと見つからないかも、だねー」

「ちよ、ちよと待つっすよ……」

ありんすちちゃんが不意に振り向きました。ルプスレギナは驚いて不可視を解いて姿を現しました。

「ルプー見つけたでありんちゅ」

またまた名探偵ありんすちちゃん、大活躍ですね。ルプスレギナも良かったですね。めでたしめでたし。

## 063 ありんすちやんスカウトされる

ありんすちやんはエ・ランテルの街を歩いていました。と、角を急に曲がったところで女の人とぶつかりそうになりました。

「あつぶないなー」

黒いマントの女は紫の瞳でありんすちやんをまじまじと見つめると少し驚いたみたいでした。

「んー。なんか強い魔力を感じるなー。もしかしてただものじやないのかな?」

「ありんちゆちやんでありんちゆ。タダじやないでありんちゆ」

「ふーん。まいつか。ありんちゆちやん、ズーラーノーンに入んない?」

「ズラロン? でありんちゆか? おもちろちようでありんちゆね……いいでありんちゆ」

なんと……ありんすちやんは初対面の怪しい女に誘われて、ズーラーノーンに入っちゃいました。大丈夫でしょうか?

「ところでズラロンはおいちいでありんちゆか?」

うーん……どうやらありんすちやんはズーラーノーンをお菓子かなにかと勘違いし

ているみたいですね。本当に大丈夫でしょうか？

「……うーん……まあ、おいしいって言うより色々良い思いは出来るかなー？ そのうちに盟主にも会えるよー。結構凄いやからねーその人ー」

女はありんすちゃんの手を引つ張って走り出しました。ありんすちゃんはどこに連れていかれてしまうのでしょうか。ナザリックに学校があつたら『知らない人についていつてはいけません』と教わる事が出来たでしょうか……

と、突然女が立ち止まりました。顔面が蒼白で、手が震えています。ありんすちゃんは女を見上げました。

「どうちたでありんちゆか？」

「しー……静かに。あいつ……モモンだ」

見ると冒険者仲間と話をしているモモン——アインズの代わりにパンドラズ・アクターでしたが——がいました。どうやら女はモモンに酷く怯えているみたいでした。

「……あいつに私、一度殺されたから……あいつの正体はアンデッドなんだ」

ありんすちゃんは目を丸くしました。なんという事でしょうか？ パンドラズ・アクターは本当はアンデッドとは知りませんでした。するとドツペンゲルガーはアンデッドなのかもしれませんね。

しばらくするとモモンと冒険者は別れ、モモンは馬車に乗って去りました。

女は深くため息をつくともたありんすちやんの手を引いて走り出しました。

そうこうしてありんすちやんは女——名前はクレマンティーヌと名乗りました——と一緒にズーラーノーンの秘密施設の一つに着きました。

このままありんすちやんはズーラーノーンの幹部になってしまうのでしょうか？  
それも仕方ありませんよね。だってありんすちやんはまだ5歳児位の女の子なんです  
から。

※ありんすちやんが挿絵を描いてくれました

## 064ありんすちゃんモモンをみはる

前回のあらすじ

お腹が減っていたクレマンティーヌ改に吉備団子をあげたありんすちゃんはお礼に竜宮城に連れていってもらう。そこで秘密組織ズーラーノーンの存在を知ったありんすちゃんはアインズの特命を受けて潜入する。そんなありんすちゃんにクレマンティーヌ改はアダマンタイト級冒険者モモンの正体がアンデッドだという驚愕の事実を打ち明けるのだった。

※ ※ ※

ありんすちゃんのズーラーノーンの一員としての初仕事は『冒険者モモンを監視して弱味を見つけよ』でした。ありんすちゃんは張り切っていますよ。

え？ あらすじが滅茶苦茶ですって？ 申し訳ありません。ありんすちゃんがどうしてもそう書けと言うので仕方ないので……

改めて……今日のありんすちゃんは朝から張り切っていました。鹿撃ち帽を被りマ

ントを羽織つてまさに気分はシャーロック・ホームズですね。ありんすちゃんは何でもよく似合っっちゃいます。

エ・ランテルの街でこつそりモモンが現れるのを待ちます。

やがてモモンが姿を見せました。どうやらナーベと一緒にみたいですね。

「ギリギリギリ……」

モモンとナーベは何やら親密そうに話をしています。ありんすちゃんはこのモモンが実はパンドラズ・アクターだと知っています。もちろん『美姫ナーベ』が戦闘メイドのナーベラル・ガンマだという事も知っています。

「ギリギリギリ……」

パンドラズ・モモンは派手な職種でナーベをエスコートしながら馬車に乗り込みました。

「ギリギリギリ……」

ありんすちゃんはさつきから聞こえてくる音に気がつきました。よく見ると変なお面をつけた女の子がモモン達が乗り込んだ馬車を見つめていました。どうやらその女の子が歯ぎしりをしていたみたいですね。

どこかで見たような気もしますが、気のせいでしょう。ありんすちゃんにそんな変な知り合いはいないのです。多分。

ありんすちゃんは馬車を追いかけてました。すると仮面の女の子も馬車を追いかけているのに気がつきました。モモン達の馬車を仮面の女の子が追い、さらにありんすちゃんが追いかける、という図が出来上がりました。

モモンは冒険者組合でナーベと別れ、別の冒険者と馬車に乗り込みました。ありんすちゃんは馬車を追いかけているのにだんだん飽きてきてしまいました。

仕方ありませんよね。ありんすちゃんは5歳児位の女の子ですから。

見ると仮面の女の子はモモンを観察しながら何やらメモを取っているみたいです。もしかしたらありんすちゃんと同じようにズーラーノーンの指令でモモンを見張っているのかもしれない。

突然ありんすちゃんは閃きました。眷属の小さなコウモリを呼ぶと仮面の女の子を見張らせて、自分はナザリツクに帰っていききました。

※ ※ ※

モモンの馬車を追いかけているからイビルアイはいろいろ考えていました。一目モモンの姿を見届けたいという思いでエ・ランテルに来てしまったが、いざモモンを目の当たりにすると声をかける事が出来ないでいたのです。

「……うむ。や、やあ、モモン殿。息災であるか？ ……これじゃダメだな。……うーん……も、モモン様。私を覚えていますか？ 貴方のイビルアイです。……これは柄じゃないな……うーん」

イビルアイはモモンの後を追いながら声をかけるタイミングを見計らっていたのですが、肝心のセリフが決まりません。あれこれとメモしてみますが実際に言葉にしてみると恥ずかしいものばかりなのでした。

「まさか、この私がこんな乙女チックな悩みに落ちるとはな……」

イビルアイは溜め息をつきました。——仕方無いじゃないか。モモン殿はあんなにも格好が良いのだから——

やがて夕方になり今日の所は諦めて帰ろうか、と踵を返した瞬間、何者かに襲われてイビルアイは気を失ってしまいました。

倒れたイビルアイから誰かがメモを拾い上げました。なんとありんすちゃんです。なる程、自分でモモンを見張るのが面倒くさくなつたから他に見張っている人間を利用したわけですね。……しかし、その仮面の人物は多分ズーラーノーンではないかと……

※ ※ ※



ズーラーノーンの秘密拠点の一つ——ありんすちゃんはメモを幹部に渡しました。

「……………うむ。ご苦労。……………なになに……………モモン様ああモモン様モモン様……………モモン様にすべてを捧げます……………モモン殿が颯爽とマントを翻す様は実に格好がよいな、私はマントになりたい……………モモン殿は右利きだな……………モモン様、モモン殿、モモンさーん……………これは一体？」

メモは小さな字でびっしりとモモンを崇拜するような意味不明な言葉で埋め尽くされています。幹部はあきれてしまい、得意げに胸を張るありんすちゃんに返す言葉がありませんでした。仕方ありませんよね。ありんすちゃんは5歳児位の女の子なんですから。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 065 ありんすちゃんおやつをたべる

ズーラーノーンの一員になってしまったありんすちゃん。今日は何をするのでしようか？

ありんすちゃんは自分の階層の屍鑑玄室にいました。食卓に腰掛けてよだれかけ……ゲフンゲフン……前掛けをしてお行儀良く座っています。そこにヴァンパイア・プライドがシュークリームが載せられたお皿を持ってきました。

ありんすちゃんの顔の半分位ある大きなシュークリームを前にして、とても嬉しそうですね。

ありんすちゃんは両手でシュークリームを持つとかぶりつきました。あらあら、顔がカスタードクリームだらけですよ？

あつという間にシュークリームを平らげたありんすちゃんの前に今度はエクレアが運ばれて来ました。これまた大きなエクレアです。

パクリ、パクリ、パクリ。なんと三口で食べてしまいました。左右からヴァンパイア・プライド達がタオルでありんすちゃんの顔についたクリームを拭きます。

さて、そろそろズーラーノーンの仕事に……行かないみたいですね。ありんすちゃん

はお昼寝をし始めてしまいました。

あつという間にスヤスヤと寝息をたてはじめてしまいました。うーん……こうなると二三時間は起きないでしょう。

さてさて、そろそろありんすちゃんのお昼寝が終わった頃です。まだ、ベッドの中でボンヤリしていますね。仕方ありませんよね。だってありんすちゃんは5歳児位の女の子なのですから。おやおや、またおやつを食べるみたいですね。

うーん……さつきのは十時のお茶の時間で今度が三時のおやつのお時間なんですつて。なんだかおやつばかり食べているような気がします……

ところでズーラーノーンの仕事はしないのですか？ ……なになに……ズーラーノーンにはおやつのお時間が無いからやめた？ ……うーん……どうなんでしょうか？

特にアインズ様から潜入を命じられた訳でも無いし、良いのでしょうか？

まあ、ありんすちゃんらしいと言えばありんすちゃんらしいのですが……

あらあら……おやつのおーナツをくわえたままベッドに……砂糖でベトベトの手をシートで……ちよつとお行儀が悪いですね。

今度は片手にドーナツを持ったまま、うつらうつらし始めてしまいました。中途半端な時間に眠ると後で眠れなくなりますよ？

それによりんすちゃん、寝る前にトイレに行っておいた方が……ダメです。もうスヤ

スヤと寝息をたてています。

と、まあ、こんな訳であります。スーラーノーン所属は三日坊主ならぬ一日で終わってしまったようです。

仕方ありませんよね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 066ありんすちゃんかしこくなる

まだ夜明け前の屍鑑玄室のベッドではありんすちゃんがスヤスヤ眠っています。こうして眠っている姿はまるで天使みたいですね。

ゴロゴロゴロゴロ。ゴロゴロゴロゴロ。大きなベッドなのでありんすちゃんがいくら寝返りをうっても大丈夫です。……多分。

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロ。ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ……ゴチン！

大変です！ ありんすちゃんが真つ逆さまにベッドから落ちてしまいました。

ありんすちゃんは何が起きたのかわからないようにボンヤリしていますね。もしかしたら単に寝ぼけているだけかもしれないませんが……何はともあれ大事なかつたみたいで良かったですね。

※ ※ ※

——ナザリツク第九階層アインズ執務室——

「アインズ様、これが本日の報告書でございます」

アイNZはアルベドから書類の山を受け取って中から一枚の報告書を無作為に取り出して目を通しました。

(……なになに……何やらデータみたいだな。よくわからないがエ・ランテルに於ける物資の在庫状況みたいだな)

「……うむ。問題は無いだろう。アルベドよ、良い働きだ」

「勿体なきお言葉、ありがとうございます」

重々しく頭を下げるアルベドの後ろで扉をノックする音がしました。

「アイNZ様、ありがとうございます様がお目通りしたいとの事です」

アイNZはデスクリメントに指示してアイNZすちゃんを中に招き入れました。アイNZすちゃんはアイNZの前で可愛らしくちょこんとお辞儀をしました。

「至高のお方、アイNZすちゃんにはご機嫌うるわしく、ご尊顔を拝し誠にきようえちゆし」きゆ……」

「うむ……」

アイNZはアイNZすちゃんの口上を片手を上げて制止すると尋ねました。

「さて、私に何か用かな? ……気兼ねなく申してみよ」

「アイNZすちゃんのお手伝いをしたいのでアイNZすちゃん」

「アイNZすちゃん、アイNZ様はこの私と大切な仕事の最中です。遊び相手が欲しいな

ら他を当たりなさい」

「いや……さて、アルベドよ。そうだ、せっかくだからこの国を良くする為のアイディアの検討にありんすちゃんも参加させてみよう。子供ならではの斬新な視点が得られるかもしれない」

「……アインズ様がさようにおっしゃるならば、この私に異存は御座いません」

アルベドの同意を得てアインズはありんすちゃんに話しかけました。

「どうだろうか？　ありんすちゃんよ。是非とも忌憚のない——ああ、素直な、ということだな——意見を聞かせて欲しい」

「わかりましたでありんちゅ」

アインズは用意していた紙を取り出しました。

「まずは……『魔導国にアインズ様を主神としたアインズ教団を設立してアインズ様の慈愛を国民全てに知らしめては如何でしょうか』……ふむ……」

アルベドは潤んだ瞳でアインズを見つめながら答えました。

「私もその提案には賛成です。我々にとつて至高の方以上の存在等考えようがありません。至高の方を蔑ろにして神を信仰するなどという行為はむしろ根絶すべきかと思えます」

「ちよつと待つでありんちゅ。ありんちゅちゃんは反対でありんちゅ」

「……な……」

不意をつかれてアルベドは思わずありんすちやんを睨みつけました。しかしありんすちやんはアルベドの鋭い視線に全く動じる様子がありませんでした。

「……意見を申ししてみよ」

アインズに促されてありんすちやんは言葉を続けました。

「歴史を紐解くと宗教の違いはかじゆかじゆの争いをもたらしてきたでありんちゆ。今ある教会を無くす事は新たな混乱を招くだけでありんちゆ。教会や神はちよのままでありんぢうちやまは更にその頂点を統べる存在として君臨すべきでありんちゆ」

「ふむふむ。なかなか的を得た指摘だな。このアイデアはもつと様々な角度から検討すべきだろう」

アインズは次の提案を取り出しました。

「……こほん。なにに……『アインズ・ウール・ゴウンの紋章をデザインしたTシャツを国民全てに配布して団結力を高めると良いと思います』か……ふむ。これは是非ともけ——」

「——あまりにも下等な発想です。このような下らない意見が至高のお方の手を煩わすなど言語道断」

即座にアルベドが否定しました。と、静かにありんすちやんが口を開きます。



「待つでありんちゅ」

アインズもアルベドもありんすちゃんをじつと見つめました。そういえば先ほどからのありんすちゃんはいつもと別人みたいですよね。

「魔導国の国民に自覚と誇りを持たせる政策は黎明期の現在、真剣に検討すべき案件でありんちゅ。Tシャツは下策でありんちゅが、アインズ・ウール・ゴウンの紋章を使ったオリジナルグッズの販売等は是非とも検討すべきでありんちゅ」

「……ありんすちゃん？ ……どうしちゃったのかしら？」

「アルベド、アインジュちやまの補佐役ならばアインジュちやまの真意に気づけなければならぬでありんちゅ。わざわざアインジュちやまが自ら手書きで書き直すのはそもそも——」

「よ、よい。ありんすちゃんよご苦労であった。もうよい」

ありんすちゃんは恭しくアインズとアルベドに会釈すると部屋から出ていきました。二人だけになるとアインズはアルベドと顔を見合わせました。

「……ありんすちゃん、だよな？」

「……は、はい。……おそらく」

※ ※ ※

さて、賢くなったありんすちゃんですが……これからアインズの片腕として活躍してくれるに違いありません。これまでありんすちゃんの事を少しばかり残念な……ゲフンゲフン……思考する習慣が少なめだと思っていました……

その夜、ありんすちゃんは寝返りを打ち……

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ……ゴチン！

翌朝にはいつものありんすちゃんに戻ってしまいました。

仕方ありませんよね。だってありんすちゃんは5歳児位の女の子なのですから。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 067ありんすちやんのすべしやるカレー

今日のありんすちやんは鼻歌まじりでも上機嫌です。いつもよりソワソワして落ち着きなく、時間ばかり気にしています。

ありんすちやんはお昼が来るのが待ちきれないのです。そうなんです。今日は月に一回の『カレーの日』なんです。

毎日のナザリックでの執務の一つのナザリック改善についての提案で、唯一アインズの発案が実現したのがこの『月に一回のカレーの日』だったのです。

いよいよお昼になりました。ありんすちやんは早足で食堂に向かいます。そして厨房の前で大きな声で注文しました。

「ありんちゅちやんすべしやるカレーでありんちゅ」

説明しましょう。『ありんすちやんすべしやるカレー』とはリンゴと蜂蜜をふんだんに使った甘口の、いわゆるお子様カレーです。ありんすちやんはまだまだお子様ですから仕方ないですよ。ちなみに辛口カレーが好きなのはマーレ、意外にもアウラとコキュートスは甘口派だったりします。

ありんすちやんは甘口カレーライスを早速頬張ります。この最初の一口がたまりま

せん。

次にトッピングの半熟玉子をスプーンで割ります。固ゆで玉子でなく半熟なのはありんすちゃんのだわりです。スプーンの手でトロリ出てくるまったりとした黄身を一緒にすくって口に……まさに至高のひとつときです。

「おや？　ありんすちゃんはまたお子様カレーっすね」

目を閉じてうっとりとしていたありんすちゃんに容赦ないルプスレギナの声がありました。ルプスレギナはカレーライスにハムカツ、茹で玉子、ラッキョウに福神漬けとてんこ盛りしたトレイを持っていました。

「辛くないカレーなんてカレーじゃないっすよ。せめて中辛にしないと大人になれないっすよ」

そういうルプスレギナはいつも中辛のカレーライスです。実はありんすちゃんも一度だけ中辛のカレーにチャレンジしてみた事がありました……大人にはまだまだ遠いという実感を得るだけでした。

「お子ちゃまカレーではないでありんちゅ。ありんちゅちゃんすべしやるカレーでありんちゅ」

ありんすちゃんは一生懸命に主張しました。とは言っても本当はただの『甘口カレー』なんですけどね。

「ふーん。ま、良いっすけど……そういえば今度カルネ村でエンちゃん、ああ、人間のエンちゃんっす——がカレー作るみたいっすね」

「……………もぐもぐ」

「この前、カルネ村にカレーを小さな鍋で持って行ったんすけど、大好評だったんすよ。で、料理長にレシピ貰ってあげたら挑戦したいってなったっすよ」

「そういえばありんすちやんはしばらくカルネ村に行ってませんでした。ネムは元気でしようか？」

「……………もぐもぐ。もぐもぐ」

「うーん……ありんすちやんはルプスレギナの話には全く興味が無いみたいですよ。目の前のカレーを味わう事に集中しているみたいですよ。仕方ありませんよね。だってありんすちやんはまだ5歳時位の女の子なのですから。」

※ ※ ※

——まだバハルス帝国が魔導王国の属国化する前——

バハルス帝国皇帝ジルクニフは苦悶していました。カツツエ平野でアインズ率いる魔導王国の圧倒的な力を見せつけられた現在、帝国の行く末に明るいものが全くないからでした。

「陛下、こうなりやなるようにしかならないですよ」

バジウツドの言葉もジルクニフにはなんの気休めにならなりません。

「一体どうしたら……」

頭を抱えたジルクニフ達の目の前に突然女の子が現れました。

「ま、魔導王国の？」

確か魔導王国を訪れた際にどこかで見かけたような気がします。

「これを食べるでありんちゅ」

女の子はジルクニフに小さな鍋を差し出しました。ジルクニフが蓋を開けると中には茶色いドロツとしたものが入っていました。

(……シチューのようだが……いや、違うな……ま、まさか……いや、そんな筈は……)

ジルクニフがバジウツドを振り返つて見ると彼も同様に引きつった顔をしていました。恐らくジルクニフと同じ事を考えていたのでしょう。

「おいちいカレーでありんちゅよ。早く食べるでありんちゅ」

女の子は茶色いものをスプーンですくうとジルクニフの目の前に突き出しました。思わず顔をそむけたジルクニフの口に無情にもスプーンが近づけられていきます。

「…………へ、陛下…………食つちまうんですかい？」

(……………!!)

ジルクニフは観念しました。恐らく目の前の女の子は強い。バジウツド達が全員でかかっても勝てないでしょう。しかしながらこの帝国の鮮血帝として怖れられた自分が少女にウ●コを食べさせられる屈辱にあうとは……

ジルクニフは目を固く閉じて口に入れられたものを味わした。

途端にジルクニフの脳髓を刺すような閃きを感じました。

「う、うまい！」

ジルクニフの目からはいつしか涙が流れ落ちていました。なんとという事か……魔導王国ではウ●コすらこんなに美味しいのか……次元が違いすぎる……

このジルクニフのちよつとした誤解が後にバハルス帝国が魔導王国の属国化する要因になった事はあまり知られていないそうです。

※ありんすちゃん<sup>が</sup>挿絵を描いてくれました



## 068ありんすちゃんむくちになる

今日もありんすちゃんは二人のヴァンパイア・ブライドに抱えられて自分の階層を見回っています。あれ？　ありんすちゃんはやたらと手をバタバタさせ始めました。ヴァンパイア・ブライド達はありんすちゃんの意図がわからなくて困っているみたいです。すね。

手足をバタバタさせながら、ひたすらイヤイヤをするように頭を振っています。

あんまり激しく手足をばたつかせていたのでありんすちゃんは落ちてしまいました。大丈夫でしょうか？

ありんすちゃんは勢いよく走り出すとどこかに行ってしまいました。後に残されたヴァンパイア・ブライド達は互いに顔を見合わせてため息をつきました。

なんでも今日のありんすちゃんは朝から喋れないみたいなんですって。一体ありんすちゃんに何が起きたのでしょうか？

しばらくすると爽やかな表情のありんすちゃんが戻って来ました。もしかしたらオシッコがしたかったのかもしれないですね。

さて、そろそろお昼です。ありんすちゃんは何を食べるのでしょうか？

食堂にやって来たありんすちゃんは難しい顔をしています。うーん……もしかしたら何も食べられないのでしょうか？

よく見るとありんすちゃんは口をモゴモゴ動かしています。まるで飴玉でも舐めているみたいですね。

結局、ありんすちゃんはお昼に何も飲み食いしませんでした。まあ、アンデッドなので問題はなさそうですが……

〈ありんすちゃん、貴女にカルネ村のドワーフ達に物資を送ってもらいたいだけだよね〉  
アルベドからのメッセージです。

〈モゴモゴモゴ……〉

〈ちよつと、返事なさい？〉

〈……モゴモゴ……〉

〈……わかったわ。貴女には頼まない〉

うーん……ありんすちゃんはどうかやらアルベドを怒らせちゃったかもしれないね。大丈夫でしょうか？

ありんすちゃんが喋れなくなった事はアインズの耳に入りました。

(うーむ……まさかNPC特有の感染症とかじゃないかな？ ……とりあえずシモベ達から少し情報を集めておくか……)

アインズは自らヴァンパイア・ブライド達からありんすちゃんに何が起きたのか尋ねました。その結果、昨夜プレアデスの面々と『セツ・ブーン』を祝っていた事、そしてそれからずっと喋っていないらしい事がわかりました。

次にプレアデスのユリ、シズを呼び出して話を聞いてみました。

彼女達の話では昨夜は『セツ・ブーン』では『エホ・マ・キー』なるご飯と具をノリで巻いた食べ物を食べるという事で、試しに挑戦してみたとの事でした。細長い『エホ・マ・キー』を食べ終わるまで一言も喋ってはいけないという決まりがあるとの事でした。もしかしたらその『エホ・マ・キー』に理由があるのかもしれないと、もしもありません。

「うーむ……他の戦闘メイド達には影響が出ていないが……もしかしたらヴァンパイアか子供にだけ影響があるという事も有り得るかもしれないね。ユリよ、その『エホ・マ・キー』とやらを再現してみてくれぬか？」

「かしこまりました。至急、作りましてお持ち致します」

※ ※ ※

しばらくして執務室のアインズ、アルベドのもとにユリとシズが『エホ・マ・キー』を持参して来ました。ありんすちゃんも一緒です。

アインズは『エホ・マ・キー』を見てふと関西出身のメンバーから聞いた風習の話を思い出しました。

(確か長い巻き寿司を家族揃って無言で食べる風習だったかな……あれは誰から聞いた話だったか……)

アインズは『エホ・マ・キー』を崩して中身を調べ始めました。玉子、カンピョウ、シイタケ、キュウリ、そして……梅干し。

「もしかしたら……ありんすちゃんよ、口を開けてみよ」

ありんすちゃんが口を開けると中に梅干しの種がありました。

真相はこうです。ありんすちゃんは『食べ終わるまで一言も喋ってはいけない』と言われた為、梅干しの種が無くならないからまだ『食べ終わっていない』と思いついで喋れなかった、というわけです。

仕方ないですよ。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## 069ありんすちゃんのバレンタインデー

ありんすちゃんはとつてもご機嫌みたいです。なんでも今日はバレンタインデーとかいうチョココレートをたくさん食べられる日なんですって。うーん……ちよつと違う気がしますが……

ありんすちゃんは第六階層にやつて来ました。アウラとマールにチョココレートをご馳走して貰うつもりですね。

「あれ？　ありんすちゃんじゃん。え？　ばれんたいんでい？　……チョココレート？　マールはわかる？」

「えーと……チョコ、チョココレートなら料理長に……」

どうやら二人共バレンタインデーについて全く知らないみたいです。仕方ありません。ここは賢いありんすちゃんが先生になってバレンタインデーとはなんたるかを教えなくてははいけませんね。

ありんすちゃんは胸を張りました。

「二人共だめでありんちゆね。バレンタインデーとはバレンタインという神ちやまがチョココレートをプレゼントしてくれる日なのでありんちゆ」

双子の感心した眼差しを受けてありんすちゃんはエヘンと得意そうです。

「……うーん……じゃあ、僕達もチョココレート、貰えるのかな？」

おずおずとマールが尋ねました。

「マールはありんちゅちゃんにチョココレートあげなくてはならないのでありんちゅ。アウアウもありんちゅちゃんにチョココレートあげるでちゅよ」

アウラとマールはよくわかりませんが、ありんすちゃんにチョココレートを差し出しました。ありんすちゃんは大喜びです。うまくすればナザリックのチョココレートを全て独り占め出来るかもしれません。

ありんすちゃんは次に第五階層にやって来ました。

「コレハ……アリンズ殿、メズラシイ」

「コキュトチュ、今日はバレンタインデーでありんちゅよ」

ありんすちゃんはコキュートスに手を出して催促しました。コキュートスは意味がわからずにきよとんとしました。

「バレンタインデーはありんちゅちゃんにチョココレートをあげなくてはならないのでありんちゅよ。まちやか知らなかったでありんちゅ？」

「グヌヌ……サヨウナ風習ヲシラズ、面目ゴザラヌ。チョココレートトハ一体？」

ありんすちゃんは先程アウラ達から貰ったチョココレートを見せました。コキュート

スはシモベの雪女郎達にチョコレートを持って来させるとありんすちやんに渡ししました。

両手一杯のチョコレートを手に入れたありんすちやんは自分の階層に戻り、一人で全部食べる事にしました。

うーん……本当はバレンタインデーってそんな風習じゃないと思いますが……ま、ありんすちやんはまだ5歳児位の女の子ですから仕方ありませんよね。ありんすちやんととつて大満足な一日だったみたいです。

※ ※ ※

「……バレンタインデーですか？……なにやら女性が男性にチョコをプレゼントするとかいう人間共の習慣ですな。……私が女だったらアインズ様に差し上げるのだがね。……おや、誰か来たみたいだね？」

ありんすちやんはデミウルゴスからもチョコレートを貰おうと第七階層にやって来ました。両手一杯のチョコレートを持って。

ありんすちやんは一旦自分の階層に戻ったのですが、どうやら欲が出てもつとチョコレートを貰おうとやって来たみたいです。

「これはこれは。ありんすちゃん、バレンタインデーのチョコレートです。ね。ありがとう。……しかし、女性が男性にチョコレートを贈るバレンタインデーをよく知っていましたね」

ありんすちゃんはイヤイヤをしましたが、バレンタインデーを知っていたデミウルゴスには逆らえませんでした。

※ ※ ※

第九階層アイنزの執務室——アルベドは少しイライラしていました。先程いきなりやって来たアウラの愚痴をずっと聞かされていたからです。

「ありんすちゃんばかりズルいよね？ あたしだって『ばれんたいんでい』のチョコレートを欲しいんだよね。ありんすちゃんだけって不公平じゃん」

「あのね、アウラ。バレンタインデーっていうのはね——」

アルベドは「女性が好意を持つ男性にチョコレートなどのプレゼントをする習慣なのよ」と言いかけてやめました。アウラ達はそもそもバレンタインデーを知らないか誤解をしているが、確か至高の方々の話題に上がった事もかつてあったのだからアイنز様は知っている筈です。ここでアルベドがアイنزにプレゼントをしたら高ポイントを



稼げるのではないでしようか？

アルベドはアウラが訝しげに自分を見つめているのに気が付くと小さく咳をして話を続けました。

「まあ、そうね。小さい子供の事を羨んでも仕方ないわね。それともアウラはまだまだ子供なのかしら」

途端にアウラは真つ赤になり、あれこれ言い訳しながら出て行きました。残されたアルベドは一人、あれこれと思い悩むのでした。

※ ※ ※

その夜、ナザリツク地下大墳墓に戻ったアインズは執務室の扉を開けました。中には花で囲まれたチョコレート山の山が置かれていました。

「そうか……今日は聖バレンタインデーだったな……」

カードを見るとデミウルゴスからでした。

「……うーん……まさか、その気はないと思うが……単なる好意と受け止めておこう」

次に寝室に行くとなにやら大きな箱があります。リボンがかけられている事からど

うやら贈り物みたいです。アインズ番の一般メイドが箱を開けると中に等身大のアルベドのチョココレートが入っていました。

「……………これは……………」

チョココレートのアルベドは全裸だったのでアインズが目のやり場に困っていると、突然、チョココレートのアルベドの目が開き動き出しました。なんとチョココレートのアルベドはアルベド本人にチョココレートでコーティングしたものだだったのでした。

「お、落ち着けアルベドよ！ ……うわ……………ちよ……………」

※ ※ ※

第二階層屍蟻玄室——ありんすちちゃんがため息をつきました。せつかく集めたチョココレートを全てデミウルゴスに持っていかれてしまった事が残念でたまらなかつたみたいです。せめて三月にキャンディーでも貰えると良いですね。

やつぱり欲張らずに程々にしておくべきでしたが……………仕方ありませんよね。ありんすちちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## 070劇場版 ふしぎのくにのありんすちゃん??

ナザリック地下大墳墓玉座の間に各階層守護者が集められていました。守護者統括アルベドが玉座の前で跪き恭しく口上を述べます。

「ナザリック地下大墳墓の主にして至高のお方のまとめ役、アインズ・ウール・ゴウン魔導王陛下、第四第八階層を除く守護者一堂御身の前に」

玉座のアインズはアルベドの挨拶に片手を上げて答えると要件を切り出しました。

「さて、諸君。いよいよ劇場版オーバーロード総集編の公開が迫っている。丸山くがね氏の特典小説目当てで前売り状況はなかなか好調のようである。実に喜ばしい事だ」

階層守護者の顔に喜色が広がります。もちろんありんすちゃんも大喜びです。

「しかし、だ。……今回劇場版後編での最大の山場である私、アインズとシャルティアとのバトルシーンを新しく撮影し直す事となった」

「なんと……あれはスタントや吹き替えやCGを使わないガチンコバトルであったはず……そんな事が……」

真っ先にデミウルゴスから危惧する意見が出ました。かのシャルティア戦について一番否定的であったのですからもつともな話です。声に出さないまでも他の階層守

護者達も同じ思いのようでした。若干一名を除いては。

「頑張るでありんちゅ」

見るとありんすちゃんに既に真紅のフルアーマーを身に纏い、スポイトランスをしきりに振り上げていました。ありんすちゃんはやる気満々みたいですね。

アインズはそんなありんすちゃんを少し憐れみを含んだ目で眺めながら言葉を続けました。

「……ふむ。結構。ありんすちゃんよ、そのやる気は評価したい。しかし、だ。その……今の状態ではちよつとまずいのでな」

「たしかに……今のありんすちゃんでは過去のシャルティアとの繋がりがありませんな。これは困りましたね」

アインズの意を汲んだデミウルゴスが問題を指摘します。そうでした。シャルティアがおりんすちゃんになってしまったのは復活後なのですから、アインズVSシャルティアの時にありんすちゃんではまずい訳です。

「くふふふ。皆はまだ気がつかないのかしら？　アインズ様がこれ位の事を見越していなかったと本気で考えているのかしら？」

「……なる程。アルベド、そういう事ですか。さすがはアインズ様。既に手を打っていたとは」

含み笑いをするアルベドに同意して、デミウルゴスが大きく頷いてみせました。

二人を除く階層守護者達は一様にわけがわからないでキョトンとしています。内心ではアインズも何のことか全くわかりませんでした。

「どゆことでありんちゆか？　せちゆめいするでんちゆ」

アインズは鷹揚に頷いて見せてからデミウルゴスを促しました。

「他の者達はまだわからないようだ。デミウルゴス。説明してあげなさい。……ありんすちゃんにも理解出来るように」

「全くもってアインズ様には不可能な事など無いとしか思えませぬ。私めなどは到底至りませぬ」

（お世辞は良いから説明してくれよ……一体どうしたら良いのか……そうだ、アルベドだ。アルベドならば……）

「コホン……では、アルベド。お前から説明してあげなさい。……ありんすちゃんにも理解出来るように」

「そもそも何故シャルティアが復活の折、ありんすちゃんとなってしまったのか？……そこに至ればアインズ様のお考えに至ると思われます」

アルベドは訳知り顔で微笑むと平伏しました。

「……ふむ。……そうか」

アインズは目を閉じて感慨深く俯くのがやっとでした。デミウルゴスもアルベドも何を言っているのか全くわかりませんでしたから。

「あー！……アタシわかったかも！」

唐突にアウラが叫びました。

「この前、アインズ様はこの二次作品の作者を捕まえて餓食狐蟲王の穴に放り込んでおいたじゃん。あの作者に書き直させたら良いんだね」

「……ウム、ソレハ一体ドウイウ事ナノカ？」

「つまりさー、作者にありんすちゃんか元のシャルティアに戻る話を書かせたら解決する——」

「わかったでありんちゅー！　ありんちゅちゃんが主役の映画をちゅくれば良いでありんちゅねー！」

得意気に説明するアウラを遮ってありんすちゃんが叫びました。

「ちよつとありんすちゃん。アタシの見せ場を横取りしないでくれる？」

アウラが抗議しますがありんすちゃんは全く聞きません。もうすっかり自分の考えに酔ってしまっています。

「アインズ様、如何いたしますか？」

アルベドが困った様子でアインズに尋ねました。次善の案としてパンドラズ・アク

ターがシャルティアに成り代わって撮影しても良いのですが、そうなればおそらくありんすちゃんがヘソを曲げてしまう事でしょう。

それはそれで非常に厄介な事態といえました。アインズは目を閉じて絞り出すような声で決断しました。

「……良かろう。ありんすちゃんの好きにさせるが良い。……まあ、所詮は読者も少ない二次作品で映画などありえないのだがな」

※ ※ ※

その後どうなったか、ですって？ありんすちゃんは自分で脚本を書くんだと言って張り切っていました。案の定、ほんの数時間で飽きて投げ出してしまいました。仕方ないですよ。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

ちなみに劇場版総集編オーバーロード後編はなんとかなったとかならなかったとか……まあ、上映されたら皆さんのご自分の眼で確かめられる事をお薦め致します。

## 071 ありんすちゃんせがのびる

今日のありんすちゃんやんはヴァンパイア・ブライドに身長を計ってもらっています。背筋を伸ばして息を止めて、少しでも高くなろうと力んでいますよ。そんなに頑張っても背は伸びないのですが……あれ？ ありんすちゃんつま先立ちでズルをしています。すぐさま見つかってしまいました……まあ、気持ちはわかりますが、それでは身長測定する意味がないですからね。

ギョツと目をつぶっておまじないのように「伸びろ伸びろ」って呟いています。効果あるのでしょうか？

ヴァンパイア・ブライドがびっくりした表情でありんすちゃんの耳元で何やら呟くと、途端にありんすちゃんやんは跳ね回って喜びだしました。なんと、ありんすちゃんの身長が少し伸びたみたいです。

あまりにも喜び過ぎて転んでしまいましたが、ちつとも痛くないみたいです。そのまま飛び跳ねながらどこかへ行ってしまうました。

※ ※ ※



「あれ？ ありんすちゃんじゃん。随分ご機嫌みたいだけど、何かあった？」

相変わらずに飛び跳ね続けているありんすちゃんがやって来たのは第六階層でした。

「あ、ありんすちゃん。転んじやうんじやないかな？ ……その、危ないよ」

明らかに興奮して浮かれているありんすちゃんをアウラとマーレが心配しています。ですが、浮かれて飛び跳ねているありんすちゃんには届かないみたいです。

「背がのびたでありんちゅ！ のびたでありんちゅよ！」

きつといつかはアウラよりも身長が伸びて、かつてのようにアウラの事を『ちびすけ』と呼べるようになるかも知れませんね。

「……ふーん。でもさあ、アタシだっていつかはおつきくなってバインバインになるんだよ？」

アウラが口を尖らせて言い返します。

「ありんちゅちゃんもバインバインでありんちゅ！ バインバイン！ バインバイン！」

相変わらず飛び跳ねながらありんすちゃんはどこかに行ってしまいました。

※ ※ ※

「ありんちゅちゃん、背が伸びた！ 伸びたでありんちゅー！」

第七階層を叫びながら走り抜けるありんすちやんを、呆氣にとられながら強欲と憤怒の魔將が見送りました。

どうやら何度か転んでしまったので飛び跳ねるのは止めたみたいですね。

※ ※ ※

第九階層の食堂にありんすちやんがいました。ありんすちやんの前には大きなケーキが置かれていました。ケーキには『ありんすちやん 成長おめでとう』とデコレートされたチョコレートのプレートが飾られています。

「ありんすちやん、おめでとう！」

「良かったね！ ありんすちやん」

食堂にいた一般メイド達も揃って祝福しました。ありんすちやんは切り分けられたケーキをフォークで刺すとかぶりつきました。あらあら。顔が生クリームだらけです。

ケーキは居合わせた一般メイド達にもお裾分けされました。こうしてありんすちやんの成長をみんなで祝いしました。

※ ※ ※

ありんすちゃんの身長が伸びた話はすぐにアインズにも届きました。

(……これは、アンデッドであつても成長や進化が可能という事なのだろうか？ ……  
今後のナザリック強化や自身の将来に関わる重大なフアクターとなるかも知れないぞ。  
以前にデスナイトが武技を会得出来ないかという実験が不首尾に終わったが、単にやり  
方がまずかつただけかもしれない)

アインズは執務室のソファーに深く腰掛けて考えました。と、扉をトントンとノック  
する音がしました。

「アインズ様、ありんすちゃんがお見えになりました」

一般メイドのシクスに許可を出すと、得意そうな表情のありんすちゃんが入つて来  
ました。

「アインジュちやま、ありんちゅちやん来ましたでありんちゅ」

アインズは手を上げてありんすちゃんに座るよう示すと優しく声をかけました。

「ありんすちゃん。何でも最近身長が伸びたと聞いたが、それは本当かね？」

「背が伸びたでありんちゅ！ 伸びたでありんちゅよ！」

ありんすちゃんは興奮しながら答えました。

「素晴らしい！……む、感情が抑制されたか……ありんすちゃんよ。これはアンデツドの可能性を示す一大事と言えるかもしれない。良くやった」

ありんすちゃんの顔がみるみる紅潮していききました。今にも爆発しそうな位、得意絶頂な状態です。

「……で、ちなみにどれ位身長が伸びたのかね？」

「……………5ミリ……………でありんちゅ」

「は？」

うーん……………まあ、ほんのわずかでも身長が伸びたのが余程嬉しかったのでしよう。仕方ありませんよね。何しろありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子に過ぎないのですから。

## 072特別番外編 ルベドでありんす

第一階層の奥にナザリックの精鋭部隊が今まさに出動の時を迎えています。アイズの特命『至高のメンバーを捜索せよ』を実現する為の守護者統括アルベド直属の部隊——アルベド、パンドラズ・アクター、ルベド、さらにアインズ謹製のレベル90台のシモベ達が揃っている様はなかなか壮観ですね。

「守護者統括殿、一つばかり質問があるのですが、よろしいですか？」

パンドラズ・アクターが仰々しく拳手しながら発言しました。アルベドは投げやりな様子で許可を出すとパンドラズ・アクターは大げさに胸をそらして疑問をぶつけました。

「その……なんと申しますか……ルベド殿はルベド殿ではなくありんすちや——」

パンドラズ・アクターの質問が終わる前にアルベドとルベドが叫びました。

「ルベドよ！ 紛れもなく!!」

「ルベドでんちゅ！」

そこにはこの件に関する他者の意見を抹殺するかのような明確な意志が込められていて、質問を許さない圧力がありました。

「……他に何かあるかしら?」

「……アリマセン」

すつかり意気消沈したパンドラズ・アクターは大人しく引き下がるしかありませんでした。客観的にはパンドラズ・アクターの指摘は正しいでしょう。明らかにルベドはありんすちゃんと同じにしか見えません。しかしながらこのプロジエクトに於いてはプロジエクトリーダーたるアルベドに全権があり、アルベドと自称ルベド本人がルベドだと断言する限り否定する事は不可能でしょう。

重い沈黙を破ってルベドが口を開きました。

「アルベド、目的はなんでありんちゆか?」

アルベドは小さいルベドを諭すかのように答えました。

「アインズ様の勅命を受けて他の至高のお方がこの世界にいないか探す事が私達に与えられた任務よ。……そして、それは他の守護者達にも秘密に行わなくてはならないの」

アルベドはメンバーを見回してから言葉が続けました。

「まずは……そうね。至高のお方の情報を探す事が必要ね。漠然と探すよりも誰かしら絞って探した方が良くしら?」

「それならペロロンチーノちゃまの行方を探るのが良いでありんちゆ」

「ふむ、確かにペロロンチーノ様はアインズ様とも特に仲が良かったのでしたね。私も是非、見つけて差し上げるべきかと」

ルベドの案にパンドラズ・アクターも同意するのでした。

アルベドは少しばかり考え事をしてから結論を出しました。

「良いでしょう。まずはペロロンチーノ様の情報を優先して集めてみましょう」

アルベドは静かに夢想し始めるのでした。

『よくやった。アルベドよ。まさに私の願いを叶えてくれた。』

『……恐れ多いお褒めの言葉。これも守護者統括たる務め。当たり前前の事に御座います』

『私の前で謙遜はいらぬ。私にとってお前は唯一無二の存在なのだ』

『ああ……アインズ様。このアルベドは身も心もアインズ様、いいえ、モモンガ様に捧げております』

『お前の忠義、嬉しく思う。アルベドよ。そしてお前の全てが私の物だと言うのであれば、この私の全てはお前の物だ』

アインズは強くアルベドを抱きしめて――

「――ベド？ アルベド？ ……どうちたでありんちゆか？」

いつの間にかアルベドは妄想の世界をさまよっていたようでした。心配そうに覗き込む小さな妹——ルベド——をわざとらしく咳払いでごまかしながら言葉を続けるのでした。

「ゴホンゴホン。さて、それではペロロンチーノ様の情報を集める為のアイデアを出していきましようか」

ありん——ルベドがすぐさま手を上げました。

「ペロロンチーノちゃんやまはエロエロ大王とも言われてましたでありんちゅ。『えろげ』なる物で誘うと良いでありんちゅよ」

「ふむ。『えろげ』とは……確か『あだるとげーむ』とかいう物でしたな。私の管理する宝物庫には残念ながらありませんね」

パンドラズ・アクターの言葉にアルベドはため息をつきました。

「残念ね。私も『あだるとげーむ』という言葉が何を指すのかはわからないわ。至高の方々の何人かはお持ちだったようだったけれど……」

「ペロロンチーノちゃんやまは『えろげ』でぶくぶく茶釜ちやまの声でなえた、とかおっしゃっていまちたね。積んだりする物だとも……」

「——という話をありんちゅちゃんから聞いたでありんちゅ」

ルベドは慌てて言い足しました。あくまでもここにいるのはありんすちゃんではな



くルベドなのでした。たとえ少しばかり共通点があるとしても……

※ ※ ※

「大変つす！ どうやらありんすちゃんがお亡くなりみたいつす！」

突然、ルプスレギナが飛び込んで来ました。あり——ルベドは目をまん丸に見開いて驚いています。

「ありんちゅちゃん死んでしまったでありんちゅか！」

ありん——えつと……ルベド役のありんすちゃんの目にみるみるうちに涙が溢れてきました。

「うわ——ん！ ありんちゅ、ヒック、あり、ありんちゅちゃん死んちゃったでんちゅ！  
うわ——ん！」

ありんすちゃんはどうとう泣きながらかけ出して行ってしまいました。

うーん……ありんすちゃんは死んでいないと思いますが……仕方ないですね。何しろありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子に過ぎないのですから。

## 073 ありんすちやんのへいぼんないちにち

ありんすちやんが珍しくアルベドといいます。アルベドから大きな荷物を受け取ってスキップしながら自分の階層に帰っていきまます。とはいってもありんすちやんの場合には右足右足、左足左足と交互に出しているだけなのでスキップになっていませんが。

さて、ありんすちやんのお家の屍蟻玄室を覗いてみましょう。

あれあれ？ さっきまで元氣一杯だったありんすちやんがベッドで寝ています。

スツポリ毛布にくるまって頭のとっぺんしか見えませんね。

お昼になりました。ありんすちやんは……まだ寝ていますね。うーん……。

「こんちはー。ありんすちやん、いるかな？」

元氣良くアウラがやって来ました。ありんすちやんは頭までスツポリと毛布をかぶったまま相変わらず寝たままです。

「今日のお昼はカレーライスだつて。早く食べに行こう。ありんすちやん？」

ありんすちやんは相変わらず無反応です。アウラはしばらくありんすちやんを誘っていましたが、諦めて一人で行ってしまいました。

部屋に残されたありんすちやんは身動きひとつしないで寝ています。うーん……少

し寝過ぎではないでしょうか？

夕方になりました。ありんすちゃんは相変わらず頭までスツポリ毛布をかぶって寝ています。

「ありんす様、起きていらつしやいますか？」

今度は戦闘メイドのユリ・アルファがやって来ました。ユリはベッドを見下ろして腕組みをしました。

「さて、いい加減に起きましようね？ ……起きないとボク、私が叱られてしまいますから」

ユリは強引にありんすちゃんから毛布を剥がします。あれ？ よく見るとありんすちゃんは本物ではなくて編みぐるみの身替わりみたいですね。

「さあ、ありんす様。起きましようね」

ユリはありんすちゃん本人だと思ひ込んでいるみたいです。ありんすちゃんの肩に手をかけて引き起こしました。

「……………」

当然ながら編みぐるみのありんすちゃんは無反応です。ユリはまだ眠っていると思ひ、ありんすちゃんを強く揺さぶりました。

「!!!」

ユリが強く揺さぶり過ぎたからか、ありんすちゃんの頭がポロリと落ちてしまいました。編みぐるみなので継ぎ目が弱かったからでしょう。しかしながらありんすちゃん本人だと思いい込んでいたユリは驚きました。

「大変！　ありんす様が——」

「どうしたつすか？　ユリ姉。あんまり慌てると頭が落ちるつすよ」

ユリが顔を上げると、ルプスレギナの覗き込んだ顔がありました。

「ありんす様の頭が——もげて死んじゃった」

「マジつすか？　……こりや大変つす！」

ルプスレギナは大騒ぎしながら走り去っていきました。

※ ※ ※

大騒ぎするルプスレギナから加速した騒動は結局、ありんすちゃんの等身大編みぐるみだとわかり終局しました。

ありんすちゃんも今ではニコニコしています。良かったですね、ありんすちゃん。

その夜、アルベドに直してもらったありんすちゃん編みぐるみを抱きしめてありんすちゃんはぐっすりです。なんでもアルベドからルベドの代役を頼まれた際に報酬とし

ておねだりしたんですって。ようやく編みぐるみが出来上がったので、早速ルベド役を張り切っていただけで身替わりのつもりではなかったみたいですよ。

おやすみ、ありんすちゃん。良い夢を……

## 074 ありんすちゃんはるがくる

春ですね。だんだんと過ごしやすい気候になって来ました。ナザリック地下大墳墓もポカポカ陽気でみんなのんびりしています。

ありんすちゃんはマーレのハンモックでお昼寝しています。とても気持ち良さそうですね。

おや？ ……ありんすちゃんの頭に花が……？ 一輪の花が生えています。一体どうしたのでしょうか？ ありんすちゃんはスヤスヤ眠っていて、気がついていないみたいです。

しばらくするとありんすちゃんが目覚めました。寝ぼけ眼でボンヤリと周りを見回してからウーンと背伸びをします。それからハンモックから降りるとヨチヨチと歩き出しました。ありんすちゃんの頭の花もユラユラ揺れます。

水がめの水で顔を洗い、タオルできれいに拭きます。第六階層のアウラとマーレの居住区ですが、まるで自分の家みたいに手慣れていますね。

さらにヨチヨチと歩き出すと戦闘メイドのソリユシヤンと会いました。

「おや、ありんす様。アウラ様はどちらにいらっしやるかご存知でしょうか？」

「アウアウは……わからないでありんちゅね」

ありんすちゃんは可愛らしく小首を傾げながら答えました。頭の花がプルンと大きく揺れます。

「……さようですか。では、失礼致します」

ソリュシヤンは丁寧にお辞儀をするとありんすちゃんに背を向けました。

「待つでありんちゅ。ありんちゅちゃんも一緒に探すでありんちゅよ」

ありんすちゃんはソリュシヤンを呼び止めて一緒にアウラを探しに行く事にしました。

「あの……ありんす様。質問があるのですが……」

「なんでありんちゅか？」

ありんすちゃんが頭の花を揺らしながら振り向きました。

「……その、ありんす様はアインズ様の妻の座はもう望んでいないのでしょうか？」

「うーん……難しいでありんちゅね……」

ありんすちゃんは腕を組んで悩みました。かつてシャルティアだった頃にはソリュシヤンが指摘したようにアインズの妻の座をアルベドと争ったものでした。では、今はどうでしょう？

「うーん……アインジュちやまの娘でありんちゅね」

ありんすちゃんは考え考えゆつくりと答えました。

「アインジユちやまのかわいい娘でありんちゆね」

改めて言葉を足してもう一度言いました。

「……残念です。私はありんす様、シャルティア様こそがアインズ様に相応しいと思っておりますので……」

ありんすちゃんはソリュシヤンの言葉に答えずにヨチヨチと歩いていきます。それにつれて頭の花もユラユラ揺れました。

「あれえ？ ソーちゃんとありんすちゃんじゃないですか？ アウラ様でも探しに来たっすか？」

木の上から突然声が聞こえてきました。「ほいッ」とかけ声と共にルプスレギナが飛び降りてきました。

「ブヒヤヒヤヒヤ！ なんすか、これ？ ありんすちゃんの頭に花が生えてるっすけど」  
ありんすちゃんは慌てて頭に手をやりましたが、よくわかりません。

「本当です！ なんか生えてます！」

今頃になってソリュシヤンも気が付き驚いて叫びました。

ソリュシヤンは小さな手鏡を取り出してありんすちゃんに見せます。確かに小さな花がありんすちゃんの頭で揺れていました。もしかしたらさつきからやたらと眠かつ



たり、ヨチヨチ歩きになっていたのはこの花のせいかもしれません。

「ありんすちやん、引っこ抜いていいっすか？」

ありんすちやんが頷いたので、ルプスレギナはありんすちやんの頭の花を引っ張りました。

「イタタタ……イタイでんちゅ！」

ありんすちやんが痛がるのでルプスレギナは花から手を離しました。

「なんでしたら私が食べてしまいいましようか？」

「……このままでよいでありんちゅ」

よほど痛かったからか、ありんすちやんはソリュシヤンの申し出を拒絶してしまいました。

「これはほつとくと大木になって、面白い事になるっすよ、きつと」

ルプスレギナは他人ごとなので面白がっています。

「そうだ！ きつとアウラ様マーレ様ならなんとかして貰えますよ。きつと」

ソリュシヤンがありんすちやんを励ました丁度その時――

「あれ？ ありんすちやんじゃん。アタシになんか用？」

「ソリュシヤン、ルプスレギナも、こ、こんにちは」

アウラとマーレが現れました。

なんと……二人の頭にもありんすちやんと同じ花がユラユラ揺れていました。

## 075ありんすちやんがんばる

今日のありんすちやんはいつもとちよつと違います。難しい顔をして、腕を組んでなにやら悩んでいるみたいです。いったいどうしたのでしょうか？

正直な話、悩み事をしているありんすちやんって少しばかり違和感がありますよね。悩むにしても「今日のおやつは何かな？」とか「今晚のおかずは何かな？」という程度の悩みしか無いような……あくまでもイメージの話ですが……多分、この話を読んでいる全員がそう思っていると思います。

とりあえずありんすちやんに聞いてみるとしましうか。え？ ……なにになに？ ……ありんすちやんは頑張る事にした。……で、何を頑張れば良いかわからないから悩んでいる、ですつて。

……うーん……これは難しいですね。

そもそもありんすちやん、考え方が間違っていますよね。普通はなにかしら目標があつて、それを叶える為に頑張るものなのですが……まあ、ありんすちやんはまだ5歳児位の女の子ですから仕方ないですよ。

しかし、困りましたね。ありんすちやんはいつたい何を頑張ったら良いでしょうね？

ふと、ありんすちゃん顔が顔を上げました。なにやら思いついたみたいですね。ありんすちゃんとはトテトテと駆け出しました。

※ ※ ※

「えー？ 何を頑張ったらいいか、だつて？」

真剣な表情のありんすちゃんにアウラは戸惑っていました。

「あたしにそんな事聞かれてもねー……ありんすちゃんがやりたい事すれば？」

「それが思いつかないでありんちゆよ」

「あの、ええつと……きつとアインズ様なら教えてくれるんじゃないかな？」

マールレの意見でありんすちゃんの瞳が突然煌めきました。そうです。確かに至高の方々の束ね役をされていて、アルベドやデミウルゴスですら遠く及ばないアインズ様ならばきつと悩めるありんすちゃんに道を示してくれるに違いありません。

ありんすちゃんは嬉しそうにトテトテと駆けていきました。

※ ※ ※

「うむ……何か頑張ってみたい、だど?」

アインズは真剣な眼差しでありんすちやんを凝視しました。

(ふむ。……これはNPCが自ら成長しようとするひとつのモデルケースとなるかもしれないな。もし、NPC達が自ら成長出来るならばナザリックにとって実に有意義な事となるが……)

「素晴らしい! ありんすちやんよ。……うむ……そうだな……では、アルベドの補佐などどうかな? 将来ナザリックの運営を任せられる信頼出来る人材は多いにこした事はない」

「わかりましたでありんちゆ。アルベドのお手伝い頑張るでありんちゆ」

真剣な眼差しでありんすちやんはなんだかいつもと違って頼もしいですね。アインズは満足そうに頷くのでした。

※ ※ ※

アインズの執務室を出たありんすちやんは真剣な表情で歩いていきます。そしてアルベドの居室を……おやおや? そのまま通り過ぎて自分の住居がある第二階層に戻って来てしまいました。〈死蝟玄室〉に帰ってくると、ありんすちやんはいつものよう

にお風呂に入って……お昼寝してしまいました。

一方、アルベドは自らの居室でありんすちゃんを待つていましたが、ありんすちゃん  
は来ません。当然ですよ。ありんすちゃんは自分の屍蠟玄室でお昼寝中なのです  
から。アルベドは戦闘メイドのユリ・アルファにありんすちゃんの様子を見に行かせる事  
にしました。

しばらくしてユリが戻って来ました。

「……その……ありんす様は『明日から頑張る』そうです……」

うーん……仕方ないですよ。なにしろありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子な  
のですから。

## 076ありんすちやんとひみつかいぎ

ナザリック第十階層にある巨大図書室——アツシユールバニパルにおいて密かに行われている会合、それが通称『賢人会議』です。

「お集まりの諸兄、本日はまず、我が賢人会議に今回特別に御参加頂きます御方をご紹介致します。……至高の方々のまとめ役であり我らがナザリックの絶対的支配者、アインズ・ウール・ゴウン様——からの推薦によりまして参加されるありんすちやんです」

ありんすちやんは立ち上がって丁寧にお辞儀をしました。

「では、各員宣誓を。私ティトウス・アンナエウス・セクンドウスはこの集まりでの内容を未来永劫秘匿する事をここに誓います」

「……かいまちゆでありんちゆ」

各司書達に混ざってありんすちやんも宣誓します。秘密の会議なんてワクワクしますね。

「……ゴホン。今回はアインズ様の下着のあるべき方向性について実に有意義な議論が出来ました。ブリーフ派とトランクスの派の熾烈な戦い、伏兵のふんどし案、さらには『はかない案』……最終的にボクサーパンツに行き着くまでの徹底した議論が出来ました」

テイトウスは感慨深げに目を閉じました。

「さて……本日の議題ですが……『階層守護者マーレ殿の下着は男ものであるべきか女ものであるべきか』です」

オーと一堂から静かな歓声が上がりました。

「コホン……かのナザリック地下大墳墓においてもっとも『純潔の乙女』という表現が相応しいマーレ嬢、ゴホン、マーレ殿にはやはり純白のシルクのレース模様のシヨーツこそが似合うと私は愚考致します」

L V 80のオーバードの司書の一人、コツケイウスが発言しました。ありんすちゃんはマーレこそが『純潔の乙女』という主張に納得いきませんでした。我慢して黙っています。

すぐさま反対意見が上がりました。挙手をして自らの意見を述べる機会を得たアウレリウスが重々しく意見を述べます。

「意外性の妙、これこそが我々が目指すべき究極の美ではないでしょうか？ ……私は美少女にししか見えないマーレ殿が実は男である、というそもそもの創造主である至高のお方、ぶくぶく茶釜様の意図を汲んでこそ最善の案と考えます。よってマーレ殿には男性用のブリーフ、しかも真っ白でGUNZEのロゴが入ったものこそ相応しいと考えます」



アウレリウスの意見に賛同する意図を込めてありんすちやんは手を叩きました。つられたかのように二三人がパラパラと拍手をしました。

「ちよつとよろしいか？」

ウルピウスが手を上げました。

「……アウレリウス殿の意外性が大切という意見は誠に結構。私も重要だと思います。……が、それが男性用ブリーフが相応しいというのは戴けません。……マール殿の顔かたちはまさに天使であるならば、その肌にもとうのは小悪魔たるべき装いこそが相応しい！……でーあーるーなーらーばーあー……」

ここで興奮し過ぎたウルピウスがカッと白目を剥いて仰向けに倒れ込んでしまいました。

「……く、黒じゃ……ガーターベルトに網のすと、きんぐ……」

シモベ達に担がれて退場する際にウルピウスは讒言のように呟いていました。

「同志ウルピウスの執念、実に素晴らしい。その遺志は我らが継ぐ事にしよう」

議長のテイトウスが重々しく言い渡します。

「……では、そろそろ結論を出すでしょう。皆々方はいつものように挙手で多数決を

……」

「まちゆでありんちゆ！」

テイトウスの言葉を遮ってありんすちちゃんが立ち上がりました。その瞳には強い意志が満ち溢れ、とても5歳位の女の子には思えないものでした。

「へグレーターテレポーターチョン！」

次の瞬間、天井に向かって伸ばされたありんすちちゃんの右手には水色地に白の水玉模様の子ビキニタイプのブリーフがありました。

「これがマールがはいていたパンツでありんちゅ」

ありんすちちゃんはテイトウスにパンツを突きつけて得意そうに笑いました。

※ ※ ※

その後会議は紛糾し、ありんすちちゃんは外に連れ出されてしまい、プンスカしていたそうです。まあ、ありんすちちゃんは間違っていないかと思いますが、仕方ありませんよね。

※ ※ ※

「——クシユン……」

マールは不意に寒さを感じてくしやみをしました。

「ちよつと、マール。風邪ならうつさないでよねー？」

一緒にいたアウラが露骨に嫌そうな顔をしました。その時、一陣の風がマールのミニスカートを翻していききました。

数分間の沈黙が二人の間に過ぎていき——

「……マール……あんた変態みたいだよ……」

マールをジトつとした目で見つめるアウラがぼそりと呟きました。

## 077 ありんすちゃんチャイナドレスをひろう

いつものようにありんすちゃんは目覚めました。そして久しぶりにくしやみをしました。

「くちゅんー」

とてもとても小さなくしやみでしたが、久しぶりに本当に久しぶりにテレポートしちやいました。

ゴチン!!!

おや？ ありんすちゃんは誰かの上に転移してしまったようです。怪しげなマントを頭からスッポリ被った女のような男のような人がありんすちゃんの下敷きになって気絶していました。

よく見ると怪しげな人は大事そうに鍵付きの箱を抱えていました。ありんすちゃんは箱をもぎ取ろうとしてみましたが、しっかりと抱え込んで放そうとしません。気絶してまで手放すまいとしているのですから、きつと高価なお宝が入っているのかもしれない。

ありんすちゃんはニッコリしながら爪を伸ばして鍵穴に差し込みました。カチャリ

と音がして箱が開くと中には薄い生地が入っていただけでした。

「これは食べられないでありんちゆね……」

ありんすちやんはちよつぴりがっかりしましたが、生地を広げてみるとなかなか可愛いらしいチャイナドレスだったので嬉しくなりました。オマケに何故だかかなり魔力が高いマジックアイテムみたいです。

ありんすちやんがチャイナドレスを着てみるとありんすちやんのサイズにぴったりになりました。

ありんすちやんはクルクル回ってみました。足元にスリットがあつてなかなか動きやすく、角がある蛇の模様もなかなか可愛らしいので気に入りました。それまで着ていたボールガウンをクルクルと畳んでいると、ポケットから一枚の布が落ちました。ありんすちやんではありません。両手で布を広げると水色地に白の水玉模様のビキニタイプのブリーフでした。

いつの間にポケットに入っていたのでしょうか？ ありんすちやんには記憶がありませんでしたが、なんとなくマーレのもののような気がするのです。

ありんすちやんはしばらく考えていましたが、ビキニブリーフを箱に入れて鍵を掛けるとニツコリしました。

ちよつと肌寒くなって来たのでありんすちやんは上からボールガウンを着ました。

今更ながら周りを見回してみました。全く見覚えがない場所でした。

「ちよつと探検してみるでありんちゆ」

ありんすちゃんは歩き出しました。

※ ※ ※

ありんすちゃんが立ち去つてしばらくすると気絶していた怪しい人が呻き声を上げました。

「…………う、うーん…………な、何が起きた？」

すぐさま両手で抱え込んでいた箱を確かめます。大丈夫。鍵が掛かったままでした。彼——女ではなく男でしたが——の使命はこの法国の至宝を無事に届ける事でしたから、安堵のため息をついたのでした。

「はやく神官長様に届けなくては」

男は大急ぎで走り去っていきました。

※ ※ ※

「むう？ ……こ、これは？ ……いったい？」

土の神官長 レイモンは思わず呻きました。スレイン法国に伝わる秘宝、ケイセケコウクを宝物庫に仕舞う為、箱を開けたのでしたがその形状が変化していたからです。「ふむ。……かつての神々の言い伝えでは、始原の魔法が込められし秘宝の中にはその形態を変えるものがあると聞く……よもや現実にも目の当たりにするとは思わなんだが」

水の神官長老ジネディーヌが重々しく口を開きました。

「破滅の竜王の復活、そして百年の揺り返しと思われる強大な吸血鬼の出現と始原の魔法すら行使する魔導王。……時が来たという事か」

「すると……ケイセケコウクが進化してこの姿になったのでしょうか？」

老ジネディーヌにレイモンが問いかけました。

「そうとしか思えぬ。お主も知っているようにこの箱には魔法で鍵が掛けられており、我ら神官長クラスでなければ開けられぬ。しかも、見よ。強大な力を感じるマジックアイテムではないか」

ジネディーヌは水色地に白の水玉模様のピキニタイプのブリーフを広げました。

「G U N Z E……魔法の刻印でしょうか？ ……この進化したケイセケコウクならば魔導王にも使えるのでは？」

「かもしれない。……しかしながら焦りは禁物じやろう。……まずは神官長会議にて報告

すべきじゃな」

箱を再び閉めると二人の男は出ていきました。

※ ※ ※

カチャカチャ……

ありんすちやんがその部屋を覗いてみると一人の少女がうずくまっています。白と黒の二色に別れた長髪の少女は熱心に小さな箱で遊んでいました。

「なんでありんちゆか？ それ」

ありんすちやんが尋ねましたが少女は見向きもしないで答えました。

「……ルビクキュー」

「ありんちゆちゃんもやってみたいでありんちゆ」

「……………ヤダ。もう少しで二面そろってから話しかけないで」

なんとということでしょう？こんなに可愛らしいありんすちやんが頼んでいるのに拒否するなんて……………とんでもないですよね。

「ありんちゆちゃんもやってみたいでありんちゆ！」

「……………」



今度は無視されてしまいました。おやおや？ ありんすちゃんの顔が真っ赤になってきました。このままではありんすちゃんが爆発してしまいますよ。

「……………ん」

と、少女が相変わらずルビクキューを弄りながらあごで部屋の片隅を指しました。なんと、そこにはもう一つルビクキューがあるではありませんか。ありんすちゃんは喜んで少女の隣でルビクキューで遊び始めました。

ありんすちゃんはいくら遊んでいましたが、お腹が減ってきたのでナザリックに帰りました。帰りはくしやみではなくてグレーターテレポーションでしたが。

その日からしばらくありんすちゃんはルビクキューで遊んでいましたが、一面も揃えられずに飽きてしまったそうです。

仕方ありませんよね。ありんすちゃんは5歳児位の女の子なのですから。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

## 078 ありんすちゃんあなにおちる

ナザリツク地下大墳墓第二階層 屍蠟玄室、ありんすちゃんの居室です。さつきからありんすちゃんは姿見の前でいろんなポーズをしています。この前にスレイン法国で手に入れたチャイナドレスを着た自分自身の姿に見入っているみたいです。普段と違って髪型もお団子二つに結っていてかわいらしいですよ。

ちよつとばかり前屈みになってパチパチとまばたきしていましたが、多分、ありんすちゃんはセクシーポーズでウイंकしているつもりかもしれませんがね。

ひとしきりいろんなポーズをとっているうちにやら思いついたみたいです。屍蠟玄室の扉を開けつ放しにして部屋を飛び出して行っちゃいました。

※ ※ ※

ありんすちゃんは第一階層にやって来ました。いつもなら元気いっぱいになるので、チャイナドレスを着たありんすちゃんは少し落ち着いた様子で歩いて来ます。気分は淑女、といった所でしようか？ ……もつとも気分だけで、周りの印象はいつもの

ありんすちゃんだと思いますが……

どうやらありんすちゃんが目指しているのは地表のログハウスのようです。なる程、ログハウスならば当番の戦闘メイドがいますからありんすちゃんのチャイナドレスを見せるのはうってつけですね。

ログハウスの近くまでありんすちゃんがやって来ると、なにやら丸い落とし穴みたいなのがありました。周りをロープで囲って看板まであります。

「んん……んちいりんん……おめか？　でありんちゅ」

うーん……看板には『危険　立ちいり禁止　オメガ』と書いてあったのですがありんすちゃんは漢字が読めなかつたみたいです。まあ、もつとも仮に読めたとしても好奇心旺盛なありんすちゃんが素直に指示に従ったかどうか疑問に思いますが……

「おもちろそうでありんちゅね」

ありんすちゃんは独り言を言うのと辺りを見回しました。

周りに誰もいませんから誰の反応もありません。ありんすちゃんはもつと大きな声で言いました。

「おもちろそうでありんちゅから入ってみるでありんちゅ」

ありんすちゃんはまた周りを見回しました。もちろん何の反応もありません。

「おーもーちーろーちよーでーあーりーんーちゅーねー！　はーいーつちやーうーでー

あーりーんーちゅー!!」

ありんすちゃんは大きな声で叫びました。何事かとログハウスから誰かが飛び出して来ました。

「ちよ、ちよつと待つつすよ! ……そこはオーちゃんが危険が危ないって言ったつすよ!」

ありんすちゃんはルプスレギナの慌てる様子を見てようやく満足そうに笑うと落とし穴に飛び込みました。

——と、同時に——

ありんすちゃん「!!!」

ルプスレギナ「!!!」

オーレオール「え?」

男「使え!」

シャルティア「くっ!!」

カイレ「な?」

——凄まじい閃光と衝撃が起こり、様々な事態が一斉に起こりました。

「……大変つす！　なんか大変な事が起きたつす！」

ありんすちゃんの姿はどこにもありませんでした。後にはルプスレギナと慌てて周囲に撒き散らしてしまったポテトチップスが残されていました。

〈……ルプス姉さん、大変です。どうやら次元の狭間が生じてしまったみたいです〉

〈オーちゃんつすか？　ありんすちゃんが消えちゃったつす。……あー！〉

〈どうしましたか？〉

〈ポテトチップス全部こぼしちゃったつす!!〉

プレイアデスの末妹、桜花領域守護者のオーレオール・オメガはルプスレギナに対し冷静に指示を出します。

〈ルプス姉さんはシモベ達にこの空間の狭間を警戒して下さい。私はアインズ様に報告して対策を練ります。ありんすちゃんはきつと連れ戻します〉

〈了解つす〉

ナザリック地下大墳墓ではこれから総力を上げてありんすちゃんの帰還を目指す事になりました。一方、ありんすちゃんはどうなったのでしょうか？

「……びつくりしたでありんちゅ」

ありんすちゃんは周りを見回しました。さっきまであったログハウスもルプスレギナの姿もありません。どうやら落とし穴の発動に驚いてグレーターテレポーテーションを発動させてしまったのかもしれない。

ふと、ありんすちゃんは自分が誰かの上に座り込んでいた事に気が付きました。なんと、ありんすちゃんと同じチャイナドレスを着たシワシワのお婆さんが倒れていました。どうやらありんすちゃんはこのお婆さんの上に落ちてきてしまったみたいです。

「……ちんでいるみたいでありんちゅ」

そういえばありんすちゃんが落ちた時にありんすちゃんのチャイナドレスの竜の模様が光ってなにやら魔法が発動したような気がします。もしかしたらありんすちゃんも魔法を使い過ぎるとシワシワのお婆さんになってしまうかもしれない。

「……シワシワになりたくないでありんちゅね」

ありんすちゃんは先程強大な魔力の放出が着ているチャイナドレスから起きた事から、このまま着続けているところのお婆さんみたいにシワシワになってしまうに違いないと思いました。

「帰ったらチャイナドレチュはしまう事にちまちゅか……」

ありんすちゃんは残念そうにチャイナドレスを着た自分自身を見下ろしました。と、不意にメツセージが聞こえてきました。

〈………ちゃん、ありんすちゃん………聞こえますかー？〉

なんと、桜花領域守護者のオーレオール・オメガです。

〈………ありんちゅちゃんでありんちゅ〉

〈………良かった！ ええと、ですねー今から私の座標にテレポーションを試して下さい。多分、次元の狭間が閉じる前ならナザリックの時空間に戻れるはずですよ〉

〈………わかりましたでありんちゅ！〉

ありんすちゃんは〈グレーターテレポーション〉を発動させました。と、次の瞬間、ありんすちゃんはナザリック地下大墳墓の入り口のログハウス側にいました。

「良かったわ。無事にありんすちゃんが戻ってきて……アインズ様のお留守に問題を起こしたくないものね」

「おかえりー。良かったねーもう少しで大変な事になる所だったんだよー」

ありんすちゃんをアルベドとアウラが出迎えてくれました。とりあえずありんすちゃんは疲れていたものでその日は休む事にして、屍蠟玄室に帰りました。

チャイナドレスは魔封じの箱に入れてベッドの下にしまったそうです。何はともあれ良かったですね。もう少しでありんすちゃんの話が終わる所でしたから。

おやすみ。ありんすちゃん。

## 079 ありんすちゃんプーさんになる

ありんすちゃんは今日もヴァンパイア・プライドに抱っこされて階層の巡回をしています。

「……プスウ……」

何やら妙な音がしました。

「……プー……プー……プー……」

ヴァンパイア・プライドの歩みに合わせて変な音が続きました。ありんすちゃんは二人のヴァンパイア・プライドの顔を代わる代わる見ました。二人ともブルブルと顔を振って否定します。

ありんすちゃんは不満足そうでしたが、それ以上追求しませんでした。

お昼になり、ありんすちゃんが本日のスペシャルメニューのトリプルチーズバーガーにかぶりついた時にまたもや「プププスウ」という音がしました。

すぐさまありんすちゃんは周りを見回してみましたが、誰もいません。そこにはありんすちゃんだけで、他には離れた席に一般メイドが三人いるだけです。

「ププププププ」



突然、ありんすちゃんのすぐ近くで音がしました。一般メイド達が遠巻きにありんすちゃんを見つめていました。ああ、なんとという事でしょう？ 彼女達はきつと今の音がありんすちゃんが出したと思っっているに違いありません。ありんすちゃんは知らず知らず顔が赤くなつていくのを感じました。仕方なく食事を止めてそそくさと食堂を出て行くのでした。

第二階層屍蟻玄室のありんすちゃんの部屋のベッドに仰向けになつて天井を眺めながら、ありんすちゃんは考え事をします。

時折、「ププー」と音がします。この部屋にはありんすちゃんしかいませんから音はありんすちゃんからしているとしか思えません。

ありんすちゃんは真つ赤になつて恥じらうのでした。

「このままではプーさんになつてちまうでありんちゅ」

ありんすちゃんは昨日ルプスレギナから聞いた『くまのプーさん』という話を思い出したのでした。

『くまのプーさん』とは……

※ ※ ※

「ありんすちゃんは何知っているっすか? 『くまのプーさん』の話」

ありんすちゃんは首をブルンブルンと振りました。

「うーん……知らないなら幸せかもしれないっすね。……じゃあこの話はおしまいです」

ルプスレギナは唐突に話を打ち切りました。しかしありんすちゃんは気になって仕方ありません。

「……やめた方が良いっす。ありんすちゃん夜トイレに行けなくなっても知らないっすよ?」

「いいから話すでありんちゅ」

ありんすちゃんに促されてルプスレギナは話始めました。

「あるところに熊の男の子がいたっす。ある日男の子は友達のおやつをこっそり食べちゃったっすよ。それ以来男の子はオナラが止まらなくなったらしいっす。皆は男の子を『くまのプーさん』って呼んで馬鹿にしたらしいっす。そのうちお腹のガスが溜まり過ぎて……」

ルプスレギナはそこで口を閉じました。

「どうなったでありんちゅ?」

ルプスレギナは意地悪そうな笑いを浮かべました。

「ドツカーン！ ……って爆発しちゃったつすよ。 ……馬鹿つすね。オナラが止まらなくなつた時にあることをすればたすかつ…。」

丁度その時にルプスレギナを呼びにシズが来たので話はそこで終わったのでした。

ありんすちゃんは立ちあがると裸になつて姿見に自分の姿を映してみました。心なしかお腹が膨らんでいるみたいです。オナラは相変わらず止まりません。泣きそうになりながらありんすちゃんはルプスレギナを探す事にしました。

第一階層からログハウスにやつて来たありんすちゃんはルプスレギナがいないか尋ねましたが、残念ながらいませんでした。

次に第六階層に行くときアウラとマーレがいたので尋ねてみました。アウラは一瞬怪訝な表情をしましたが、ありんすちゃんのただならぬ様子に気がつくやうに優しく語りかけました。

「あのさ、ありんすちゃん。ルプスレギナを探しているのはどうしてなのかな？ 良かったらあたしに話してみなよ」

「ありんちゅちや、プーさん、プーさん…：ありんちゅちや、ばくはちゅ、ヒック…：」  
アウラの優しい言葉に気持ちが緩んだのか、ありんすちゃんはとうとう泣き出してしまいました。アウラはありんすちゃんを優しく抱き抱えてあげました。

「いるんでしょ？ ルプスレギナ、もういい加減にしときなよ？」

「なんだ、やっぱり気付かれていたっすね。ちよつとした可愛いイタズラっすよ」

不可視化を解除したルプスレギナが姿を現しました。ありんすちゃん事態がよく解らずきよとんとしています。実はありんすちゃんの止まらないオナラはすべてルプスレギナのイタズラだったのです。

そもそも『くまのプーさん』なんて話もすべてルプスレギナのでまかせだったのでした。何はともあれありんすちゃん、無事で良かったですね。

## 080ありんすちゃんねぼける

ナザリック地下大墳墓第六階層に朝が来ました。マーレはハンモックの中で目覚めてうーんと伸びをしました。するとハンモックに他の誰かがいることに気がつきました。

なんと、ありんすちゃんがマーレに寄り添うようにすやすやと寝息を立てています。

「あ、ありんすちゃん? ……あ、あれ? どうして?」

マーレは混乱しました。どうやら夜中にいつの間にかありんすちゃんがマーレのハンモックに潜り込んで来たようです。

「んー……おはよー」

寝ぼけ眼をこすりながらやって来たアウラがマーレに声をかけます。と、ありんすちゃんがいることに気がついて目を丸くしました。

「あれ? ありんすちゃんじゃん? えっ? なんて?」

何故かアウラの脳裏にはマーレとありんすちゃんが結婚式をあげる光景が浮かびました。そしてウエディングドレスを着たありんすちゃんがアウラに『お姉ちゃま、よろしく』と挨拶を……

「いやいやいや、そんなのあり得ないから……マ、マーレ？あんた一体？」  
「違うよ、お姉ちゃん。僕も何がなんだか……」

何が違うのかはわかりませんがマーレは慌てて首を振りました。アウラはジトツとした視線を相変わらずマーレに向けています。

「う、うーん……うるちやいでありんちゆ。……まだ寝ているでちゆよ」

啞然とする双子の前でありんすちゃんはマーレの毛布をかぶって再び寝息を立て始めました。

※ ※ ※

「……うむ。それはなかなか興味深い話だね。なるほど、なるほど」

アウラの話聞いていたデミウルゴスはいかにも楽しそうに言いました。アウラにはなにながなにやらわかりません。デミウルゴスはそのアウラの表情に気がつくと言葉を続けました。

「これはまだ推測の域を出ないのだけど、マーレとありんすちゃんの二人は特別な関係かもしれないね」

アウラの脳裏にはまたしても二人の結婚式の光景が浮かびました。

「アウラ、君は姉として二人の恋を暖かく見守っていくべきだね。……しかしながらNPC同士のカップリングとはね……全く盲点でしたよ」

※ ※ ※

「アウラ、デミウルゴスから聞いたのだけれど……シャルティア、いえ、ありんすちゃんが貴女の義妹になるんですって?」

アウラが振り向くと守護者統括のアルベドが慌てた様子でいました。若干興奮気味で紅潮したアルベドは続けて言いました。

「早速、マールとありんすちゃんとの結婚式をあげるとしましょう。こういう事は急いだ方が良いと思うの。仲人にはアインズ様にお願したら良いわね。私もアインズ様に付き添って、まるで妻みたいで誤解されてしまうかも……いいえ、どうせならば私とアインズ様の結婚式も一緒に……」

「結構です」

このままこの話が大きく広がってアインズ様の耳に入ってしまうと大変です。アウラはなんとかしなければ、と思いました。

※ ※ ※

第六階層のアウラの住居にありんすちゃん、アウラ、マールが集まっています。アウラは少し緊張気味です。アウラに脇をつつかれたマールが口を開きました。

「あ、あの……その……ありんすちゃんは、ぼ、僕の好きなのかな？」

マールからの質問にありんすちゃんは可愛らしく小首を傾げながら答えました。

「うーん……好きでありんちゅね」

「じゃ、じゃあ、その……僕と結婚……」

「結婚ならアインジユちやまとでありんちゅ。マールはおこちやまちゅぎまちゅね」

アウラは思わずありんすちゃんに叫びました。

「えー……じゃあなんでマールのハンモックにいたのよ？」

「マールは……焼きたてアップルパイの匂いがあるんでありんちゅ」

ありんすちゃんの予想外の答えに双子は呆れてしまいました。仕方ありませんよね。ありんすちゃんは5歳児くらいの女の子に過ぎませんから。

※ ※ ※



翌朝、ハンモックで目覚めたマーレはまたしても隣に誰かが寝ている事に気がつきました。もしかしたらまたありんすちゃんが来ているのかもしれないね。起き上がつたマーレは思わず叫びました。

「お、お姉ちゃん?」

## 081 ありんすちゃんとおふろ

今日もありんすちゃんは自分の階層の見廻りを早々と終えてお風呂でくつろいでいます。浴槽に泡を満たして、お気に入りのアヒルを泳がせながら思いました。

大好きなお風呂をずっと楽しむ事が出来たらとても素晴らしいのにと、と。そしてありんすちゃんは閃きました。そうです。いっそのことお風呂で生活したら良いのではないのでしょうか？

思い付いたら即実行です。シモベ達を浴槽の周りに集めてありんすちゃんは宣言するのです。

「これからありんちゅちゃは、お風呂から出ないでありんちゅ」

シモベ達は大混乱です。いつものありんすちゃんの気まぐれだとは思いましたが、いろいろと問題がありそうでしたから。

「あ、あの……巡回はどうなさるのでしょう？」

おずおずと遠慮がちにヴァンパイア・ブライドが尋ねました。

「やめるでありんちゅね」

ありんすちゃんは即答しました。それを聞いてシモベ達は真っ青になりました。階

層の巡回は至高のお方から命じられた仕事です。それを簡単に放棄するとなればただでは済みません。なんとかありんすちやんを宥めないと大変な事になってしまいうでしょう。

「では、あの……湯船に入ったまま巡回するのは如何でしょう？ ソウルイーターに馬車を着けてそこに浴槽を乗せればお風呂に入りながら巡回出来ます」

ありんすちやんは悩んでいるみたいでした。シモベ達は必死です。なんとしても主であるありんすちやんを言いくるめなくてはなりません。

「それでは馬車を花で飾りましょう。湯船にも花びらをたくさん浮かべましょう。きつと素敵だと思いますよ」

ヴァンパイア・ブライド達は交互にありんすちやんを説得しました。そのうちにありんすちやんもその気になってきたみたいです。

「それはなかなか良さそうでありんちゆね。わかったでありんちゆ」

シモベ達は皆、ホツと胸をなでおろしました。とりあえずなんとか巡回はこれからも続けてくれる事になりました。

ありんすちやんがお風呂で暮らし始めてすぐに一つの問題が起きました。それはお風呂の温度を保つ事でした。最初は第七階層から溶岩を運んでいましたが、思いの外の重労働なのと、運ぶ際に床を焦がしたり、火傷をするシモベが続出したりでうまくいき

ません。

最終的には釜を作り、そこにエルダーリッチが並んでファイヤーボールを撃ち込む事でなんとか解決しました。

さらに大変だったのはありんすちゃんがお風呂で寝ると言い出した時でした。さすがにお湯に浸かったまま寝る事は思いとどまってもらい、お湯を抜いた浴槽に布団を敷いて寝る事になりました。

やがて、ありんすちゃんがお風呂で暮らすと宣言して一週間が経ち——ありんすちゃんは結局元のように屍蟻玄室に戻ってしまいました。なんでもお風呂でアイスクリームを食べていたらうっかり湯船に落としちゃったからやめたんですって。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子ですから。

## 082ありんすちやんとオツパイ

ナザリック地下大墳墓第九階層——ありんすちやんが誰かを探すかのようにキヨロキヨロしながら歩いていきます。どうやら誰かに用事があるみたいですね。

「これはこれは……ありんすちや、様では」

ありんすちやんが振り返ると戦闘メイドのユリとシズがいました。ありんすちやんは二人を交互に眺めてから小さく呟きました。

「ま、これくらいで我慢するでありんちゆか……」

「な、なにを!？」

思わずユリは叫びました。ありんすちやんがいきなり両手でユリの胸をわしづかみにしたからです。ありんすちやんは両手をわきわきさせてユリの胸を揉み始めました。

「ありんす様? 一体なにを?」

ありんすちやんはユリの胸を揉んだ手を自分の胸に当てます。

「これでよし」

ありんすちやんは満足したように頷くと、トテトテと駆け出しました。

「ありんす様ー? ボクの胸をなんでー?」

ユリはありんすちゃんに問いかけましたがそのままありんすちゃんは走り去ってしまいました。

※ ※ ※

次にありんすちゃんが姿を見せたのは第六階層でした。

「おやー？ ありんすちゃんじゃん。あたしに用かな？」

アウラがありんすちゃんに声を掛けましたが、ありんすちゃんは無言でアウラの胸元をじっと見ています。やがて小さく「プツ」と笑うとトテトテと走り去っていききました。「うーん……なんか感じ悪い」

※ ※ ※

アルベドはアインズの部屋のベッドの中で思い出に浸っていました。ナザリック地下大墳墓の玉座の間でアインズがアルベドに触れてよいかと尋ねた時の事を——そして「構わないな？」と力強く言いながら胸に手を伸ばして——

「モミモミモミ……」

アルベドが我に帰るといつの間にかありんすちやんがいて、アルベドの胸を両手で揉んでいました。ひとしきり揉み終わると今度は自分の胸を触ります。

「ちよ、ありんすちやん？ ……あんた……」

※ ※ ※

「オツパイが大きくなるおまじないでありんちゅ」

アインズの執務室に連れてこられたありんすちやんは胸を張って答えました。アインズは子供のする事と笑って済ましたかったのですが、いかんせん被害者がたくさんいすぎました。ここは穏便に解決しなくてはならないでしょう。

アインズは考え考え言葉を絞りだしました。

「ありんすちやんよ。私はお前の創造主のペロロンチーノさんとは仲が良かった。おそらくパンドラズ・アクターを除けばありんすちやん、つまりシャルティアについて一番詳しいかもしれない」

ありんすちやんは神妙そうな表情でアインズの言葉に耳を傾けています。

「ある日、ペロロンチーノさんが酷く愚痴をこぼしていた事があった。その時、ペロロンチーノさんははつきりと言った。『オツパイなんて飾りです。エロい人にはわからんです』と。そして更に『貧乳はステータスだ。稀少価値だ』とも」

ありんすちゃんの顔はみるみる明るくなっていききました。

「無理に背伸びする事はペロロンチーノさんも望まないだろう」

「わかりました……」

ありんすちゃんはアインズに向かって深々とお辞儀をしました。アインズはほっとしました。どうやらこれで無事に解決出来たみたいです。

※ ※ ※

ちなみに翌日、アウラとマーレからありんすちゃんが胸を撫でに来るといふ苦情があつたそうです。まあ、ありんすちゃんは5歳児位の女の子ですから、仕方ありませんよね。



## 083ありんすちやんとからっぽのヨロイ

今日のありんすちやんはナザリックの地表部に建てられたログハウスにいました。忙しそうにしている戦闘メイド——今日はソリユシヤンとエントマがいましたが——にお構い無しに、窓に顔をつき出した格好でうとうととしています。

「どうでもいいんだけど、ここはあ、託児所じゃあないんだけどおー?」

エントマがありんすちやんに聞こえるように愚痴を言いましたが、ありんすちやんは自分の事を言われたとは気づかないみたいです。気持ち良い春のポカポカとした日射しにありんすちやんはうつらうつらしています。

と、鼻がムズムズして……

「くちゅん!」

小さくしゃみと共にありんすちやんの姿が消えてしまいました。

※ ※ ※

気がつくときありんすちゃんは狭い所にいました。どうやらテレポーションでどこかに移動してしまつたみたいですね。窮屈な中で懸命にもがいているとピヨコンと頭が外に飛び出しました。周りを見回すとどうやら洞窟のようでした。

「綺麗な剣でありんちゆね」

洞窟の壁には大きくて綺麗な飾りが一杯ついた剣が飾られていたので、つい、ありんすちゃんはため息をつきました。きつとありんすちゃんはこの剣の持ち主になる為にテレポーションしたに違いありません。偶然たまたまテレポーションしたら剣があつた、なんていう夢のない話では無いと思います。多分。

ありんすちゃんは剣に手を伸ばそうとしましたが、頭を出している場所の他に出口が無いみたいで手を出すことが出来ません。すぐ近くに綺麗な素敵な剣があるのに手が届きません。こんな素敵な剣をアインズ様にプレゼントしたらきつとアインズ様は大喜びしてくれるでしょう。ありんすちゃんは身体ごと倒して剣の側まで転がる事になりました。

「ゴオオオン！」

ありんすちゃんが倒れると大きな音がしました。なんとという事でしょう。ありんすちゃんが入っていたのは金属製の鎧でした。そして——ありんすちゃんは今まで気が

つきませんでした。剣のすぐ下に白金の鱗の竜がいました。白金の竜はゆつくりと起き上がり辺りを見回します。

きつとあの剣の番をしている竜王に違いありません。戦えばおそらく勝てない相手ではなさそうですが、今のありんすちやんは鎧にはまっついで文字どおり手も足も出ない状態です。

(……これはみちゆからないようにちないといけないでありますちゆ)

ありんすちやんはほつべたを膨らませて鎧のような顔をしました。

「なんだ……君か。ずいぶん久しぶりだね。まだ冒険者をしているのかい？」

「冒険者はとうに引退したさ。代わりにインベルンの泣き虫に任せて、じやな」

いつの間にか白金の竜王の隣に老婆が来ていて、仲良さそうに話をしていました。

「彼女を泣き虫呼ばわりするのは君位のものだよ。……しかしまあ、よく冒険者になる事を認めたものだね？」

「簡単さ。ちよつとばかりボコボコにやつつけてやったのさ」

老婆はニヤリと笑いました。

「そうか。それは彼女にとつては良かったかもしれないね。……魔王との戦いでは彼女にも世話になったから幸せになって欲しいものだね」

「……ふん。それは難しいじやろうて。魔王との戦いで儂が一緒に戦った仲間はお主で

はなくてあそこに転がっている空っぽの鎧だったかの」

二人はじつとありんすちゃんを見つめました。ありんすちゃんはさらにほっぺたを膨らませて鎧の真似をします。

ありんすちゃん渾身の演技で二人共ありんすちゃんの存在に気がつかないようです。

「……昔の事さ。それに別に騙そうとした訳じゃない。」

白金の竜王の言葉を老婆は聞き流して尋ねた。

「激しい戦いじゃったみたいじゃな？ ……これも揺り戻しかの？」

老婆の鋭い視線は鎧に大きく開いた穴から顔を出しているありんすちゃんを居抜きました。ありんすちゃんは更に更にほっぺたを膨らませて鎧の真似をします。

「それはどうか……確かに強大な力を持った吸血鬼だったけれど。邪悪な存在なのは間違いないみたいだった」

「お主が全力で戦えば勝てない相手はいないじやろうて」

白金の竜王はありんすちゃんをじつと見つめながら答えました。

「ところで君に渡した指輪はどうしたのかい？」

「あんなもの、小僧めにくれてしまったわ」

老婆の答えを聞いて白金の竜王は少し悲しそうな顔をしましたが、ありんすちゃんは鎧の真似で必死な為、気がつきませんでした。さすがにほっぺたを膨らませ続けてきた

ありんすちやんも我慢出来なくなってきたので――

「へテレポーテーチヨン」でありんちゅ！」

初めてありんすちやんの存在に気がついた白金の竜王と老婆の驚く顔がぼやけ……  
ありんすちやんはナザリツクの入り口に戻ってきました。

「おちっ！」

そして――ありんすちやんは大急ぎでお手洗いに向かうのです。仕方ありません  
よね。だつてありんすちやんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## 084 ありんすちゃん 07211919

ポカポカとした穏やかな昼下がりに、ありんすちゃんとアウラはナザリツク地下大墳墓の第六階層にある山小屋でのんびりとお茶をしていました。ありんすちゃんはアツプルティーに角砂糖を三ついれて、ちよつと悩んでからもうひとつ入れました。

「やつぱりちやとうはよつちゆ、でありんちゆね」

ありんすちゃんはカップをすすると満足そうに言いました。

「……うーん……そうだね」

アウラが相づちを打ちましたが、なんだか上の空みたいです。

「アツプルティーだとケーキが食べたいでありんちゆね。ありんちゆちはモンブランがしゆきでありんちゆ」

「……うーん……そうだね」

どうやらアウラはありんすちゃんの言葉を聞き流していただけみたいです。それもそのはず、アウラはさつきからアインズ様に頂いたぶくぶく茶釜様の声が入ったバンドをうっとりしながら眺めていたのです。

ありんすちゃんだって、アインズ様からペロロンチーノ様の百科事典を頂いたのです

から羨ましくなんてないですよね。ね？

ニヤニヤと笑みが崩れているアウラをじつと羨ましそうに眺めていたありんすちゃんはアウラに尋ねました。

「ちよう言えばアインジユちゆまがタイマーをセットしないように言つてた時間があるんでありんちゆよね？」

「うーん……たしか0721と1919にはセットしちやいけないってアインズ様に命じられているよ」

ありんすちゃんの瞳がキラーンと光りました。

「ちよのしゆうじ、きつと意味があるんでありんちゆよ」

「うーん……でもアインズ様から命じられているからね。やめておくね」

「ちよういえば……この前変な箱をみちゆけたでありんちゆ」

ありんすちゃんは最近、屍蠟玄室の奥で見つけた謎の箱の話をしました。頑丈で鍵がかかっており、どうやらテンキー部分で暗証番号を入力しないと開けられないみたいですよ。

「へー。面白そうだね。もしかしたら07211919で開いちやつたりするかもね？」

ありんすちゃんとアウラは屍蠟玄室で見つけた箱を開けてみる事にしました。

「ありんすちゃん、じゃああたしが番号を押すからね。えーと……0 7 2 1  
………」

アウラが07211919と押すとカチャリと音がして箱が開きました。そして中には金色のおしやぶりが入っていました。

※ ※ ※

「……うむ……こ、これは………」

ありんすちゃん達が持ってきたアイテムを魔法——〈道具上位鑑定〉をかけたインズは思わず唸りました。ありんすちゃんとアウラは緊張した面持ちでインズの言葉を待ちました。

「うむ。このアイテムは『星に願いを』と良く似た効果がある。肉体の変化に限定されるものの、三回だけ発動出来るアイテムだったようだな。既に一回発動した後なので残り二回みただが……これはきつとペロロンチーノさんが所持していたアイテムだろうね。だからありんすちゃんが持っているといい」



※ ※ ※

再び第六階層に戻って来たありんすちゃんとアウラはとても興奮していました。この金のおしやぶりは大変なアイテムだったのでしたから。

「ありんすちゃん、これはよくよく考えて使わないといけないね——え？」

アウラがありんすちゃんを見るとなんとありんすちゃんは金のおしやぶりをくわえています。どうやら金のおしやぶりを発動させるつもりみたいです。

「ちよ、ちよつと待ってっ！」

「おつきくなるでありんちゅ！」

ありんすちゃんが願い事を叫ぶと同時に金のおしやぶりが光りました。

——そして——なんとありんすちゃんは10Mの大きさになってしまいました。

ありんすちゃんは大人になるつもりで『大きく』して欲しかったのですが、金のおしやぶりはそのまま『大きく』してしまっただけですね。

その後最後の発動でもとの大きさになんとか戻る事が出来ましたが、結局、せつかく

のアイテムが無駄になってしまいました。仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## 085ありんすちゃんひきこもる

守護者統括アルベドはいささか緊張していました。ナザリックの繁栄の為のある計画の為、アインズ様とデミウルゴスが当分不在となっていたからです。

「アインズ様の留守をしつかり守らなくては……ナザリックはいわば家族。まるで家族の長たるアインズ様の留守を守る新妻の気分ね。そうね、新妻。……ああ……アインズ様……」

アルベドがありんすちゃんを訪ねて第二階層にやって来ると屍蠟玄室の周りにシモベ達が集まっていました。

「……これはなんの騒ぎ？ シャルティア……ありんすちゃんはいるかしら？」

「……アルベド様。その……ありんす様はいらっしゃるのですが……その……」

シモベのヴァンパイア・プライドが言いにくそうに答えました。代わりに他のアンデッドのシモベが答えました。

「……恐れながら……ありんす様は自室にこもって出てこないのです……至高の御方から与えられた仕事もせずこうして籠っておられます」

アルベドは金色の瞳を細くしました。これは至高の御方への反逆にも等しい行為、ま

さかまたしてもありんすちゃんが反逆したという事なのでは——が、しかし——アルベドは思い直しました。いまのシャルティアはシャルティアではなくありんすちゃん。所詮は幼児、大それた考えなしに仕事をサボっただけかもしれない。

ましてやアインズ様が不在の最中に最悪な事件——シャルティアが再び反逆する——などあつてはならないのです。

「わかったわ。この件は私になんとかします。あなた達はありんすちゃんの代わりに階層の巡回と警戒をしつかりしておきなさい」

(……………さて……………アインズ様の留守にこの問題を片付けてしまわなくては……………)

※ ※ ※

アルベドの命を受けてアウラが屍蠟玄室の前にやって来ました。アウラはまず室内の様子を窺います。どうやらありんすちゃんは誰かと会話をしているようでした。

『……………』  
『ちようでありんちゆか。やっぱりちようでありんちゆよね』

『……………』

『もつと言うのでありんちゅ』

アウラは扉をノックしてみました。

「ありんすちゃん？ いるんでしょ？ あたしだけど、開けて」

途端に室内がシーンと静まり返りました。どうやらありんすちゃんは息を殺して居留守を使っているようです。

「ありんすちゃん？ いないの？」

アウラはなにやら閃いたみたいです。

「ありんすちゃんいないのかな？ いないのなら『いない』って返事したら諦めるけど？」

「ありんちゅちやいないでありんちゅ！」

ありんすちゃんはついつい返事をしてしまいました。すぐに騙された事に気がつきましたが後の祭りです。仕方なくしぶしぶとアウラを招き入れました。

アウラが中に入るとありんすちゃんは死の宝珠の言葉に聞き入っているところでした。

「なんと美しい、なんと賢い、誠に素晴らしいありんす様……」

「当然でありんちゅ」

「世界中で最も凛々しく賢く美しいありんす様は正に我が全てを捧げるに相応しい」

「もつと言うのでありんちゅ」

アウラは何も言わずに死の宝珠を掴むと持つて来た袋に押し込んでしまいました。ありんすちやんは口を尖らせて抗議をしましたが、アウラは黙って首を振るのです。「ところでありんすちやん。この宝珠、何処で拾ったの？」

ありんすちやんはなかなか答えようとしません。アウラは肩をすくめて言いました。「これはアインズ様がハムスケに預けた宝珠じゃん。どうせハムスケが口から落としたりを拾ったんじゃないの？ ……とりあえずこれはあたしがアルベドに渡すから」

ありんすちやんはいいややをしました。アウラは怒った顔で『仕事しろ』と睨むので諦めざるを得ませんでした。

泣きそうなありんすちやんを少し可哀想に思ったアウラは優しく声をかけました。

「ま、この宝珠の言葉なんて単なるゴマすりだから、聞く必要ないんだよ。与えられた仕事を放つたらかしてこんなおべっかに喜ぶなんてアインズ様は望まないと思うよ」

※ ※ ※

それからしばらくたってエ・ランテルの町を用事で訪れたアウラはハムスケに声をか

けられました。

「大変でござる。それがしが殿より預かった玉を何処かに落としたでござる。なんとか殿が帰ってくる前に見つけないと命が無いでござる」

アウラはハムスケをなだめ、その夜、ナザリック地下大墳墓第九階層のアルベドの私室の前にやって来ると……

部屋の中からアルベドが誰かと話しながらくつつふと笑う声が聞こえてきたのでした。

仕方ありませんよね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の………あれ？ 失礼しました。

## 086 ありんすちゃんこまらす

アルベドが考え事をしながらナザリツク地下大墳墓第二階層を歩いていた時の事です。いきなり屍蟻玄室の扉が開いて、中からズロース一枚の姿のありんすちゃんが飛び出してきました。

「ありんす様、この服を着てください」

「キヤツキヤツ！ イヤでありんちゅ」

ありんすちゃんの後をヴァンパイア・プライドがいつものボールガウンを持って追いかけます。二人はアルベドの周りをグルグル回って追いかけていました。

「いい加減にしなさい！ これは何の騒ぎなの！」

アルベドの叫びにヴァンパイア・プライドが立ちすくむと、ありんすちゃんはスルリと脇を抜けて逃げて行ってしまいました。

アルベドは平伏するヴァンパイア・プライドを起こすと優しく尋ねました。

「一体これは何の騒ぎかしら？」

ヴァンパイア・プライドはまたもや平伏して答えました。



「恐れながら……ありんす様は服を着たくない気分だと仰せになりまして、その……裸で逃げまわっているのをごさいます。なんでもハダカンボ天国わーい、だそうで……」

アルベドはため息をつきました。ありんすちゃんは幼児ではあるものの、階層守護者であり、シモベ風情ではどうしようもありません。

「わかったわ。ありんすちゃんには誰か適任者をお目付け役にする事にしましょう」

アルベドはとりあえずヴァンパイア・プライドを戻らせると戦闘メイドのユリ・アルファにメッセージを飛ばしました。

「ユリ、貴女は確か暇だったわよね？ ちょっと力を借りたいのだけれど」

「これはアルベド様。実は現在アインズ様のご下命にてエ・ランテルに孤児院と学校を作っております……」

「……そう。それなら良いわ。貴女はアインズ様の命令をしっかりとこなさない」

アルベドは悩みました。こういう事は普段ならアウラに頼むのですが、アインズ不在の折りに階層守護者をありんすちゃんのお守りにする訳にはいきません。せめて戦闘メイドの誰かに……と、アルベドは適任者を思い浮かべて即座にメッセージを発動しました。

※ ※ ※

「なんかあーよくわかんないけどおー私がありんすちゃんのお面倒みるんだってー」

戦闘メイドのエントマ・ヴァシリツサがだるそうな口調で言いました。ありんすちゃんは相変わらずズロース一枚の格好でふざけています。

「……そおれえでえ、ありんすちゃんは真面目にする事おー。ふざけているとおーこれだよおー」

と、ありんすちゃんの目の前で不意にエントマの顔が外れて落ちました。ありんすちゃんはよほど怖かったらしく、表情がこわばり足下にはなにやら温かいものが……  
それ以来ありんすちゃんはおとなしくなったそうです。

※ ※ ※

実はその後、エントマはありんすちゃんのお目付け役を外されてしまいました。

ある晩の事です。アルベドの部屋に一人の領域守護者が訪ねてきました。彼はあり

んすちゃんのお目付け役が第二階層にいる事で眷属達が恐慌状態になっているのでアルベドの居室に避難させて欲しい、という要望をしてきたのでした。

—アルベドはその要望を断るかわりにエントマをありんすちゃんのお目付け役から降ろしたのでした。

—それでもありんすちゃんはその後もおとなしくしていたそうです。よほど怖い思いをしたのでしょうかね。

仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## 087 ありんすちゃんとうアウアウちゃん

ありんすちゃんが階層の見回りをしています。今日は随分と気合いが入っているのでゴツズアイテムのスポイトランスを振り回しながら一人で見回りをしています。いつもだったらヴァンパイア・ブライドに抱っこされての見回りですから偉いですね。遠目で見るとありんすちゃんが歩いているのかスポイトランスが歩いているのかわかりませんが……

「クツクツクツ……こうして完全不可視化で近づいてありんすちゃんを驚かせてやるっすよ。あー楽しみっす」

おや？ 姿が見えませんが何やらありんすちゃんにイタズラしようとする誰かがいるみたいですね。ありんすちゃんは気がつかないみたいです。

「ありんすちゃん。やつほー！ ……ん？ ルプスレギナじゃん」

ちようどアウラがやって来ました。アウラはどうやら隠れているルプスレギナに気がついたみたいです。

ありんすちゃんはアウラに気がついて手をふっています。と、いきなりルプスレギナ

が完全不可視化したままありんすちやんを突き飛ばしました。

「——あぶない！」

ありんすちやんがコロコロ転がっていくのをアウラが慌てて止めます。その時スポイトランスがアウラを直撃してしまいました。

※ ※ ※

「あちやー……これはまずいっすね。まさかこんな事になるとは思わなかったっすよ」

「可愛いでありんちゅ」

ルプスレギナとありんすちやんは変わり果てたアウラを目の前にしていました。ありんすちやんのスポイトランスが運悪くアウラのお尻に刺さってしまい、精気を一気に吸われたアウラがなんと赤ちやんになってしまったのです。

「シユポイトランチュにこんな能力があったとはちらかなかったですでありんちゅ。アウアウ可愛いでありんちゅ」

「あうー。だあーだあー」

完全に赤ちやんになってしまったアウラはネックレスの金のドングリをおしゃぶり

のように舐め始めました。

「あうー。おちまんちゃん、だうー」

「……お、お姉ちゃん？ ……あ、あの……」

金のドングリはマールレの銀のドングリと通話するマジックアイテムだった為、マールレの困惑する声が聞こえてきました。

「マールレも第三階層に来るでありんちゆ。アウアウが大変なんでありんちゆ」

「えー！ お、お姉ちゃんが？ ……すぐ行きます」

「マンレあきちゆるちゆるんね。だうー」

赤ちゃんになったアウラ——アウアウちゃんは何やら一生懸命にしゃべっています  
が何を言っているかわかりませんでした。

「——おね、お姉ちゃん！ えー！」

到着したマールレが目を丸くしました。無理もありません。まさかアウラが赤ちゃん  
になってしまふなんて、ありんすちちゃんも予想していませんでしたから。

「今日からはマールレがアウアウのお兄ちゃんでありんちゆね。良かったでありんちゆ」

アウアウちゃんはマールレにハイハイで近づくと登ろうとし始めました。

「マールレ、抱っこしゆるでありんちゆ」

マールレがアウアウちゃんを抱っこするとアウアウちゃんはマールレの耳に手を伸ばし

て掴もうとしました。マーレが嫌がって頭を降ると……

「う、うわーん！ うわわわーん！」

アウアウちゃんが泣き出しました。と、アウアウちゃんの近くで空間が歪み……なんと大きな魔獣が次々と召喚されました。

※ ※ ※

「……………これはなんとかしないとまずいつすね。うーん……」

「このままだとありんちゅちやのお家もこわちやれちやうでありんちゅ」

「お、お姉ちゃん……耳をしゃぶるのはやめて……はふん」

三人はマーレの耳をしゃぶりながらご機嫌のアウアウちゃんを眺めながらため息をついたのでした。

仕方ありませんよね。だってアウアウちゃんはまだ小さな赤ちゃんに過ぎませんか。

その後、スポイトランスのエネルギーを戻す事が出来て、なんとかアウラを元に戻せ

た  
そ  
う  
で  
す。



## 088ありんすちやんとスポイトランスとマーレとおしり

今日もありんすちやんが階層の見回りをしています。うーん……前回、あんな事があったのにまたもや真紅のフルプレートにゴッズアイテムのスポイトランスを片手にしていますね。これはまた何かトラブルが起きそうです。

おや？ スポイトランスを振り振り歩くありんすちやんのすぐ後ろにまたもや完全不可視化したルプスレギナがいます。また、ありんすちやんをびつくりさせるつもりですよ。

そのルプスレギナのすぐ後ろに、やはり完全不可視化したアウラがいます。ルプスレギナは全く気づいていないようです。

「あれ？ ……ありんすちやん。お、お姉ちゃん来ませんでしたか？」

マーレがありんすちやんに声をかけてきました。その瞬間——アウラが姿を現し、ルプスレギナがびつくりして駆け出し、ルプスレギナにぶつかったあたりんすちやんがコロコロと転がって……

「ぷすうー」

なんとありんすちゃんのスポイトランスがマーレのお尻に刺さってしまいました。

「ちよつと、マーレ！ あんた赤ちゃんに？」

アウラがマーレに駆け寄りました。マーレは身体をくの字に曲げてお尻を突き出した姿勢で気絶していました。

「おやおや？ マーレ様は赤ちゃんになつていないっすね？」

ルプスレギナは感心したように言いました。ありんすちゃんはマーレのお尻に刺さったままのスポイトランスを見て、感激していました。

「さすがはゴッドアイテムでありんちゆね……マーレのお尻にみごちよに刺さっているでありんちゆ」

ありんすちゃんはスポイトランスを突っついてみました。するとスポイトランスはマーレのお尻の上でユラーンと揺れました。

「……う、うーん……あれ？ お姉ちゃん？」

しばらくするとマーレが目を覚めました。すぐに起き上がろうとしましたが、スポイトランスが地面に当たってまた倒れてしまいました。

「え、えー？ ……どうなってるの？」

「マーレにはしつぽが生えちゃでありんちゆよ」

得意そうにありんすちやんが説明します。確かに現在のマーレはお尻からスポイトランスが生えているように見えなくてもないですが……

「ヒヤツハツハツハ……確かにマーレ様にはしつぽが出来たみたいですよ？ ……どうします？」

「……こ、こんなのイヤだよ。……すぐにぬ、抜いて欲しいな」

ありんすちやんはちよつとガツカリしました。偶然とはいえスポイトランスの刺さり方がまさに芸術的だったのですから。このまま型をとって銅像にして飾りたいくらい、気に入っていたのです。

「……マーレ、じゃああたし達が引っこ抜くから。……いくよー！」

「——あいたたた。お姉ちゃん、痛い」

なんとという事でしょう。スポイトランスの先がひつかかかっていてなかなか抜けません。ありんすちやんはこのままマーレがスポイトランスのしつぽを付けたままにしたら良いのに、と思いました。

「うーん……困ったつすね。このままだとトイレでふんばってもらうしかなさそうつすね。ありんすちやん、このままだとせつかくのスポイトランス、臭くなっちゃうつす」

……それは大変です。ありんすちやんは事の重大さがようやくわかってきました。トイレから拾ったスポイトランスをこれまでと同じように使えるでしょうか？ 答え

はノーです。デリケートなありんすちゃんにはとても無理です。

「ち、ちよつと、ありんすちゃん……な、何を？ ……いたつ！ イタタタタ！ イタタ

タタ——」

——スツポーン!! ——

マーレのお尻に刺さったスポイトランスはありんすちゃんにより、なんとか無事に引き抜く事が出来ました。尚、マーレはしばらく安静にしなくてはならなくなつたそうです。

仕方ありませんよね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## 089ありんすちやんときんのはくちよう

ナザリック地下大墳墓第二階層——ここには領域守護者の恐怖公がいます。おや？  
戦闘メイドの一人、エントマがやって来ました。珍しく鼻唄混じりでスキップしながらやって来ますね。

「ふんふん♪」

エントマは恐怖公の眷属が蠢く〈黒棺〉へ繋がっている穴へ飛び込みました。

他の女性NPC達が苦手になっている恐怖公の眷属ですが、エントマにとっては単なるおやつなんですよね。

「今日はあ、料理長にたのんでえ、カレースパイスう。振りかけるともつとおーいしーサイコー！」

小瓶から振りかけて黄色くなつたのをポリポリ食べ始めました。音だけ聞いていると、美味しそうなんですが……

「あの……せめて一週間おき位にしてもらえませんか？」

王冠を着けた恐怖公が丁寧な物腰で嘆願しますが、エントマは聞こえないふりをしています。それどころか、その内恐怖公にまでカレースパイスを振りかけてきたので、恐

怖公は慌てて逃げます。

「ちよ……ねえ、ありんすちゃん様、エントマ嬢に何か言つてはくれませんか？」

辺りを良く見ると〈黒棺〉に珍しくありんすちゃんがいました。普段は恐怖公が苦手なのですが、今日はボケーとしながら座り込んでいたのです。

「うーん……キレイでありんちゆね」

ありんすちゃんは恐怖公の『シルバー・ゴーレム・コックローチ』が放つ銀色の輝きに見とれていたのです。

「なんだあ。ありんすちゃんいたんだあ？ ……それ、欲しいの？」

エントマがありんすちゃんに訊ねるとありんすちゃんは即答します。

「欲ちいでありんちゆ。ありんちゆちゃんもピカピカの乗り物欲ちいでありんちゆね」

恐怖公は慌てました。

「いや、これは私めがかの至高のお方、るし☆ふあー様より賜わりし物。たとえ階層守護者殿といえど譲りする事は出来ませぬな」

色をなす恐怖公をよそに相変わらずカレー味の恐怖公の眷属をポリポリ食べていたエントマが耳寄りの情報を話しました。

「そおいえばあ、この間アインズ様の命令でえ、宝物庫を片付けたユリ姉が色々貰つて来たんだけどお。その中から探してみたらあ？」

ありんすちゃんは大喜びでエントマの案内で倉庫に向かいました。

※ ※ ※

「ほら、ちらかったままだけどお。探してみればあ?」

「探ちてみるで、ありんちゅう」

倉庫には宝物庫から運ばれてきた比較的価値の低い物が山積みになっていました。とはいえ、宝物庫の中では価値が低くてもどれも中々の物ばかりで、まさに宝の山です。恐怖公のシルバー・ゴーレム・コックローチが銀色で出来ているので、ありんすちゃんには金で出来た乗り物が良さそうですね。まあ、どうせ本物の金で出来ていなくても金色なら満足すると思います……

「見ちゆけたでありんちゅう! これが気に入ったでありんちゅう」

ありんすちゃんは金の白鳥を引っ張り出してきました。ありんすちゃんが座るのに丁度良い大きさで、しかも頭の部分の両側につかまりやすい棒まで付いています。

ありんすちゃんは金の白鳥に跨がると、魔法を発動させてふわふわと飛んでいきまし

た。

それからしばらく、ありんすちゃんはどこへ行くのにも金の白鳥に股がついていくのでした。

※ ※ ※

——そんなある日

アインズは久しぶりにナザリック地下大墳墓に戻って来ました。そこにふわふわと金の白鳥に股がつたありんすちゃんがやって来ました。

アインズは金の白鳥のおまるに得意そうに股がつてふわふわ飛んでいるありんすちゃんの姿に、思わず言葉を失ってしまうのでした。

仕方ありませんよね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。



## 090ありんすちやんのショー・マスト・ゴー・オン

——ナザリック地下大墳墓第九階層アインズの居室——アルベドがそわそわしながらアインズの寝室にいました。

「……アインズ様はまだお戻りになっていないみたいね……では、失礼して……そーれ！ ……はあはあはあ……今のうちにアインズ様の香りをお腹の中に溜め込んでおかないと……すうはあ、すうはあ……！ ……足音？ まさかアインズ様がお戻りに！」

部屋の主が戻って来た気配にアルベドはベッドから立ち上がると急いでベッドの下に潜り込みました。

「！」

するとそこには既に先客——いつの間にか転移していたありんすちやんがいたのでした。騒ぎだそうとしたありんすちやんの口を塞ぐとアルベドはありんすちやんを宥めました。アルベドの真剣な様子にありんすちやんも静かになりました。

アインズは部屋に入るとベッドに寝そべりました。

「……ん？ ……何だか生暖かい？」

「しやつきまでアルベ——」

ベッドの下で喋ろうとするありんすちゃんをアルベドが慌てて塞ぎます。幸い  
アインズは気が付かなかったようです。

「……威厳か……確かに大事な事だよ……組織のトップに立つものが弱腰だったら着  
いていこうとは思わないからな。とはいえ、いつでも威厳があるように振る舞えるとは  
限らぬ……うーん。もつと演技力があれば良いのにな……」

アインズの独り言を聞いてありんすちゃんの目が光りました。そうです。ありんす  
ちゃんは以前に『赤ずきんちゃん』を演じていますから、演技力には自信があります。

アルベドはベッドの下から出ようとするありんすちゃんを必死に止めます。

「さて、仕事に戻るとするか……ん？ 気のせいかな」

アインズは立ちあがり、ちよつとだけ不審げな視線をベッドの下の空間に向けました  
が何事もなかったかの様に部屋を後にしました。

アルベドとありんすちゃんはベッドの下から這い出すと、深くため息をつきました。

(アインズ様は演技力を求めていらつしやるの？ ……主君の求めるものを捧げるのが  
臣下の努め……くつつふつつふ……)

ニヤニヤしながら部屋を出ていくアルベドをよそにありんすちゃんはじつと坐り込  
んでいました。

※ ※ ※

「アインズ様！」

ナザリック地下大墳墓第九階層の廊下を歩いていたアインズはアルベドに呼び止められました。

「アルベド。どうしたのだ？」

「はい、アインズ様。あの、先日議題にありました……ふくり？ ……」

「福利厚生か？」

先日、アインズは各階層守護者を集めてナザリックの今後に関する意見を出させる為、組織における福利厚生者の必要性の話をしたのでした。

「ナザリックに劇場を建設しては如何でしょうか？ ナザリックの住人の中には娯楽を求める者も少なくないと思います。一定の需要はあるのではないのでしょうか」

アルベドは熱く語り続けました。いにしえの為政者が支配の為にいかに娯楽を活用してきたか、といった話を聞いている内にアインズの心も決まりました。

「うむ。で、演目はとうするのだ？ まずは台本が必要であろう？」

アルベドは胸元に抱えていた一冊の本を差し出しました。

「この書物はかつてアインズ様の世界から持ち込まれたもので『ロミオとジュリエット』

で御座います。司書のテイトウス曰く、文学的かつエンターテイメント性に溢れた作品との事ですので、演目には最適かと」

「うむ」

アインズが頷きかけた瞬間――

「ちよつと待ちゆでありんちゅー！」

一冊の本を抱えたありんすちやんが走つて来ました。

「ありんちゅちやは赤じゅきん、しゆるでありんちゅー！」

ありんすちやんは持つていた絵本『赤ずきんちゃん』をアインズに向けました。

「ちよつと、ありんすちやん。こちらに來なさい」

アルベドはありんすちやんを脇に連れ出すと説得を試みました。ありんすちやんは以前に演じた『赤ずきんちゃん』に思い入れがあるので、なかなか折れませんでした。それでも最終的にはモンブランケーキ三十個で演目を『ロミオとジュリエット』にする事に同意する事になりました。

「で、演目は『ロミオとジュリエット』で良いのだな？」

「はい。アインズ様」

「仕方ないから良いでありんちゅー」

そこに騒ぎを聞きつけてデミウルゴスがやって来ました。

「随分と盛り上がりつつあるみたいですね。で、配役はどうするおつもりですか？」

アルベドが口を開きました。

「主人公のロミオ様は高貴な貴族の長子でもありますから、アインズ様をお願いしたく存じます。そして、ヒロインのジュリエットには——」

「ありんちゅちゃー！」

ありんすちやんが手を挙げました。鼻息もとても荒くなっています。

「え、えつと……それで良いのかね？」

デミウルゴスが困惑した面持ちで周りを見ます。

「よくないわよ！ ジュリエットには私が！」

アルベドも一步も引かないようです。

「……では、公平にオーディションで決める、というのはどうでしょう？」

しかし、ありんすちやんが首を縦に振りません。仕方ないので結局、ヒロインのジュリエットはアルベドとありんすちやんのダブルキャストにする事になりました。

（いろいろ手間取ってしまったけれども劇のラストシーンでアインズ様とキス出来そうだからよしとすべきね）

アルベドは公演までの時を夢見ながら稽古に励むのでした。

※ ※ ※

いよいよ公演当日——

ロミオとジュリエットで有名なバルコニーのシーンが始まりました。アインズのロミオが庭からバルコニーに呼び掛けると、バルコニーの窓からジュリエットのありんすちゃんが出てきます。

「おお、ロミオ……あなちやはどうちて……」

おやおや？ ありんすちゃんがセリフにつまってしまったみたいですね。大丈夫でしようか？

「ロミオ……あなちやのお口はどうちてちよんなにおつきいの？」

……ありんすちゃん……そのセリフは『赤ずきんちゃん』ですよ？

仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

※ ※ ※

「ふう……何だか今日は疲れたな」

その日、ロミオを演じきったアインズは自分の居室に戻ってきました。

「うん？ ……何だか濡れている？」

アインズが訝しげに見た場所は先日ありんすちゃんが座り込んでいた場所でした。

## 091 ありんすちやんのたなばた

ナザリック地下大墳墓 第十階層玉座の間——玉座のアインズの前に各階層守護者が揃いました。

「アインズ様、守護者統括アルベド以下各階層守護者、ガルガンチュア及びヴィクティムを除き御身の前に揃いまして御座います」

「うむ。ご苦労。……さて、皆に集まって貰ったのは、実は明日が七夕でな。たまには皆で七夕祭りをするのも悪くないと思つてな」

「たなばた……ですか？ アインズ様、それは一体どの様な？」

アルベド以下階層守護者達は七夕について初耳だったようでした。ただ、一人を除いて——ありんすちやんは鼻からフンスと息を吐き出しながらアインズの前に進み出ました。

「アルベドは知らないでありんちゆか？ 『たなばた』とはぼた餅が降ってくるでありんちゆ」

ありんすちやんは昨日ルプスレギナから教わった知識を早速披露しました。残念ながらそれは七夕ではなくてタナばたでしたが……もしかしたらルプスレギナはわざと



間違つた情報を与えたのかもしれませんが。

「ゴホン……七夕とは毎年七月七日の一日だけ、天の川を隔てて離ればなれになつていた恋人が会えるという言い伝えがあつてな、笹の葉に願い事を書いた短冊を吊るすと叶えてくれる、という風習なのだ」

「それはなかなか風情がありますな。では、早速準備するのでしょうか。さいわい、短冊には私の所の羊皮紙が使えると思います。笹という植物は……」

デミウルゴスが思案しているとアウラが意見を出しました。

「あたしの階層のザイトルクワエを使つたらいいんじゃないかな？ 最近また枝が伸びてきたから短冊を沢山ぶら下げるのに丁度いいと思います」

「それは丁度良いわね。そうだわ。せっかくだから、短冊もカラフルにしましょう。メイド達には飾りを作らせて……主だつたシモベ達にも短冊に願い事を書かせても良いわね？」

アルベドの意見にデミウルゴスも頷きました。

「では、カラフルな短冊の準備と配布は私、ザイトルクワエの飾り作りと飾り付けはアルベドとアウラに任せて、他の者はシモベ達に知らせたり、準備をするという事で良いかな？」

「おっけー。任せておいて。……では、アインズ様、失礼します」

「了解シタ……全テハ御方ノ思シ召シノタメニ……」

各階層守護者達は忙しそうにそれぞれアインズに挨拶をすると準備に向かいました。後に残っていたデミウルゴスはアインズにお辞儀をすと言いました。

「……今回の一件、アインズ様の意図は理解して御座います。さすがはアインズ様」  
 「え？……なんの事？……いやあ、ただ、七夕祭りをしたと思うただけで別に……」

「……うむ。さすがはデミウルゴス。お前には見抜かれてしまったか」

デミウルゴスは言葉を続けました。

「今回、願い事を短冊に書かせる事で配下の欲求や不満をいち早く発見しようとするアインズ様の真意には誠に畏れ入ります」

(……成程。確かに短冊を見れば階層守護者達やシモベ達の望みがわかるな)

「うむ。まあ、そんな所だ。ではデミウルゴス、頼んだぞ」

「はっ。お任せ下さい」

※ ※ ※

ナザリック地下大墳墓第六階層のザイトルクワエには色紙を鎖状に繋げた飾りやカラフルな短冊が沢山付けられています。

アインズはコツソリ短冊を見て回ります。

『世界征服 デミウルゴス』

『日々コレ鍛練アルノミ コキュートス』

『ロロロが欲しい アウラ』

それぞれの階層守護者が書いた短冊を見ながらアインズは心暖まる気持ちになりました。

『アインズ様のお嫁さん マーレ』

「——ん？」

マーレの短冊を見たアインズは一瞬、硬直してしまいました。そして——

『アインズ様の赤ちゃんを授かりますように アルベド』

（——こ、これは……）

茫然としたアインズはしばらくしてようやく我に返りました。と、ある事に気がつきました。

セバス、プレイアデス、領域守護者から一般メイドまで短冊を吊るしていましたが、階層守護者のありんすちゃんの短冊がありませんでした。

アインズは第二階層の屍蠟玄室の様子を見に行く事にしました。

※ ※ ※

屍蠟玄室ではありんすちゃんが居眠りしてしまいました。どうやら沢山の短冊に願い事を書いてある内に眠ってしまったようでした。

アインズはありんすちゃんの周りに落ちている短冊を拾い上げました。

『おおきくなりたい』

『いなりずし』

『しょーとけーき』

(……子供らしい願い事じゃないか。七夕らしくて良いな)

『きんののべぼう』

『うちゅうろけつと』

(……子供らしく夢があつて良いな)

『とろろいも』

『もんぶらん』

(……食べ物が多いみたいだな?)

そして、最後の書きかけの短冊を拾い上げたアイズは悩みました。

『んい』

(……………ウンコ……………)

ありんすちゃんは願い事を短冊に書いている内に『しりとりに夢中になっちゃったみたいですね。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## 092 ありんすちゃんあこがれる

今日もありんすちゃん二人のヴァンパイア・ブライドと一緒にナザリツク地下大墳墓の第一階層から第三階層の巡回をしています。

おや？ なんだかいつもと違いますね。いつもなら、すぐに飽きてしまったり抱っこをせがむのに今日のありんすちゃんはそんな様子がありません。顔つきもなんだか少し凛々しく見えます。

第三階層まで巡回を終えると、ヴァンパイア・ブライドがありんすちゃんに向き直り、号令をかけます。

「Achtung! Heil A Linceechan!

号令、そしてありんすちゃんに対して敬礼をします。

「じーくなじやりつく、でありんちゅ」

うーん……なんだかイヤな予感がしますが……

※ ※ ※

アインズは暫くぶりにエ・ランテルの街のモモンの住居を訪れていました。

「……………うん？ アンデッド反応があるな。……………二つ？」

一つはハムスケが抱き枕がわりにしているデスナイトでした。そしてもう一つは……………どうやら建物内から反応しているようです。

（モモン、いや、パンドラズ・アクターにアンデッドの来客か？ ……それともズーラーノンの関係者か？）

アインズは〈完全不可視化〉を発動すると建物の中に入り、様子を伺いました。見ると居間でパンドラズ・アクターと一緒に小さな人影がありました。

「では、次のカッコいいセリフですが、愛していますという意味の言葉です。では、『R i e b t!』はい！」

「リーベ！ ……でありんちゅ」

「うーん……………もつと情熱的に感情を、そう、溢れる愛を込めて下さい」

「りーべ！ ……でありんちゅ」

なんとパンドラズ・アクターと一緒にいるのはありんすちゃんでした。ありんすちゃんはキラキラとした瞳でパンドラズ・アクターの大げさなジェスチャーに見とれていま

す。

「……………」

アインズはそんな二人の様子にため息をつくど、静かに扉を閉めて立ち去って行きま  
した。

※ ※ ※

それから暫くしたある日、ありんすちゃんの姿がナザリツク地下大墳墓の第九階層に  
あるアインズの執務室にありました。

「うむ。……その、だな。最近、シモベ達に敬礼をさせているそうだが?……」

アインズの問いかけにありんすちゃんは瞳をキラキラさせて答えました。

「カッコいいでありんちゅ」

「……ゴホン……そうか。格好が良いのか……うーむ」

ありんすちゃんは興奮しながら更に言葉を続けました。

「パンドラジュ・アクターカッコいいでありんちゅ。ありんちゅちやもカッコいくなり  
たいでありんちゅ」

ありんすちゃんは大袈裟な手振りを交えながらパンドラズ・アクターの格好の良さを



力説します。そんな有り様を前にしたアインズは力が抜けていくのを感じました。

(まさに黒歴史だ。こんな形で胃の痛くなる様な思いをするとは思わなかったな……)

「……そ、そうか……わかった。戻ってよろしい」

ありんすちゃんはアインズに向かい気を付けの姿勢を取ると――

「はい、アインジュちゃま、でありんちゅ」

――敬礼をし、踵を打ち鳴らして退出していききました。

「――パンドラズ・アクターを。パンドラズ・アクターにすぐ来るよう伝えよ」

ありんすちゃんが居なくなるとすぐにアインズは控えていた一般メイドに命じるのでした。

※ ※ ※

「――なんですと！ それではアインズ様はこのわたくしめにありんすちゃんが憧れるのを辞めさせよ？ ……それはアインズ様の本心なので御座いますでしょうか？」

目の前で仰々しい身振りで話すパンドラズ・アクターを眺めながら、アインズは喉元に酸っぱいものがこみ上げてくるような感覚に苦しめられていました。

(まさに黒歴史だ。でもさ、格好が良いって思ってたんだよな。若気の至りみたいな  
のなんだろうけどさ……)

「ふむ。しかしな、パンドラズ・アクターよ。貴様がその身振りやドイツ語の言い回しを  
する様に設定したのはこの私だ。そして私はお前以外のものがそれらを真似る事は許  
すべきではないと思うのだ」

アインズの言葉にパンドラズ・アクターはいたく感銘を受けたみたいでした。

「畏まりました。アインズ様。では私に一つ考えが御座います。それならありんすちゃん  
が私の真似を諦めてくれる事でしよう」

※ ※ ※

「ちゆまり、ありんちゆちやがありんちゆと言つてはいけない、でありんちゆか？」

翌日、第二階層の屍蠟玄室に訪れたパンドラズ・アクターの言葉にありんすちゃんは  
目を真ん丸くしました。

「実は私の話すドイツ語は完成された言語でして、『ありんす』等の形容詞や助動詞は加

える事は赦されないのです」

つまり、ありんすちゃんがパンドラズ・アクターの真似をするには『ありんす禁止』だと言っているのです。ありんすちゃんはずっと考え込みました。

でも、答えは一つに決まっていますよね。もし、ありんすちゃんが『ありんす禁止』になつたら、この物語は『ふしぎのくにの？ちゃん』になつてしまいますから。

目をつぶつて考え込んでいたありんすちゃんがパツチリと目を開きました。

「決めたでありんちゅ。ありんちゅ封印、するでありんちゅ」

「えー？」

※ ※ ※

パンドラズ・アクターからの〈ヘメッセージ〉を受けたアインズは酷く動揺しました。へアインズ様、かくなる上はいつそドイツ語をナザリックで流行らすのは——

アインズにとつて幸いな事でありんすちゃんのお熱はすぐに醒めて、翌日にはいつものありんすちゃんに戻っていたそうです。可哀相だったのはパンドラズ・アクターで、

あれだけファンだったありんすちゃんから『キモいでありんちゆ』と言われてシヨツク  
だったみたいです。

仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## 093ありんすちゃんのがーるずとーく

今日のありんすちゃんは朝からプリプリしていて不機嫌でした。実は昨日、アルベドとアウラのガールズトークから締め出されてしまったのでした。

「ありんすちゃん様、いかがなさいますか？」

ありんすちゃんに恐る恐るシモベのヴァンパイア・ブライドがお伺いを立てます。

「こうなったらありんちゅちゅも『がーるずとーく』しるでありんちゅ。すぐにプレアデシユ呼んでくるでありんちゅ」

なるほど。アルベド達とは別にガールズトークをするのですね。主催者だったら仲間外れにはならないですよね。

問題はありんすちゃん主催のガールズトークのティーパーティーに参加者がどれだけいるかですが……

三十分程して、ヴァンパイア・ブライド達が戻って来ました。なんとという事でしょう！

「ありんすちゃんのガールズトークに戦闘メイドは誰も来れないとの事でした。皆さんお忙しいらしく、どなたも都合がつかないそうです。仕方ありませんから私達だけでガールズトークしてはいかがでしょう？」

怒りに真つ赤になつてゐるありんすちゃんにヴァンパイア・ブライドが提案しましたが、ありんすちゃんにはとても受け入れる事は出来ませんでした。このメンバーだけはいつとも何も変わりません。せめて、一人でも良いから参加者を増やさなくては意味が無いのでした。

「今しゆぐ、エ・ランテルに行つて誰かちゆれて来るであります。出来たらアンデッドが良いでありますね」

すぐさまヴァンパイア・ブライドが十人、エ・ランテルの街に向かうのでした。

ヴァンパイア・ブライド達が戻るまでにありんすちゃんはナザリック地下大墳墓の第二階層の屍蟻玄室からティーセットやらテーブルとイスとかを運び出します。配下のシモベ達によつて地表のログハウスの脇にティーパーティーの会場が出来上がりしました。

ここならばエ・ランテルからやつて来たお客さんをナザリック内に入れずに済みますし、ログハウスのプレアデスにありんすちゃんのティーパーティーを見せつける事が出来ます。もしかしたらソリユシヤンカルプーあたりは途中から参加したいと心変わりするかもしれませんね。

「うむ。お前がありんすちゃんか？ その、ガールズトークに参加すれば、も、モモン殿の秘密を教えてくれる、と聞いたが……その……私はイビ、いや、キーノという。その

……たまたまエ・ランテルに来ていた通りすがりのヴァンパイアだ」

そこには二人のヴァンパイア・ブライドに挟まれて、十四五歳ぐらいの金髪で赤いローブを着た少女が立っていました。ありんすちやんはホスト役としてキーノと二人のヴァンパイア・ブライドを席につかせます。

次々と他のヴァンパイア・ブライドも戻ってきましたが、残念ながら連れてこれた客は結局キーノだけでした。でも、とりあえずこれでありんすちやんの面目は保てたので、シモベのヴァンパイア・ブライドから更に二人を席につかせてガールズトークを始める事にしました。

残りのヴァンパイア・ブライドとシモベ達はナザリツクに返し、六人で紅茶を楽しみます。おや、今回の参加者は全員がアンデッドでしかも、偶然、全員がヴァンパイアです。

「ヴァンパイアあるある、言い合うのもおもしろいでありんちゆね」

「……いや、私はモモン殿の——」

ありんすちやんは横から遮ろうとしたキーノの口にシークリームを押し込んで黙らせました。とても美味しいシークリームなんですよ、それ。

「ええと、鏡に映らないとか言われますが、映りますよね？」

早速ヴァンパイア・ブライドの一人が話題に乗ります。

「この前、急流で溺れかけちゃでありんちゅ。水は気をちゅけないとダメでありんちゅ」  
ヴァンパイア・ブライドは全員がおりんすちやんが溺れかけたのは単に背が届かなかっただけだと知っていました。が、黙っていました。

「初めてのお家は『上がってくだちやい』と言われるまで上がっちゃいけないでありんちゅ」

「……いや、それは迷信……それよりモモン——むぐぐ……モグモグ」

おりんすちやんは今度は大きなエクレアをキーノの口に押し込みます。キーノは顔中をクリームだらけにして、モグモグしていました。

「銀製品は少しだけ苦手です。十字架は別に好きでも嫌いでも無いですが」

「ちようでありんちゅね。あと、トマトジュージュよりオレンジジュージュがしゅきでありんちゅ」

最初のうちはいろんなヴァンパイアあるあるの話題に盛り上がっていましたが、おりんすちやんはどうやら飽きてきたみたいです。

「たまにはキーノの話を聞くでありんちゅ」

「モモン殿の秘密とは是非、教えて頂きたい！」

キーノは勢いよくおりんすちやんに詰め寄りました。と、いきなりおりんすちやんは意を決したかのような真剣な表情で立ちあがりました。



ありんすちゃんはこれでもナザリック地下大墳墓の階層守護者の一人です。ですから当然、アダマンタイト級冒険者「漆黒」のモモンが実はアインズの仮の姿である事を知っています。

しかし、目の前にいる『通りすがりのヴァンパイア』キーノが実は王国のアダマンタイト級冒険者蒼の薔薇のマジックキャスターであるイビルアイだという事をありんすちゃんは知りません。

このままありんすちゃんはモモンの秘密をばらしてしまうのでしょうか？

ありんすちゃんの言葉をキーノもヴァンパイア・ブライド達も、そしてログハウスの中にいるプレアデスも固唾を飲んで待ちます。ピンと張り詰めた空気の中、ありんすちゃんが口を開きました。

「……おちっこに行つてくるでありんちゅー」

仕方ありませんよね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## 094 ありんすちやんとねむれないよる

ナザリック地下大墳墓 第二階層 屍蟻玄室の寝室——大きな天蓋のダブルベッドで頭までタオルケットにくるまってありんすちやんが寝ています。

おや？ モゾモゾして、タオルケットから少しだけ頭を覗かせてキョロキョロしています。熱帯夜で寝つけないのでしょうか？ しばらくするとまた頭までスツポリとタオルケットを被りました。

ありんすちやんはベッドの中でモゾモゾしています。どうやらオシッコがしたいのを我慢しているみたいです。

ありんすちやん、早くトイレに行くといいですよ？ 一人で行けないならシモベのヴァンパイア・プライドを呼んだら良いのではないのでしょうか？

「……ヤチュメウナギが怖いでありんちゅー」

うーん……ありんすちやんはどうやら昼間にルプスレギナがした話を真に受けてしまっているみたいですな。

※ ※ ※

「ありんすちやん、こんにちはつす。今日は夏の土曜日つすね。土曜の丑三つ時はウナギつすよ」

その日の昼頃、ありんすちやんがヴァンパイア・プライドとのんびりしている所に戦闘メイドのルプスレギナがやって来ました。

「ウナギでありんちゆか?」

ありんすちやんは小首を傾けながら聞き返しました。

「あの、ニユルニユルのやちゆでありんちゆね」

ありんすちやんは得意そうに言葉を足しました。賢いありんすちやんはちやんとウナギを知っているんです。

「そうつすよ。そのウナギのお化けが出るつすよ。土曜日の丑三つ時、つまり今晚つすね」

どうやらルプスレギナはありんすちやんを怖がらせようと、いい加減な事を言っているみたいですね。しかしありんすちやんもヴァンパイア、それも真祖。元々がアンデッドですからお化けなんて怖がるはずがありません。

「……お化けなんて、怖く、ない……でありんちゆ。ありんちゆ」

……おや？　ありんすちゃんの顔が強ばっています。うーん……どうやらありんすちゃんはお化けが苦手みたいです。アンデッドなのに……

そんなありんすちゃんの様子を眺めながら、ルプスレギナが続けます。

「ただのウナギのお化けじゃないつすよ。ヤツメウナギつす。こーんなにデカイ口をガバーって開けると中にはビッシリと尖った牙がグルリとあるつす。不気味で凶悪なヤツメウナギ、よりによってこの屍蠟玄室で見た事があるつすよ」

ヴァンパイア・プライドが何か言おうとしましたが、ルプスレギナが制止します。

「……ありんちゅちゃは見ちや事ないでありんちゅ。ヤチユメウナギなんていないでありんちゅ」

ありんすちゃんは必死に否定しました。もし、そんな怪物が居たらありんすちゃんは安心して眠れません。

「……ヤツメウナギの怪物は間違いなく居るつすよ。せいぜい頭をかじられないように気をつけるつす」

そして夜になり、ありんすちゃんはベッドに入りましたが、ヤツメウナギの怪物の事をあれこれ考えている内に怖くて眠れなくなってしまった、という訳です。

※ ※ ※

ヴァンパイア・プライドに付き添ってもらい、用を済ませたありんすちやんはベッドに戻りました。そして相変わらず頭を出したり引つ込めたり、タオルケットを被ったりめくったりしています。

どうも眠れないみたいですね……

とうとう意を決してムクリと起き上がりました。愛用の枕とお気に入りのウサギのぬいぐるみのつかむと屍蠟玄室を後にしました。

※ ※ ※

「……なあに？ こんな夜中にやって来て……あたしは寝てただけど？」

ありんすちやんがやって来たのは第六階層のアウラとマーレの住居でした。アウラは熟睡中だった所を起こされてひどく不機嫌でした。

「……え？ ヤツメウナギの怪物？ 屍蠟玄室に？」

ありんすちやんは一生懸命にヤツメウナギの怪物の怖さを伝えます。しばく黙って話を聞いていたアウラは呆れた様子でため息をつきました。

「——あのさ、それってありんすちゃんのことじゃん。真祖の姿ってまんまツメウナギそっくりだよね?……じゃ、おやすみ」

アウラは冷たくいい放つとありんすちゃんの前で扉を閉めました。

うーん……考えてみたら真祖の姿を本人は鏡で見る事はあまりなさそうですね。まさか自分の事を怖がっていたなんて……仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

※ありんすちゃんが挿し絵を描いてくれました

## 095ありんすちやんとコキュートス

ナザリック地下大墳墓 第五階層——氷河——。階層守護者のコキュートスは久しぶりに戻ってきました。

〈大雪球——スノーボールアース〉で留守を預かっていた雪女郎——フロストヴァージン——達が出迎えます。

「……留守番、ゴ苦労。……特二変ワツタ事ハナカツタカ？」

「コキュートス様の留守中に特に何も御座いませんでしたが……あの……」  
雪女郎の一人が言いにくそうに言葉を濁しました。

「……ナンダ？ 何カアルナラ申シテミヨ？」

「……実はその、……ありんすちやん様がコキュートス様をお待ちになっ  
ていらつしやいます」

コキュートスは思わず息を吐き出しました。白い息がコキュートスの外装に薄い氷を作ります。

「……アリンスチャンカ……？ 珍シイ客ダナ。……マタ氷河デ凍ラセタ死体デモ必要ニナツタノカモシレヌ。……デ、アリンスチャンハ何処ニイルノカ？」

「あの、コキュートス様のお戻りになる時間がわからないと申し上げましたら、ご自分で〈スノーボールアース〉の中で待つと……」

「……ウム。ワカッタ。マズハ会ッテ話ヲ聞ク事ニシヨウ」

コキュートスはありんすちゃんが待つへ大雪球——スノーボールアース——へ入りました。

中ではノンビリとくつろぐありんすちゃんの姿がありました。

「待つていたでありんちゅ。コキュートシユにお願いがあるんでありんちゅよ」

「……ウム。ドンナ願イカ聞カセテモラオウカ。……ダガ、断ツテオクガ、リザードマンノ財産ニカカワル事ハ認メラレナイゾ……」

コキュートスはあらかじめ予防線を張りました。アウラが以前にリザードマンのペットのヒュドラの口口をねだった事があったからです。

「ちよんなこちよはしないでありんちゅ。ただ、コキュートシユに第二かいちように来てお仕事して欲ちいだけでありんちゅ」

※ ※ ※



ありんすちやんに連れられてコキュートスは第二階層の〈屍蠟玄室〉の前にやって来ました。ありんすちやんは広場になっている場所を示しながら言いました。

「ここに雪山をちゆくつて欲ちいでありんちゆ。こーんな、こーんなおつきいなのでありんちゆ」

ありんすちやんは両手をいっばいに広げて説明します。どうやら最近暑いので涼しくする為に雪山が欲しいみたいですね。

「……シカシ……涼シクスルナラバ第五階層カラ氷ノカタマリヲ運ンダハウガ良イノデハナイカ？ 雪ヲ降ラセテモスグニ溶ケテシマウダロウ……」

ありんすちやんは首を振りました。

「雪が良いでありんちゆ。雪じゃないとダメなんでありんちゆ」

ありんすちやんに言われるまま、コキュートスはスキルを発動してあつという間に十メートル程の高さの雪山を作りました。

ありんすちやんは大喜びです。大きな鍋に入ったメロンシロップを雪山にかけると、屍蠟玄室の上から雪山——いや、巨大なかき氷に飛び込みました。

これがありんすちやんがやりたかったのですね。

その日、一日中かき氷を食べ続けたありんすちやんはお腹を壊してしまったそう

す。アンデッドなのに……

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## 096ありんすちゃんおえかきする

「フーンフーンンンールルラール」

ナザリツク地下大墳墓第二階層の屍蠟玄室では、ありんすちゃんが寝転がってお絵かきに夢中になっています。

画用紙に肌色のマーカーで大きな丸を描いて丁寧に塗りつぶします。それから赤のマーカーで目と口を描きます。髪は灰色のマーカーで描きます。左右に伸びた髪はクルクルとカールさせます。

ピンクでフリフリの帽子と大きなリボンを描き足せばあつという間にありんすちゃんの出来上がりです。

画面一杯の大きなありんすちゃんの自画像をしばらく眺めていたありんすちゃんは今度はサインペンを手にします。

ありんすちゃんの顔の上に『ありんすちゃん』と書きました。『す』が左右逆さなのはご愛嬌です。またもやしばらく眺めていたありんすちゃんはサインペンで『かわいい』と書き加えました。そして、それから『とつても』と書き加えました。

これで『とつても かわいい ありんすちゃん』の絵が完成しました。ありんす

ちゃんは満足そうです。

床に今まで描いた絵を広げてみます。どの絵も真ん中に楽しそうなありんすちゃんが描かれています。

ありんすちゃんはふと、これまでの出来事を絵に描いてみたくなりました。さてさて、どの出来事を描いてみましょう？

いろんな事がありましたから、たくさん描けそうですよね。

ありんすちゃんが最初に描いてみたのは戦闘メイドのナーベラルを追いかけてアイズ扮する冒険者モモンと一緒になった様子でした。

次にありんすちゃんはトブの大森林でザイトルクワエと戦った様子を描いてみました。ありんすちゃんその他の階層守護者達とが合体した姿を一生懸命描きました。コキユートスが複雑な形態なのでとても苦労したそうです。絵ではありんすちゃんが目からビーム光線を出しているようですが……まあ、5歳児位の女の子のありんすちゃんの記憶ですから仕方ありませんよね。

次の絵を描こうとしてありんすちゃんは鏡の中の自分の姿を見ましたが、どうもうまく描けないみたいです。ありんすちゃんは画用紙とマーカーを握りしめると何処かに走って行きました。

※ ※ ※

ナザリック地下大墳墓 第九階層を歩いてきた守護者統括 アルベドはいきなり走って来たありんすちゃんとおぶつかりました。

「ちよ……なんなの？ ありんすちゃん？ そんなに慌てて」

「モデルがひちゆようなんでありんちゆ」

ありんすちゃんはそう言うといきなりアルベドの胸を両手で揉みました。

「ちよ……なに？ また……」

なるほど。おそらくありんすちゃんは以前にユリやアルベドの胸を揉んだ時の事を描こうとしているのですね。

しかしながら、当然アルベドには全く理解出来ません。しばらくアルベドの胸を揉んでいたありんすちゃんはガツクリと肩を落としました。

「モミモミしてるちよ描けないでありんちゆ……描いているちよモミモミ出来ないでありんちゆ……」

うーん……それは仕方ないと思いますが……

それから一時間もの間、アルベドは訳が分からないままにありんすちゃんに胸を揉ま

れ続けたそうです。仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

ちなみにありんすちゃんがお絵かきした作品はそれぞれの話のあとがきに掲載していきますので、興味がある方はご覧下さい。

## 097ありんすちゃんはみた

ナザリック地下大墳墓 第二階層〈屍蟻玄室〉——もうじきお昼になるというのにありんすちゃんはまだぐっすり眠っているようです。

あれ？ 起きてる……と思ったたら目玉が書いてあるアイマスクをしていたんですね。びっくりしました。

モゾモゾしながら大きなあくびをして、どうやらやくお目覚めのようです。

うーん……どうも最近睡眠が浅いみたい？ なんだか疲れが抜けない？ なんだか年寄りみたいな事をブツブツ言っていますね。

ありんすちゃんは育ち盛りの子供なんですから、とはいってもアンデッドだから育たないのかも知れませんが——とにかく子供らしく元気に過ごして欲しいものです。

ベッドの上でありんすちゃんがボンヤリしていると、シモベのヴァンパイア・ブライドが顔を出しました。

「ありんすちゃん様、コキユートス様がお見えになりました」

ありんすちゃんがうなずくと、冷氣と共に階層守護者のコキユートスが入って来ました。

「……アリンスチャン、才目覚メノヨウダナ。我が階層デ作ツタ天然水ノカキ水デモ食ベテクレ」

ありんすちゃんは大喜びです。ありんすちゃんの大好きな宇治金時の山盛りかき氷です。コキユートスはかき氷に手を伸ばすありんすちゃんを制すると言いました。

「——ソノカワリ、アノ事ハ内密ニシテモライタイ。タノム」

ありんすちゃんは何の事かさっぱりわかりませんでした。力強く頷きました。

「まかちえるでありんちゅ！」

決してかき氷を早く食べたかったからではないと思いますが……

コキユートスが去ると、今度はアウラがやって来ました。なんだかモジモジしていて、いつものアウラらしくありません。

「あ、ありんすちゃん。やつほー。……とても美味しいモンブランケーキを持ってきたよ。ほら、栗も大きいでしょ？」

「モンブラン！」

ありんすちゃんはまたまた大喜びです。さっそくモンブランケーキをわしづかみしようとして手を伸ばします。

「——その前に！……ありんすちゃん、あたしのあんな所を見られちゃったけどさ、たまたまなんだから忘れて欲しいんだけど？　ね？」



「わかったでありんちゅ」

ありんすちゃんはまたしても力強く頷きました。うーん……モンブランケーキを食べたいから、かもしれませんね。

アウラはホツとした様子で帰っていききました。

「これはきつと幸運のアイマシユクでありんちゅね！」

ありんすちゃんは目玉が書いてあるアイマスクをマジマジと眺めました。このアイマスクをつけて眠って起きたらこんなの良い事があるなんて。もしかしたらたまたまなのかも知れませんが。

※ ※ ※

さかのぼる事、数時間前——

ナザリック地下大墳墓第五階層へ大雪球——コキュートスが真つ赤なビキニブリーフを前にして腕組みしてなにやら考え込んでいます。

「……コノママ全裸キャラトシテ変態扱イサレ続ケルカ、ソレトモセメテパンツヲハク

ベキカ……悩ミ所ダナ……」

しばらく考え込んでいたコキユートスは意を決すると、赤いビキニブリーフをつかんで足を通しました。が、なんとという事でしょう！ しつぽが引つ掛かって上まであげられません。なんとも微妙な格好で、まるでパンツをずり下げた変態に思われかねない状態になってしまいました。

「……マズイナ、コレハ。シモベ達ニハトテモ見セラレン……ナ、アリンスチャン？」

慌てるコキユートスの前に突然ありんすちゃんが現れました。実はありんすちゃん  
は寝呆けてへグレーターテレポーターションを発動させてしまっただけで、ぐっすりと熟睡中だったので……たまたま目玉が書いてあるアイマスクをしていたのでじつとコキユートスを見つめていると勘違いさせたのでした。

動揺したコキユートスを残してありんすちゃんはまたもや何処かに転移してしまいました。

※ ※ ※

ナザリック地下大墳墓 第六階層——守護者のアウラがマールレの衣装タンスの前でなにやら思い詰めていました。

(……この間、アインズ様が『アウラが好きだ』って言ってたけど、もしかしたらアルベドでなくてあたしが正妻に……)

アウラはタンスからマールレのミニスカートを取り出しました。

(その内あたしもグラマーになって、女らしい衣装も似合うようになるかも……)

アウラはミニスカートを履いて鏡の前でセクシーポーズをとりました。

「……ウツフーン。パンチラサービスう——う！ ゲッ！ ……あ、り、ん、す、ちゃん？」

アウラの目の前にありんすちゃんの姿がありました。とはいってもありんすちゃんは熟睡中だったんですが……結局、アウラもありんすちゃんに恥ずかしい格好を見られたと思い込んだそうです。

まあ、ありんすちゃんはなにも見ていませんから、単純にかき氷やモンブランケーキが食べられて良かった位しか思っていないんですけど……

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## 098 ありんすちゃんしようせつをかく

ナザリック地下大墳墓第二階層〈屍蟻玄室〉——今日もありんすちゃんは床に寝転がって一生懸命になにやら書いています。また、お絵かきしているのかと思ったら、どうやら文章を書いているみたいですね。

「ふしぎのくにのありんちゅちゃはありんちゅちゃが書くでありんちゅ」

うーん……二次小説の主人公が自分が登場する小説を書くなんて聞いた事がありませんが……

それによりんすちゃんのまともな文章が書けるとは思えません。ハーメルンに投稿出来るのは最低文字数が一千文字で、四百字詰め原稿用紙で二枚半です。

「ありんちゅちゃが書いて評価をまっかかにしゆるでありんちゅ」

うーん……無理です。それ。

まあ、ありんすちゃんの事ですからしばらくしたら飽きてしまうでしょうし、オーバード本編の最新刊の12巻が九月末にならないと出ないので、ネタ切れ気味な私としてはありんすちゃんが話を書いてくれるのは有り難い事ではあります……

それにこのままだとありんすちゃんが『スクリームアイドル』を結成してしまったり

しそうなので……そうなるよりは幾分ましかもしれません。

※ ※ ※

「できたでありんちゅ！ 傑作が書けちゃでありんちゅ！」

どうやらありんすちゃんの小説が書き上がったみたいですね。どれどれ――

『ありんすちゃんかわいいとてもかわいいびじん

ナザリックありんすちゃんおうちでおふるあわあわブクブク

ありんすちゃんはんちんちんありません

ありんすちゃんはいいました

ありんすちゃんにちんちんください

あいんずさまにちんちんもらいます

はえたはえた

ありんすちゃんにちんちんはえました

によきによきちんちん

こりでたちしよんできます

とばしつこでかちます

ありんすちやんはちんちんふつてでかけました

まあれとあうらがいました

ありんすちやんはちんちんみせます

すごいちんちん

あうらはくやしくなるす

あたしもほしいあうらいます

ありんすちやんとくいです

ちんちんがとんでいきました

ちんちんはどこいつたかな

あるいていくとちんちんおちてた

ありんすちやんがひろうと

ちんちんがこんにちわしました

ぼくはちんちんです

ありんすちやんかわいいです

ありんすちゃんけこんしましよ

ありんすちゃんはおこたわりします

ありんすちゃんはいんずさまにおむこするからだめです

ちんちんはなきました

えんえんありんすちゃんのいじわる

ちんちんはなきつつけました

しるとちんちんはとけてました

さよならちんちん

ありがとうちんちん

———おわり———  
』

これ……だめですよね。ちなみに作中のちんちん——いや、やめておきましょう。……  
うーん……仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なの  
ですから。

## 099 ありんすちやんとパッド

ナザリツク地下大墳墓第二階層〈屍蠟玄室〉——今日の階層の見回りを既に終えたありんすちやんは自分の部屋でのんびりしています。

普段使っていないクロゼットの引き出しを開けてみたありんすちやんは、綺麗に並べて仕舞われているたくさんの胸パッドを見つけました。

「ありんすちやん様、これは全てかつてシャルティア様であった頃にお使いになりました胸を大きくするパッドでございます」

ありんすちやんの質問にヴァンパイア・ブライドが答えます。シャルティアだった頃ならともかく、5歳児位の女の子に過ぎない現在のありんすちやんには全く無用な物です。今までありんすちやんは存在する事すら気がつかなかつたのも仕方ありませんね。

「ぱつど、でありんちゆか？ 色んな種類があるんでありんちゆね」

ベッドの上に並べられたたくさんのパッドを眺めながらありんすちやんはため息をつきました。デザインや色も様々で、素材もいろんなものがあります。以前のシャルティアのパッドにかける情熱がこのコレクションから垣間見る事が出来ます。



「シャルティア様はこちらのシリコン製の品をお試しになられましたか、重さで落ちてしまい、結局こちらの布製のパッドを左右それぞれ三枚ずつ重ねて着用される事が多かったそうです」

ありんすちやんにはシャルティアだった頃の記憶がほとんどありません。ですが、ひどくこだわっていた事らしく、今のありんすちやんにも惹かれる気持ちがありました。

「……あの……ありんすちやん様、お試しになりますか？」

ありんすちやんの気持ちを察してヴァンパイア・ブライドが声をかけました。勧められるままに、ありんすちやんは胸にパッドをつけてみましたが残念です……さすがにサイズが合わないので無理でした。

本来の用途での使用はあきらめたありんすちやんですが、まだまだ興味が尽きないようです。ベッドの上に広げられたコレクションを一つ一つ、じっくりと見比べるのでした。

「こつちのはプルプルでありんちゅね」

ありんすちやんが気に入ったのは肌色のシリコン製のパッドでした。本物のオツパイ同様の感触で、指先で突つくとプルンと揺れます。

「……気持ちいいでありんちゅ」

ありんすちやんはパッドに顔をすりすりしてみました。少しひんやりしていて病み

つきになりそうです。その内になにやら閃いたありんすちゃんは頭にパッドを乗せるとリボンで縛りました。

「ひんやりして気持ちいいでありんちゅ」

すごいですね。ありんすちゃんは時々ただの5歳児位の女の子に思えない発想力を発揮しますよね。

ちなみにこのありんすちゃんの発案のひんやり帽子『ヒヤリハット』はその後商品化され、エ・ランテルで大人気商品となったそうです。

## 100ありんすちやんとルビクキュー

その日のありんすちやんは暇でした。ですから部屋の片隅にほったらかしにしていたルビクキューを取り出して遊んでいました。

ルビクキューというのは四角い形のパズルで、それぞれの面が違う色になっていきます。それが上下左右に回転するようになっていて、色をバラバラにしたりまた色を揃えたり出来ます。……ありんすちやんには出来ませんでした……

それまでは一面ですら揃えられなかったありんすちやんでしたが、なんと二面が揃ってしまいました。まったくの偶然だっただけなんです、ありんすちやんは得意満面です。

誰かに見せびらかして自慢したくなりました。シモベ達を集めてありんすちやんが如何に素晴らしい偉業を達成したかを褒め称えさせましょうか？ ありんすちやんは静かに首を振りました。ダメです。このところありんすちやんはやたらとシモベ達を集めて自慢ばかりし過ぎていたので、最近はどうもシモベ達がウンザリしてきていますでした。

では、第六階層に行つて双子のダークエルフに自慢してみても如何でしょう？ あり

んすちゃんはまだしても首を振ります。そもそもアウラもマーレもルビクキュー自体を知りません。ですからありんすちゃんが二面を揃えた事がどれ程凄い事かわからないでしょう。それどころかきつとこう言うでしょう。「面白そうじゃん。あたしにもやらせて」……器用なアウラの事です。たちまち一面はおろか六面を揃えてしまいかもしれません。

「……アウアウのばーかばーかばーか！」

思わずありんすちゃんはアウラに悪態をつきましたが、アウラは何も悪くないですよ？

「ちようでありんちゅ。あの子に見せるでありんちゅ」

ありんすちゃんはかつてルビクキューを手に入れた時に会った女の子を思い出しました。名前は知りませんが髪が白黒の変なハーフエルフの女の子です。確かスレインを発動させ——ようとして止めました。そして部屋の本棚から一冊の本を取ってニツコリしました。

「これをお土産にあげるでありんちゅ」

そして改めて魔法を発動させたのでした。

※ ※ ※

スレイン 法国最奥部 神聖執行会議室——最高執機関十二名による会議が行われる場所——の手前の最高神官長の執務室では現在、重要な打ち合わせの為周辺にまで人がさがされていました。

誰もいないその廊下に転移魔法へグレーターテレポーテーションで転移してきたありんすちやんがやって来ました。

「たちかこの辺りの部屋で会ったでありんちゅ」

ありんすちやんはトコトコと最高神官長の執務室の前にやって来ました。部屋の扉には法国語で『重要秘密会議中 立ち入り禁止』と書かれたプレートが掛けられています。勿論ありんすちやんには読めません。仮にナザリックで使われている日本語で書いてあったとしても、ひらがなしか読めないのです『ちり』しか読めなかつた事でしょうが……

ありんすちやん扉の前でしばらく考えこんでいましたが、すぐに明るい顔で叫びました。

「えっと、『ありんちゅちや、ようこそ、いらっちやいまちた』って書いてあるでありんちゅ！ 開けるでありんちゅ」

ありんすちゃんは扉を思いきり開けました。勿論、扉には魔法で鍵が掛かっていたのですが、ありんすちゃんにはなんの意味もありませんでした。

「……………な！」

部屋の中では黒の女性用下着を身につけた最高神官長と、下着姿の土の神官長——レイモンがびつくりした顔でありんすちゃんを見ました。

「……………うーん……………違ったでありんちゅね」

二人がパクパクと口を開きありんすちゃんに何か言いかけた瞬間——ありんすちゃんはくしやみをして姿を消してしまいました。

※ ※ ※

「……………あれは転移魔法……………恐らく第六位階以上の……………」

最高神官長の執務室に残された二人は先程起きた事柄について話し合っていました。「間違いありません。あの少女も恐らくは……………」

最高神官長にレイモンも同意しました。ちなみに二人は既に着替えていました。

「……さらにこの本……魔導王国で作られたものようだ。この暴露本がガゼフの命を奪ったのかもしれないな」

「……まさか？ ……だとするとかの戦士長は自殺……？」

最高神官長は顔をしかめました。

「これだけの醜聞を広められてしまつては、な。聞くところによると蘇生を拒否して死んでいったという」

「……………」

部屋には沈黙が訪れました。二人にはこれから自分達の身に起こるであろう事がまざまざと思い描かれたからです。

「……恐ろしい……明日は我が身、か。……我らは秘密を握られてしまった……おそらくは、かの邪悪な魔導王に……な」

力なく呟く最高神官長の横顔を見ながらレイモンは項垂れるのでした。

……かのガゼフのように我々の醜聞が明らかにされた時、自分は死を持つて名誉を守るだろうか？ 魔導王の恐ろしさをこうして体験する事になろうとは……

レイモンはただただ震えるのでした。

※ ※ ※

結局、ありんすちゃんはルビクキューを自慢する事は出来ませんでした。髪が白黒の変なハーフェルフの女の子の名前すら知らないので結局見つからなかったので諦めちゃったんですって。

仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。



## 101ありんすちやんとみつまめ

ナザリツク地下大墳墓 第二階層〈屍蝨玄室〉では今まさにありんすちやんがおやつを食べている最中でした。今日のおやつはなめらかなこし餡をたつぶりのせたみつ豆です。

ありんすちやんはあんみつだけでなくフルーツみつ豆も大好きです。こし餡を少し溶かして寒天と一緒にスプーンですくってほお張ります。完全に溶かさずに少し残した状態がありんすちやんのこだわりです。

目を閉じてうつとりとした表情はとても幸せそうですね。

おや、ありんすちやんが何やら器の中を覗んでいます。なにかあったのでしょうか？  
ありんすちやんに給仕をしていたヴァンパイア・ブライド達が表情を硬くします。ありんすちやんはじつと器から視線を動かしません。どうやらありんすちやんが覗んでいたのは小さな黒豆のようです。

「この豆はいらないでありんちゅ。美味しくないでありんちゅ」

「どうやらありんすちやんは黒豆が嫌いなようですね。」

「黒豆、入れちゃダメって、ありんちゅちゃ、言ったでありんちゅよね？」

ありんすちゃんに鋭い視線をヴァンパイア・ブライドの一人に向けました。ヴァンパイア・ブライドはおろおろしながら答えました。

「……それがその……副料理長が言うには『みつ豆から豆を抜いたらみつ豆とは言えません』と……」

ありんすちゃんは思いもしない答えにしばらくポカンと口を開けたままでいました。

ありんすちゃん、これは副料理長の方が正しいと思いますよ。とはいえ、私もみつ豆の黒豆はいらないと思います……

ありんすちゃんはヴァンパイア・ブライドから器の中の黒豆に視線を戻しました。じつと黒豆を睨んでいます。どうやら頭の中でどうにかして黒豆を懲らしめてやろう、とでも考えているのでしょうか？

しばらく黒豆を腕組みしながら見詰めていたありんすちゃんは何か閃いたらしく、笑いました。

「この黒豆はこうちてやるでありんちゅ」

ありんすちゃんは黒豆をつまみ上げると自分の鼻の穴に詰めました。そしてフンスと鼻息の吹くとまるで弾丸のように黒豆が飛び出してヴァンパイア・ブライドの額にくつつきました。

ありんすちゃんは大喜びです。今度は左右の鼻の穴に黒豆を詰めます。

「フランス！ フランス！」

的はまたしても哀れなヴァンパイア・ブライドです。

「おもちゃろいでありんちゅ！ もつとやるでありんちゅ！」

今度は片方の鼻の穴に黒豆を二個詰めてみました。さて、どんな飛び方をするでしょうか？ ありんすちやんはワクワクしながら反対側の鼻の穴をふさぎ――

「!!」

フスー……ありんすちやんは力一杯鼻息を出そうとしますが黒豆は出てきません。鼻に指を差し込んでみましたが、黒豆はさらに奥にいつて取れません。大変です！

「おやおや？ 大変つすね。そのうち黒豆から芽が出てきてありんすちやんの顔にニョキニョキ豆の木が生えてくるつすよ」

ありんすちやんが見るといつの間にか姿を現したルプスレギナがニヤニヤしていました。

ルプスレギナの言葉にありんすちやんは真っ青です。いやいや、みつ豆に入っていた黒豆は発芽しないと思えますよ？

※ ※ ※

大騒ぎの末、結局ニューロストが持つている道具でありんすちゃんの鼻の穴の黒豆は無事に吸い出されました。やはり、食べ物で遊んではいけませんよね。

翌日の昼食はチャーハンでした。ありんすちゃんは早速ペロリと平らげます。あれ？ お皿の上には綺麗な緑色のグリーンピースが四つ残っていますね。

ありんすちゃんは腕組みをして皿の上のグリーンピースを睨みます。うーん……もしかしたらありんすちゃんはグリーンピースが嫌いなのでしょうか？

しばらく睨んでいたありんすちゃんはいきなりグリーンピースをつかむとまたしても鼻の穴に……うーん……懲りませんね。

かくして鼻からグリーンピースが取れなくなったありんすちゃんは、またもや大騒ぎするのです。

仕方ありませんよね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## 102番外編・“美姫”ありんすちやん

(おかしいな……ナーベラルがない。……まさか、まだかくれんぼなんて事は無いだろうが……急に“漆黒”のモモンとして仕事をしなくてはならないのに困ったな。……先方は『ナーベさんも是非』というたつての願いだから俺一人ではまずいんだよね。……はあ。どうしたものかな?)

ナザリツク地下大墳墓の執務室でアインズは頭を抱えています。脳裏に以前ナザリツクに戻ってきた晩に、椅子の後ろに隠れたつもりのナーベラルの姿を思い出しました。かれこれ一週間前の事になりますが、それがナーベラルの姿を見た最後でした。

(……まさかな。あのまますつと隠れたままとは思えないが……それにかくれんぼならすぐに見つかるだろう。そもそもあれから随分経つし、いくらナーベラルでもまさか、ね? ……いくら融通がきかない性格とはいってもまさかあれから一週間もかくれんぼを続けるなんていう事は……うーん……)

アインズはこの所忙しくしていた為、ナーベラルの不在に全く気がつかなかった自分を恨めしく思うのでした。

「アインズ様、シャルティア様がおみえになりました」

アインズが頷くと、ありんすちやんが部屋に入ってきました。見ると銀色だった髪を黒くしてポニーテールに結んでいます。服装もいつものポールガウンではなく茶色のローブを着ていました。

(……………うん? ……………これはまるで……………)

「アインズちやまにはご機嫌うるわちく、ナーベのかわりにわたちが行くまずでありんちゆ」

緊張していたので『行きます』を『行きます』と言ってしまった。

「……………シャルティアよ。気持ちは嬉しいのだが、ナーベのかわりにはちよつと……………」

「大丈夫でありんちゆ! あ、り、ん、ちゆ!」

駄目です。ありんすちやんはもはや聞く耳を持ちません。それもそうです。アインズ様がナーベラルの所在を探しているという話を聞いて、時間をかけてありんすちやんはナーベラルに変装したのでしたから。本当は本物のナーベラルと間違つて見つけてもらい、アインズ様の所に連れていってもらう計画だったのですが、さすがに無理がありませんとメイドに断られてしまったのでした。

結局、ありんすちやんの激しい熱意に負けて「美姫」ナーベの代役をさせる事になってしまいました。

※ ※ ※

「依頼人は貴族と聞いていたが……あの若者かな？ ……しかし……何ゆえ私をあんなに睨み付けてくるんだ？」

依頼人との待ち合わせ場所に来たアインズとありんすちゃんは依頼人からの視線に戸惑うのでした。

「わらわがあんまり、可愛いからでありんちゅ」

ありんすちゃんは可愛く小首を傾げてから続けました。

「——ころちましゆか？」

(……いや、そんな変な所だけナーベラルの真似をしなくていいから……)

アインズは少しばかりウンザリしながらありんすちゃんをたしなめます。

「……その『取り敢えず殺せばいいや』という考えはよせ。死なせてしまえば利用出来なくもなる。良いな？」

ありんすちゃんは少し考えてから平伏しました。

「さしゆがアインジュちゃま。えっと、モモンしゃ——ん」

(いや、そんな所ばかり真似しなくて良いから……うーん……やつぱりシャルティアを連れて来たのは失敗だったかな……)

「お二人は、仲が、よろしいんですね!」

アインズとありんすちゃんに依頼人の若者が棘のある言い方で呼掛けて来ました。

「まあ、仲間ですから……初めまして。今回は名指しの指命だそうで……私がアダマンタイト級冒険者チーム『漆黒』のモモン、こつちが——」

「ナーベでありんちゅ」

ありんすちゃんが胸を張って名乗ります。

「モモンさんにナーベさん。この度は依頼を引き受けて下さってありがとうございます。私はアンドレと申します。そしてこちらが——」

「トーケル・カラン・デイル・ビョルケン Heim だ」

依頼人の若者はありんすちゃんを見てとても驚いた顔をしました。

「……あの……ナーベさんが少し若返ったりしていませんか? 少し幼くなった——」

「まさか。〴〵冗談を……気のせい、ですよ。気のせい。ハハハハハ」

トーケルも釣られて笑いしました。

「気のせいでしたか。ハハハハ……」

「そうですよ。ハハハハ……」



「そうですね。ハハハハ……」

互いに腹を探りあうような空虚な響きの笑い声がしばらく続きました。

「ところで……組合から話は聞いていますが、ビオルケンヘイム卿が――」

「まだ、家督を継いだ訳ではないので卿ではないがな」

アインズの言葉をトーケルが遮りました。そんなトーケルにむつとしたありんすちゃんが眩きました。

「……ちゅまんないゴミムシでありんちゅね」

ありんすちゃんの眩きにトーケルは真つ青になりました。

「いや、その……この成人の儀を澄ませれば家督を継いだも同じというか……ですから私の事はビオルケンヘイム卿と呼んでいただいても構いませんとも。問題ありません……」

「……では、なんとお呼びすれば？」

トーケルはありんすちゃんの顔を伺いながら答えました。

「ビオルケンヘイムで構わない……です。あ、トーケルでも……」

「了解しました。ではビオルケンヘイムさん。今回の依頼は身辺警護という事でよろしいですね？ ビオルケンヘイムさんはお家の掟によりモンスターを討伐しなくてはならないとの事です」

トーケルの代わりにアンドレが答えました。

「出来れば人型のモンスターがいいですね。モモンさんは以前、ゴブリンの集団を追い払ったと聞きましたか？」

「ああ、南方の森から出現したゴブリンの件ですか？ それはナーベがやったんです」

「ほーう。やっぱり凄いですね。ナーベさんは！」

トーケルがわざとらしく叫びました。ありんすちゃんは自分が今、ナーベだという事を思い出して胸を張りました。

「わたしがナーベでありんちゅ！ しゅーいでありんちゅ」

そして打ち合わせの結果、ゴブリンの残党を討伐しに行く事になりました。

※ ※ ※

「どう思う？ アンドレ」

一頭の馬に相乗りするモモンとナーベから距離を保ちつつ移動しているトーケルはアンドレに尋ねました。アンドレは頭をかきながら答えます。

「……うーん……やはり坊ちゃんには脈が無さそうですね。ああしてあからさまに代役を立てられたって事は、拒絶とみた方が良いでしょうね」

「アンドレもそう思うか……しかし……何故ナーベさんはそんな事をするんだろうか？」

「しかもよりにもよってあんな少女が代役など……」

「うーん……そうですね。明らかにすぐばれる代役、しかもモモンさんはそれを認めていません。これはあまり深く追求しない方がよさそうですね」

一人なにやら考え事をしていたトーケルは顔を上げました。

「アンドレわかったぞ。これはきつと試験に違いない。ナーベさんは私を試しているんだ。考えてもみろ？　いくら代役とはいえ全く無関係な少女を代役にする筈はない。それに少女とはいえあの美貌……おそらくはナーベさんの妹かなにかなのだろう。そして彼女にいかにか紳士的に振る舞うかをナーベさんは試しているのに違いない」

※ ※ ※

「ビョルケンハイムさん、アンドレさん、なにか悲鳴のようなものが聞こえてきませんか

「？」

先頭のモモンがいくら緊張した様子で振り返りました。すかさずナーベが魔法を発動させます。

「モモンしゃ——ん。うさみみ、可愛いでありんちゆ。悲鳴がよおく聞こえて便利でありんちゆ」

いつの間にかうさ耳姿のナーベが答えます。

「ふむ。どうやら私達が向かっている村でゴブリン達は何者かに襲われているようです。私達は依頼人の要望を第一に考えますが……」

トーケルは結局偽ナーベのうさ耳は何だったのだろう、と疑問に思いましたが口には出さずにいました。

「モモンさん。私達を守ってくれますか？　そしてもう少し村の状況がわかる場所まで移動しましょう」

「わかりました。私達は依頼人の安全を守りつつ要望をかなえてみせます。もしもの場合には私達が後ろを押さえますので振り返らずに逃げて下さい。では、一気にいきますよ。ハイヤー！」

※ ※ ※

一行が村の近くまでやって来るとひとときわ大きな悲鳴が上がりました。見ると巨大なモンスターがゴブリンを襲っていました。

「——八本の足、頭部に王冠のようなトサカ、バジリスク！ しかもあの大きさはギガントバジリスク！ 石化の視線や猛毒の体液、そしてあの皮膚はミスリル製の鎧に匹敵する固さ！ 最悪の相手です！ 逃げましょう！ モモンさん！」

モンスターを見たアンドレが叫びました。と、アンドレの前に小さな影が立ちはだかりました。

「ここは、チャル——ナーベにまかちえるでありんちゅ！」

なんと小さなナーベがギガントバジリスクに向かっていきます。と、次の瞬間——  
——パクリ！

なんとありんすちゃん扮するナーベはギガントバジリスクに一呑みにされてしまいました。

「——ナーベさああん！」

※ ※ ※

ナーベを一呑みにしたギガントバジリスクは今度はモモンに向かいました。と、突然ギガントバジリスクの腹部が光りだして――

「へヴァーミリオン・ノヴァ！」でありんちゅ

ありんすちやんの超位魔法、ヴァーミリオン・ノヴァによりギガントバジリスクは消滅してしまいました。

「ベチヨベチヨで気持ち悪いでありんちゅ……クチュン！」

ギガントバジリスクの腹の中で体液まみれになったありんすちやんはくしやみをしました。すると、ナザリック地下大墳墓の第九階層でかくれんぼを続けていたナーベラルの姿が現れました。

「お風呂入るでありんちゅ」

ありんすちやんは着ていたローブ等を脱ぎ捨てて裸になると、ヘグレーターテレポーターションを発動させてナザリックに帰ってしまいました。

尚、その後で残されたアインズと事情を知らないナーベラルがトーケル主従に説明をするはめになったのですが……ありんすちやんはそんな事も知らずにのんびりお風呂

呂に入っていたそうです。仕方ありませんよね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## 103 ありんすちゃんぶきをもつ

ローブル聖王国にありんすちゃんの姿がありました。

「あんまり賑わっていないでありんちゅね」

ありんすちゃんはつまらなさそうに呟きました。デミウルゴスの話ではローブル聖王国には海があると聞いていて、ありんすちゃんは海水浴なるものを楽しもうとこっそりお忍びで来たのでした。

デミウルゴスに教えてもらった座標にヘグレーターテレポーションでやって来たのでしたが海はありません。どうやら聖王国の首都のようです。人影はまばらで城壁に囲まれた街はどことなく陰気でありんすちゃんはがっかりです。

と、慌ただしく人混みを散らして王城に向かう聖騎士の一団が駆け抜けていき、ありんすちゃんの持っていたイルカの浮き輪を踏んづけていきました。

「ありんちゅちゅのイルカ！ まちゅでありんちゅ！」

ありんすちゃんは聖騎士団の先頭の白いサーコートの女聖騎士を睨んで叫びましたが、届かなかったようで騎士の一団はそのまま王城に入って行ってしまいました。

「……もうちゅかえないでありんちゅ」



ありんすちゃんはペッチャンコにしぼんでしまったイルカの浮き輪をつまみ上げてため息をつきました。まあ、すぐそばに海がなかった時点でふくらませたイルカの浮き輪は邪魔だったのかもしれませんが……

「ちえつかくだからお散歩するでありんちゅ」

ありんすちゃんはチョコチョコとした足取りで歩き出しました。

※ ※ ※

——ガツシャーン！

「——なんだか騒がしいでありんちゅね？」

いつの間にか広場で眠っていたありんすちゃんは建物が壊れる音で目をさましました。壊れた建物を囲んで聖騎士達が緊張した面持ちで見守っていました。

「姉様！ やりましたね！」

「まだだ！ 奴は自分から飛んだんだ！」

先程の白いサーコートの女聖騎士が怒鳴ります。

「——ふふふ。そろそろ、こちらも本気を出す頃合いのようですね」

「ほう。だったらさっさと力を見せてくれないか？ ……カルカ様、ケラルト、下がって」

次の瞬間、倒壊した瓦礫の山から何か巨大なものが立ちあがりました。

「……ヤルダバオト？」

なんだかよくわかりませんがどうやらこれからヤルダバオトと女聖騎士達の戦いが始まるみたいです。

「おもちゃろちようでありんちゅ」

ありんすちゃんはドキドキしながら広場の中央に建っている銅像の台座の横に座って見学する事にしました。

「——でやああああ!!」

先程の白いサーコートの女聖騎士がヤルダバオトに攻撃します。女聖騎士の渾身の一撃は簡単にヤルダバオトに弾かれました。

「素手で相手も面倒……いや、いい武器があるな」

ヤルダバオトはそう呟くと女聖騎士に背を向けました。そして女聖騎士が切りかかった瞬間——

「ふむ——〈グレーターテレポーターション〉」

姿が消えたヤルダバオトは次の瞬間、棒立ちになった二人の女の背後に現れました。

「カルカ様ああ！」

ヤルダバオトは女聖騎士がカルカ様と呼ぶ女の足首を掴んでぶら下げました。

「いい武器だ」

ヤルダバオトは手に掴んだカルカを振り上げると女聖騎士に降りおろしました。

「おもちゃろいでありんちゅー！」

ありんすちゃんは大喜びです。人間を武器代わりに戦うなんて、なんて面白そうなのでしよう。

「ありんちゅちゅもやるでありんちゅー！」

ありんすちゃんは立ち上がると戦いの中に入っていき、女聖騎士の足首を掴むとヤルダバオトに降り下ろします。

バチンバチン！

ありんすちゃんとヤルダバオトはそれぞれの武器——聖王女カルカと聖騎士団長レメイオス——を激しく打ち合いました。

「……これはこれは。まさかこんな場所でこれだけの相手にまみえるとは思いませんでしたね」

「この遊びはおもちゃろいでありんちゅー！ こっちの武器のが丈夫だから勝ちゅでありん

ちゅー！」

女聖騎士はなにやら聞き取れない叫び声を上げていましたが、その内静かになりました。

二人は三十分程戦いましたが、なかなか勝負がつきません。仕方なく一時的に休憩する事にしました。

「……だいぶきちやなくなつたでありんちゅ。〈大回復〉こりてまた丈夫になつたでありんちゅ」

ありんすちゃんが女聖騎士を回復させると弱々しい声で話しかけてきました。

「……私はローブル聖王国聖騎士団長レメディオスだ。私は、テニスが得意なんだが……」

レメディオスはありつたけの知恵を振り絞つて考えた台詞を口にしました。このままこん棒の代わりに振り回されては死んでしまう。少なくともカルカ様の命は無い。せめてボールならば……

「てにす、でありんちゅか？ ……おもちろそうでありんちゅ」

レメディオスの狙い通り、ありんすちゃんは乗つて来ました。命懸けの説得により、レメディオスとカルカはラケットの代わりとなりテニスの試合として戦いが再開される事になりました。

※ ※ ※

「やーめーた！ でありんちゅ！」

突然、ありんすちゃんはぐったりとしたレメデイオスをポイと投げ捨てる。ヤルダバオトに背を向けて去っていきました。うーん……さつきまで楽しそうにラケット（レメデイオス）を振り回しながらボールを追いかけていたのに……勝負に負けそうになった途端につまらなくなつたようですね。まあ、仕方ありませんよね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なので。から。

※ ※ ※

後に残されたヤルダバオトは一人、小さな独り言を呟くのでした。

「ここにありんすちゃんが登場するとは……さすがはアインズ様。私ごとときには全く予想出来ない展開……これは実に楽しみです」

## 104 ありんすちゃんテニスをする

「え？ テニス？ ……ふーん。面白そうだね」

ローブル聖王国から戻ってから数日後、ありんすちゃんはアウラとマーレを訪ねてナザリック地下大墳墓の第六階層に来ていました。

「あの、ありんすちゃん。……そのラケットって、その……シモベを使うのは、あの、まじいんじゃないかな？」

マーレの言葉にアウラも腕組みして頷きます。

「うん。うん。シモベ達もさ、ナザリックの仲間なんだし、あたしも物扱いするのはどうかと思うけどな？ ……そういや、ありんすちゃんってシモベの扱い、酷くない？ この間ヴァンパイア・ブライドを立たせて『ぼうりんぐ遊び』とやっていたらしいじゃん」

ありんすちゃんは二人の批判を受けて、思わず口をパクパクさせました。上手く言い訳をしようとしては、言葉が出てきません。

「シモベを大切にしないとさ、その内にありんすちゃんのシモベがみんないなくなっちゃうんじゃないかな？」

「……ちよんな事ゆるしやないでありんちゅ」

ありんすちゃんは否定しますが、内心では戦々恐々としていました。もしもありんすちゃんの階層からシモベがいなくなつてありんすちゃんが一人になつてしまつたらどうしましょう？ 階層の見廻りもありんすちゃん一人でしなくてはなりません。それにお風呂で頭を洗うのは……？ 着替えもどうしましょう？

真つ青な顔で呆然と立ち竦むありんすちゃんを見ていたアウラに憐れむような表情が浮かびました。

「とりあえず、さ……ラケットにシモベを使うのはやめておこうよ？ 別に丈夫な人間だつたら大丈夫なんじゃないの？」

アウラのさりげない一言にありんすちゃんの顔がパアーツと明るくなりました。そうですね。手頃な人間ならいましたよね？

※ ※ ※

「ヘックション!!」

魔導国傘下となり、暫定帝国の暫定皇帝と立場が変わつたジルクニフは盛大なくしゃ

みをしました。

「うへえ。……陛下、鼻水が垂れていますぞ？」

近侍の一人、バジウツトがおどけた様子で大袈裟な身振りで避ける真似をしました。

「……風邪なら気をつけて下さいね。陛下にはまだまだ頑張つて頂かないと……」

同じく近侍のニンブルが口を開きました。

（……ふん。今更この私がどう頑張れば良いと言うのだ？）

ジルクニフは口の中に苦々しいものを感じながら二人の顔を交互に眺めました。かつての帝国四騎士も、一人は死亡、一人は職を辞して今ではこの二人だけになってしまいました。噂ではかの「重爆」は魔導国で解呪されて冒険者になったとか……

「……私も皇帝でなかったらな」

ジルクニフは誰にも聞こえない位の小さな声で呟きました。そうです。もし、皇帝でなければ、現在のように魔導国から暫定皇帝として任命されなかったら――

「――一介の冒険者も良いものだな」

思わず口から出てしまった本音に早速バジウツトが続けます。

「……俺はそうは思いませんね。あれはあれでなかなか大変ですよ？ とはいえ今の俺達程じゃ無いとは思いますがね……と。あれ……不味いんじゃないですか？」

バジウツトが空の彼方を指で指しました。遙か彼方の空に点のような小さな影が見



えてきました。だんだんと大きくなる影は――

「……あれはドラゴン！ 魔導国の……まあ、もう属国となったのだ。まさか無茶はすまい」

「……だと良いですがね」

ジルクニフの目はドラゴンの背中の三人の子供達を捉えていました。そしてこれまでの理不尽な出来事の一つ一つを思い返していたのでした。

「……なにせよ、だ。魔導国からのご使者殿だ。出迎えるぞ」

※ ※ ※

「なんだ。テニスラケットを借りただけか。それなら――」

ジルクニフは魔導国から来た子供達の望みを聞いて安堵しました。テニスというのはかつて「口だけ賢者」が発明した遊びの一つで、帝国ではさほど流行っていないもののラケット等の道具はあります。

「ありんちゅちゅはこっち！」

「それじゃ、あたしはこっちにするね！」

二人の子供がジルクニフの両側の二人を引ったくります。あまりの事にバジウツトもニンブルも声一つ上げられませんでした。慌てたのはジルクニフです。さつき子供達は『ラケットを借りに来た』と言っていていませんでしたっけ？

「ありんちゅちやからいくでありんちゅ」

ありんすちゃんは片手でバジウツトを軽々と持ち上げるとブルンブルンと振ります。対するアウラは同じくニンブルを構えてポンポン叩きます。

「やーめーてー!!」

これから始まるであろう地獄絵図を思い描きながら、ジルクニフはただただ絶叫するのです。

一時間程の死闘の後、ぐったりして身動き一つしないバジウツトを放り投げたありんすちゃんがジルクニフを振り返りニッコリしました。

「次は皇帝の番でありんちゅよ?」

仕方ありませんよね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## 105ありんすちゃんアイドルになる

ナザリック地下大墳墓 第六階層へアンファイテアトルム——円形劇場の脇に建てられた舞台劇場（経緯はありんすちゃんのシヨール・マスト・ゴー・オンをご覧ください）のステージではありんすちゃん、アウラ、マールレの三人が踊っています。

「はいはい。そこまで。マールレはもつと動きを大きく躍動的に。アウラは左右に動く時は相手との距離感を意識して」

三人にアルベドからの叱責が飛びます。ありんすちゃんはじつとアルベドを見つめて訊ねました。

「ありんちゅちゅはどうでありんちゅか？」

「ありんすちゃんは……」

アルベドはしばらく口を閉じて考え込む様子を見せました。

「ありんすちゃんは……そうね、そのままが良いわ」

アルベドの言葉にアウラがキツと睨み返しました。

「ちよつと！ アルベドさあ、ありんすちゃんに甘いんじゃないの？」

アルベドはアウラの耳元に囁きました。

「アウラ、我慢して頂戴。ありんすちゃんにあれこれ指導して果たして良くなるかしら？ それどころか反発して拗ねてしまっただけだとは思わない？」

「……それはそうだけどさあ……」

アウラは言葉に詰まりました。確かにありんすちゃんの性格ではせつかくの指導は全て無駄になるでしょう。ありんすちゃんが三人のセンサーに選ばれたのも、単にありんすちゃんが目立つポジションをやりたがったからだけでなく、左右からアウラとマーレがフォロー出来るから、でもありました。少なくともアルベドの説明では、でしたが。

※ ※ ※

ナザリック地下大墳墓 第九階層アインズ執務室――

「アインズ様、これは？」

「うむ。実は普段アルベドと共にな、こうしてナザリックの皆から集めた様々なアイデアの中から良いものがないか検討していてな……」

デミウルゴスはいたく感動しました、と大袈裟に一礼すると、紙の一枚一枚に鋭い視線を送りました。

「……なるほど。公平を期する為、全て同じ筆跡で清書されている……さすがはアイン

ズ様」

「……よくわかったな。デミウルゴス。……所で今回付き合って貰って済まないな。いろいろ忙しいだろうに」

「……いえいえアインズ様。アルベドが不在なれば、このデミウルゴスが代わりをつとめるのに何の問題がありません。幸いに私の仕事は現在一段落しておりますのでご懸念には及びません」

「……ゴホン。それならば始めるとしようか。まず——」

アインズはデミウルゴスの顔色を伺いつつ一枚目の紙を選びます。このアイデアが書かれた紙の中にはアインズ自身のもも混ざっています。普段のアルベドが相手の場合にはさりげなさを装って何枚か検討した後に選ぶのですが、今回は思いきって一枚目に自分のアイデアが書かれた紙を選びました。

「……ゴホン。えーなになに。『魔導国の冒険者を増やす為、ナザリック戦闘メイドでアイドル冒険者チームを結成してみても如何でしょうか』……うーむ」

アインズはチラリとデミウルゴスの表情を伺います。アルベドなら『いったい誰がこんな愚孝を……却下です』と即座に否定した事でしょう。

「……ふむ。なるほど。……アインズ様がこの提案をお選びになったのには何らかの意図があるのですね。そういうばここに同じような意図の提案が——なになに、『ありん

ちゅちゅやはすくうるあいどるになります』……どうやらありんすちゃん、の提案のようです  
すね？」

デミウルゴスは瞳を細めながら囁きました。

「アイドル冒険者チーム。魔導国の広告塔……なかなか素晴らしい提案ではないですか」

かくて『スクールアイドル』ならぬ『スクリームアイドル』としてありんすちゃん、アウラ、マーレの三人組ユニットが急ぎよ結成されたのでした。

※ ※ ※

アルベドがナザリックに戻るとすぐに留守中にインズとデミウルゴスで協議されたアイドル冒険者チーム案を知り、心の中で歯ぎしりしました。しかしながらそんな胸のうちは押し隠してインズに進言します。

「アインズ様。そのアイドル冒険者チームの件、是非ともわたくしにお任せ下さい。きつと最高の成果をご覧頂きます」

それからありんすちゃん、アウラ、マーレの厳しいレッスンが始まりました。そして

いよいよアインズや階層守護者達へのお披露目の日――

三人の踊りは完璧でした。

日頃のレッスンの成果は間違いなく披露できていて、非の打ち所はありませんでした。……踊りに関して、は。

ですが、残念な事に――

「こちやえーはあーどうこにいー」

「イエーイ！ イエーイ！ オー！」

メインボーカルのありんすちゃんはなんと……音痴だったのです。

本人は気持ち良さそうに歌っていましたが……ね。仕方ありません。だって、ありんすちゃんは5歳児位の女の子なのですから。

## 106 ありんすちやんきがえる

「あーあ。なんか残念だったねー」

「……ポ、僕もが、頑張ったんだけどな」

ナザリツク地下大墳墓 第六階層のアウラ達の部屋ではありんすちやん、アウラ、マールがため息をついていました。前回アイドルユニットとしてのお披露目で、ありんすちやんが音痴だという決定的な欠点が明らかになり、計画は消滅してしまったのでした。

「……ありんすちやんだけ口パクにしたら良いのにねー。今度あたしから『中の人』に頼んでみようか?」

アウラさん……それはダメです。

「——ゴホンゴホン。お、お姉ちゃん、な、中の人なんてい、いないと思うな……」

「……ふーん」

アウラは納得いかないみたいで口を尖らせました。

「……じゃあさ、上坂す●れに頼んでみたら良いじゃん。ありんすちやんの声にそっくりだし」



「……うーん。無理じゃないかな。オバロ二次でもマイナーな作品だから、あの、上●すみれさんはありんすちゃんなんて、その、知らないんじゃないかな？ それに今は鬼灯のれ——」

——ゲフンゲフン。少々お待ち下さい——

ここはアウラとマールレの部屋。先程からありんすちゃん、アウラ、マールレの三人がアイドルユニットの反省会をしています。

「……残念だったねー。ありんすちゃんがもつと歌が上手だったら良かったね。今度はあたしがセンターでやってみる？」

「……お、お姉ちゃん。ありんすちゃんだって一生懸命だったんだから……」

ありんすちゃんを擁護するマールレをアウラはジト目で見ます。

「……なあに？ 世の中には一生懸命だからって許されるなんて甘い事は無いと思うけど？ 下手くそは下手くそって言ってなんか悪い？」

「……お姉ちゃん。ありんすちゃんを責めると……」

マールレはおどおどしながらありんすちゃんを振り返りました。するとありんすちゃんはマールレの衣装タンスを開けて楽しそうに様々な服を広げてご満悦でした。

「アウアウは衣装持ちでありんちゆね？」

「……え？ 違うよ。それはみんなあたしのじゃなくてマールレのだよ。ぶくぶく茶釜様

がよくマーレの着せ替えをしていたんだよ。そういえばありんすちゃんだって沢山の衣装をペロロンチーノ様から頂いているんでしょ？」

ありんすちゃんはため息をつきました。

「ありんちゅちゃはかわいいの、あまり無いでありんちゅ。ナーシユ服やシエーラー服や布が少ないかわいくないのが一杯なんでありんちゅ」

アウラはペロロンチーノの性格を思い出してありんすちゃんに少し同情するのでした。かつて姉のぶくぶく茶釜様から『エロ大魔王』と呼ばれていた所以を。

「あ、あの……気に入ったのがあったら、着てみたら、あの、どうかな？」

「そうだよ。着てみたら？ たまにはイメチェンも良いんじゃないかなあ？」

双子のダークエルフに薦められてありんすちゃんはマーレの衣装ダンスから服を選んでみる事にしました。

「決めちゃでありんちゅ！」

あれこれ楽しそうに悩んでいたありんすちゃんは黒地に花の模様が綺麗な着物を選びました。

「へー。綺麗な着物だね。これには確か黒髪のウィッグがあつたよね？ あ、これだよ」  
マーレが黒髪のおかつぱのウィッグを持ってきました。確かに金髪や銀髪よりも黒髪の方が着物に似合いますよね。

うーん。黒髪おかつぱで着物姿のありんすちゃん。とても似合って可愛らしいのですが……なんだか座敷わらしみたいにも見えます。

「ありんすちゃん、似合う似合う」

「……本当に似合うと、あの……僕も思います」

双子の賞賛を受けてありんすちゃんは得意満面です。片手を横に上げてポーズを取りました。

「……いっぺんちんでみる、でありんちゅ」

——あ……ありんすちゃんそれはのと……

うーん。ありんすちゃんには大人の事情は関係ないみたいですね。仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## 107 ありんすちやんとふしぎなダンジョン

魔導国郊外——ここにマールが冒険者訓練用のダンジョンを作っています。おやおや？ ありんすちやんがやって来ましたが……邪魔にならないと良いですね。

「マール。ここは何があるんでありんちゅ？」

「……えつと、あの……落し穴で……グリーンスライムだらけになるんです。あの、いそいで上がらないと溶けちやうんです」

ありんすちやんはマールの説明を聞くといきなり提案しました。

「じゃあここで空からチョコレートが雨みたいにかくちやん降るんでありんちゅ。ありんちゅちやが口おつきく開けていっぱい食べるでありんちゅ」

二人は次のトラップに行きます。

「えつと……ここでは次から次へとスケルトンが、あの、出てきます。あの、全てを一気に全体攻撃魔法で倒したら、あのクリアです」

「しようにありんちゅ。シケルトの頭にドーナツツのしえるでありんちゅ。ありんちゅちやはオールジョファツシヨドーナツツが良いでありんちゅ」

うーん……ありんすちやんの要望を聞かない方が良さそうです……

マールは奥の部屋の宝箱を開けました。すると中からアンデッドモンスターのレイスが飛び出しました。ありんすちやんはビックリして尻餅をついてしまいました。

「あ、ありんすちやん、大丈夫、かな？」

マールが手を延ばして引き起こしてあげました。ありんすちやんは何事もなかったかのように綺麗です。

「ありんちゅちやをビックリさしえるにはまだまだであります」

ありんすちやんは胸を張りました。

「ちゅぎに行くであります」

マールとありんすちやんは次のフロアにやって来ました。

「えつと……ここは赤い石だけを踏んでいきます。あの、違う場所を踏んだら——」

マールが説明をしている最中にありんすちやんは黒い石を踏んでしまい、落とし穴に落ちてしまいました。マールは落とし穴に呼びかけます。

「そのー落とし穴にはー恐怖公ーさんのー眷属がーいーまーすー」

ありんすちやんはパラパラと顔に降ってくるゴキブリを払いながら答えます。

「ちよーでーあーりんーちゅーかー」

マールはまた落とし穴に呼びかけます。

「はーやーくーあーがってーきーてーくーだーさーいー」

ありんすちゃんは穴の底から叫び返します。

「あーがりーちやいーであーりーんーちゅーがー恐怖ー公ーのーけんじよくがーふりやーまーなーいーのーであーがーれーなーいーであーりーんーちゅー!」

マールは困りました。そこで恐怖公に呼びかけました。

「あのー恐怖公ーさーんー眷属ーをーふーらーせーるーのーとーめーてーもーらーえーまーせーんーかー?」

ありんすちゃんは周囲を見回しますが、穴の底には恐怖公はいないみたいでした。

「マールー恐怖ー公ーはーるーちゅーであーりーんーちゅー!」

マールはありんすちゃんの『るーちゅーでー』のあたりがよく聞き取れませんでした。

「あーりーんーすーちやーんーもうーいっーかいーいっーてもーらーえーまーせーんーかー?」

ありんすちゃんは叫び返しました。

「なーにーをーであーりーんーちゅーかー?」

マールは穴に叫びます。

「さつきーなーんーてー言ったかーおーしーえーてーくーだーさーいー!」

※ ※ ※

ナザリック地下大墳墓 第九階層にあるアインズの執務室にありんすちやんとマーレが冒険者向けダンジョンの報告にやって来ました。

「マーレ、それによりんすちやんよ。ご苦労だった。早速報告をしてくれ」

「……は、はい。今現在で、あの、八割位の、あの、完成だと思えます」

マーレが答えました。

「ふむ。で、ありんすちやんよ。率直な感想を聞かせてくれ。子供らしい自由な感性で、な」

ありんすちやんはコクリと頷くと口を開きました。

「おーもーちーろーかったーでーあーりーんーちゅーー！」

うーん……仕方ありませんよね。だって、ありんすちやんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## 108 ありんすちゃんとかくさんのランス

ナザリック地下大墳墓に一枚の回覧が回ってきました。

『ありんちゅちやのむちぼちてつだいくらい』

アインズは首を傾げました。どうやら回覧を書いたのはありんすちゃんのようなようです。

アインズは第二階層の屍蠟玄室に向かいました。

屍蠟玄室には既に他の階層守護者達も集まっています。ありんすちゃんは忙しそうに屍蠟玄室からいろいろな品物を外に運び出していました。なるほど。これらを虫干しするんですね。

「ふーん。随分衣装があるね？ でも、この衣装箱にはナース服ばかりだけどさあ、なんで？」

アウラの疑問にありんすちゃんが答えます。

「ペロロンチイノしゃまは、『やきんびようと』のナーチュ服、『ナーチュにおまかしえ』のナーチュ服と『によむらびよいんのしと』のナーチュ服だって言ってたでありんちゅ」

ありんすちゃんは説明しますがあまりよくわかっていないみたいです。



（——うん？ ……なんだか聞いた事があるような……確かペロロンチーノさんが以前話していたような……なんだっけ？）

「あ、あの、セーラー服やブレザーとかの箱もありますね？」

マールレが開けた箱には赤や紺、黒や紫といった様々な色の学校制服が入っていました。

「ちよれは『ちゆはーと』でありんちゆ。ペロロンチイノしやまは『ちようはちよ』つて言つてたでありんちゆ。他にも『でえす入れ』ちよか『すくるでーず』『どきゆうせい』ちよか沢山あるでありんちゆ」

（——うーん。やつぱり聞いた事がある。何だったかな？ ……キャラメルコーンみたいな……東鳩だ。……たしか……ペロロンチーノさんが集めていた……フィギュア？ ゲーム？ だったかな……何だっけ？）

「何かしら？ これは服なのかしら？ あら？ これならわたくしも持つているわ。確か『ガーターベルト』よね？」

アルベドの言葉にマールレも頷きます。

「……あ、はい。そうですね。あの、ぼ、僕も持っています。ぶくぶく茶釜様に戴いたんです」

ちなみにその箱の衣装はありんすちやんは今一つ気に入らないみたいでした。

「ちよの箱はいらなないでありんちゅ。可愛いのでありんちゅ」

(うーん。これは……そうか。ペロロンチーノさんの趣味、だよな？ いやいや、ユグドラシルでこんなんどうやったら手にはいるんだよ？ ペロロンチーノさん)

「……おや？ こちらの箱には水着みたいですね？」

デミウルゴスが開けた箱には同じ形のワンピースタイプの水着が入っていました。白や紺、ブルーと色違いのもので、なかには『しやるていあ』と書かれた白い布が胸元に張り付けてあるのもあります。

(……これ、スクール水着だよな？ スクール水着……ペロロンチーノさん！ なんとなくヤバいんじゃない?)

「……ホウ。コレハナカナカノコレクシヨンデハナイカ。素晴ラシイ！」

コキュートスが開けた箱にはなんと沢山のランスがありました。ゴツズアイテムのスポイトランスには及びませんがどれも聖遺物級です。

「しよれもペロロンチーノしやまは『きちくおランス』『しえんごくランス』『ランスマグナン』ちよ名じゆけてありんちゅ。でもちゆかえないでありんちゅ。どゆわけか、前からちようびできないでありんちゅ。ありんちゅちやと書いてありんちゅに……」

(……これは……一から作られているオリジナルアイテムだな。うーん……データクリスタルが特殊みたいだ。ペロロンチーノさんはこんなものを作っていたなんて知らな

かったな。……おや?——)

アインズがそれぞれのランスを裏返してみると『18禁アリンソソフト』というシールが貼ってありました。アインズは思わず心の中で『ペロロンチーノ!』と叫ぶのでした。

仕方ありませんよね。だってペロロンチーノさんはエロゲ大王なのでしたから。

## 109 ありんすちゃんはえる

ナザリック地下大墳墓 第二階層 屍蟻玄室——あらあら。ありんすちゃんは部屋を散らかし放題です。食べかけのお菓子があちこちに落ちていますが気にならないのでしょうか？

あらら。ほら言わんこっちゃありません。ポテトチップスをお尻でふんずけていますよ？ ポテトチップスって油が多いから服にシミが残ってしまいますよ？

そういえばシモベのヴァンパイア・ブライドの姿がありませんね？ え！ なんと！ ストライキ、ですか……うーん。いつかはそんな事になる気がしていましたが……ありんすちゃん、反省しましょうね？

ありんすちゃんはチョコレート系のお菓子が大好きなんですって。

両手にお菓子を持ったまま、コックリコックリ頭が揺れだしました。そしてそのままお菓子が散らばったままの上で眠ってしまいました。普段ならヴァンパイア・ブライドがありんすちゃんをベッドに運んでくれますが……うーん。

結局、ありんすちゃんはそのまま朝まで眠ってしまいました。

目が覚めたありんすちゃんは起き上がると洗面所に行きました。そして鏡を見て

ビックリしました。なんと……ありんすちゃんの顔——丁度頬つぺたの辺りに小さなキノコが生えています。

もしかしたらアンデッドにはキノコが生えてしまうのかもしれないね。特にありんすちゃんはお風呂が好きですからキノコに丁度良い湿度に保たれているのかも知れません。

ありんすちゃんにキノコが生えた、という話は階層守護者に知れ渡りました。早速皆が集まります。

「ありんすちゃん。ちょっと教えて欲しいのだけど、キノコはアンデッドなら誰でも生えるかしら？ ……その……例えばアインズ様にも、とか」

「……わからないでありんちゅ。ありんちゅちやもはじゅめちえキノコ生えたでありんちゅ」

アルベドは妙にモジモジしながらまた訊ねました。

「……その……キノコは頬つぺた以外にも生えてくるかしら？ ……た、例えば……もつと下の方……とか、なんて……キャツ！ 恥ずかしい……」

「それよりさ、アルベド。このキノコが食べられるか試してみない？ あたしはそつちの方が重要だと思っけどな？」

アウラは今にもありんすちゃんのキノコを食べようとしています。ありんすちゃん

はイヤイヤをしました。だって、ありんすちやんのキノコですから、ありんすちやんに食べる権利がありますよね？

「……そのキノコ、例えばもつと大きなマツタケみたいなのが生えないかしら？ 言っておくけどこれはナザリックにとつてとつても大切な事よ？ ……そうだ！ すぐにもニューロニストにこのキノコが生えたありんすちやんを調べさせなくては」

アルベドがありんすちやんをがっしりと捕まえます。大変です。このままだとありんすちやんは解剖されてしまうかも知れません。

ありんすちやんは激しく頭を振ってイヤイヤをしました。

すると――

「ポトリ」

ありんすちやんの顔からキノコが落ちました。

「あー！ これってキノコの形のお菓子だ！ チョコレートとビスケットのやつ！」

ありんすちやんがお菓子だらけの中で寝ていたから頬っぺたにくつついてしまったのですね。

仕方ありませんよね。だってありんすちやんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

——皆は安心して思い思いに帰っていききました。ですが独りだけアルベドだけはまだその場で呆然と立ち、何やらブツブツ言っていました。

「アインズ様……キノコ……子供……」

もしかしたら顔に付いたのがタケノコだったらこんな騒ぎにはならなかったかもしれませんね。ちなみにありんすちゃんは断然キノコ派だそうです。

## 110 ありんすちゃんはんせいする

前回、キノコ事件で大騒ぎしたありんすちゃんですが、あれから反省したみたいです。ありんすちゃんは第五階層にやって来ました。成る程。各階層守護者からシモベに對する姿勢を学ぶつもりようです。コキュートスはありんすちゃんの目的を聞くと、少し感動したみたいです。

「……フム。ソレハ良イ心掛ケダナ。守護者タル者ハ日々鍛練ニ務メテシモベノ見本タルベキダナ」

ありんすちゃんはメモ帳に『たんれん みほん』と書き込みました。

次は第六階層です。同じ様にアウラとマーレから話を聞きます。

「……うーん。あたしが心掛けているのはスキンシップかなあ？ 特に魔獣達は運動する事が好きな子が多いからね。散歩がわりに魔獣に乗って巡回したりしてるよ？」

「……あの、ぼ、僕はドラゴン位しかいないけど、まあ、植物系モンスターに水や栄養がある土とかを、あの、あげたりしています」

ありんすちゃんはメモ帳に『のってじゅんかい みず』と書き込みました。

次にありんすちゃんは第七階層にやって来ました。ここでもありんすちゃんは階層



守護者のデミウルゴスから話を聞きます。

「ほう？ シモベ達への階層守護者としての心掛ける点、ですか？ 成る程。……そうですね。私は適材適所、が肝要だと思いますね。配下のシモベの長所短所を見極めて、それを生かす仕事を与える。それこそが階層守護者たる者の務めかと思えますがね」

ありんすちゃんはメモ帳に『てきだいてきしよ』と書き込みました。

ナザリック地下大墳墓 第二階層の屍蝨玄室に戻ってきたありんすちゃんはメモ帳を開きます。そして、しばらく考え込んでいましたが、『たんれん みほん』にバツ印を書きます。さらに、『てきだいてきしよ』にもバツ印を書きました。

最後に『のつてじゅんかい』にマル印を書くこと二ツコリします。

「……ありんちゅちゃ、ちゃんと出来てるでありんちゅ」

——いやいやいや。出来ていたらシモベ達にストライキなんてされませんって。

ありんすちゃんは第三階層にシモベ達を集めました。そして各階層守護者から様々な話を聞いて学んだことを語ります。そして最後に宣言しました。

「これからありんちゅちゃはしゆてきな守護者になるでありんちゅ」

エハンと胸を張るありんすちゃんとは対照的にシモベ達の表情はどうも信じられない、といった感じでした。無理ありませんよね。

と、ここでヴァンパイア・ブライトの一人がおずおずと手を上げました。ありんす

ちゃんが発言を許可します。

「……あの……ありんすちゃん様、もう私達で『ぼうりんぐ』をするのは止めて頂けませんか？」

「俺たちも『ぼうりんぐ』の玉として投げられるのは懲り懲りです」

スケルトンもヒビだらけになった頭を撫でながら発言しました。

ありんすちゃんは口をパクパクさせながら、ようやくにして答えます。

「……あ、ありんちゅちゃはしよんな事ぢらないで、ありんちゅ」

シモベ達からは次々と発言が出てきます。

「……ありんすちゃん様。私からのお願いです。鼻をほじったあとで私の顔になすりつけるのはやめて下さい」

「……ありんすちゃん様、私達をバラバラにしてパズル代わりにするのはやめて下さい」  
ありんすちゃんはシモベ達の声に反論出来ないまま、約束させられてしまいました。

※ ※ ※

翌日、ありんすちゃんは機嫌良さげにヴァンパイア・ブライドを集めます。そしてまたしてもボーリング遊びの的にしようとして、早速反発されます。うーん。昨日の事を

忘れているのでしょうか？

しばらく考えていたありんすちゃんは今度は地面に線を引き、その線を引いた区画の中にヴァンパイア・ブライドを入れます。

「……ぼうりんぐはやめるでありんちゅ。ヴィシバールイで遊ぶでありんちゅ」※

(※ヴィシバールイはロシアのドッジボールみたいな遊び)

そう言うもありんすちゃんはスケルトンの頭を構えました。

その後、またしてもシモベ達からストライキされてしまったありんすちゃんは今後はヴィシバールイもしません、と約束させられてしまうのです。仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子に過ぎないのですから。

## 111 ありんすちゃんはねつきをする

オーバーロード13巻が発売されるまで続く2017年の冬はまだまだ終わりそうにありませんね。

ありんすちゃんとアウラとマーレがそれぞれ振り袖と紋付き袴で揃いました。良いですね。たまにはこうした正月っぽいのも……

改めましてあけましておめでとうございます。本年もありんすちゃんを宜しくお願い致します。

三人がいるのはナザリック地下大墳墓の第六階層にあるアンフィテアトルムです。なんでもこれから羽根つきをするんですって。

「……羽根つきってさ、この板の所でこの羽根が付いた玉を打ち合うんだよ。で、落としたり負け。負けたら顔にこれで落書きするんだよ？　ね、面白そうじゃん」

ありんすちゃんも大喜びです。ありんすちゃんが勝ってアウラとマーレの顔を真っ黒にしてやろうと、鼻息が荒くなっています。

あれ？　アウラがマーレとアイコンタクトでニヤリと笑いましたよ？　そうです。実はアウラとマーレは年末に羽子板を見つけてから今日まで猛特訓してきていたので

した。危うし！ ありんすちゃん。

「いくでありんちゅー！」

ありんすちゃんは張り切ってつまんだ羽根を離すと羽子板で思いつきり打ち上げます。羽根はまるでロケットのように飛んでいきました。さすがはかつて守護者でも一二を争う猛者だったありんすちゃんですね。

※ ※ ※

「……落ちてきませんね？」

手をかざしながらマーレがため息をつきました。

「しようがないなあ。ありんすちゃん力の入れすぎだよ？ きつと天井に突き刺さっちゃったんだよ。今度はあたしがやってみるよ？」

アウラは憤慨するありんすちゃんを尻目に羽根を羽子板で打ち上げました。羽根はありんすちゃんが打った時と同じように飛んで行き――

「――お姉ちゃん……落ちてこないね」

羽子板を構えながらずつと空を見上げたままのマーレが呟きました。

「……あれー？ おつかしいな……随分加減した筈だけどねー？ あ、そうだ。やっぱり外でやろう？ ね？」

ありんすちゃんはアウラに文句を言いたかったのですが、アウラの勢いに気圧されて言えませんでした。

※ ※ ※

三人はログハウスから地上にやって来ました。これなら思いっきり羽根つきが出来そうです。ありんすちゃんは羽子板をブンブン振ると鼻からフンスと息を吐きました。

「……いくでありんちゅー！」

ありんすちゃんは羽根を放り上げると羽子板で打ちました。カシユイイーンと音を立てて羽根はミサイルみたいに飛んでいききました。すぐさまマーレはシモベのドラゴンを呼び出すと背に飛び乗って飛び立ちました。

※ ※ ※

魔導国の傘下となったバハルス帝国首都アーウィンタール——新年から平和を楽しむ人々が賑い活気があります。

「……民衆がうらやましいものだな」

城下を見下ろしながら皇帝ジルクニフはため息をつきました。

「……新年ですぜ？　せめて新年くらいは楽しくいきましようや？」

バジウッドはほんのり赤く染まった顔で笑いかけます。

こいつめ。酔っていやがる——ジルクニフは忌々しく思いながら窓の外に目をやります。

「——うん？　あれは……まさか？」

皇城に向かって何かがすごい勢いで飛んできます。それはみるみるうちに大きくなっていき、ドラゴンだとわかりました。

「——あ、あれは魔導国の——」

間違いありません。以前に魔導国の使者を乗せてきたドラゴンです。ドラゴンの巨体が目の前に迫り——ドガツシャーン！

——皇城にドラゴンの尾が直撃しました。

「なんなんだ！ なんなんだ！ 一体？」

あわやの所で助け出されたジルクニフは悪態をつきました。

「パキーン!!」

甲高い音と同時にドラゴンは元来た方角に飛び去っていきました。

「なんなんだ？ あれはなんだったんだ？」

ジルクニフは力なくうなだれるのでした。

※ ※ ※

ありんすちゃん、アウラ、マーレの羽根つき勝負は互角のまま進み、夕方になりました。ありんすちゃんは焦って羽子板を投げ棄てると代わりのモノをへグレーターレポーターションで取り寄せました。

「うわ？ なんだこれは？」

「あー！ ありんすちゃんは反則したので失格だねー！」

突然羽子板代りにテレポーターションさせられた白いサーコートの子騎士を指しながらアウラが宣言しました。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですか



ら。

## 112 ありんすちやんとおわらないふゆ

ナザリツク地下大墳墓 第二階層〈屍蠟玄室〉でありんすちやんはため息をつきました。だつてなかなかオーバードの13巻が発売されないのです。確か予定では2017年の冬には発売される筈でした。

『ぐがねちやんの冬は終わらない』

きつと冬が終わらないと無理みたいです。現在の最新刊は聖王国編の前編です。ですから続きの後編が気になるんですね。

「……はあ……こんなこちよなら十二巻、一ページじゅちゅ読んだんでありんちゅ」  
ありんすちやんは後悔していました。そもそもありんすちやんは平仮名しか読めませんからシモベのヴァンパイア・ブライドに読み聞かせて貰ったのです。続きが気になったありんすちやんがヴァンパイア・ブライドにおねだりして続きをドンドン進めさせて、結局最初の晩に朝までかかって十二巻を読みきってしまった事はもう忘れてしまったようです。

「……………きつとネイアはちんじやうでありんちゅ。ドツペルはきつとお兄ちゃんでありんちゅ。アインジユチャマがピンチでチャルチエがたしゆけるでありんちゅ。……

「そうでありんちゅー！」

「おやおや？ ありんすちゃんは何やら思いついたみたいですね？ 屍蠟玄室を飛び出して行ってしまいました。」

※ ※ ※

「…………えっと、その…………つまり〈天候操作〉じゃなくて季節を変える、あの…………そういう事ですか？」

「ありんすちゃんは腕を組んで頭をブンブン振ります。ありんすちゃんの期待の眼差しを受けたマールは気まずそうにモジモジしています。」

「しゅぐに春にしるでありんちゅよ。マール」

「…………あの…………ありんすちゃん。それはちよつとボ、僕には…………その…………」

言葉に詰まるマールを見かねてアウラがやれやれと首を振ります。

「あのさあ、マールの〈天候操作〉はあくまでも気候を変える事は出来ても季節を変える事は出来ないんだよ？ 考えてみてごらんよ？ 季節が変わるってのはさ、それだけ時間が経たないといけないって訳。わかる？」

「ありんすちゃんは口を真っ直ぐに結んで真っ赤な顔をしています。」

「……冬が……冬が終わらないと……オバロドちゅぢゅき、見れないでありんちゅ！  
うわわーん！」

ありんすちゃんは泣きながら第六階層を飛び出して行っちゃいました。

※ ※ ※

さてさて、ありんすちゃんは何処に行ったのでしょうか？

ありんすちゃんは屍蝋玄室に戻ってベッドに寝そべって何やら書いているみたいで  
す。また落書き——ゲフンゲフン。挿絵を書いているのかと思ったら、どうやら文章を  
書いているようです。成る程、自分自身でオーバーロード十二巻の続きの話を書くん  
ですね。

部屋のドアにはありんすちゃん直筆で『はいるな』との貼り紙が貼られていて、今回  
はどうやら本気みたいですね。

※ ※ ※

「ありんすちゃん、ちわつす。はかどっているっすか？」

ありんすちやんの寝室にルプスレギナが入って来ました。しかし、ありんすちやんの姿はありません。どうやらお風呂に入っているみたいですね。隣接する浴室からありんすちやんの鼻唄が聞こえてきます。

「おや？ どうやら原稿みたいっす」

ルプスレギナは足元に落ちていた何枚かの原稿用紙を拾い上げました。それは平仮名でありんすちやんが書いた『オーバードロード 聖王国の聖騎士編 下』——『おぼろどせいおこくのせいき した』でした。

※ ※ ※

登場人物で聖騎士団長が最初、何度も登場してきますが、レメディオスの名前をありんすちやんは『れでめおす』とか『めれでおす』という風に間違えています。その内に面倒になってきたみたいで『ねいあさけびまくす れでめおすだんちよしんじやいました』——原文は全て平がななので修正すると——『ネイアが叫びました。レメディオス団長が死んじやいました』として退場してしまいました。

魔皇ヤルダバオトとの対決でアインズは倒れてしまいます。危うしアインズ、という場面で深紅のフルアーマーのシャルティアがヘグレーターテレポーテーションで現れ

ます。

シャルティアは激戦の末にヤルダバオトを倒します。と、次の瞬間――

ルプスレギナは紙をめくりました。

――『ハツハツハツ！ よくぞヤルダバオトを倒したな！ 私はヤルダバオトの弟のヤルバデオトだ！ 私は兄より強いぞ！』

シャルティアは激闘の末にヤルバデオトを倒します。すると今度はヤルバデオトの義理の弟のヤバルデオトが――

「これは駄目つすね。ありんすちゃんには文才は無いつす」

ルプスレギナはやれやれと頭を降りながら部屋を出て行きました。浴室からは上機嫌なありんすちゃんの鼻唄がまだ聞こえてきます。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子に過ぎないのですから。

## 113ありんすちやんとマーレとさんにんのエルフ

ある所に仲の良いダークエルフの双子が住んでいました。二人には三人のシモベのエルフがいました。

ある日、三人のエルフはダークエルフにお願いしました。

「どうか私達に名前を下さい」

ダークエルフの弟は彼女達にそれぞれ『ブー』『フー』『ウー』と名付けて言いました。

「……あの、皆さんもそれぞれ自立して家を建てて下さい。この第六階層は広いですから」

そこで三人はそれぞれ家を建ててきました。ブーは藁の家、フーは木の家、ウーはレンガの家を建てました。

「……おやおや？　なんかチャチな掘っ建て小屋があるつすね。ルプーさんが綺麗に片付けてやるつすよ」

通りがかった狼が背中の大きな聖印を振りかぶると藁の家を叩き壊しました。

「ぎゃッー」

壊れた藁の家から慌てて逃げ出したブーを狼が抱き締めました。

「なかなか美味しそうっすね。頂きますっす」

ブーは狼に食べられてしまいました。

次に狼とブーは木の家にやって来ました。そしてまたしても狼は木の家を叩き壊してブーを食べてしまいました。

狼とブーとブーはレンガの家に行ってきました。

「ルプスレギナ様、ウーの家は丈夫なので壊れないのでは？」

狼は黙ってましたも聖印を振りかぶりました。

ドカツシャットン！

レンガの家は簡単に壊れてウーも狼に食べられてしまいました。

狼が代わる代わるエルフを食べているとダークエルフの弟がやって来ました。

「……うひひひ。マールも食べてやるっすよ。かかれっす！」

狼に命令されて三人のエルフ達はダークエルフの弟の服を脱がしてしまいました。

そこに猟師の女の子が通りかかりました。猟師は狼をチラリと見ましたが興味ない様子でそのまま通り過ぎてしまいました。

「気持ち良いー。モフモフ」

猟師は一円と書かれたシールだらけのフワフワの魔獣に抱きついていきます。

「た、助けてー。お姉ちゃん」



ダークエルフの男の子は首から下げた銀のドングリに叫びました。

「マーレ？ どうしたの？」

「お姉ちゃん、ルプスレギナさんとエルフさん達が大変——」

「——あ、ごめん。アインズ様と呼んでるみたいだから。後でね」

ルプスレギナは手をワキワキさせながらマーレに近付いて来ます。あやうしマーレ。「何をちているんでありんちゅ？」

マーレが顔を上げると5歳位の少女が目丸くして立っていました。

※ ※ ※

ありんすちやんは第六階層にやって来ました。楽しそうに鼻唄を歌いながらスキップします。

とはいえ、ありんすちやんの場合は交互に足を出しているだけのニセ物スキップですが。

ふと、ありんすちやんは立ち止まりました。見るとルプスレギナと三人のエルフ達がマーレを羽交い締めになっている所でした。マーレは服を脱がされて下着だけになっています。

ありんすちゃんは大きく口を開けて叫びました。

「何をちているんでありんちゅ？」

ルプスレギナは困惑した面持ちで言葉に詰まってしまうました。

「……あの、ありんすちゃん……これは、その……あ、あの……た、助けて……」

弱々しいマーレの言葉にありんすちゃんは力強く頷きました。

「まかちえるでありんちゅ！」

そう言うたありんすちゃんはマーレ達に背を向けて走り去ってしまいました。

しばらくして戻って来たありんすちゃんはピンク色のシャンプーハットを持って来ていました。

「こりで大丈夫でありんちゅ！」

ありんすちゃんはシャンプーハットをマーレの頭にはめると得意気に帰って行きました。

※ ※ ※

ありんすちゃんが去って微妙な空気の中でルプスレギナが呟きました。

「……せつかくつすから、これから皆でスパにでも行くつすか？」

仕方ありませんよね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのでから。

## 114 ありんすちゃんまたしてもメイドになる

ナザリック地下大墳墓の第九階層にある食堂は今しもメイド達の食事時で賑わっていました。

ありんすちゃんもメイド——ブレアデスの一人、ソリュシヤンと向かい合つて食事をしています。ソリュシヤンは野菜サラダ、ありんすちゃんはペペロンチーノですね。

「……あの、ありんすちゃん様。ありんすちゃん様はアインズ様の正妻におなりにはならないのですか?」

ありんすちゃんは器用にスプーンの上でパスタをフォークでクルクルツと巻き取るとスポポポーンツと吸い込みます。それから人さし指を頬に当てて首を傾げました。

「……うーん。どうでありんちゆかね? ありんちゆちはアインジユちやまの娘、みたいなものでありんちゆ」

突然、ソリュシヤンが立ちあがりました。

「このままではアルベド様にアインズ様の正妻の座を奪われてしまいます! 以前のシャルティア様でしたら間違いなくアインズ様の正妻に……それなのに……私は今でもシャルティア様こそアインズ様に相応しいと思つています!」

ありんすちゃんはソリュシヤンを見向きもしないでパスタをフォークで巻き取っています。パクリ。

「……おいちいでありんちゆ。チヨリチャも食べるでありんちゆ」

相変わらずモグモグと食べているありんすちゃんの様子にソリュシヤンは思わずテーブルをダン！ と叩きました。

「——ソーちゃん、なに苛立っているつすか？ あー……もしかしてあの日つすか？」  
激昂するソリュシヤンの後ろに同じくプレアデスの一人、ルプスレギナが現れました。

「ありんちゆちはちらないでありんちゆ。チヨリュシヤが勝手にバンバンなんでありんちゆ……ルプーも食事でありんちゆ？」

ありんすちゃんは平然としてフォークでパスタをクルクルしながら尋ねました。

「……いやあ、食事はもう済ましたつすよ。ちよつとユリ姉を探しているんすけど……  
来月のアインズ様当番について……」

ちなみにアインズ様当番とは一般メイドが交替でアインズ様のお世話をする、という仕事なのですが……

「——それだわ！」

突然ソリュシヤンが顔を上げました。そして小脇にありんすちゃんを抱えるとルプ

スレギナをひっぱって食堂を出ていきました。

ありんすちゃんはまだペロンチーノを半分しか食べていなかったのに……

※ ※ ※

翌日、アインズがベッドから起き上がるとアインズ番の一般メイドのシクススが立ち上がりました。と、丁度その時扉がノックされ、対応したシクススがアインズに報告します。

「……あの、アインズ様。交替のメイドが到着致しました」

アインズが頷くとシクススが扉を開けて交替のアインズ様当番のメイドを入れます。

「ありんちゅちやでありんちゅ」

なんとメイド服を着たありんすちゃんでしたのでアインズは驚きました。

「……ありんすちゃんではないか？ これは一体……？」

シクススが平伏して答えます。

「なんでもペストーニャ様とユリ様から今日のアインズ様当番はありんすちゃん様がなさるとの事でございます」

「……………しかし……………」

アインズが見るとありんすちゃんは胸を張り、張り切っているようでした。

「……………頑張るでありんちゅ」

アインズは悩んだ末にありんすちゃんのアインズ番を許可するのでした。

※ ※ ※

「……………こ、これは一体……………」

「……………ああ。気にしなくとも良いアルベドよ。今日はありんすちゃんがメイドの当番だ  
そうだ」

ナザリック地下大墳墓の第九階層にあるアインズの執務室の扉を開けたアルベドは  
凍りつきました。無理ありません。

毎日の日課であるアインズとの政策協議の場に、かつてのライバルの姿を見いだした  
からです。

凄まじい目付きで睨んでいるアルベドをよそにありんすちゃんはアインズの膝の上  
に座り、足をブラブラさせながらお絵かきに夢中です。

「……………まあ、その……………なんだ。たまには子供の意見を聞いてみるのも良いのではないだ

ろうか？ それに、な……ありんすちゃんを描いた絵は挿絵として有効活用——」

「——なりません！ アインズ様の膝の上に乗るなんてもつての他です！ アインズ様の膝の上はわたくしのものです！」

アルベドは思わず叫びました。ありんすちゃんはゆっくりアインズの膝から降りるとアルベドに言いました。

「……ちかたないでありんちゅね。アルベドにゆじゅつてあげるでありんちゅ」

アルベドは歓喜しながらアインズの膝の上に座るのです。

——やれやれ。これではどちらが子供かわからないな……

アインズは思わずため息をつくのでした。

※ ※ ※

どうにかこうにかありんすちゃんの日アインズ番は夜を迎えました。普段ならばアインズの寝室で椅子に座って見守るのですが……

「……ありんすちゃんよ。無理せずに眠って構わないぞ……ん？」

ありんすちゃんに振り向いたアインズは思わず破顔しました。

なんと、ありんすちゃんは椅子に座ったままコックリコックリ居眠りしていたので



す。無理ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なので  
から。

アインズは優しくありんすちゃんを抱き上げると自分のベッドに寝かせてあげるの  
でした。

良かったね。ありんすちゃん。良い夢を。

※ ※ ※

翌朝やって来た交替のメイドを見てアインズは驚きました。

「……………くっくっくっく……………おはようございますアインズ様。本日、アインズ様当番をさ  
せていただきますアルベドに御座います」

※ありんすちゃんが挿し絵を描いてくれました

## 115 ありんすちゃんスイーツになる

ナザリツク地下大墳墓の第九階層にある一般メイドの控え室——

戦闘メイドに用意されたものよりは質素ながらも、倍くらいの広さの部屋が二部屋あり。そこにはメイド達に交ざってありんすちゃんとエクレアの姿がありました。

「へー……ちらかなかったでありんちゆが、ペストニヤワンワンはシヨートケーキだったでありんちゆか？」

ありんすちゃんが感心すると、エクレアがエヘンと胸を張ります。

「うむ。ペストニヤ殿は正式にはペストニヤ・シヨートケーキ・ワンコという名前でして、まあ、一般にはシヨートケーキをSに略するようですが。何を隠そうこの私、エクレア・エクレール・エイクレアーめも同じ至高の御方、館ころもつちもち様に創造されたのです！」

「オー！ そりはしゅごいでありんちゆ！」

いやいや、ありんすちゃんことシャルティア・ブラッドフォールンだって同じく至高の御方のペロロンチーノ様が創造されたんですよ？ まあ、立派な方だったかは諸説あるみたいですが……

ありんすちゃんは腕を組んで何やら考え始めました。うーん……こういう時ってろくな事にならない気がします……

「決めちゃでありんちゅ！ ありんちゅちやも名前、お菓子しるでありんちゅ！」  
ありんすちゃんはそう宣言しました。

※ ※ ※

ナザリツク地下大墳墓 第二階層〈屍蠟玄室〉——表にありんすちゃんの手書きの貼紙がありました。

『かんがえちゅ』

うーん。多分『考え中』という事みたいですね。

中ではありんすちゃんが寝転がっていろんな名前を考えていました。

『モンブラン・ブランブラン・ありんすちゃん』

『アイス・アイスクリーム・ありんすちゃん』

『シャーベット・ブラッドありんすちゃん』

『どらやき・まんじゅう・ありんすちゃん』

『モンブラン・チーズケーキ・タバタイ』

うーん……最後は単なる欲求にかわってしまいますが……大丈夫でしょうか？

不意にありんすちゃんは起き上がると飛び出して行ってしまいました。

※ ※ ※

「……うむ。そうか。私に素敵な名前を考えて欲しいと？ スイーツな名前か……うむ。私は名前を考えるのに少しばかり自信があつてな」

ありんすちゃんの姿が今度は第九階層にあるアインズの執務室にありました。なるほど、至高の御方であるアインズ様に素敵な名前をつけて貰おうという考えですね。

アインズはいきなりやって来たありんすちゃんの願いを聞き、腕組みをして考え込むのでした。

（スイーツな名前か……やはり『大福』か？ いや、それはそもそもハムスケに考えた名前だからまずいだろうな。……うーん……いっそペロロンチーノさんにちなんだ名前にするか？ ……なんだったかな……ペロロンチーノさんが好きだったゲームに出て

くる妹キャラの……うーん……ああ、音夢だ。……いや、だめだ。カルネ村のネムと被る。しかもスイーツとは関係ないな。……うーむ……なかなか難しいものだな)

と、突然、思い悩むアインズの頭に一つの名前が閃きました。

「よし！ 決めた。これだ！ 『ずんだ餅』にしよう！」

ありんすちゃんは喜びました。早速ありんすちゃんは名前を『ずんだ餅ちゃん』にかえる事にしました。

※ ※ ※

こうして新たに『ずんだ餅ちゃん』になったありんすちゃんでしたが……翌朝目覚めた時にはすっかり忘れてしまい、もとのありんすちゃんに戻っていましたとき。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

※ありんすちゃんが挿し絵を描いてくれました

## 116 ありんすちやんとエロさいあく

ナザリック地下大墳墓 第九階層 アインズ執務室——ありんすちやんはアインズの膝の上に座ってお絵かきに夢中です。

フンフンフンと鼻唄を歌いながら上機嫌のありんすちやんですが、隣のアルベドの顔が鬼のようです。

「こりは恐怖公でありんちゅ」

得意そうに振り返るありんすちやんにアインズは思わず破顔します。

「……うむ。なるほど。良く描けているな」

「——アインズ様。わたくし、少し外の空気を吸ってきます」

アルベドは一般メイドが扉を開けようとするのを制して自ら扉を開けて部屋を出ていきました。

「……ちよういえば恐怖公は拠点最悪でありんちゅね。しよれからガチヨクコチュオは生態最悪、ニユロシユトは役職最悪でありんちた。エロ最悪ってどんなでありんちゅ？」

「——わたくしも是非知りたく存じます」

いつの間にか戻っていたアルベドも興味深い様子で身を乗り出します。アインズは重たい口を開きました。

「……うむ。エロ最悪か……なかなか説明が難しいな……」

アインズはかつてのギルドメンバーとのやり取りを思い返すのでした。

※ ※ ※

「うわ！ えげつない！」

「いやあいくらなんでもGはまずいつしょ？ まんまじやないすか」

「ギルド長、どうします？」

恐怖公が作成された時、かなり批判的な声が他のメンバーから上がりました。

製作者のるし☆ふぁーさんはまさにこの混乱した状況を狙っていたかのようにほくそ笑んでいます。否定的な意見に皆が傾きかけた時にぶにと萌えさんが発言しました。

「いや、これはこれで有りだよ。いつそゴキブリの姿のPOPモンスターだらけのト

ラップを作ったら面白そうだよね。これは最悪だ」

「なるほど。確かに対敵に考えたら精神的にも強烈な一撃がありますね。皆さん、どうでしょう？ 異存がなければナザリック地下大墳墓に恐怖公の管轄する対人トラップを加える、という事で」

モモンガの呼掛けに皆が応じて正式に拠点最悪がナザリックに加わる事になりました。

その後もメンバーの悪のりが続き、次々と様々な最悪——五大最悪——が作られる事になりました。

エロ最悪はローバーをベースに様々な触手攻撃や女性プレイヤーの装備を溶かす体液等の攻撃、様々な性的な嗜好をテキストに盛り込んでみたのですが、ユグドラシルでの禁止項目との兼ね合いでなかなかうまくいきません。

そんな時にペロロンチーノがやって来たのでした。

「モモンガさん、なんか皆で面白い事しているんですって？」

ペロロンチーノはエロゲ大王との異名がある人物だけあって、その変態的嗜好に関する造詣は他人の追隨を許さない程に深いものでした。

エロ最悪の制作はとあるペロロンチーノが発した一言で終わりを迎えました。

「……………あれ？ これならシヤルティアの設定の方が……………」



結局エロ最悪はシャルティア・ブラッドフォールンを越える事は出来ませんでした。そしてシャルティアこそが『真のエロ最悪』である、というのがギルドメンバー間の暗黙の了解となったのでした。

※ ※ ※

アインズはふと我に返ると、ずっと見つめ続けているありんすちやんに気がつきました。

（まずいな。かつての姿とはいえこんな小さな子供に『お前こそが真のエロ最悪だ』なんて言えないぞ。どうしたものか……）

アインズの言葉を待ち続けるありんすちやんとアルベドに対して「近い内にエロ最悪を紹介する」と約束して、アインズはようやくその場を逃れる事にしました。

※ ※ ※

それから数日が経ち、アルベドとありんすちゃんはいんズと共に宝物殿にやって来ました。そこにはパンドラズ・アクターが待ち受けていて、一人の至高の方に姿を変えました。

「私がエロ最悪だ」

黄金に輝くバードマンを見てアルベドもありんすちゃんも納得したようでした。

※ ※ ※

翌日、いつものようにいんズがナザリック内で集めた投書を清書していると、全てひらがなで書かれた一枚がありました。

それには「えろさいあくになりたい」と書いてありました。仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## 117ありんすちゃんふたたびせいおうこくにいく

今日のありんすちゃんは魔導国の首都、エ・ランテルの街中を散歩しています。

門の近くまでやって来ると、何やら物々しい鎧姿の一団がいました。

「何をちているでありんちゅ？」

ありんすちゃんが門番に訊ねると代わりに白銀の鎧に白のサーコートを纏った女聖騎士が答えました。

「子供には関係ない。さっさと母親のもとに帰れ」

たちまち門番の顔は真つ青になりました。反対にありんすちゃんの顔は真つ赤に染まっています。

ドガツシャーン！ ガラガラドガツシャーン！

ありんすちゃんが女聖騎士を叩くと女聖騎士は馬に跨がったまま、ゴロゴロと転がっていき、巨大なアインズ像にぶつかって停まりました。

「だ、団長！」

副団長のグスターボが慌てて駆け寄りレメディオスを抱き起こしました。

「な、何が起きた？ 雷でも落ちたか？」

レメディオスがヨロヨロと起き上がり周りを見回すと他の聖騎士達は言葉を失い震える指で小さな女の子を指しています。

「……あの……団長を殴ったのは……その少女です」

「馬鹿な。そんな事あるわけ無かろう。こんな子供が——ングワッ！」

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロドガツシャーン！

またしてもレメディオスはありんすちゃんに殴られて転がっていきました。

「……馬鹿な！ いや、まてよ？ もしかしてその者は以前に会った事は無いか？」

「ちらないでありんちゅ」

ありんすちゃんはまたもや拳を握ります。レメディオスの転げかたが面白くて病みつきになってきたみたいですね。

「——ま、待て。待ってくれ。そう何度も殴らないでくれ。私は別に敵対するつもりは

——ングワッ！」

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロドガツシャーン！

「ありんちゅちはあちよんでるだけでありんちゅ」

「……待て待て！……グスターボ！ 従者！ なんとかしないか！」

ついつとありんすちゃんの前に目付きの悪い少女が立ちます。

「……あの……餡あげますから、団長を許して下さい」

ありんすちゃんは飴玉を二個貰うと左右の頬つぺたでモゴモゴ舐め始めました。

「……従者ネイア、なんだその言い方は？　まるで私に非があるかのようではないか？」

「……すみませんでした」

飴玉を舐めているありんすちゃんの後ろでは何やら険悪な雰囲気です。ありんすちゃんは腕をグルグル回しました。

「……ちよつ、まあ待て！　……そんなに誰かを殴りたいなら……そうだ！　私の国に来てヤルダバオトを殴ってくれないか？　うん。それは実に名案だ！」

「——団長！　まだ幼い少女になにをい——」

「うるさい！　もう私は決めたぞ！　私をこれだけ殴れる強さがあるのだ。この少女にヤルダバオトを討伐して貰うぞ！」

かくてありんすちゃんは飴玉四個と引き替えにローブル聖王国へ行き、魔皇ヤルダバオトを討伐する事になりました。

※ ※ ※

ナザリツク地下大墳墓 第九階層玉座の間——そこにはひたすらローブル聖王国か

らの使者の訪れを待つ、アインズとアルベドの姿がありました。

「……アインズ様……レメディオス団長主従はリ・エステーゼ王国からエ・ランテルに向かったとの報告は入っておりますが……その……魔導国に入国したという報告はまだありません」

「……うむ。そのようだな。……まあ、待つより仕方あるまい」

結局、ローブル聖王国の聖騎士団主従はやって来ませんでした。

※ ※ ※

聖王国へ向かう馬車ではありんすちゃんに従者としてネイアが同席となりました。

「……睨んでもありんちゅちやの飴玉、あげないでありんちゅ」

「……いや、ありんすちゃん様、私は生まれつきこの様な目付きでして……その……」

ネイアは目尻を指で押さえ、グリグリと動かししました。

「……ふーん。ちょうどでありんちゅか。……ちょうど……」

ありんすちゃんはかわいいウサギが付いたお出掛け用のリュックサックの中をゴソ

ゴソ探します。

「あつたでありんちゅ！」

ありんすちゃんはおやすみ用のアイマスクを取り出すとネイアに渡しました。

「……ありんすちゃん様、これを私に？」

「……ただ、ちよつとだけ貸すだけでありんちゅ」

ネイアはこんな幼い少女までが慈しみの心を持っている魔導国の素晴らしさに感動するのです。

道中は何事もなく、聖騎士団の馬車は無事に解放軍のアジトに到着しました。聖騎士団が整列し、レメディオス団長自らが馬車の扉を開きます。

——しかし中にありんすちゃんの姿はありませんでした。

「……これはどういう事だ？ 従者ネイア・バラハ！」

「……それがその……三時になりますとありんすちゃん様は『おやつ時間でありんちゅ』とおっしゃって、へゲートへの魔法を発動させると中に入って消えてしまいました」  
「な——」

い並ぶ聖騎士達は皆、茫然と立ち尽くすのでした。仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

118ありんすちゃんまたしてもせいおうこくにいく

「……全く……結局二度手間だったな」

魔導国の首都エ・ランテルに再びローブル聖王国聖騎士団長主従が訪れていました。

「……最初からあんな得たいのしれない少女の力を借りずにモモン殿に助勢を請えば良かったのだ」

団長レメディオスの言葉にネイアは（いや、ありんすちゃん様に助けを求めたのは貴女ではないですか）と心の中で突っ込みをいれます。

「団長、今もヤルダバオトに苦しめられ続けている民の為、我慢して下さい」

副団長のグスターボがレメディオスに言い聞かせます。やがて主従は門にやって来ました。

「ようこそ、魔導国都市エ・ランテルへ。聖騎士様方は初めていらつしやいましたか？」  
門番とおぼしき衛兵に声を掛けられて主従は顔を見合わせました。前回は門の所でありんすちゃんと出会った為、今回が初めてになりそうです。

レメディオスの代わりにグスターボが領くと衛兵は皆に馬から降りるよう言い、片隅にある部屋に案内されました。



衛兵の説明では入国にあたって簡単なレクチャーを受ける決まりだそうです。

「ようこちよ、魔導国へ。わたしが説明するであります」

部屋の中にはどこかで会った事がある少女が待ち受けていました。

※ ※ ※

「……なんなんだ？　なんでこうなるのだ？」

ローブル聖王国に戻る馬車の中でレメディオスはグスターボに不満をぶつけます。

「団長、落ち着いて下さい。こうなつては今度こそありんすちゃん様にヤルダバオトを倒してもらいましょう。……幸いな事に当人はやる気みたいですし、報酬をもっと吊り上げればきつと上手くいきますよ」

レメディオスはグスターボを睨みました。

「……ふん。子供のやる気等あてになるものか？　今度も好き放題に転がしおつて……いいか？　もしヤルダバオトを倒せなかつたら貴様が責任を取るのだぞ？」

レメディオスは腫れ上がった頬にハンカチをあてがいながら文句を言います。

無理ありません。

再びエ・ランテルを訪れて今度こそ「漆黒」のモモンの助勢を得る筈が、またしてもありんすちちゃんと一緒に聖王国に戻る事になってしまったのです。

「ありんちゅちやが行ってあげるでありんちゅ」

そうありんすちやんが言い出した時、レメディオスは即座に「だが断る！」と叫びましたが、その後ありんすちやんにまたしても殴られて転がされ、やむ無く改めて助けを乞う事になってしまったのでした。

「……結局またもや魔導国の中には入れませんでしたね……」

グスターボはため息混じりに呟きました。

「……ふん。アンデッドが支配する国など入らずともわかる。恐怖で民衆を押さえ付けているのだ」

「……そうでしょうか？ ……いや、なんでもありません」

グスターボはレメディオスの鋭い視線に口を閉ざしました。でも——門から見えた風景はごく普通だったがな——と思うのでした。

※ ※ ※

ネイアはありんすちゃんと同じ馬車の中で緊張していました。今回のネイアの任務は重大です。なんとしてもありんすちゃんをローブル聖王国まで連れて行かなくてはなりません。

「——あ、あの、ありんすちゃん様。この間はありがとうございました」

ネイアは以前にありんすちゃんからアイマスクを貰ったお礼を言います。

「ありんすちゃんはまだまだ持つてありんすちゃん」

ありんすちゃんは空間からアイマスクを取り出しました。

「……………えっと。ルーン！ こりはしゅごいルーンでありんすちゃん！」

ネイアも自分が預かっていたアイマスクを取り出してしみじみと眺めました。

（改めて見るとこれは凄いマジックアイテムに違いない。何か見たことがない記号が……………これがルーン？）

「……………あ、あの……………」

ネイアがありんすちゃんに訊ねようと顔を上げてありんすちゃんはアイマスクをかけてぐっすり眠っていました。

※ ※ ※

「くっ！ 全員後ろに下がれ！」

海辺の捕虜収容所を解放する為に亜人のバフォルクと対していた解放軍の聖騎士団長レメディオスは叫びました。

「もつとだ！ もつと下がれ！ さもなくば人質の命は無い！」

バフォルクの強者は捕虜の少女の喉元に剣を突きつけています。

——豪王バザーだ！

聖騎士の中で彼を知る者が小さく眩きました。

「ええい！ 下がれ！ 下がるのだ！」

レメディオスはバザーを睨みながら聖騎士達を更に下げます。バザーは勝ち誇ったように人質を示しながら進みます。と、バザーの足が止まりました。

「あー！ ありんすちゃん様！」

バザーが足もとを見下ろすとそこにはアイマスクをしてスヤスヤと眠る少女がいたのでした。

退屈のあまり眠たくなっていたありんすちゃんは解放軍の後方で昼寝をしていたのですが、軍が後退した為に取り残されてしまったのでした。

「……………」

ムクリと起き上がったありんすちゃんはアイマスクをずり上げるとバザーの顔をポツンヤリ見つけました。そして何事もなかったかのようにまたアイマスクをすると横になりました。

「——なんだこの子供は！ 一口で喰ってやる！ ——グハア！」

バザーを自分の身に何が起こったのがわからないまま絶命してしまいました。

せつかくの昼寝を邪魔されたありんすちゃんにより、ペツチャンコにされてしまったのです。

あまりの出来事に解放軍はそつとありんすちゃんの眠りを妨げないように遠巻きに見守るのでした。

※ ※ ※

二時間経つてありんすちゃんはムクリと起き上がりました。

「ありんすちゃんよ。豪王バザーを見事に打ち倒してくれた」

聖騎士団長レメディオスが歩み寄り手を差し出しました。その手を掻い潜りありませんちゃんは走って行きます。

「……………おちっこ」

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## 119ありんすちゃんVSヤルダバオト

ネイア・バラハはアイマスクの奥の瞳を閉じて周囲に神経を研ぎ澄ませました。そしてボンヤリと脳裏に浮かぶ的に弓を引き絞ります。

数日前の事です。ネイアの顔をマジマジと覗き込んだありんすちゃんは言いました。「ちゆよくなりたいたいならこのルーンのアイマスク、いつもちゆけているでありんちゆ」

最初はアイマスクをつけると前が全く見えなくなり戸惑いましたが、数日間着け続けている内にありんすちゃんの意図がネイアにも理解する事が出来たそうです。

(……成る程。こうして視界を遮る事で感覚を研ぎ澄まし、矢の威力を高めるマジックアイテムなのだ。……それにルーンか……凄い)

うーん……ありんすちゃんは単にネイアの目付きが悪いからアイマスクを渡したのかと……それにルーンはありんすちゃんがサインペンで書いたものですが……

何はさておきネイアは一心不乱に練習した為、アイマスクをつけたままでの正確に射る事が出来るようになりました。

と、建物のどこかでドガツシャーンと大きな音がしました。ネイアは急いで音の方へ向かいました。

※ ※ ※

「私を出迎えてくれた事に感謝しよう」

解放軍の執務室にいた皆は突如壁を壊して現れた悪魔の姿に息を呑みました。最近収容所から救出されて指揮をとっている王兄カスポンドは真つ青な顔になっています。

「……ヤ、ヤルダバオト！」

その瞬間、レメディオスが動きました。

「キエエエエー！」

レメディオスが手にした聖剣が神聖な光を帯び聖なる波動をヤルダバオトに叩きつけます。しかし――

「……ん？ 眩しいな。なんだ？ 邪魔だ」

ヤルダバオトは何事もなかったかのようにレメディオスを壁に突き飛ばすとカスポンドらに向き直りました。

「……何故だ！ 邪悪なる存在に何故攻撃が効かぬ！」

レメディオスはうずくまって茫然としています。



「——ヤルダバオト！　ちよこまででありんちゅ！」

そこにありんすちゃんとネイアが駆けつけてきました。ヤルダバオトは驚愕します。

「そのアイマスク……まさか失われたルーンの——」

ヤルダバオトの言葉はネイアの弓に消されます。ネイアが放った矢はヤルダバオトが避けた手に刺さります。

「ううむ。流星はルーンが宿るアイマスクの力。これならば私を倒せるかもしれないな」

ヤルダバオトはそう言うのと隠し持っていた武器——聖王女カルカを構えます。

「——カルカ様！　従者ネイア、貸せ！　こ、これさえあれば！」

レメディオスはネイアからアイマスクを奪うと自ら装着しました。

「カルカ様を返せ！」

アイマスクをつけて視界を自ら遮ったレメディオスが放った幾つもの漸撃は尽くカルカに命中し………

※ ※ ※

「……やっちゃったね」

「……やってしまいましたね」

「……それでは私はこの先の広場で待っていますので……そこで決戦しましょう」

「……わかったでありんちゅ」

皆が去っていききました。ネイアは呆然自失するレメデイオスからアイマスクを取り返すと皆に続きます。

後には微動ともしないレメデイオスと変わり果てた聖王女の果てが残されま  
した。

※ ※ ※

傷心のレメデイオスが広場にやって来るとそこではありんすちゃんやんとヤルダバオト  
が激しく戦っていました。

「聖騎士サビカス！ 聖騎士エステバン！」

ヤルダバオトはまるで二本の刀を構えるように二人の聖騎士を手になっています。

「聖騎士フランコに聖騎士ガルバン！ 思い出した！ お前はあの時の——！」

同じように二人の聖騎士を振り回すありんすちゃんを見てレメディオスは思い出しました。以前、ヤルダバオトと対峙した時に現れた少女——それがありんすちゃんだったのです。

ありんすちゃんは二人の聖騎士を放り捨てるレメディオスとネイアを掴みます。そしてそのままヤルダバオトに打ちかかりました。

「……なんと！ さすがはルーンの力！ この従者の硬さには歯が立ちそうにない！」  
確かにレメディオスがすぐにボロボロになっているのに対してネイアの緑の鎧には傷ひとつありません。

（……いや、アイマスクのおかげというよりありんすちゃん様に頂いた豪王バザーの鎧が丈夫だからなのだと思うけれど……）

ネイアはバツチンバツチンと打ち付けられながら思いますが黙っていました。

既に日没になるうとした頃、ヤルダバオトが口を開きました。

「その少女よ。このままでは勝負が着かぬ。ここは一旦互いに矛を納めるとしよう」  
「わかったでありんちゅ」

二人は互いの武器を捨てました。

「……ま、まて………」

虫の息になったレメディオスは聖剣を構えようとして気を失ってしまいました。

※ ※ ※

ベッドで目覚めたレメディオスは起き上がるなり激しい痛みが遠くなりかけます。

「——誰か！ ヤルダバオトはどうした！」

すると天幕の後ろからひよっこりありんすちやんが顔を出しました。

「目が覚めちゃでありんちゆか？ 丁度良かったでありんちゆ。カルカ、強力ボンドでなおちたでありんちゆ」

レメディオスが見るとボンドだらけのありんすちやんの足もとに聖王女カルカの変わり果てた姿がありました。

レメディオスによつてバラバラになったカルカの身体はバフォルク等の様々のパーツと合わさりまさに異形と呼べるおぞましい姿になってしまっていました。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちやんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## 120ありんすちゃんカリンシャに行く

「えー、であるからして我々は王都をヤルダバオトから取り戻す。その為にはヤルダバオトに反逆する亜人と手を結ぼうと思う」

王兄カスポンドの発言に皆の間にざわめきが起こりました。カスポンドの意をくんで副団長のグスターボが話を続けます。

「ここでまず我々はカリンシャを解放しようと思う。カリンシャにはゼルンの王子が囚われていて、王子を救出するならゼルンが一族をあげて我々に協力してくれるという手筈になっている」

そこでグスターボは言葉を切り、チラリと団長の様子を窺います。口の中でブツブツ呟き続けているレメデイオスの様子に小さくため息をつく、また話を続けました。

「……そこでカリンシャにありんすちゃん様と従者ネイアの二人に潜入してもらい、ゼルンの王子を救出してもらいたいと思う」

「——いや、それは困——」

「——まかちえるでありんちゅー！」

即座に断ろうとしたネイアの言葉はありんすちゃんに遮られてしまいました。あり

んすちゃんはふんぞり返るようにしてムハーと荒く鼻息を吐き出しました。

「……………妹さえ生きていればカルカ様を復活……………妹さえ……………ケラルトならカルカ様をきつと……………」

相変わらずブツブツ呟き続けているレメディオスに目をやり、小さく首を振るとグスターボはありんすちゃんとネイアに向き直りました。

「……………従者ネイアよ。本来ならば団長がありんすちゃんと共に潜入すべきなのだろうが……………」グスターボは言葉を切るとレメディオスを顎で指す。「……………いかんせん団長はあれからあの調子なのでお願いする……………」

「……………従者ネイア・バラハよ。私からも頼む」

王兄カスポンドからも頼まれてしまつてはネイアに断る事など出来ません。かくてありんすちゃんとネイアは手引きする役のゼルンと共にカリンシヤに潜入する事になりました。

※ ※ ※

首尾よくカリンシャに潜入したありんすちゃん達三人は無事にゼルンの王子のビーゼーを無事救出します。

「……勇者よ。しかしこのカリンシャにはヤルダバオトの大幹部、枯れ木のような身体をして頭部に人間の頭を飾った大悪魔——サークレットがいる。あれにはまず勝てない」

サークレットという悪魔は頭部に二つまで首を飾り、その首が持つ魔法を最高で六位階まで使える強敵です。ビーゼーが躊躇するのは当然でした。しかしありんすちゃんはそんな事お構い無し、です。

「ありんちゅちやがやちゅけるでありんちゅ！」

ありんすちゃんはいつの間にか真紅のフルアーマーに巨大なランスを持った姿に変わるとトコトコと歩き出しました。

やがて、広間にたどり着いた一行に大悪魔サークレットが姿を見せます。

「…………ケラルト様！」

サークレットの頭部に飾られた生首を見てネイアは思わず叫びました。間違いないありません。ローブル聖王国で最高司祭である神官団団長ケラルト・カストディオその人のものだったのです。

スパイトランスを構え、既に臨戦態勢だったありんすちゃんはネイアを振り返りまし

た。

「……ありがケラルトでありんちゆか？　ありんちゆちやにまかちえるでありんちゆ  
！」

そう叫ぶとありんすちちゃんは突進します。

「へブラインドネス！」

サークレットの頭部のケラルトが呪文を唱えるとたちまちネイアの視界が真つ暗になりました。しかしネイアは慌てずにアイマスクをかけます。そう、これまでの修行の成果で暗闇に神経を研ぎ澄ませます。

「……見える！　私にも敵が見える！　……え？　……ありんすちちゃん様？」

大悪魔サークレットとの戦いは呆気なく終わりました。

※ ※ ※

ゼルン達の協力もあり、解放軍は大した被害も無くカリンシヤを奪還する事が出来ました。



ありんすちゃん達は揃ってレメデイオスの元を訪れました。

「レメデオ、喜ぶでありんちゅ。妹ケラルを見ちゆけてきたでありんちゅ」

「——な！」

変わり果てた妹の姿を見て、力無く崩れ落ちるレメデイオスにサークレットが自己紹介しました。

「——我が名は大悪魔サークレット。今後ともよろしく」

サークレットの頭部に飾られたケラルトの生首がレメデイオスにウインクしました。

サークレットと対峙したありんすちゃんはどうかやらサークレットがケラルトだと勘違いしたようでした。あの時、ありんすちゃんはサークレットの手を掴み「たちゆけてあげるでありんちゅ」といきなり走り出したので戦闘そのものが起きなかったのです。

あまりの出来事に立ち竦むレメデイオスとは対称的に、ありんすちゃんは姉妹の再会を演出出来て得意満面です。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## 121 ありんすちやんとかいほうぐん

カリンシヤの南に位置する大都市プラートに向けて進軍する解放軍は南の貴族たちが率いていた軍と合流して、その数五万五千になっていました。

ありんすちやんとネイアは後方の弓部隊三千を率います。この弓部隊の各小隊長はルーン文字が書かれたアイマスク——目の所に穴があいていて見えるようになっていました——を装備していました。彼らはネイアの話すありんすちやんの逸話に感動して、いわば『ありんす教』の信者でもありました。

「先鋒レメディオス騎士団団長、亜人軍と交戦！ 幹部大悪魔の鱗の悪魔撃破！」

「——な！」

ありんすちやんはサークレットに訊ねます。

「鱗のやちゆ、ちゆよいでありんちゆか？」

「いや、鱗の悪魔は雑魚ですね。あの聖騎士でも倒せます」

「……ふーん……でありんちゆ」

サークレットは結局レメディオスが拒絶した為、ありんすちやんの部隊に配属されたのでした。

と、突然前方に火柱が上がりました。

「……まずいな……ヤルダバオトだ！」

そこへレメディオスがやって来ました。

「ありんすちやんよ。私に奴に通用する武器を貸せ。私がお前の剣になろう！」

「わかったでありんちゅ！」

ありんすちやんはレメディオスの両足首を握ると剣のように振り回しながら駆け出しました。

「——ち、ちがーう！ 剣になると言ったがそういう意味ではないのだ！ や、やめ——」

ありんすちやんはレメディオスを振りかぶってヤルダバオトに叩きつけます。

「……これはこれは……ん？ ルーンが無いか……うむむ」

困った様子のヤルダバオトに容赦ないありんすちやんの攻撃が続きます。

激しいありんすちやんとヤルダバオトの戦いは夕方にまで続きました。

そこに土煙を上げて援軍がやって来ました。それぞれ魔導国の旗を掲げています。

解放軍は歓声を上げました。

「私はアインズ・ウール・ゴウン。ローブル聖王国救援の為、アベリオン丘陵の亜人達を束ねて来た。ヤルダバオトは私に任せろ！」

ヤルダバオトに向かうアインズの姿を見てありんすちは小さく呟きました。  
「勝ったでありんちゅ」

ヤルダバオトを倒したアインズにありんすちは駆け寄りました。

「アインジユちやま！」

解放軍の皆はアインズとありんすちに喝采を贈るのでした。

※ ※ ※

帰りの馬車の中でアインズは訊ねました。

「……しかし、どうしてアルティメイトシューティングスター・スーパーを使わなかったのかね？」

ありんすちはきよとんとしています。

「……うむ。ルーンの宣伝の為にアルティメイトシューティングスター・スーパーという弓をドツペルケンガーに託しておいたのだから？　ずんだ餅ちゃんに渡すように、と」

「……ずんだ餅？　ちらないでありんちゅ」

「な……」

アインズは愕然としました。うーん……ありんすちやん、すっかり忘れていますね。仕方ありませんよね。だって、ありんすちやんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## 122ありんすちやんまたまたせいおうこくにいく

ローブル聖王国 首都ホバンスの王城では聖王になったカスボンとケラルトの頭を飾ったサークレットが会議をしていました。

「うむ。ケラルトなのかサークレットなのか……とりあえずカルカ聖王女の復活は無理、という事だな」

カスボンとの問いかけにサークレットが頷きます。

カルカ聖王女の遺体はバラバラになった後で亜人のパーツと混ざってくっつけられてしまったのでした。

——と、突然大きな音と共に壁が崩れました。

「——何事か!」

部屋の外で待機していた聖騎士団団長のレメディオスと副団長のグスターボが飛び込んできました。

「——な!」

全員がその場に凍りつき言葉を失いました。

「——貴様は……ヤルダバオト! ……」

絞り出すような声でレメディオスが叫びました。

「……ちようでありんちゅ」

レメディオスに答えたのはヤルダバオトではなく、赤いフルアーマーの小さな女の子でした。

「……な？ ありんすちゃん殿……これはどういう——」

「——やり直してありんちゅ」

意味がわからず呆然とする一同を尻目にありんすちゃんは〈ゲート〉を発動させます。「わたちはエ・ランテルで待つてるでありんちゅ。ヤルダバト後はよろちくでありんちゅ」

ありんすちゃんの姿が消えるとヤルダバオトが〈メテオ〉を唱え辺りは赤い光に包まれるのでした。

※ ※ ※

「……なんという事だ……カスボンド聖王陛下はご無事だろうか？」

レメディオスは深くため息をつきました。

「ありんすちゃん様はエ・ランテルで待つと言っていましたよね。やはりここはまたも

や助力を乞うしか……」

「……しかし明らかに今回はありんすちゃん殿がヤルダバオトを連れて来たのではないか。共犯に違いないぞ?」

レメディオスはふと閃きました。

「そうだ。法国だ。スレイン法国ならばヤルダバオトを倒せるのではないか?」

グスターボは悲しそうに首を振りました。

「……ぐぬぬ。なんとこの事だ……」

再び現れたヤルダバオトは首都ホバンスを占領、更にカリンシヤまでを占領してしまいました。現聖王であるカスボンド陛下は行方が知れませんが、唯一幸いな点はありんすちゃん「民は殺ちちやダメでありんちゅ」と言い残していった為、死者が出なかつた事です……

レメディオスは唇を噛み締めました。

「……仕方あるまい。エ・ランテルに向かうぞ」

かくしてレメディオス団長の一行はまたしてもエ・ランテルに向かうのでした。

※ ※ ※



「ありんちゅちやにまかちえるでありんちゅ！」

ローブル聖王国に向かう馬車の中で真紅のフルアーマーの姿のありんすちゃんは上機嫌な様子でスポイトランスを振ります。

今回のヤルダバオトの再来の経緯を聞いている従者ネイア・バラハはため息をつきました。

レメディオス団長からは今回のヤルダバオトはどういうわけかありんすちゃんが使役しているらしい事、ありんすちゃんを上手く宥めてヤルダバオトに去ってもらうように誘導する事を命じられていました。

「ちようでありんちゅ！」

不意にありんすちゃんが空間から素晴らしい裝飾のある弓を取り出しました。

「こりはアルテメ……アルテメシュー……シュー……」

ありんすちゃんは背中のおでかけリュックを降ろしました。可愛いピンクのウサギがついたリュックの中からクシヤクシヤになった紙きれを取り出します。

「……こりはアルテメシューテン……グスタースープ……でありんちゅ。しゅごいルン、しゅごい力を持ちたルン……ついででありんちゅ。しんこきゅしる。ゴホン、せきしてから……貸してあげますで……貸してあげる……ありんちゅ」

ありんすちゃんにはネイアの前にルーンの弓——アルテメイトシューティングスタースーパーを差し出しました。

ネイアが恐る恐るアルテメイトシューティングスタースーパーを受け取るとありんすちゃんが言いました。

「こりをちゆかう時は……ええと……『よみがえりし秘術によりしルーンの力よ』と叫ぶんでありんちゆ」

ネイアが頷くとありんすちゃんはニッコリしました。

※ ※ ※

ありんすちゃんを乗せた馬車は無事にカリンシャ郊外の解放軍の本陣に着きました。レメデイオスは複雑な表情で聖騎士を整列させます。

「ありんすちゃん様に敬礼！」

副団長のグスターボが号令をかけるとい並んだ聖騎士が一斉に敬礼をしました。

馬車の扉が開くと従者ネイアが素晴らしい装飾がある弓を抱えながら気まずそうに

降りてきました。

一緒に降りてくる筈のありんすちゃん姿はありません。

「従者ネイア、これはどうした事か？」

レメディオスが険しい表情で訊ねました。

「……それがその……ありんすちゃんはまたしても三時に『おやちゆの時間でありんちゆ』とおっしゃるなりへゲートへの魔法で……」

「——なんだ……と……」

うーん。仕方ありませんよね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## 123番外編 ジルクニフとリユロ

その日のジルクニフは上機嫌でした。魔導国の属国となり、国内は安定してきました。時折、理不尽な事がごくごく稀に起きたりしますが概ね平和だといえました。

今日はジルクニフと同じ境遇を経験した友人がアーウエンタールを訪れる予定です。ジルクニフはソワソワしながら友——クアゴアの王リユロの登場を待ちます。

「我が友ジルクニフよ。今回はお招き頂きありがとうございます」

「よく来てくれたね。我が友リユロよ。今日は君の好物を沢山用意したから楽しみにしてくれ」

リユロはジルクニフと熱い抱擁を交わしました。その際に鋭い爪がジルクニフを傷つけないようそつと手のひらを返す優しさにジルクニフは感動するのです。

※ ※ ※

「………そういえばこの前、例の女の子が来たんだが………」

豪華な食事を終えて二人は歓談に移りました。

「赤いフルアーマーで例の大きなランスを振りながらアウラ様とマーレ様と一緒に見えてね……」

リユロはそこで言葉を切り、顔を歪ませました。

「私が出迎えてひれ伏すと例の女の子は叫んだんだ。『こりからモグラ叩きゲームしるでありんちゅ』と」

ジルクニフも顔を歪ませます。

「……それは酷いな……」

二人は無言でため息をつきました。しばらくの空白の後、ジルクニフが口を開きました。

「私の所では先週……あの三人が来たよ」

ジルクニフは遠い目をしました。

「……三人、か。するとやはり——」

リユロの言葉にジルクニフは力なく笑います。

「……ああ。お察しの通りかもしれませんが、だ。そう、『ありんすちゃん当てゲーム』だ」  
ジルクニフは目を閉じました。

「あの女の子は『アウアウはどれでしょう?』と聞いてきたんだ。——仕方ないだろ? アウアウなんていないんだから——」

突然ジルクニフが荒々しく叫びました。リユロにはジルクニフの気持ち痛み程わかりました。

そうです。確かに『アウアウ』なんて名前の幹部はナザリックにはいません。だからジルクニフか『アウアウなんていない』と答えたのは間違いではないのです。

ですがあの女の子——ありんすちゃんにとっては『アウアウ』とは『アウラ』の事なのでした。

またしても沈黙が訪れました。

しばらくしてまたジルクニフが口を開きました。

「……あの女の子は今、ローブル聖王国に行っているらしい」

リユロはため息をつきました。見ず知らずのローブル聖王国に微かにあわれみを感じながら、です。

「……あの女の子は無邪気ゆえに恐ろしい。聖王国も哀相にな」

ジルクニフはまたしてもため息をつきました。何故なのだろう。魔導国の属国になったのにあまり脅威は変わらないのは何故なのだろう。

ジルクニフとリユロはありんすちゃんがローブル聖王国に出かけている、つかの間の平和をせめて楽しもうと思うのでした。

そして小さな赤い悪魔が一日でも長くローブル聖王国に滞在してくれる事を願うの

でした。

124ありんすちゃんまたまたまたまたまたまたせいおうこくに  
いく

「ルーンは輝く希望の光！」

シズの言葉に兵たちが唱和します。

「ルーンは輝く希望の光！」

「もう一度でありんちゅ！」

「ルーンは輝く希望の光！」

ありんすちゃんは満足そうに頷くとシズに合図しました。

「……ルーンはすごいなサイコーだ！」

「ルーンはすごいな最高だ！ ルーンはすごいな最高だ！」

「……あなたも私もルーンルーン！」

「貴方も私もルーンルーン！ 貴方も私もルーンルーン！」

※ ※ ※



前回突然おやつを食べに魔導国に戻ったありんすちゃんでしたが、唐突に今度は何故か戦闘メイドのシズと一緒にローブル聖王国に現れるのでした。

「……アインズ様の命でサポートする。頑張る」

聖騎士団の皆は訳がわからないまま、とりあえず不問にするのでした。

ありんすちゃんとシズは兵たちを集めると皆に唱和させ始めます。意味がわからない言葉でしたが兵たちは声を出している内に力がわいてくるのでした。

次にありんすちゃんは従者ネイアを壇上に上げると、彼女の弓を皆に示しながら叫びました。

「……そして、こりがしゅごいルーンちゆいた、アルテムシユテン、グスタンンスーパ、でありんちゆ！ 我らに勝利をー！ ……でありんちゆ」

兵たちの歓声が壇上のありんすちゃん、シズ、ネイアを包み込むのでした。

※ ※ ※

「……うむ。これはいけるな。これならば勝てるぞ」

騎士団の士気の高まりを見てレメディオスは喜びました。しかしながら副団長のグスターポの胸中は複雑でした。

そもそも一旦倒した筈のヤルダバオトがまたしても現れたのはありんすちゃんのせいでしたから。

ありんすちゃんとシズは壇上から降りると一面にシートを広げてどこから取り出した武器や防具を並べ始めました。

「しゅーいルーンちゅいた武器が今ならお買い得でありんちゅよ！」

「……ルーンの刻まれた武器。支払いは分割払いのローンでも良い」

どうやら魔導国製のルーンが刻まれた武器や防具を販売し始めたようでした。

「——なんだ……と！ ルーンの武器か！ 私も買うぞ！」

レメディオスの顔色が変わりました。すぐさま並べられた商品から一番高そうな武器を手に入れます。

「——この剣なら、この剣ならヤルダバオトにダメージを与えられるか？」

「……それは『こうてつのかん』にルーンを刻んで強化したものだ。ダメージは——」

「——金貨三十枚のちよころ二十枚におまけしるでありんちゅ！」

「——よし！ 買った！」

シズの説明を遮ったありんすちゃんの言葉にレメディオスは即決してしまいました。

聖騎士達は「どうのつるぎ」、民衆兵達は「ひのきのぼう」や「たびびとのナイフ」をそれぞれルーンが刻まれて強化されたものを、あるものは即金で、また、あるものはローンで購入するのでした。

※ ※ ※

いよいよヤルダバオトと再対決です。いつの間にか聖王のカスポンド陛下も無事に合流しました。

「いよいよ改めて決戦だ。ヤルダバオトを倒し聖王国を取り戻すのだ！」

カスポンドに並んだレメディオスが剣を抜きます。

「ごやー。」

聖騎士団を中心とした解放軍二万が城外に陣形を組みます。対するヤルダバオト率いる巫人の軍勢は同じく一万です。

「貴方も私もルーンルーン！ 貴方も私もルーンルーン！」

思い思いにルーン武器を装備した解放軍の士気は高く、誰もが勝利を疑いませんでした。

やがて巫人軍が左右に割れ、ヤルダバオトが進み出てきました。

「全軍前に！」

レメデイオスを筆頭に聖騎士団の騎馬隊が突入して戦闘が始まりました。

※ ※ ※

「……………くつ。……………何故だ？ 何故勝てないのだ？」

カリンシャ城内に敗走したレメデイオスは壁を叩きました。

「……………ちよれはルーンが一つだったからでありんちゆ。ルーンがふたちゆならもつとちゆよいでありんちゆ。……………ただ……………」

ありんすちやんが小首を傾げて続けました。

「……………ルーン、一つ増えると倍の金額になるのでありんちゆ」

「……………その……………ルーンはいくつまで刻めるのですか？」

副団長のイサンドロの質問にシズが答えました。

「……………ルーンは現在の所、最大で三つまで。値段は一つ増える毎に倍になるからルーン三つなら倍の倍で四倍の金額になる。……………分割払いのローンで購入するのがお薦め」  
かくしてシズの前には聖騎士の列が出来るのでした。

※ ※ ※

「——くらえ！ ルーンの輝き！ アルティメイト・シユータイングスター・スーパー！」

ネイアが放った矢は避けようとしたヤルダバオトの右腕に刺さりました。

「……恐るべしルーンの力！ かつて封印されし秘術、ルーンとはここまで凄まじいものだとは！」

「——ちが——わない！」

ヤルダバオトは驚愕し、思わずネイアも叫びます。

「……さすがはルーンが刻まれた武器の力。すごい。……ルーン最——高——」  
抑揚のないシズのやや棒読みで投げやりなセリフが続きます。

「……ありんちゅちやがとどめ、しるでありんちゅ！ へヴァーミリオンノヴァン！」

ヤルダバオトはありんすちゃんが放つ光に包まれていきます。

「……最後ルーン……関係ない……」

シズの小さな呟きは巨大な爆発にかき消されてしまいました。

ヤルダバオトは消滅し、ありんすちゃんとルーンの力によつて聖王国に平和が訪れる

のでした。

※ ※ ※

ナザリツク地下大墳墓 第十階層へ玉座の間——玉座のアインズの前にありんす  
ちやんとシズが跪きます。

「二人ともご苦労だった。……で、ルーンの宣伝は上手くいったかね？」

ありんすちやんが顔を上げて答えます。

「ありんちゅちや頑張ってローン、いっぱい契約したでありんちゅ」

うーん……ありんすちゃんは目的のルーンがいつしかローンになってしまったみたい  
いですよ。

……うーん……仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の  
子なのですから。

# 125特別編・ありんすちゃん理解テーブルゲーム ド ラマCD 人間理解テーブルゲーム より

ナザリック地下大墳墓 第二階層屍蠟玄室——ありんすちゃんが寝そべってなにやら書いてます。

また落書き……ゲフンゲフン……挿絵を描いてくれているのでしょうか？

「かんしえいしたでありんちゅー！」

どうやら完成したみたいです。大学ノートをかざして得意そうな顔です。ノートの表紙には『ありんちゅちゅりかいてぶるげいむ』とあります。ありんすちゃんはノートを片手に飛び出して行ってしまいました。

※ ※ ※

ナザリック地下大墳墓 第六階層のヘアンファイテアトルムに集められたプレアデス

とアウラは不満そうです。無理ありません。彼女たちは理由もわからないまま、ありんすちゃんに引つ張ってこられたからでした。

台に登ったありんすちゃんが得意そうに説明を始めます。

「……コホン。こりからありんちゅちやのテブルゲームしるでありんちゅ」

ありんすちゃんは手にしていたノートをみんなに見せます。

「……なんすかコレ？　ありんすちゃんが書いたつすか？」

「……テブルゲーム……もしかしたらテブルトークロールプレイングゲームの事か？　確か最近アインズ様が守護者たちとされたらしい……」

プレアデスの面々は興味しんしんみたいです。

「……確かアインズ様は守護者たちに人間について理解してもらいたいの目的で人間理解テブルゲームをやったとかでしたね。ボク——私は直接見てはいませんが……ありんす様は階層守護者として参加されたんですよね？」

ユリの問いかけにありんすちゃんはエヘンと胸を張りました。

「ちようでありんちゅ。今度はプレアデシユがありんちゅちやになるテブルゲームしるでありんちゅ」

「……ハイハイ。じゃあたしは帰っていい？　これでもいろいろ忙しいんだけど？」

アウラの言葉は無視されてしまいました。



ありんすちゃんは得意そうに『ありんちゅちゅちゅかいてぶるげいむ』と書かれたノートを広げます。

「…………えと…………えと…………ユリはありんちゅちゅちゅレベル1でありんちゅ。ルプーもありんちゅちゅやレベル1でありんちゅ。ナーベもありんちゅちゅちゅやレベル1でありんちゅ。ソリシヤはありんちゅちゅちゅやレベル2でありんちゅ。エントマはありんちゅちゅちゅやレベル1でありんちゅ。シズはありんちゅちゅちゅやレベル1でありんちゅ。ありんちゅちゅちゅはこりからお風呂はいるありんちゅ」

ありんすちゃんはパタンとノートを閉じるとプレアデスを眺めます。

「…………そりぞれありんちゅちゅになりきって行動するでありんちゅ」

どうやらそれぞれありんすちゃんがやりそうな事を、出していく遊びみたいですね。

「…………えーコホン。ありんすちゃんはお風呂で洗わずきたら身体が削れてしまっただす。…………なんと胸はペツタンコになりました。『大変！ 私の胸がなくなっただす！』…………ぷぷぷ…………」

ルプスレギナは自分の言葉に吹き出してしまいました。ありんすちゃんは少し面白くありませんでした。

「…………えつと…………ありんすちゃんがお風呂に入っていました。…………ありんすちゃんはただお風呂に入っています。…………まだまだお風呂に入っています」

シズの話にありんすちゃんは興味しんしんです。

「……ありんちゅちやのお風呂、ずいぶん長いでありんちゅね？」

「……えーコホン。ありんす様はあまりにも長くお風呂に浸かっていたのでドロドロに溶けてしまいました。めでたしめでたし」

ありんすちゃんのほつべたがプクーと膨れてきました。

「……次は私が。……ありんすちゃんがお風呂に入っていると湯船の栓に気がつきました。ありんすちゃんは「こりを抜いてみるでありんちゅ」と言つて栓を抜きました。ありんすちゃんは流れていってしまいました」

「……今度はあ、わあたあしい。ナーベラルに続けるねえ。……ありんすちゃんはあブラックカプセルに流れてえきましたあ。恐怖公のお眷属があ……おいしくういただきますあ」

ありんすちゃんは真つ赤になって目には涙を浮かべています。

ウワーンと泣きながらありんすちゃんはどこかへ行つてしまいました。

「……あの、さ……あたしはもう帰つていいよね？」

最後にアウラがポツリと眩きました。

※ ※ ※

翌日、ありんすちゃんはシモベのヴァンパイア・ブライドを集めて言いました。

「……ここからありんちゅちやのテーブルゲームしてありんちゅ！」

懲りないですねありんすちゃんは。仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんは  
まだ5歳児位の女の子なのですから。

## 126 ありんすちゃんおもいだす

ナザリツク地下大墳墓 第二階層〈屍蠟玄室〉——ベッドの上でありんすちゃんがマカロンをほおぼっています。時刻はもうお昼近くなんです……

ありんすちゃんは中でもピンクのマカロンがお気にいりみたいですね。もつとも色が違うだけで味はどれもおなじなんですけれど。

マカロンを三つつかんで大きく開けた口に放ります。あらあら。さすがにありんすちゃんの口では小さすぎたみたいでマカロンが一つベッドの下に転がってしまいました。

ありんすちゃんはベッドの下を覗きこんでマカロンを見つけます。

「……ありんちゅちゅの口から逃げ出したふとどきなマカロンはこちてやるでありんちゅ」

ありんすちゃんはマカロンを拾うと上に放り投げ大きく口を開けました。

残念。マカロンはありんすちゃんの唇に当たってまたベッドの下に転がってしまいました。

「……逃がさないでありんちゅ」

ありんすちゃんは逃げたマカロンをつかみます。と、ベッドの下になにやら箱があるの気がつきました。

マカロンをいそいで食べてしまおうとその箱をベッドの上にあげました。

「……しゅごい箱でありんちゆね。中身はなんでありんちゆ」

その箱は魔封じの箱でした。……うーん。その箱の中にはたしか……

ありんすちゃんは躊躇せずに箱を開けます。なんと中には可愛らしいチャイナドレスが入っていました。

……たしかそのマジックアイテムは……うーん……

ありんすちゃんはチャイナドレスを自分にあてて鏡を見ました。とてもありんすちゃんにお似合いですね。

……しかしそれは……

ありんすちゃんはさっそくチャイナドレスに着替える事にしました。

※ ※ ※

チャイナドレスを着たありんすちゃんは鏡の前に立ちます。それから悩んだすえに長い銀髪を結ってお団子二つにしてみました。

次に鏡にむかってウインクしてみます。もっともありんすちゃんは片目だけ閉じる事が出来ないのてただ両目をつぶるだけでした……

突然ありんすちゃんの脳裏にかつて見た光景が甦りました。ありんすちゃんがシャルティア・ブラッドフォールンとして行動不能になった瞬間に確かに見たのが鏡の中の女の子だったのです。

ありんすちゃんは口を大きく開けて呆然としました。やがて正氣に戻ると手足をバタバタさせながら駆け出していきました。

※ ※ ※

「…………どうしたのだ？　ありんすちゃんよ？」

第九階層のアインズの執務室にいきなり飛び込んできたありんすちゃんにアインズは驚きます。

「ありんすちゃん。今わたくしはアインズ様と大切な仕事をしているのよ？　遊びたいなら他に行きなさい」

ありんすちゃんは手をバタバタさせるばかりで何が言いたいのかわかりませんでした。実はこの時ありんすちゃんの喉に食べかけのマカロンがへばりついていたのであ

りんすちゃんは喋ることが出来なかったのです。

「……アインズ様。ありんすちゃんの事はプレアデスに任せては如何でしょう？ 彼女たちならうまくありんすちゃんから聞き出せると思います」

アインズは頷くのです。

※ ※ ※

プレアデスを前にありんすちゃんは身ぶり手振りで伝えます。

(……頭にお団子……チャイナドレス……光でまっ白……動けなくなる……)

……そう。かつてシャルティアとしての自分に起きた事態を懸命に伝えてみました。

「……えっと。なにになに？ ……タヌキが……えーと……お腹でポンポコ……ビツクリして……死んだふりっすね？」

「……違うわ。きつとタンコブだわ」

「……残念。ゼスチャーのレベル低すぎ……解説不能……」

「……やっぱいい……人間が美味しいわよう……」

「……だめね。誰もわからないみたいね」

プレアデスにもどうやらお手上げみたいでした。

「——あ！ わかったかもっす！」

突然ルプスレギナが叫びました。

「……今日はカレーライス……お腹一杯食べて……お昼寝……っす！ 完璧っす！」

ありんすちゃん首を振りますが……ググウ……と思わずお腹が鳴ってしまいました。た。

「それなら早速食堂に行きましょう」

ありんすちゃんはプレアデスと一緒に食堂に行きました。

※ ※ ※

「……お腹一杯でありんちゅ」

カレーライスを食べたありんすちゃん、いつの間にかはりついてたマカロンも飲み込んでいつも通りです。

「……おや？ ありんすちゃんカレーの染みが付いちやっすね。急いで洗わないと大変っす」



ありんすちゃんは万歳してルプスレギナにチャイナドレスを脱がせてもらいます。

「これは私が洗っておいてあげるっす。ありんすちゃんは気にせずデザート食べていて良いっすよ」

ありんすちゃんはデザートのリントを食べました。可愛くウサギになっているやつです。

ありんすちゃんは満腹になるとせっかくだと思出した事をすっかり忘れてしまいました。

仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

※ ※ ※

ルプスレギナはチャイナドレスを広げて自分にあててみました。

「……これはなかなか素敵っすね。このルプーさんのセクシーさが120%アップ間違

いなしつす。……今度カルネ村で惱殺しまくりつす」

## 127ありんすちゃんダイエットする

秋です。天高く馬肥ゆる秋、といいますが……ナザリック第二階層〈屍蠟玄室〉では……

ありんすちゃんがベッドの中でお菓子を食べています。うーん……

朝起きて朝食を食べ……お風呂。十時にはお茶の時間にお菓子……お昼に食事……

その後はお昼寝……三時にはおやつ。それから階層の巡回。

自分の足で歩かないでヴァンパイア・プライドにおぶさつての巡回ですね……うーん

……

巡回から戻るとお風呂……夕方に食事……で就寝……夜中に起きてお菓子……なんだかほとんど運動していませんね。それにお菓子を食べる回数が多すぎるような気がします。

そう言えば……気のせいかもしれませんが、まん丸くなってきたような……

ありんすちゃんは鏡をマジマジと見つめました。間違いありません。ありんすちゃんは確実に太っていました。

「……ありんすちゃん様！ そのお姿はいったい？」

ありんすちゃんを振り替えるとプレアデスの一人、ソリュシャンが驚愕の表情で立ち竦んでいました。

「……ありんすちゃん様……これではアインズ様の寵愛を受ける事が出来なくなつてしまいます！」

「……ありんちゅちは悪くないでありんちゅ。ちよつと……ちよつと食べしゆぎなだけでありんちゅ」

ありんすちゃんは口を尖らせます。うーん……なんか起きあがりこぼしみたいなの……ゴホンゴホン。

「……ありんすちゃん様……ハッキリと言わせていただきます。今のありんすちゃん様は『デブ』でございます。『デブデブ』の『おデブ』以外の何ものでもありません！」

ありんすちゃんの顔がたちまち赤く染まっていきます。口をパクパクさせますが言葉が出てこないようです。

ソリュシャンは腕を組むと静かに宣言しました。

「ありんすちゃん様はこれからダイエットしなくてはなりません！ 全てはありんすちゃん様の為でございます！」

ありんすちゃんは必死に反論しようと口をパクパクさせますがソリュシャンは頑として認めません。

「反論は認めません！ よいですね？」

それからソリュシヤンはありんすちゃんに付きつきりでダイエットのコーチをするのでした。

※ ※ ※

「ピッピッ！ ピッピッ！ ピッピッ！」

第一階層から第三階層までありんすちゃんは走らされました。ソリュシヤンは笛を鳴らしてありんすちゃんを急かします。

「……ありんちゅちはちゅかれたでありんちゅ」

ありんすちゃんはすぐに泣き言を言い出します。

「ダメです！ よいですか？ このままではアルベド様に負けるだけでなく正妃候補からも脱落してしまいます！」

「……ありんちゅちはべちゅにかまわな、でありんちゅ」

「いいえ！ ありんすちゃん様には必ずアインズ様の正妃になっていたただかなくてはならないのです！」

ありんすちゃんはイヤイヤながらも走り続けるのでした。

「これはこれは我が階層の主、ありんすちゃん様。どうやらソリュシャン殿と一緒にダイエツトに励んでおられるご様子……うむ。これは是非ともわたくしめに一肌脱がさせていただけませんか？」

ありんすちゃんとソリュシャンが振り向くと領域守護者の恐怖公が丁寧にお辞儀をしていました。

「……ダイエツトならば我が眷族に余分な脂肪を食べさせればあつという間に——」

「……チヨリユチャ、もっとペーシユ上げるでありんちゅ！」

「ハイッ！　ありんすちゃん様！」

ありんすちゃんとソリュシャンの姿はあつという間に遠ざかっていきました。

※ ※ ※

ありんすちゃんがダイエツトに挑戦している事は瞬く間に知れわたり、プレアデスや他の階層守護者たちはみな応援するのです。

しかながらありんすちやんの体重はなかなか減りません。

それもそのはずです。ソリュシヤンの目を盗んではお菓子を食べる事をやめませんでしたから……

仕方ありませんよね。だってありんすちやんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

※ ※ ※

ソリュシヤンが側にいない間にドーナツを食べるありんすちやんをぞつと見つめる人物がいました。

「……くっくっくっ。素晴らしいわ。八本指が見つめてきたこのマジックアイテムの効果がこんなに素晴らしいものだとは……これでライバルを全て脱落させてこのわたくしがアインズ様の正妃になってみせるわ。……次は誰の名前を書こうかしらね？ やはりアインズ様と行動を共にする事が多いナーベラルかしら。あの娘はわたくしを支持しているけれど油断出来ないですからね……」

彼女は手にした一冊のノートを広げました。黒い表紙にはDebu Noteとあ

りました。



## 128ありんすちゃんたちしよんする

ナザリツク地下大墳墓 第九階層 アインズ執務室——今日もアインズとアルベドの二人が魔導国の運営についての打ち合わせをしています。

と、唐突にありんすちゃんがアインズの膝の上に現れました。

眠そうに目をこすっていますからまだ寝ぼけているみたいですね。

ありんすちゃんはネグリジエ姿で片手にウサギのぬいぐるみ、反対の手にはタオルケットを持っています。

ボンヤリとアインズの顔を眺めていたありんすちゃんは——

「アインジュちゃま……おちんちん、ほちいでありんちゅ」

「……な？」

驚愕のあまり固まるアインズ。

「——ダメです！ アインズ様の………はこのわたくしのものよ！ ありんすちゃん、貴女は子供だと思っつい油断していたけれど、やっぱりシャルティアなんだわ。……いいえ、かの至高の御方の中でも要注意人物だったペロロンチーノ様が作られた存

在——」

冷静になったアイNZは興奮するアルベドを制してやさしくありんすちゃんに尋ねました。

「……うむ。ありんすちゃんよ。なぜ私のおちんちんが欲しいのかね？」

ありんすちゃんはアイNZの顔をキョトンと見つめます。

「……アイNZジュチャマはおちんちんあるでありんちゆか？」

今度はアイNZがキョトンとしました。

「……うん？ それは……無い……うむ。無いな」

アルベドは少しだけ哀しそうでした。

「……ありんちゆチャ、おちんちんほちいでありんちゆ！」

「うん？ すると……ありんすちゃんは男になりたいのかね？」

「なりたいでありんちゆ！ ありんちゆチャはたちしよん、しるでありんちゆ！」

と、いきなりアルベドが顔を上げました。

「アイNZ様！ このありんすちゃんの願いは是非ともかなえてあげるのがよろしいかと……いえ……叶えなくてはなりません」

（かつてシャルティアはわたくしとアイNZ様の正妻の座を争った、いわばライバル。子供になったとはいえ正妻争いから脱落するに越した事はないわ。それにもし……も

しもアインズ様に………が生えるならば……このわたくしはアインズ様のお子を授かる事も夢ではなくなるのだし……)

アルベドの強い後押しもあり、結局アインズは〈星に願いを〉を使いありんすちゃんにおちんちんを生やす事にしました。

※ ※ ※

アインズが高々と〈シユーティングスター〉を掲げます。

「<sup>I</sup> <sup>w</sup> <sup>i</sup> <sup>s</sup> <sup>s</sup> <sup>h</sup>  
我は願う——」

ありんすちゃんの体が光に包まれました。そして——

ニヨキニヨキ……ありんすちゃんにおにんが生えてきました。

ありんすちゃんは大喜び。早速第六階層に駆けていきました。

※ ※ ※

ありんすちゃんは第六階層に着くとザイトルクワエの所に行きました。

「……君は誰だい？ 見たような見たことないような……ああ……いったいなにを？」  
ザイトルクワエの根元にジヨウロで水をかけていたドライアドのピニスは慌てました。

ありんすちゃんはお願いなしにザイトルクワエの側に立つとスカートをまくりあげました。

——ジヨロジヨロジヨロジヨロ……

ありんすちゃんは念願だったタチシオンなるものが出来て大満足です。

——ジヨロジヨロジヨロジヨロジヨロジヨロジヨロ……

静まり返る第六階層に水の音がいつまでも続くのでした。

※ ※ ※

ありんすちゃんはベッドの中で目を開きました。第二階層の〈屍蟻玄室〉のありんすちゃんのベッドの中です。

回りを見回しますがザイトルクワエもピニスンもいません。

ありんすちゃんはお尻がヒンヤリしていたので布団をめぐつてみました。

なんとという事でしょう！ ありんすちゃんはビショビショのシートの上に座っていました。ありんすちゃん……これはおねしょ——

「まちや水をこぼしちやでありんちゆ。水でありんちゆ。ぜたいにぜーたいに水でありん・ん・ちゆ！」

ありんすちゃん顔を真っ赤にしながら強い口調で断言するのです。……うーん。

まあ、本人が断言するのですからおねしょではないのでしょうか。……たぶん。……いや、きつと……

ありんすちゃんは慣れた動作で濡れたシートをクルクルつと丸めます。

「ヘグレーターレポーターチヨン」でありんちゆ！」

ありんすちゃんが魔法を唱えるとあら不思議……乾いたシートにかわってしまいました。

このシート……やたらとハートマークだらけの生地であまりセンスがなさそうですが……

ありんすちゃんハート柄のシーツを敷き直すとまたスヤスヤと寝はじめた。  
た。

※ ※ ※

「……………これは……………まさか……………いや、そんなはずは……………」

ヒンヤリとした感触にイビルアイは思わず起き上がりました。

ハート柄のパジャマの下半身が濡れています。

(……………ありえない。まさか……………これは……………いや……………既に二百年以上もしていないのに……………まさか……………これは……………おねしよをしたというのか?)

イビルアイはハートマークだらけの枕をギュツと抱きしめました。

「……………よう。イビルアイ、もう起きているんだろ? しかしよ、マイシーツにマイ枕でないと眠れないなんて贅沢だな。この宿屋のベッドだつて充分に——ん?」

騒がしく入ってきたガガーランは急に黙りました。ベッドに座り込んで枕を抱きしめたイビルアイのオドオドした顔を眺め——イビルアイの座っている辺りにひろがったシーツのシミを眺めてニヤリと笑いかけました。

「……………ああ……………なるほど。それで自分のシーツを……………ね」

「いや、違う！ 違うんだ！ こ、これは……」

「イビルアイは必死に否定しましたが……」

その後しばらくイビルアイはガガーランから『チビるアイ』とからかわれたそうです。もちろんありんすちゃんはそんな事は知りませんが……仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## 129 ありんすちやんとメロン

ナザリック地下大墳墓 第六階層——ここには畑が作られていてドライアドたちが世話をしています。

「たいへんだよ！ もうじき収穫予定だったメロンがなくなっちゃったよ！」

アウラとマーレがお茶をしているところにドライアドのピニスンが駆け込んできました。

「……騒がしいなあ。ねえ？ 本当に無くなったの？ ナザリックの中にそんなことするNPCはいないんじゃないのかな？」

「……あの、僕もそう思います。ピニスンの勘違い、とかじゃないでしょうか？」

ピニスンはどもりながら答えました。

「……昨日までは確かにありましたよ。丁度収穫時期のメロンが二個、間違いなく今朝無くなっています」

アウラとマーレはピニスンの案内で様子を見に行くことにしました。



※ ※ ※

「……うーん。確かになにか鋭利な刃物で切られているみたいだね。あたしの知る限りこの階層にいるシモベのいたずらじやないみたいだよ」

「……すると、もしかして侵入者が……あの、いるのかな？」

マールがおどおどした口調で尋ねました。アウラは口もとに笑みを浮かべると言いました。

「そうだ。確かありんすちやんって探偵としていくつか事件を解決しているんだよね？ありんすちやんを呼んできたら解決するんじゃないかな？」

アウラはなぜかニヤニヤしながら提案をしました。そこでマールが第二階層にありんすちやんを呼びに行くことになりました。

※ ※ ※

マールが第二階層の屍蠟玄室にやって来るとシモベのヴァンパイア・プライドが言いしました。

「マーレ様、ありんすちゃん様はただいま身支度をされていらつしやいますので少しお待ちください」

三十分ほど待たされるとようやくありんすちゃんが姿を現しました。

「……またしえたでありんちゅ。めいたんてありんちゅちやの定番でありんちゅ」

ありんすちゃんを見てマーレは驚きました。まだ5歳児位のありんすちゃんの胸が不釣合に大きくなっていたのです。

「なにしちえるでありんちゅか？ マーレ置いてくでありんちゅよ？」

ありんすちゃんの言葉に我にかえったマーレはあわてて後を追いかけるのでした。

※ ※ ※

「めいたんてありんちゅちやにまかちえるでありんちゅ！」

腕を組んで胸をそらすありんすちゃんをアウラはジト目で眺めます。

「……あのさあ、あたし犯人が誰だかわかつちやつただけど……」

アウラは宣言しました。

「犯人はこの場所にいる！」

ありんすちやんは明らかに動揺したみたいでした。

「……ありんちゅちやは何のこちやじえんじえんわからないでありんちゅ」

フースーと口笛を吹くそぶりをしました。

「……ありんすちやんさ、その胸のどこにあたしのメロンが入ってるよね？」

「……何のこちやじえんじえんわからないでありんちゅ。ありんちゅちやのポインポインは男のロマンでありんちゅ」

ありんすちやんの必死な主張にアウラは首を振りました。

「……その『男のロマン』とやらが落っこちかけてきてんだけど？」

ありんすちやんはあわてて自分の胸もとを見ました。なんと膨らみがお腹のあたりにずれてしまっています。

咄嗟に押さえようとしたが、時すでに遅くありんすちやんの足下にゴロンゴロンとメロンが二個、落ちてしまいました。

※ ※ ※

翌朝、またしてもピニスンが騒ぎでした。

「たいへんだよ！ 今度はスイカが七個も無くなっているよ！」

アウラはすぐにはありんすちゃんを呼び出しましたが今回は全くの無関係のようでした。アウラ、マーレ、ありんすちゃんはスイカの行方についてあれこれ悩むのでした。

※ ※ ※

「——なん、だ、と？」

恭しく平伏するアルベドとブレアデスに対してアインズは思わず叫んでいました。

「——お前たちが私の子供を身ごもった、だと？」

アルベドとユリ、ルプスレギナ、ソリユシヤン、ナーベラル、シズ、エントマのそれぞれの腹部はまるまると膨れ上がっていたのでした。

それにしてもスイカは一体どこにいつてしまったのでしょうか？

## 130ありんすちやんのあけおめ

あけましておめでとうございます。

ナザリック地下大墳墓 第二階層の屍蟻玄室の前には赤い鳥居が建てられています。更にお賽銭箱まで置かれています。

お賽銭箱の前ではありんすちやんが得意そうにしています。

今日のありんすちやんは巫女服を着ていても可愛いですね。ありんすちやんに巫女服を着せる為、シモベのヴァンパイア・プライドが大変な苦勞をしたのは秘密です。

「この箱におちやいちえん、入れるでありんちゆ」

ありんすちやんはシモベ達を集めて言いました。そして少し考え込むと言葉を続けました。

「……おちやいちえんじゃなくてもお菓子でも良いでありんちゆ。ありんちゆちやの好物入れて良いでありんちゆ」

フンスと鼻息を荒くするありんすちやんにヴァンパイア・プライドの一人が恐る恐る声をかけます。

「……ありんすちゃん様、恐れながら私たちシモベはお菓子も持つておりませんが……かといって屍蠟玄室から持ち出すのも意味がないかと……」

ありんすちゃんはしばらく考え込むと何か閃いたようです。

「……しよれなら他の階層からありんちゅちやのお参りしやしえるるありんちゅ！」

それからありんすちゃんはヴァンパイア・プライド達を各階層に行かせて『ありんすちゃん神社にお参りをするよう』伝えさせます。ありんすちゃんは大きな紙に『ありんちやのじんじやこち』と貼紙を作りました。

第二階層のゲート入り口に貼るんだそうです。

そうして準備をするとありんすちゃんは巫女さんとしてお賽銭箱の側に待機をします。

「……こりでいばいイパーイお年玉あちゅめるでありんちゅ」

※ ※ ※

新年そうそう第二階層に初めてやって来たのはアウラとマールでした。

「やほー。ありんすちゃん、あけましておめでとう。あたし達と羽根つきしようよ」

「……あの、あけましておめでどう、ございます」

アウラは紋付き羽織に袴、マールレは振り袖を着ていました。

ありんすちゃんは首をふります。

「ありんちゆちやは巫女ちゃんしるでありんちゆからダメでありんちゆ」

「……ふーん。あつそ」

アウラとマールレはあつさりと頷きます。

「……そうだ。マールレ。確か食堂にアインズ様がお雑煮とお汁粉を用意してくれているらしいね。これからアインズ様に新年のご挨拶にいきこうか？」

途端にありんすちゃんのお腹がグウ〜と鳴りましたが双子は気がつかないふりをします。

「……あの、そ、そうですね。せっかくの晴れ着をアインズ様に、あの、ご覧いただきましたよね」

賑やかに去っていく二人をちよつと羨ましくなったありんすちゃんでした。

※ ※ ※

お雑煮もお汁粉も我慢して頑張り続けたありんすちゃん神社でしたが、残念ながら次の来客によっておしまいとなつてしまいました。

「……お賽銭箱かあ。わたしいの大好物のお、おいしい栄養満点のおやつう、たくさん入れてあげるう〜」

みるみる黒くてピカピカ光沢がある『おやつ』が溢れ出す賽銭箱からありんすちゃんは逃げ出すのでした。

「……もうありんちゅちや神社やらないでありんちゅ」

ありんすちゃん、新年そうそうに災難でしたね。

翌日になつたらすつかり忘れてしまい、またしてもありんすちゃん神社が復活したりしますが……仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。



# 131ありんすちやんのひなまつり

今日は三月三日、ひな祭りです。

ありんすちやんはアウラとマーレに誘われてナザリツク地下大墳墓 第六階層にやっつて来ています。

「ほら、すごいでしょ？ やまいこ様のコレクションなんだよ？」

アウラは五段飾りのひな人形の前で得意そうに胸をそらします。

「やまいこ様は、あの……ぶくぶく茶釜様と餡ころもち様と女子会を、あの、よく開いていらつしやっつていたんです」

「……………ぶーん」

ありんすちやんは気のない返事をしていましたが、視線は可愛らしいひな人形に釘付けでした。

8センチ程の小ぶりな人形はネコやイヌなどの動物を模していて、どれも綺麗な装束をまとっています。なかでも男雛女雛は実に素晴らしく、ありんすちやんは思わずため息をついてしまいました。

「ね、あたし達のひな人形、すつこいでしょ？」

アウラが更に胸をそらしします。

「……べ……別にうらまやしくないでありんちゅ。……あ・り・ん・ちゅ！」

ありんすちゃんはその言いきりましたが、相変わらず視線はひな人形に釘付けのままです。

「……ふーん」

アウラはありんすちゃんの視線を遮るようにひな人形の前に立ちました。

「……ありんちゅちやもひな人形、もってるでありんちゅ。ペロロンチーノしやまから貰ったでありんちゅ。ほんちよでありんちゅ」

「……ふーん」

アウラはジト目でありんすちゃんを見つめます。

「……じゃあさ、ありんすちゃんのひな人形をあたし達に見せてくれない？」

「わかったでありんちゅ」

ありんすちゃんは真つ赤な顔で出ていこうとします。

「……その前にポケットからあたし達の女雛様、返してほしいんだけど？」

ありんすちゃんはしらをきろうと頑張りましたが、双子にひな人形を取り返されてしまいました。

※ ※ ※

「……ありんちゅちやのひな人形、探すでありんちゅ」

第二階層に戻ったありんすちやんは早速シモベを集めます。

「……あの……ありんすちやん様。恐れながらありんすちやん様はひな人形をお持ちではありませんが……」

ヴァンパイア・ブライドはおずおずと意見します。

「……ちようでありんちゅ。今から第六階層へ行つてひな人形もつてくるでありんちゅ。あれはほんとはありんちゅちやのひな人形でありんちゅ」

ありんすちやんは鼻からフンスと息をはきながらシモベに命じます。しかし誰一人として動こうとしません。

「ありんすちやん様。この屍蟻玄室の階段に赤い絨毯を敷いてひな人形みたいに人形を飾つてはいかがでしょうか？」

別のヴァンパイア・ブライドがありんすちやんに提案します。ありんすちやんはニツコリすると飾る人形を探し始めました。

※ ※ ※

最上段の内裏びなはすぐに決まりました。男雛は以前にリ・エステイーゼ王国に行つた時に手に入れた超合金アインズ様人形です。女雛にはいつも寝る時に抱いているウサギのぬいぐるみにしました。

問題はその他の三人官女や五人雛子といったひな人形です。ありんすちゃんはこの人形もぬいぐるみもありませんでした。

「……困つたでありんちゆ」

そこに先程のヴァンパイア・ブライドが明るい顔でやって来ました。見ると人形の形をしたクツキーを手にはしています。

「ありんすちゃん様。このジンジャーブレッドを人形の代わりにしてはいかがでしょう？ カラフルな紙で衣装を作ればだいぶ見映えがよくなると思います」

ありんすちゃんは手を叩いて喜びました。

「ちようだ。ありんちゆちやのお雛様は十人雛しるでありんちゆ。アウアウよりたくさんしるでありんちゆ！」

なにやらお雛子というよりちよつとしたオーケストラになりそうですね。

※ ※ ※

そしていよいよアウラとマーレにありんすちやんのひな人形をお披露目する時がやってきました。

ありんすちやんは得意そうに屍蠟玄室の扉を開きます。

ありんすちやんのひな人形を目にしたアウラとマーレは言葉を失いました。

※ ※ ※

「これはこれは我が階層守護者たるありんすちやん様。この度は我が眷属の為にご馳走をご用意頂きました誠に恐悦至極にございます——」

恭しくお辞儀をする恐怖公の後ろにはありんすちやんのひな人形のジンジャーブレッドを貪る眷属の大群が——

仕方ありませんよね。だって、ありんすちやんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

——あれ？

## 132 ありんすちゃんけしようにする

ナザリツク地下大墳墓 第二階層〈屍蠟玄室〉——今日のありんすちゃん是不機嫌そうです。

真つ赤な口紅を手にしてドレッサーの前にチヨコンと座っているのですが鏡に届かないのです。うーん……どうやらドレッサーを使うにはありんすちゃんが小さ過ぎてしまうようです。

しばらくムツとした顔で睨んでいたありんすちゃんでしたが、何やら閃いたみたいで

す。  
しばらくすると、どこからかいくつもの木箱を持って来ました。そしてドレッサーの  
スツールの上に積み始めました。

なるほど。こうして高くすればありんすちゃんでもドレッサーに届きますね。しか  
し……ああ！ 危ない！

あつという間に木箱が崩れてありんすちゃんは落ちてしまいました。

うーん……ありんすちゃん、もう少し安全なやり方を探した方が……

こまりました。ありんすちゃんはまたしてもスツールの上に木箱を積み始めます。

ほらほら言わんこつちやありません。またしてもありんすちゃんは落ちてしまいました。  
す。

ふうふう言いながら、真つ赤な顔で木箱にあれこれ怒っています。……うーん。そんな事では解決しないと思いますよ。たぶん。

やがて、とうとう木箱をスツールに積み上げるのを諦めたありんすちゃんは食堂から椅子を借りてきました。

いつもありんすちゃんが使っている、幼児用の補助椅子です。よくファミレスで小さな子供が使うあれです。

ありんすちゃんは補助椅子に登ると腰を下ろします。うーん……ドレッサーと反対の向きに座ってしまったのでやり直します。

椅子の上に立ち上がり、両足をスポンと補助テーブルの下にくぐらせます。

大成功です。ありんすちゃんは口紅を持つとドレッサーを眺めます。

大変です！ なんとという事でしょう！ せっかく苦労してドレッサーに届いたというのに……ドレッサーの鏡にはありんすちゃんの姿がありません。

うーん……どうやらありんすちゃんは吸血鬼なので鏡には写らないようですね。

と、ありんすちゃんは何やら思いついたみたいです。補助椅子から降りると何やら紙に描き始めました。

うーん……いったいどうするのでしょうか？

※ ※ ※

その後真つ赤な口紅を顔中に塗りたくったありんすちゃんはシモベのヴァンパイア・ブライド達を恐惶させ、皆に無理矢理お風呂でゴシゴシ洗われ……疲れきって眠りりにつくのでした。

翌朝、ありんすちゃんはおねしょをしてしまいました。

「……ありんちゅちゅや、あちよこからオバケ覗きこんでいるから、おトイレいけなかつちやでありんちゅ……」

ありんすちゃんが指を指したドレッサーの鏡には昨日ありんすちゃんが描いた絵が貼ってありました。なるほど。鏡に写らないから自分の顔を描いてそれを鏡に見立ててお化粧をしたのですね。

なかなか良い考えですが、それをすっかり忘れてオバケだと思ってしまうとは……

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子のですか





## 1333 ありんすちゃん ツインテールにする

ナザリック地下大墳墓 第二階層〈屍蠟玄室〉——今日のありんすちゃんはご機嫌です。

三人のヴァンパイア・ブライドに髪をツインテールにしてもらっています。ありんすちゃんの長くて艶やかな銀髪はツインテールが良く似合いそうですね。

ツインテールの根元にはピンク色のサクランボみみたいなボンボンをつけます。服装は白のフリルがたくさんのワンピースです。

ありんすちゃんは椅子から降りるとクルリクルリとワンピースを翻しながら回ってみせました。

「ありんすちゃん様。とつてもお似合いです」

「本当にお似合いです」

シモベのヴァンパイア・ブライド達の賞賛にありんすちゃんの小鼻が膨らみます。

「……と、とうじえんでありんちゅ。ありんちゅちゃは可愛いでありんちゅから……ふん！」

ありんすちゃんの頬がみるみる紅潮していきます。

「では、ここから見回り、しるでありんちゅ」

ありんすちゃんはフンスと鼻から息を吐き出すと階層の巡回に出かけて行きました。興奮のあまり、ぎこちなく手足を揃えて歩いてしまっています……

※ ※ ※

翌日もありんすちゃんは髪をツインテールにしました。今回は前より少し上から分けていますね。細い銀色の髪がユラユラ揺れています。

「おはよー！ ありんすちゃん」

いきなり扉が開き、アウラが入ってきました。アウラはありんすちゃんを見つけるとマジマジと見つめます。

「……へえー……思ったより似合ってるじゃん。あーあ。あたしも髪が長かったらツインテールにしてみるんだけどな……」

残念そうなアウラを見て、ありんすちゃんは得意になります。

「ふふん。ツインテールはありんちゅちやにとおつても、とおつても似合うんでありんちゅ！」

ありんすちゃんは鼻からフンスと息を吐きました。

「……うー……なんかムカつく……あたしも髪を伸ばすんだ。じゃあね、ありんすちゃん」

アウラは乱暴に出ていってしまいました。

ありんすちゃんはご機嫌です。シモベ達の賞賛を浴びながらまたしても階層の巡回に出かけていくのです。

※ ※ ※

やがて、ありんすちゃんがツインテールにし始めてから一週間が経とうとしていたある日のことです。

ありんすちゃんがいつものようにヴァンパイア・ブライド達に髪をすいてもらっていると、来訪者がありました。

ありんすちゃんが部屋に入れるとそれは領域守護者の恐怖公でした。

恐怖公は真っ白のタキシードに身を固め、恭しく赤い薔薇の花束を差し出しながら言いました。

「この数日間というものの貴女の美しい銀色の触角に心奪われておりました。身分の違いこそあれど、この恋心はいかにもしようなく、ここに想いのたけをぶつけたく思いません。願わくは我が宿世の伴侶となって頂きたく……」

その日からありんすちゃんは二度とツインテールにする事はありませんでした。仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。 仕

## 134 ありんすちゃん、ゆかたをきる

ナザリック地下大墳墓 第二階層〈屍蠟玄室〉のありんすちゃんの部屋の扉に一枚の貼り紙がありました。

『きがえちゅう』

中ではありんすちゃんがドツタンバツタン大騒ぎです。どうやらありんすちゃんは浴衣を着ようとしているみたいですが……うーん。一人で浴衣を着るのは無理みたいですね。

あまりの騒ぎにヴァンパイア・ブライド達が駆けつけてきました。総出でありんすちゃんに巻き付いた布をほどいていきます。ようやくしてありんすちゃんの顔が出てきました。

「ぶはー！ グルグル巻きになっちゃやでありんちゅ」

夏祭りの季節ですからありんすちゃんが浴衣を着るのは良いと思いますが……

ヴァンパイア・ブライド三人がかりでようやく帯をほどき、きちんと浴衣を着せ直します。最初からそうすれば良かったのではないのでしょうか？ それともまたしてもシモベ達からストライキされてしまったのでしょうか？

なにはともあれ、ありんすちゃん、浴衣がとってもよく似合います。可愛らしい朝顔の柄がありんすちゃんの魅力を引き出していますよ。長い銀髪は結いあげられてピンク色の金魚の飾りの簪で留めてあります。

「ちよれでは浴衣をアインジュしゃまに見てもらおうでありんちゅー！」

ありんすちゃんは胸をそらせると、鼻息も荒く屍蠟玄室を出ていくのでした。

※ ※ ※

ありんすちゃんは真つ直ぐ第九階層にやって来ました。アインズの執務室の前で止まると扉にノックをします。ありんすちゃんつてなかなか行儀が良いですね。

アインズ当番の一般メイドがアインズ様の許可をとり、ありんすちゃんを部屋に入れます。

「アインジュちゃまに、ありんちゅちやのかわいい、見てみるでありんちゅー」

ありんすちゃんは口上を述べるとクルリと回ってみせました。

「おお……なかなか似合うじゃないか。うむ。夏は浴衣が良いものだな」

アインズは思わず破顔しました。夏らしく花火や縁日、盆おどり等をナザリックで楽しむのも良いかもしれないな。

思いをはせるアインズにありんすちゃんがちよこんとお辞儀をします。

「ちよれでは、ペロロンチイノしまにおちえていただいちゃ、浴衣のさほをしるでありんちゅ」

(……さほ？ うん、作法の事だろうか？ しかしペロロンチーノの、というのが気になるが……)

考え込むアインズの手をとると、ありんすちゃんは帯の端を持たせます。

「あれー、でありんちゅー！」

ありんすちゃんはクルクルと独楽のように回りながら帯をほどいていきました。

クルクルクルクルクルクルクルクルクルクルクルクルクルクルクル……

やがてすっかり帯がはできると、浴衣が脱げてスツポンポンのありんすちゃんが飛び出してきました。

素っ裸のありんすちゃんはヨヨヨとばかりに手をつくくと、「……おちやわむれでありんちゅ」と決めセリフを言いました。

「——ペロロンチーノオオオオ！」

執務室にアインズの叫び声がむなしく響くのでした。

仕方ありませんよね。だってペロロンチーノさんはエロゲ大王なのでしたから。



## 135ありんすちゃんのにじいろのみずたまり

ありんすちゃんがナザリック地下大墳墓 第三階層にやって来ました。いつもの巡回のお仕事です。

「あめあめふれふれかーちゃんかー」

おやおおや？ 今日のありんすちゃんは可愛らしい赤のレインコートと長靴、そしてピシクの傘をさしています。

「先程まで降っていた雨はすでにやんでいますが、ありんすちゃん、とっても似合っていますよ。」

ナザリック地下大墳墓では時折マーレが魔法で雨を降らせているんですね。

「ビツチビツチジャブジャブらんらんらん」

うーん……なんだか歌詞が微妙に違うみたいですが……

ありんすちゃんは水溜まりを見つけると飛び込んでいきます。

「おもちゃろいでありんちゅー！」

水溜まりの中でありんすちゃんの笑い顔が波紋で揺れます。吸血鬼は流れる水が苦手だったりしますが、こうした水溜まりは問題ないみたいですね。

「……あちよこ、綺麗でありんちゅー！」

ありんすちやんが駆け出していきます。

「こりは綺麗なみじゆたまりでありんちゅね……」

そこにあつたのは虹色の水溜まりでした。いったい何の水溜まりなのでしょう？

確かに綺麗な虹色なんです……

ありんすちやんはしばし虹色の水溜まりにうつとりと見とれていましたが、突然何かを閃いたみたいです。

「ちようだー！ こりがどこから出ているかちらべるありんちゅー！」

ありんすちやんはウソソコのスキップをしながら歩きだしました。

「冒険でーありんちゅー冒険がーありんちゅー♪」

何やら即興の歌を口ずさみながら、ありんすちやんはどんどん進んでいきます。どこまでもどこまでも進んでいくと、何やら物音が聞こえてきました。

※ ※ ※

「……オエエエエ！ ゲホツゲホツ！ オエルルエエエエ！」

ありんすちやんはどうとう虹色の水溜まりの発生源を突き止めました。

なんとナザリツクのアンデッド、シルクハットに取りつけられた金髪の少女の頭の口

から滝のように虹色の液体が溢れていました。

「……これは、オエルルルエエエエ！　ありんすちゃん様、オエルルルエエエエ！　申し訳ありません、オエエエエ！　この首が、オエエエエ！　吐くのをやめ、オエルルルエエエエ！　ないので申し訳あり、オエエエエ！　その、ありんすちゃん様が、オエエエエ、近づいた途端に、オエエエエ！　吐くのがとまらなく、オエルルルエエエエ！」

まるで噴水のように虹色の液体を吹き出すシルクハットをありんすちゃんはうらやましそうに見つめました。

「ありんちゅちやもそりがほちいでありんちゅ、おえうちたいでありんちゅ」

階層守護者の不興を買うかとビクビクしていたシルクハットは困ってしまいました。

「……この頭を、オエエエエ！　ありんすちゃん様が、オエエエエ！　お持ちになつても、オエエエエ！　意味はないかと、オエエエエ！　思いますが、オエエエエ！」

「ありんちゅちやも、オエオエしるでありんちゅ！　きれいな虹色、オエオエしるでありんちゅ！」

シルクハットは丁寧にありんすちゃんに説明をしました。このままありんすちゃんにアルシエの首を渡しても腐らせてしまうだけです。せつかくアインズ様から賜ったのに無駄にする事は出来ません。

シルクハットによるありんすちゃんの説得は三時間にもおよびました。

「……わかっちゃでありんちゅ」

ありんすちゃんはずぶしぶとシルクハットから首をもらう事をあきらめると、何処かへ走り去っていききました。

「いいもーん！　ありんちゅちやの方がもつともつとしゆてきな頭、飾るでありんちゅもん！」

うーん……嫌な予感しませんが……

※ ※ ※

その後、アインズはユリ・アルファの頭を頭の上に結びつけて得意そうなありんすちゃんからユリ・アルファの首を返させるのに苦労したそうです。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ五歳児位の女の子なのですから。

## 136ありんすちやんとしやつくり

「……ヒクツ……」

ナザリック地下大墳墓の第九階層にある食堂でひととき大きな音が響きわたりました。

「……ヒックー」

食事の中の一般メイド達が一斉に振り向いた視線の先にいたのはなんと！ ありんすちやんでした。

ありんすちやんは目を見開いて口を両手で押しえています。

「……ヒックー！ しやつくり、とまらない……ヒックー！ でありんちゅ……ヒックー！」

どうやらありんすちやんはしやつくりが止まらなくなってしまったようです。

ありんすちやんは昼食にペペロンチーノを食べていたのですが……口に入れようとする度にしやつくりが出て、フォークに巻かれたペペロンチーノが弾みで飛んでいっちやうのでした。

「……全く……このナザリックの次期支配者たる私、エクレア・エクレール・エイクレアーに先程からパスタを投げつけているのはいったいどなたですか？……」

エクレーアが頭の上からパスタをたらしてありんすちゃんのもとにやってきました。

「……ありんちゅちや、ヒック！ わざとじゃ、ヒック！ ないで………ヒヤックション！」

ありんすちゃんがくしやみとしやつくりを同時にした為にヘグレーターテレポーターションが発動してエクレーアは何処かへ転移してしまいました。

「……ヒヤック……ヒック……」

ありんすちゃんのしやつくりは止まりそうにありません。

「おやおや？ ありんすちゃん、17回目のしやつくりっすね。知ってたっすか？ しやつくりって止まらずに百回続けてしたら死んじやうっすよ？」

唐突に姿を見せたルプスレギナの言葉にありんすの顔色が真っ青になります。

「……ヒクツ……なんちよかちないと……ヒクツ……ちんじやうで……ヒクツ……ありんちゅ……」

ありんすちゃんは食事を中断すると走り出していきました。

※ ※ ※

「えー？ しやつくりを止める方法が知りたい？」

突然のありんすちやんの来訪にアウラがすつとんきような声を上げます。

「……うーん……いろんな方法があったと思うけど……どうしようかな？」

腕を組んで考え込むアウラをありんすちやんは期待のこもった眼差しで見つめます。

「わっ!! ど、どうかな? あの、びっくりするとしゃっくりが止まりますよね」

突然現れたマーレがありんすちやんを驚かしました。でも……

「……………ヒック」

残念ながらありんすちやんのしゃっくりは止まりません。

「……そうだ! たしか茶釜様に教えてもらった方法があった!」

アウラが手を叩きました。

「うんうん。これなら大丈夫だよ。こうして鼻をつまんで水を一気に沢山飲むんだよ。

そうすれば一発で止まるはずだよ」

ありんすちやんは頑張つて水を沢山飲み続けました。沢山飲んでお腹はチャポン

チャポンです。

「……………ヒック」

うーん……残念ながらありんすちやんのしゃっくりは相当手強いみたいですよ。

「……………ヒック……………ヒック……………」

大変です。しゃっくりが収まるどころかむしろひどくなってきたようです。

「……ヒック……ありんゆちや、ヒック……ちにたかないでありんゆちや……ヒック……うわわああん！」

ありんすちゃんは泣きながら飛び出していつてしまいました。

※ ※ ※

「……え？　ありんすちゃんのしゃっくりが止まらないと……ありんすちゃんが死んでしまう、ですって？」

ありんすちゃんが泣きながら訴えています。アルベドは落ち着いていました。

うーん……さすがは守護者統括ですね。アインズ様が留守中のナザリックを任せるだけの事はあります。

「……ありんすちゃん、一言だけよいかしら？」

ありんすちゃんは真つ赤に腫らした目をこすりながらアルベドを見上げました。

「……アンデッドは死なないんじゃないかしら？」

「……」

ありんすちゃんはポカーンと口を開けたまま固まりました。



「……………」

「……………」

しばらく二人は無言で向き合っていましたか……

「あ！ しゃつくり、止まったでありんちゅ！ ありんちゅちや、こりでちなないでありんちゅ！」

ありんすちやんは踊りながら飛び出していききました。仕方ありませんよね。だって、ありんすちやんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## 137 番外編 ティラの忍者修行

バハルス帝国の暗殺組織の首領だったティラは強引にナザリックにスカウトされてしまいました。

「うむ。ユグドラシルでは忍者は最低60レベルだったはずだが……それにしても現地の忍者はレアだな。しかもクノイチとアサシンの職業を持っているのか……是非とも鍛えてみたいものだ」

アインズはメツセージでシモベのハンゾウを呼び出しました。

〈はい。アインズ様。……うわ……むぐぐぐ……〉

〈……ん？ ハンゾウよ。どうかしたか？〉

〈……ハンゾウでありんちゅ。なんでも、なーんでもーないでありんちゅ〉

アインズは嫌な予感がしましたが気がつかないふりで続けます。

〈……すぐに私の執務室に来るように。ティラという人間を鍛えて欲しいのだ〉

〈今しゅぐ行くますでありんちゅ〉

メツセージを切ると同時にアインズの前にあらんすちゃんが見れました。どうやらグレーターテレポーターションを使ったみたいですね。

「ありんちゅちゃ、じゃなくてハンゾウ参上してるでありんちゅ」

ありんすちゃんは歌舞伎に出てくるようなポーズをとります。よく見ると服装がクノイチっぽいですね。

「……………あー……………コホン。ティラよ。この者の下で修行するのだ。よいな？」

「ハッ。かしこまりました」

かくてティラはありんすちゃんの元で忍者修行する事になりました。

※ ※ ※

「まじゆは第二階ちように行くますでありんちゅ」

「ハッ」

ありんすちゃんは鼻唄まじりで第二階層にやって来ると〈屍蟬玄室〉に入っけいきました。そしてお風呂身体を洗い、のんびりと湯船につかり、シモベに髪を乾かさせるとベッドに入っけしまいました。

「……………あの……………私の修行は……………？」

ありんすちゃんはベッドの中で目をパチクリさせました。

「うっかりわちゆれてちやでありんちゅ」

※ ※ ※

ありんすちゃんはシモベのヴァンパイア・ブライドに大きなルーレットを持ってこさせました。盤上のベルトにテイラの手足を固定させると言いました。

「こりから立派な『たいまにん』なるますでありんちゆ」

テイラは手足を固定されたまま高速回転させられて絶叫するのです。

※ ※ ※

『たいまにん』の道はまだまだ厳しいでありんちゆ」

テイラはまだ手足をルーレットに固定されたままです。

「次の修行しるでありんちゆ」

ありんすちゃんが指示をだすと四人のヴァンパイア・ブライド達がテイラをくすぐりはじめました。

「アツハハハハハハ！ ぐるじい……やめて！ アツハハハハハゴホゴホツ！」  
テイラは身もだえするのです。

※ ※ ※

「だいぶ『たいまにん』らしくなっちゃやでありんちゅ」

いつの間にかティラの忍者装束はボロボロでバラバラあちこち穴が開いています。胸もととか太ももとか晒されてちよつとエッチですね。

「……そりでは最後の修行しるでありんちゅ」

ありんすちゃんとティラは第六階層にやって来ました。

「あれ？ ありんすちゃんじゃん。そっちはアインズ様がスカウトした人間かな？ あたしの階層に用かな？」

ありんすちゃんはアウラに胸をそらせてみせました。

「ありんちゅちはアインジュちやまのお仕事しるでありんちゅ。アウアウじゃなくてありんちゅが頼まれたでありんちゅ！」

「……えつと……ハンゾウ様が頼まれるはずですよ……ね？」

得意そうなありんすちゃんにティラが小さな声で呟きましたが、ありんすちゃんには聞こえなかつたみたいです。

「アウアウ、しゅぐにウネウネニヨロニヨロに案内しるでありんちゅ」

アウラはやれやれと首を振りながらもありんすちゃん達を触手だらけの蟲が住む穴

に案内するのでした。

「こりて立派な『たいまにん』なるでありんちゆ。ニヨロニヨロウネウネがつきものなんでありんちゆ」

可哀相にテイラは触手が蠢く穴に落とされてしまいました。

かくしてテイラは立派な対魔忍となり、エロエロな活躍をするのでした。

仕方ありませんよね。だってペロロンチーノさんはエロ大魔王なのですから。

## 138ありんすちやんとワードスーツ

ナザリック地下大墳墓 第二階層へ屍蝨玄室——…ありんすちやんはベッドから起き上がるとお風呂に向かいました。途中でパジャマを脱ぎ散らかしています。

泡で満たされた浴槽に潜り、ブクブクと息で泡を作ったりきめ細かな泡を積み上げて息を吹き掛けて飛ばしてみたりします。

手や足でバシャバシャし始めるとシモベのヴァンパイア・ブライドがバスタオルを持ってやってきます。

ありんすちやんは万歳をした格好で身体を拭いてもらうと、他のシモベがありんすちやんの衣類を持ってやって来ます。ヴァンパイア・ブライド達に着替えさせてもらったありんすちやんは小さくくしゃみをしました。

次の瞬間、ありんすちやんは何処かに転移してしまいました。

※ ※ ※

テレポーテーションしてしまったありんすちやんは何やら狭い場所にいました。とりあえず手元にあったスイッチを片っ端から点けてみました。

と——ウイイ……ンンと音がして目の前に画面が表示されます。何やら裸の女性といた裸の男が大きな口を開けてこちらに向かってきます。

ありんすちゃんが小さく頭をふるると声が聞こえてきました。

「——おい！　こら！　冗談じゃないぜ？　なあ、どうせツアーの悪戯なんだろう？　なあ？　ま、待てよ！」

ありんすちゃんは男の無様な姿に笑いました。うん？　頭の中にいろいろイメージが浮かんでいきます。どうやらありんすちゃんの意味でいろいろ動かす事が出来るみたいです。

ありんすちゃんは空高く飛びあがるとたちまち見えなくなっていました。

※ ※ ※

「……おいおいおい！　なんてこった！」

後に残された男——リ・エステイーズ王国アダマンタイト冒険者チーム“朱の雫”

リーダーアズス・アインドラは立ち尽くしたままでありんすちゃんが消えた空を見上げていました。

ちなみに下半身も裸です。



ありんすちやんが転移したのはアズスのパスワードスーツの中だった為、アズスにしてみたらいきなりパスワードスーツが勝手に飛び出していつてしまったのでした。

「くそー！ いったいどうなってやがる……」

アズスは他の「朱の雫」メンバーに情報収集させると同時に冒険者組合のネットワークを使ってパスワードスーツの行方を探させるのでした。

※ ※ ※

やがてアズスのものと思われるパスワードスーツについての情報がアズスのもとに報告されました。それによるとトブの大森林の近くの開拓村のひとつで幼女が自慢気に見せびらかせていたとの事です。

うーん。間違いありません。きつとそれ、ありんすちやんです。

アズスは「朱の雫」の仲間を伴い、その村を訪ねる事にしました。

※ ※ ※

「……………うん？ カルネ村とはここのようだな。……………しかし……………これは……………」

アズスは一介の開拓村に過ぎないはずのカルネ村のものものしさに緊張します。村の周囲は頑丈な柵が巡らされていてちよつとした要塞のようでした。

「……ちよつと訊ねるが、この村にパワードスーツを所有するよう……少女がいると聞いたが……？」

アズスは利発そうな少女に声をかけました。

「あれ？ お客さんですか？ この列に並んでください。スツゴイんですよ」

アズス達は仕方なく50人位の列に並びました。

しばらくするとパワードスーツが空から降りてきました。

「な、なんで腕が？ ドリル？」

思わずアズスは叫びます。パワードスーツの右手は肘の先がドリルになっていました。しかも胴体の部分が異様に太くなっています。

やがて胸あたりのハッチが開きありんすちゃんが出てきました。

「おまたせちたでありんちゅ。こりからありんちゅちやのしえんようガリダムに順番あしよぶでありんちゅ！」

ありんすちゃんが宣言をすると列に並んでいた皆が歓声を上げました。

※ ※ ※

「……………いやいやいや。子供のオモチャにするなよ……………ああ、そんな小さな子に操縦は無理だろ……………ああ。やつぱり……………いやいや、『丈夫だから大丈夫でありんちゅ』つて……………いやいやいや。ダメだつて……………やめろ！ 赤ちゃんに操縦はやめろ！

無理だつて……………いやいやいや……………せめて十歳以上とか身長制限を……………いやいや。ゴブリンだぞ？ ゴブリンがパスワードスーツ乗っちゃう？ いやいやいや……………てかゴブリンどこから出てきたの？ せめて列に並ぼうよ？ ルール守ろうよ……………オーガ！ いや無いわあ。オーガ無いわあ。オーガに操縦さすか？ 普通……………そもそもパスワードスーツ操縦が普通じゃないよね……………いやいや。『ありんちゅちやのパスワードスーツじゃないから。そもそも俺のだし……………』

アズスはブツブツと呟き続けていますが仲間達はスルーしていました。  
やがてアズスの番になりました。

※ ※ ※

アズスはパスワードスーツから降りるとありんすちやんに返して欲しいと頼んでみました。

意外にもありんすちゃんは快く頷いてくれました。

「……ちなみに何故、ドリルをつけたんだ？」

アズスはささやかな疑問を口にしました。

「……かつこいいでありんちゆ。ドリルグルグルしてでありんちゆ」

アズスは更に訊ねてみました。

「……しかし、コクピットに湯船をつけるのは全く理解できないのだが……」

ありんすちゃんは答えました。

「ありんちゆちやはお風呂だしゆきでありんちゆよ」

うーん……仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

# 139ありんすちゃんスライムになる

ナザリック地下大墳墓 第二階層〈屍蠟玄室〉

「ありんすちゃん様！」

ヴァンパイア・ブライドの大声にありんすちゃんは目をこすりながら起き上がりました。

プヨヨン……

ありんすちゃんは目をこすり……

プヨヨヨン……

なんという事でしょう！ ありんすちゃんは目をこする事が出来ませんでした。

「……恐れながら、ありんすちゃん様は……その……スライムになっておられます」  
おずおずと意見を述べるヴァンパイア・ブライドにありんすちゃんは振り向きま

た。  
プヨヨン……

ありんすちゃんは首をねじれないので仕方なく身体全体で向き直りました。

ボヨヨン……ボヨン。

ありんすちゃんを改めて自分の身体を見下ろしてみました。すると、なんという事でしょう！ ありんすちゃんはピンク色のスライムになっていたのです。

スライムになったありんすちゃんの身体の表面からは汗の様に液体が染みだして見えました。その液体はありんすちゃんのベッドのシーツに染みを作るのです。

※ ※ ※

「……………うむ。ではスライムになった身体から出た液体がこの染みだということのかね？」

アインズは会議室に広げて置かれたベッドのシーツを指して尋ねました。ありんすちゃんは首をコクンコクンとさせます。

アインズは額に手をやり、軽く頭を振りました。しばらく考え事をした後でありんすちゃんに向き直りました。

「……………しかし、ありんすちゃんよ。スライムになったのならはどうやってその姿に戻ったのかね？」

ありんすちゃんはしばらく考え込むと口を開きました。

「……ちよれはベストーニヤワンワンに戻ちてもらちちやでありんちゅ」

「……ふむ。ありんすちゃんはこう言っているが……ペストーニヤよ。どうなのだ？」

「……私は全く身に覚えがありません……ワン」

アインズはさらにい並ぶ戦闘<sup>ブレイアデス</sup>メイドに尋ねていきます。

「……とりあえずありんすちゃんはこう言っているが、お前たちはどう思う？」

「……恐れながらアインズ様。これはただのおねしよかと……」

「……おねしよだと思えます」

「……おねしよです」

「……おねしよとしか……」

「……正確にはアンデッドの中でも吸血鬼族特有の分泌物だと分析……」

戦闘メイド達の指摘にありんすちゃんの顔がみるみる紅潮していきます。

「ありんちゅちゃ、おねしよなんてしないででありんちゅ！　ありんちゅちゃはもう立派なレレイなんでありんちゅ！」

「——その立派なレレイが——」

ありんすちゃんの叫びを打ち消して悲痛な声が響きわたりました。

「——その立派なレレイとやらは何故に罪もないメイド、ツアレのベッドのシーツをおねしよシーツに取り替えたのでしょうか？　説明をしていただきたいものです！」

執事のセバスがありんすちゃんに指を突きつけて糾弾します。

ありんすちゃんは最後には、おねしよをしてしまい、それを誤魔化す為にツアレのシートとへグレーターテレポーターションで交換し、バレそうになったのでスライムになったという話をでっち上げた事を認めました。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子に過ぎないのですから。



※ ※ ※

ちなみにセバスが激昂したのは『ツアレが自らおねしよをしたと勘違いして茫然自失した』から、というのもありましたが、一般メイド達の噂に『セバス様が激しすぎて弛んでしまったからお漏らししたのに違いない』というのが理由だったらしいです。勿論、純真なありんすちゃんにはなんの事かは全く解らないでしょうが……

## 140 たいまにんアリス

ナザリック地下大墳墓 第二階層〈屍蠟玄室〉——階層守護者のありんすちゃんが着替え中です。うーん……V字型の赤い革の生地にメツシユ素材の服装……成熟した女性ならば目のやりどころに困ってしまいそうな衣装です。

「たいまにんありんちゅちや見参しるでありんちゅ」

ありんすちゃんは両手を前に合わせて胸もとを強調するポーズをとります。

うーん……どう見ても猿回しの猿が反省するポーズ——ゲフンゲフン。

かくして対魔忍となったありんすちゃんは意気揚々と出かけていきました。

※ ※ ※

第六階層にやってきたありんすちゃんは触手を持つ巨大な植物が住む穴に呼びかけました。

「ありんちゅちやがたいまにんのお手本しるでありんちゅ。ちやつちやと出てくるますでありんちゅ」

ありんすちやんの呼びかけに一人の女性が這い上がってきました。先日無理矢理ありんすちやんに対魔忍にさせられた元イジヤニーヤのテイラです。

「……うとう……もう触手はイヤだ……」

「……ダメでありんちゆ。せくしいさがじえんじえん、じえんじえーん足りないでありんちゆ」

ありんすちやんは肩をはだけると「いやーん」「ぼかーん」「えっちい」と叫びながら身体をくねらせてみせます。

「テラもやるでありんちゆ」

ありんすちやんはテイラの肩をはだけさせました。

「いやーん」「……イヤーン」

「ぼかーん」「……ん……バカーん」

「あーれー」「……あ、れー……」

ありんすちやんは腕を組みました。

「まったくダメダメでありんちゆ。色つぼちや、じえんじえん足りないでありんちゆ」  
ありんすちやんは更にテイラの肌をさらけ出させました。

「いやーん」「イヤーン」

「ぼかーん」「バカーん」

「えっちい」「……エツチ」

ありんすちゃんは満足そうに頷きました。

「だいぶ良くなつたでありんちゅ」

ホツとしたティラは思わずため息をつきました。

「……ふう。こんな事なら妹たちのように気楽な冒険者にでもなつていれば良かった

……」

途端にありんすちゃんの目が光りました。

「……テラには妹がいるでありんちゅか？　ありんちゅちゃはしゆてきなアイデア、ひ

らめいちゃでありんちゅ！」

※ ※ ※

リ・エステイーズ王国首都リ・エステイーズ。アダマンタイト級冒険者チーム『蒼の薔薇』のメンバー、ティアとティナは音信不通となつた暗殺組織イジャニーヤの行方を探っていました。

「……おかしい。全く痕跡が消えている。これはあり得ない」

「……やはり皇帝が関わっていると見るべき。一度バハルス帝国に行く必要があるそ

う」

「……しかし王国もなにやらキナ臭いのも気になる。これは皇帝の策略かも……しかし信じられないのはイジャーニーヤ首領程の実力者が……」

ティアとティナは不意に武器を構えました。二人の視線の先に人影が現れました。

「……ティラ？ 貴女なのか？」

「ティア、ティナ、貴女たちに話がある。是非聞いてほし——」

「ありんちゅちゃパーンチ！」

ティアとティナはティラの隣にいた少女のパンチを受けて意識を失ってしまいました。

※ ※ ※

「……………ここはいつたい？」

ティアとティナが目覚めたのは円型闘技場でした。

「こりから二人にはたいまにんなる特訓しるでありんちゅ。いっちよけんめしるでありんちゅ」

先程の少女が胸を反らせて言いました。ティラは少女の後ろに隠れるようにして目を伏せています。

「……そんな無理強いがきけると?」

「……シヨタなら許したが幼女なら許さない」

ティアとティナはありんすちゃんに飛びかかりました。が、あつさりと気絶させられてしまいました。

※ ※ ※

それから一週間後……

「……うむ。ありんすちゃんよ。対魔忍育成の成果を披露したい、だと? 良かろう。この私が直々に見学するでしょう」

ありんすちゃんはアインズを第六階層の円型闘技場に案内しました。やがて小さな舞台のたれ幕が開かれるとティラがベッドに寝ていました。

(……対魔忍……大丈夫か? そういえばペロロンさんのコレクションでもかなりハドだったよな……)

「……ゆーたいりだつー!」

ティラの身体からティアが起き上がりました。

「……からのー……更にゆーたいりだつー!」

更にティアからティナが起き上がりました。

「……………」

目を白黒させて言葉を失ったアインズとは反対にありんすちは嬉しそうです。うーん……仕方ありませんよね。だって、ありんすちはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## 141 ありんすちやんスーパーロボットたいへん

リ・エステイーズ王国アダマタイト級冒険者チーム “朱の雫” のリーダー、アズス・アインドラは叫びました。

「な、なんでー?」

またしてもアズスのパワードスーツがひとりでに飛び去って行ってしまったのです。

前回はレポーターションしてきたありんすちやんが勝手に動かしてしまったのでした。その後、カルネ村でみんなのおもちやになっていたのを頼み込んでようやく返してもらったのです。最近ようやく右手のドリルをふつうの手に替えたばかりです。

「いったい誰の仕業でしょう?」

「……あのよう……少女だな。きつと……」

どうやらアズスには心当たりがあるみたいですな。

※ ※ ※

アズスたち “朱の雫” は馬を飛ばしてトブの大森林にやって来ました。すると遠く



に大きな何ものかの姿がありました。

「……あれか……いや、違う。あれは巨大なゴーレムか……？」

森からヌツと半身を突きだした巨大なゴーレムの姿がありました。そしてその上空には――

「あつ！ 俺のパワードスーツ！」

アズスは駆け出していきました。

※ ※ ※

「まちやしえたでありんちゅ！ ありんちゅちやのガリダムでありんちゅ」

「……勝負です。ありんすちゃん。僕がアインズ様からお借りしたガルガンチュアの強さを見せつけて、あの、やります！」

「かちゆのはありんちゅちやしえんようガリダムでありんちゅ！」

うーん。どうやらありんすちゃんとマーレがそれぞれパワードスーツ、ガルガンチュアに乗り込んでいるみたいですね。

ガシイイン！ 二体は互いに手をつかんでまずは力比べです。

ギンギンギン……どうやら力比べではガルガンチュアが圧倒的みたいです。ありんすちゃんも素早く、パワードスーツを離脱させ、上空に逃れます。

「……ありんちゅちやしえんようガリダム、こうなつちやら、ひみちゅへいきロケットパ  
ンチでありんちゅ！」

うーん。ありんすちゃん、パワードスーツにはそんな機能はないと思いますが……それにそもそもありんすちゃん専用機ではないですよ。

「……ろけつちよお、はんちゅい！」

ありんすちゃんは叫びますが勿論腕は飛んでいきません。

「ちかちやないでありんちゅ！　ろおけつちよおお！」

ありんすちゃんは。パワードスーツの右手で左腕をつかみます。ミシミシミシ……

「ばああああんちゅい……！」

ベシイイイ！　とありんすちゃんはねじりつつた左腕を思いつきりガルガンチュアの頭部に叩きつけます。

「——や、やめえろおお！」

アズスは泣きながら駆け寄ります。

「……効かないでありんちゅな。もつかいろおおけつちよお！　ばああああんちゅ

い……！」

ありんすちゃんはコクピットから乗り出すとパスワードスーツの右手をむしりとって投げつけました。

「やめえろおおお！」

「ろけつちよおお！ きいいいつくううう！」

「やめてくれええええええ！」

「もいつぱちゅ！ ろけつちよおおお！ きいいいつくううう！」

「や、やめてくれええええええ！」

ありんすちゃんは次々にパスワードスーツの手足を投げましたがガルガンチュアはびくともしません。

「さしゆがはガルガンチャでありんちゅ。こうなったら奥の手ちゅかうでありんちゅ！」

ありんすちゃんはパスワードスーツの頭部をつかみました。

「それだけはやめろううう！ 頼む！ やめてくれええええええええええ！」

アズスの叫びはありんすちゃんには届きませんでした。

「ろけつちよおおお！ あたまあああ！」

パスワードスーツの頭部は無惨にもむしりとられ、投げつけられてしまいました。

「……右手のドリルがなくなったから負けちゃでありんちゅ」

ありんすちゃんはパウードスーツの残骸を乗り捨てると言いました。

「……あの、ありんすちゃん。『ロケットあたま』じゃなくて『ロケットヘッド』じゃないかな？」

ありんすちゃんはマーレと一緒にガルガンチャの肩に乗ってナザリックに帰ってきてきました。

残されたアズスはパウードスーツの残骸に涙するのです。仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ五歳児位の女の子なのですから。

## 142ありんすちゃんはりきる

ナザリック地下大墳墓 第九階層執務室——重厚な机の前には階層守護者が勢揃いしていました。もちろんありんすちゃんもいます。

「ナザリック地下大墳墓の主たる至高のお方々のまとめ役、偉大なる魔導王陛下であらせらるアインズ様にアルベド以下各階層守護者の忠誠を——」

「——よい。かたぐるしい挨拶はよせ。アルベドよ」

アインズは片手を振ってアルベドを静止しました。スカートの裾を摘まんで会釈をしようとしていたありんすちゃんは、ちよつと止まってから優雅にお辞儀をします。

「こぬたびはありんちゅちやもガンバリングでありんちゅまちゅ」

「——ガンバリング、か。ワハハハハ」

ありんすちゃんの可愛らしさにアインズもつい破顔します。

「——うん。うむ。さて、階層守護者達よ。今回集まつてもらったのは他でもない。かねがね進行していた王国の件で重大な局面となったからだ。……アルベドよ。皆に説明を」

アルベドは軽く咳払いをすると話始めました。その内容は魔導国の傘下に入った

ローブル聖王国に対し食糧などの支援物資を積んだ馬車の車列が魔導国を発った事、その途中のロ・エステーゼ王国の辺境地でその車列が襲われ、支援物資が全て何ものかに奪われてしまった事、そしてその名分をもって魔導国は王国を攻め滅ぼすつもりである事、でした。

「ゆるちゃんないでありんちゅー！ あ、り、ん、ちゅー！」

ありんすちゃんは鼻を膨らませて叫びました。

「そうだ。王国にはそのつけを払わせてやるつもりだ。アウラ、マーレ、コキュートスはそれぞれ軍勢を率いて王都リ・エステーゼを滅ぼせ。一人たりとも生かすな……ん？」

アインズはふと、ありんすちゃんの期待のこもった眼差しに気付きました。

「……うむ。ありんすちゃんも、だ。シモベを率いて滅ぼすのだ。ただし、無理はするな」

ありんすちゃんはコクンコクンと頷きます。

「よし。では明日開戦だ。現場の総指揮はデミウルゴスに任せる。ナザリックからの兵站などはセバスに一任する。各自細かく調整して事に当たれ。ナザリックの名を天下に示すのだ」

※ ※ ※

ありんすちゃんは興奮しながら第二階層に戻ってきました。鼻の穴がずいぶんと広がっていますよ。

「明日はいよいよ王国攻めましゆでありんちゅ！」

ありんすちゃんは深紅のフルアーマーを身にまとい、高々とスポイトランスをかがげます。

「ありんちゅちやが一番、やりしるでありんちゅ！」

ありんすちゃんの周りのシモベ達が拍手をしました。

「そいでもって、二番、やりもありんちゅちや！」

シモベ達が一層激しく拍手します。

「そいでそいで、三番、四番もありんちゅちや！」

ありんすちゃんはフンスと鼻から息を吐き出すと胸を反らします。

次にありんすちゃんは明日の準備を始めました。お出かけ用のウサギのリユックに次々と着替えとお菓子を詰め込みます。うーん……ありんすちゃんは遠足と勘違いしているそうですね？

まあ、ありんすちゃんは階層守護者とはいってもまだ五歳児位の女の子に過ぎません

から、戦争について理解していないのかもかもしれませんね。

ありんすちゃんベッドの枕もとにウサギのリュックを置くと目をつぶります。明日寝坊しないように早めに眠るのですね。感心です。

※ ※ ※

夜も更けた頃——ありんすちゃんはベッドでパチリと目を開きました。うーん……もしかしたら興奮してなかなか寝つけないのでしょうか？

ありんすちゃんはベッドから降りると深紅のフルアーマーを身につけます。手には大きなスポイトランスを握りしめています。

「ありんちゅちやが一番やり、しるでありんちゅ！」

ありんすちゃんはブンブンとスポイトランスを振り回しました。

「しよいで、二番、やりもしるでありんちゅ！」

ありんすちゃんは気合いを込めてスポイトランスを降り続けるのでした。

※ ※ ※



そして朝になり、いよいよ王国を攻める刻限になりました。

「……うん？　なんだと？　ありんすちやんが到着していない、だと？」

アインズはデミウルゴスからのメッセージを受けて大きな声をあげました。

「……まあ、よい。とりあえず王国殲滅はありんすちやん抜きで構わん。いや、むしろいたいけな幼女には参加させるべきでなかったかもしれぬな。では、デミウルゴス。頼んだぞ」

※ ※ ※

で、結局ありんすちやんは……

アインズの命で様子を見にきたルプスレギナは深紅のフルアーマー着てスポイトラ  
ンスを手にしてグースカ眠るありんすちやんを見つけたのでした。仕方ありませんよ  
ね。だって、ありんすちやんはまだ五歳児位の女の子に過ぎないのですから。

## 143 ありんすちゃんねぼうする

ナザリック地下大墳墓 第二階層——ありんすちゃんはパチリと目を開きました。どうやら昨夜、スポイトランスを振っているうちに寝てしまったみたいです。起き上がると、目の前にルプスレギナが意地悪そうな笑みを浮かべていました。

「おんやあ、ありんすちゃん、随分とゆっくりしているつすね。アインズ様はカンカンじゃないつすかね？」

「アインジユちゃまー！」

ありんすちゃんは真つ青になりました。大変です。今日は朝からナザリックの軍勢がリ・エステイーズ王国の首都を攻略する作戦が行われているのです。

ありんすちゃんもアウラ、コキュートスと同じようにシモベを引き連れて王国の人間を殲滅する任務を与えられていたのでした。

「ありんちゅちゃは、じえんじえん、じえーんじえーん、遅刻なんかちないでありんちゅ！ ちよつと、おしよくなつちやだけで、ありんしゅ」

口を尖らせて異議を唱えるありんすちゃんですが……うーん……

——まじゅいでありんちゅ……いしよいでお城しえめるでありんちゅ！

ありんすちゃんは大喜ぎで「グレーターテレポーション」を唱えました。

※ ※ ※

「まにあつちや、でありんちゆ」

ありんすちゃんは幾つもの塔がある大きな建物を見てホツとします。

マールやコキュートスにかかれれば王城もあつという間に瓦礫の山に変わってしまうでしょう。

「ありんちゆちやがチャツチャツと片付けしるでありんちゆ」

「ありんすちゃんは王城に向かつて……うん？　ちよつと待ってください。ありんすちゃんが向かつているのはリ・エステイーゼ王国のロ・レンテ城ではありませんよ。うーん……この建物はたしか………そうです。ありんすちゃんは間違つてスレイン法国に来てしまったみたいですよ。」

「二番やり、間に合つたでありんちゆ！　へヴァーミリオン・ノヴァ」でありんちゆ！」

ありんすちゃんは塔を次々に破壊していききました。

※ ※ ※

「た、大変です！ 何ものかが結界を破壊して攻撃してきます！」

一人の神官が慌てて駆け込むと同時に激しく建物が揺れました。

「何事じゃ！ まさかエルフ共が攻めてきたというのじゃあるまいな？」

最高神官長は厳めしい顔をさらに厳しくして咎めます。

「……それが……小さな赤い鎧の子供の姿のバケモノが……突然攻撃してきまして……」

「……バケモノ？ そんなに強い相手なら私が出ようか？」

銀と黒の髪の毛のまだあどけない表情の少女が立ちあがりかけました。——番外席次へ絶死絶命——法国最強の神人は肩に得物のバルデツシュを担いで散歩にいくように出て行くこうとしました。

「……さて。お前が出るのは不味い。評議国の目もあるだろうからな」

番外席次を制止すると最高神官長は目を閉じて 何やら考え込みました。

「神官長。では、我らが……」

その場にいた何名かの漆黒聖典隊員が名乗りをあげます。彼らは法国が誇る各自が一騎当千の実力者です。

「——いや、私が出よう。法国の至宝、ヘケイ・セケ・コウク」を使う」

最高神官長は力強く頷きました。

「真なる姿を得た〈ケイ・セケ・コウク〉ならば必ずやかの者を意のままにしてくれよう！」

※ ※ ※

ありんすちゃんはいくつもの塔や建物を壊しながら中央の一際大きな建物にやってきました。

「今度は〈メテオ〉にしるでありんちゆ。流れ星、おほしちやまでありんちゆな」

「——待て！ 喰らえ！」

ありんすちゃんは突然現れた男にビックリしました。初老の男が半裸、いわゆるブルメラン水着のような物を着ているだけの裸の格好で偉そうに腕を組んで立っていたのですから。

「……おかしい？ 何故だ？ 〈ケイ・セケ・コウク〉よ。力を示せ！ 何故だ？ 何故光らぬ？」

初老の男——最高神官長は狼狽えますが、当たり前ですよね。最高神官長が穿いている、もしくは着ているのは実はワールドアイテムではなくてマールのパンツなのでした

から。

ありんすちゃんは器用にスパイトランスの先を使ってマーレのパンツを脱がしてしまいました。

「……………なんという屈辱……………か……………」

股間を両手で隠した最高神官長にありんすちゃんが迫ります。

「——ふ。人類最強〈絶死絶命〉、この私が相手だ！ 子供相手だろうと手加減はしない！」

ありんすちゃんはバルデツシユを振るう番外席次に向き合います。

「……………ありんちゅちやがやっちゅけゅんでありんちゅ！」

横風ぎされるバルデツシユの刃をありんすちゃんはスパイトランスで突き上げました。番外席次の体が流れるとそこに——

「——ありんちゅちやパーンチ！」

スパイトランスから片手を離れたありんすちゃんが握りこぶしで殴りつけます。

「——ありんちゅちやキーツク！」

番外席次の顔面にありんすちゃんの蹴りが炸裂しました。

蹴られた勢いで飛ばされた番外席次はヨロヨロと立ちあがりました。

「……………強い。強いな……………仕方ない。最後の手段だっ！」

番外席次は懐から何かを取り出しました。

※ ※ ※

「…………あれ？ ありんすちゃん、結局来なかつたんすか？ おかしいつすね？ ちゃん  
とへグレーターテレポーションで移動したはずなんつすけど…………」

リ・エステイゼ王国首都、リ・エステイゼを焼け野原にして完膚なきまで叩き滅  
ぼした魔導国陣営でルプスレギナが首を傾げました。

「…………うーむ？」

アインズもまた、首を傾げるのでした。

※ ※ ※

「……………ありんすちゃんが戻った、だと。うむ…………では執務室で会おう。アルベドも  
同席させろ」

慌てた様子のシモベからの報告を受けたアインズは一人眩きました。

「……………さて……………どうしたものか…………」

## 144ありんすちやんリベンジする

へん？ どうした？

へインズ様。先程ありんすちやんが戻ったと姉から報告を受けました

アインズはアルベドからの〈メッセージ〉を受けて思案を巡らせました。

へわかった。私もすぐに氷結牢獄へ向かう。アルベドよ。そこで落ち合おう。詳しい話はそこで聞こう

へかしこまりました

※ ※ ※

「さて、報告を聞こう」

ナザリツク地下大墳墓 第五階層の中にある〈氷結牢獄〉でいつものイベント——狂乱するニグレドに赤子を模した人形を渡す——を終えたアインズはさっそく尋ねました。

「……はい。……それが……そのう……」



何故かニグレドの口が重い様子なのにアインズは不安を覚えました。

「……アインズ様。ありんすちゃんはどうかやら負けたようです」

「……………なん……………だ……………と?」

姉のかわりに答えたアルベドの言葉にアインズは絶句しました。無理ありません。ありんすちゃんは幼児の姿ではありますが、ナザリックの階層守護者の中でも最強の一角を誇る実力者です。しかも念のためにワールドアイテムを渡しておいた筈です。

「……相手が何ものだったのかは不明です。突然地上のログハウスの近くに転移してきたと思ったら、泣きながら〈屍蠟玄室〉にとじ込めてしまったそうです」

ニグレドが簡潔に報告します。

「ありんすちゃんは泣きながら『負けちゃうくやちいでありんちゅ』とか『アイテムルビキユのしえいで負けたでありんちゅ』とか叫んでいました」

「……負けた、だと? ルビキユ? ワールドアイテムなのだろうか?」

愕然とするアインズにアルベドがとりなします。

「恐れながらアインズにおかれましては直ぐにもありんすちゃんを召喚し、事情を聞くべきかと思われませす」

「うむ。そうだな。まずはありんすちゃんから詳しい話を聞かねばなるまい。……ニグレドよ。ありんすちゃんは今、どうしている?」

「あれからずっと〈屍蠟玄室〉にとじ込もっているようです。魔法障害障壁があるよう  
で、中の様子は確認出来ませんが……」

アインズはしばらく考え込むと静かに言いました。

「……仕方ない。今日はそつとしておいてやろう。ありんすちゃんは幼児に過ぎないの  
だからな」

「……………かしこまりました」

アインズはニグレドに引き継ぎ監視を続けさせる事にすると、エイトエツジアサシン  
を呼び出し屍蠟玄室に向かわせました。

※ ※ ※

屍蠟玄室のベッドにもぐり込んだありんすちゃんは泣いていました。

『……………くっ……………こうなればこれで勝負だ！』

『ルビキユー！』

ありんすちゃんはハーフェルフの少女が取り出したアイテムを見て思わず叫びまし  
た。そのままでも勝負はありんすちゃんの勝ちで決まったはずでした。そう、ありんす  
ちゃんがルビキユー対決さえしななければ……

『しよの勝負うけちえあげるでありんちゅ！ どうしえありんちゅちやが勝ちますであ

りんちゅ』

ありんすちやんは鼻からフンスと息を吐きました。ありんすちやんには自信がありました。だって——『ありんすちやん様。流石です。私たちでは到底敵いません』——シモベのヴァンパイア・ブライドは誰一人ありんすちやんにルビクキューで勝てませんでした。ありんすちやんは得意気にルビクキューの好きな色をどれでもあつという間に揃えてみせます。ありんすちやんはナザリックでのルビクキューチャンピオンでした。

『相手は……漆黒聖典隊長 “漆黒聖典” だッ！』

ありんすちやんと “漆黒聖典” との対決は呆気なくつきました。ありんすちやんは1面しか揃えられないのですが、“漆黒聖典” は3面まで揃えてしまおうのでした。

『——うわわわーん！』

ありんすちやんは大声で泣きながら腕をグルグル回しながら走り出しました。ドヤ顔のハーフェルフ、戸惑い顔の “漆黒聖典”、次々にありんすちやんは殴りつけます。様々なモノを殴り倒しながらありんすちやんは駆け続けました。気がつくときありんすちやんは別の都市に来ていました。

うーん……仕方ありませんよね。だって、ありんすちやんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

※ ※ ※

「出来ちゃでありんちゅ！ こりでありんちゅちは負けなめでありんちゅ！」

〈屍蠟玄室〉にこもっていたありんすちゃんは高々とペンキまみれの立方体を掲げました。どうやらルビクキューのようです。

なるほど。この塗り替えたルビクキューと気がつかれないようにすり替えるつもりですね。ありんすちゃん、なかなかズル賢い——ゴホンゴホン。戦略的頭脳が優秀ですね。

「こりで負けないぜたい、ぜーたい、でありんちゅ！」

ありんすちゃんは鼻息も荒く、ナザリックを飛び出していきました。

※ ※ ※

——アインズ様。ありんすちゃんがナザリックを出しました。まだ、転移をしません、姉にオーレオールとのリンクをさせて転移先を追いかけます」

へうむ。転移先が判明したら座標を教えろ。私とアウラ、マーレとで現地向かう。なにしろ我が階層守護者に打ち勝つ存在だからな。ワールドアイテムの一つは持っている

るとみて間違いない」

アインズは脇に控えるアウラとマーレに目をやりました。

「わかりました。念のためわたくしも直ぐにアインズ様の元に駆けつけられるように致します」

「うん？ まあ、アウラとマーレがいるから大丈夫だろう。まあ、それでも万が一にアルベドに備えてもらうのも良いな。さて……」

「……アインズ様。ありんすちゃんが転移しました。転移先は——スレイン法国です！」

「……予想通りだな。よし、では行こう。へげーと」

アインズは「へげーと」を開くとアウラ、マーレと共に法国に向かうのでした。

※ ※ ※

スレイン法国に着いたアインズ達の前に現れた光景は——

ふんぞり返って得意そうなありんすちゃんと土下座をする法国の神官達——

「どうか我々の降伏を認めて頂きたい」

最高神官長が弱々しい声で言いました。

「ダメでありんちゅ！　ありんちゅちやはルビキユで勝ちゆますでありんちゅ！」

ありんすちやんはキヨロキヨロとあたりを見回しました。どうやら「漆黒聖典」を探しているみたいですね。

「……『漆黒聖典』も『絶死絶命』も貴女様に殴られて絶対安静の状態です。もう、法  
国には貴女様に歯向かう事は出来ません」

「!!」

ありんすちやんは口をポカンと開けました。

「……じゅるいでありんちゅ！　勝ち逃げするゆるちやないでありんちゅ！」

ありんすちやんは腕をグルグル回しながら駆け出しました。

「——ウグエー！」——フングツ！」

ありんすちやんに殴り飛ばされた最高神官長達が空高く飛んでいきます。

「——そこ、まで、だ……この最強の『絶死絶命』が相手になるッ！　……グハア……」  
崩れかけの建物からヨロヨロと銀髪と黒髪のハーフェルフが姿をあらわしました。

「……勝負するでありんちゅ！」

ありんすちやんのリベンジが始まりました。

※ ※ ※

「……アインズ様。どうします？」

ずっと様子を離れて見守っていたアウラが尋ねました。

「……………帰るか……………」

「はい。アインズ様」

「はい。……………では、〈ゲート〉……………」

※ ※ ※

「こりでありんちゅちゃの勝ちでありんちゅ！」

ありんすちゃんは得意気にルビクキューを掲げました。ベタベタと塗りたくったニセモノのルビクキューです。

「——いや、それはニセモ——グハア！」

番外席次は思わず叫ぼうとした神官を殴り黙らせませます。

「……………うわースゴイ。全部そろーてるー！　ワタシの負けダワー！」

何故か棒読みでありんすちゃん勝利を讃えると、ありんすちゃんはさらに胸を反らしてふんぞり返ります。

「……また、あの幼女を泣かせてみる？　法国は跡形もなくなるぞ。いいか、絶対に泣かせてはならない」

番外席次は小声で皆に言い聞かせます。うーん。

かくしてありんすちゃんの大活躍でスレイン法国はアインズ・ウール・ゴウン魔導国の傘下に入る事になったのでした。

もちろんありんすちゃんにはスレイン法国が降参した本当の理由は知るよしもありませんでした。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ、5歳児位の女の子に過ぎないのですから。



# 145ありんすちやんとドラゴンのほ

ナザリック地下大墳墓 第六階層へログハウス——ここはアウラとマーレが住んでいる建物です。

「……うーん。うーん？」

分厚い本を前にしたマーレが何やら難しい顔をしています。

「マーレ？ トイレなら我慢しない方が良いよ？」

「……ち、違うよ。お姉ちゃん。ちよつとこの本の話に納得出来ないんだよ……」

「——ちよおつと待った！ あたしは無理！ そういうの無理だから。そうだ。デミウルゴスなら詳しいんじゃないかな？」

アウラは慌てて言いました。マーレはニツコリすると

「わかったよ。お姉ちゃん。デミウルゴスさんに聞いてくるね」

マーレはデミウルゴスのいる第七階層に向かいました。

※ ※ ※

「これはこれはよろこそ。マールに……………ありんすちゃん」

マールが後ろを振り向くといつのまにかありんすちゃんがついて来ていました。

「……………えつと、あのですね……………」

マールはモジモジしながら尋ねました。

本に書かれていた話——ドラゴンの歯を地面にまくとやがてガイコツの剣士が生えてくる——を話すとマールは……………

「……………あの、僕はおかしいと思うんです。なんでドラゴンの歯から、あの、ガイコツなのかな？　つて」

マールは目を輝かせながら言った。

「やつぱり、ドラゴンの歯を埋めたらドラゴンが生えてくるんじゃないかって、あの……………思うんです」

「……………ドラゴン埋めたらドラゴン、はえてくるますでありんちゆか……………？」

ありんすちゃんは話についてゆけていないみたいです。

デミウルゴスは楽しそうに笑いました。

「うん。そうだね。マール……………その答えなら実際に試してみてもどうだろう？　幸いにもこの階層にドラゴンの死体が保管されているから、歯などを第六階層に埋めてみた

ら良い」

マールはパアツと顔を明るくします。

「デミウルゴスさん、ありがとうございます。あの、早速試してみます！」

マールは嬉しそうに駆けていきました。ありんすちやんも後を追いかけていきます。

「ドラゴン、ドラゴン、たくちやん、はえる、ドラゴン、たくさん！」

※ ※ ※

第六階層に戻ってきたマールは一区画の畑を用意すると耕し、ドラゴンの歯を埋めました。

「……こりでドラゴンいばーい生えるでありんちゆね。ありんちゆちやもやりたいでありんちゆ」

ありんすちやんがスコップで山を作ります。

「ありんすちやん、そんなに山にしたら、あの、なかなか芽が出せないですよ」

「……こり位でありんちゆ」

二人は仲良くドラゴンの歯や目玉、ウロコ等を埋めていきます。

「……ちようだ。マーレ。いいもの持ってくりゆでありんちゆ！」  
ありんすちゃんはなにやら思いついたようで、泥だらけのまま駆け出してしまいました。

※ ※ ※

「ふーん。で、第六階層にドラゴンの歯を埋めてみたんだ？」

アウラがマーレに尋ねます。マーレは『実験中』と書かれた札が立てられた区画に  
ジョウロで水を撒いています。

「……ドラゴンの歯以外にもいろいろ埋まっているみたいだけど？」

「え？ ……うん。ありんすちゃんがね……」

実験中の畑には小さな立て札がいくつもあって、それぞれには『もんぶらんのけき』  
『いちごだいふく』『ちよこれと』等と書かれています。

「……ありんすちゃんは埋めたらたくさん生えてくるって、あの……思ったみたいで  
……」

なるほど。ありんすちゃんはモンブランケーキ等を増やそうと考えて畑に埋めたの  
ですね。うーん……

「……………で、あれなんだけどさあ？」

アウラがジト目をしながら畑の一ヶ所を指差しました。

「……………あそこにあるんだけど？」

アウラが指差した場所には顔だけを地面から出したありんすちやんが鼻唄を歌っていました。

「ありんちゅちや、いぱーい、ありんちゅちや、たくしやん、ありんちゅちや、ふえる♪」  
仕方ありませんよね。だって、ありんすちやんはまだ5歳児位の女の子に過ぎないのですから。

## 146 ありんすちゃんとなぞのメモ

ナザリック地下大墳墓第二階層〈屍蠟玄室〉——ありんすちゃんが机に向かって書きものをしています。珍しいですね。

ありんすちゃんはお風呂呂に入るか眠るかお菓子を食べているかしかイメージがありませんが……ゲフンゲフン。

もしかしたらオーバーロード15巻がなかなか発売されないので自分で書き始めたのかも知れませんね。一枚の紙に何やら書き連ねると満足そうに頷きました。

「むふー。けつちやくが出来たでありんちゅ」

ありんすちゃんは机の引き出しを開けました。どうやら書きあがった傑作をしまうみたいですね。

おや？ 引き出しの中には何やら書きなぐったメモが入っていました。

「……こりはなんでありんちゅね？ ……えとえと……」

ありんすちゃんはメモを声を出して読み上げました。

「——もつちもち うれしよん たいへん あるだろ ドラゴン しよつく たおれる  
かわいい すべてしまつ かんしや どあーふ ほうもつこ——宝物庫！」

ありんすちゃんの顔に赤みがさしてきました。

「こりは宝もののありが、しめちた謎謎でありんちゅ！」

……いやいや、ありんすちゃん。たぶん忘れているみたいですがそのメモはドワーフ王国にアインズ様のお供をして行った時に一生懸命アインズ様の言葉を書き記したやつですよ？

「……お宝、ありんちゅちやがみちゆけるますでありんちゅ！」

※ ※ ※

ありんすちゃんがやってきたのはカルネ村でした。

「……え？ 儂にうれしよんしろ、じゃと？ ……いや、それは……いったいどういう意味なんじゃ？」

カルネ村の一面に工房を設けたドワーフ達の一人、ゴンドはいきなり詰め寄るありんすちゃんに困っていました。

「……お主の言うことが全くわからんのじゃが……儂がうれしよんすれば宝が見つかるとは一体どういう事なんじゃ？ そもそもうれしよんとは……まさか嬉しさのあまり

垂れ流すというやつではあるまいの？」

ありんすちゃんは胸を張り、フンスと鼻息を荒くします。

「チャツチャとうれしよんしるでありまちゆでありんちゆ。うれしよんしたらおちつこが宝ものありかみちゆけるんでありんちゆ」

ありんすちゃんはメモを両手で掲げ持ちました。すると――

「……フンフン。なんか面白そうな匂いがするつすね。なんすか？ このしわくちやなメモは？」

突然姿を表したルプスレギナがありんすちゃんからメモをひったくり、広げました。

「……なんすかこれ？ うれしよん……これって餡ころもつちもち様がうれしよんされたつてことつすか？ マジつすか!!……」

ありんすちゃんはルプスレギナを見ながら考えます。餡ころもつちもち様のうれしよんつて何だか記憶にありました。確か老犬がうれしよんをして困るつて話だったはずですが……

「……え？ なんすか？ イヤイヤイヤ、私はうれしよんなんてしないつすよ？ そもそもうれしよんなんて犬のような事は私ははしないつす」

ルプスレギナはふと何やら思いつき、ありんすちゃんに囁きました。

「……そんなにうれしよんにこだわるなら……餡ころもつちもち様が作られたNPCに



も犬がモチーフな人物がいるじゃないっすか」

※ ※ ※

「……ありんすちゃん様。館ころもっちもち様に対して不敬ですわ。……わん。……それと私は犬では御座いません……わん。……そもそもこんなメモに宝物のありかが示されているなど到底思えません……わん」

納得いかないありんすちゃんが唇を尖らせますが、ペストレーニャは上手でした。

「そんな事より……最近副料理長が新作のスウィーツを作りまして、紫芋を使った紫色のモンブランケーキですよ……わん。栗と芋を合わせたクリームが絶妙でしたわん」

ペストレーニャを急かして食堂に向かったありんすちゃんの頭から先程のメモの事はなくなってしまうました。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## 147 ありんすちやんのりょうりたけつ

「あたしの記憶が確かならばここ、ナザリツク地下大墳墓の第六階層の円型闘技場コロッセウムではいくつもの名勝負が繰り広げられてきたッ！ 今宵はアインズ様をお招きしての天覧試合を行います！ アインズ様に盛大な拍手！」

アウラの挨拶を受けてアインズは立ちあがり観衆のシモベ達に手を振ります。

「さてさて、まずは挑戦者の登場だッ！ アインズ様の片腕を自任する守護者統括、アルベドの登場だッ！ ちなみにアインズ様の右腕はあたし、譲らないからね」

アルベドは一瞬だけ眉をひそめました、すぐに笑みを浮かべます。

「そして対戦相手は——蘇るがいい！ スーパーシエフ！」

アウラが呼びかけると煙りと共に可愛らしい料理人が現れました。

「ありんちゅちゃは負けないでありんちゅ！」

「そして今回の料理対決の食材はこれだッ！ 最高級エンシヤントドラゴンの霜降り肉だッ！」

舞台の中央にせりあがってくる肉の塊を眺めながらアインズは呟きました。

「……馬鹿な……料理対決……だと？ 二人とも料理のスキルは無いはずだが……」

ありんすちやんは鼻からフンスと熱い息を吐きました。

「それじゃあ<sup>料</sup>Satus <sup>理</sup>cocctione<sup>開</sup>始！」

アウラが高々と宣言しました。

※ ※ ※

「ええつと、あの、挑戦者サイドです。アルベドさんが動き出しました。着ていたガウンを脱いで……あれ？ 裸…………」

料理対決の様子をダークエルフの双子が実況中継するみたいです。

「これは……アルベド様はどうやら本気の様子ですね。なんとガウンの下は裸エプロンです」

副料理長のピツキーが解説します。

「こちらは超人サイドです。大変な事がおきました！ ありんすちやんが包丁を持ちました。なんとボロボロになっちゃいました！ アシスタントのソリュシャンが体内から新しい包丁を取り出して渡しますが次々にボロボロになっちゃいますッ！」

「——そうか！ カーストスキルかッ！」

アウラの中継にアインズが眩きました。なんとという事でしょう！ ありんすちやん

はカーストスキルの影響で手に触れるものを破壊してしまおうでした。

今まで『ふしぎのくにのありんすちゃん』ではあまり触れてこなかったので忘れていましたが……ありんすちゃん、早速ピンチです。

「……えっと、アルベドさんです。大きな肉の塊を手にしました。あれはブルーアイズホワイトドラゴンの肉です」

「……なんと！ ドラゴンの中でも最高難度のドラゴンですね。私も料理長もまだ調理した事がありません！ ……しかし……用意された食材の中になかったはず……」

マーレのレポートに副料理長が続けます。

「……このままではアルベドは失格か……」

アインズが小さく呟くとアルベドの動きが止まりました。

「アインズ様！ これはその……練習。そうです。練習です！ アインズ様にわたくしの最高の料理を召し上がって頂きたいのです！」

「……うん？ ……ああ。」

（いやいやいや。俺、食事出来ないんだけど……それになんかこの流れ……もしかしたら俺が食べるの？）

アインズは複雑な思いで料理対決を見守るのでした。

「おお！ ……ありんすちゃんは包丁をあきらめたぞ？ どうするのか？ ……なんと！ ……爪

ですッ！ 爪で食材を切り分けているッ！ 凄いッ！」

ありんすちゃん手際よく肉の塊を切り分けていきます。その肉をソリュションが鉄板に載せて焼いていきます。

「なるほど。素材の味わいを活かしたステーキにするんですね。上に乗せられたのは臭み消しの香草のようです」

ピッキーがすかさず解説します。

「……えつと、アルベドさんの方です。現在、鍋でスープを作っています。中身はお砂糖、スパイス、素敵なものいっぱい、だそうです」

マーレが挑戦者サイドの報告をします。

「……うーん。どうでしょう？ どんな味になるか想像が出来ません……」

ピッキーに続いて出たアインズの小さな呟きは誰にも聞こえない小さなものでした。

※ ※ ※

「いよいよ終盤です！ 挑戦者サイドでは鍋をかき回すアシスタントのナーベラル、ドラゴン肉に焼き目をつけているアルベド。今、ナーベラルの鍋にドラゴンが入りました

！」

「……鍋ラルか……ふっ」

「超人サイドです。ありんすちゃん焼いているステーキにワインをかけました。凄い炎です。……おや？」

「……ありんすちゃん様、ワインを飲んだんですね……足もとがふらついています……」  
料理終盤でありんすちゃんはワインで酔っぱらってしまっているようです。うーん。大丈夫でしょうか？

やがて終了時間となりました。はたしてこの料理対決の勝者は料理の超人ありんすちゃんか？ それとも挑戦者のアルベドでしょうか？

※ ※ ※

いよいよ実食です。アインズとピツキーの前に料理が運ばれてきました。まずは挑戦者アルベドの料理です。

「……うん？ ……こ、これは！」

ピツキーが目を見開きます。

「……この香ばしき、苦々しく荒っぽい濁流のように舌を焦がす独特な味わい

……………墨ですな」

次は料理の超人ありんすちゃんの料理の番です。

「……………ただの墨ですね」

仕方ありませんよね。だってありんすちゃん達には料理スキルがないのですから。

## 148 ありんすちゃんのおしよがつ

明けましておめでとうございます。ナザリック地下大墳墓ではアインズからの通達でお正月気分を皆楽しんでいるようです。

ありんすちゃんは長い銀髪をお団子に結びあげて、可愛らしい着物を着て澄ましています。

こうしてじつとしているだけなら掛け値なし、文句なしに絶世の美少女なのですが――ゲフンゲフン。

ありんすちゃんは第二階層を出ると第六階層に向かいます。成程。なかよしのアラ・マーレの双子の姉弟に会いに行くのですね。

※ ※ ※

「来たね〜！ あけおめ！」

「……あ、あけましておめでとうございます」

ありんすちゃんを第六階層でアウラとマーレが出迎えます。二人はそれぞれ羽織袴と振袖を着ています。ちなみに姉のアウラが羽織袴で弟のマーレが振袖です。



「あけましておめとーでありんちゅー！」

ありんすちゃんも双子に返します。

「それでどうする？ お正月の遊びは何をしようか？」

アウラが首を傾げます。ナザリック地下大墳墓でのアインズの新年の挨拶で『皆、正月を楽しむように』とあつて、各自いろいろと試行錯誤しているのでした。

「……あの……ボクはカルタがいいと——」

「羽根ちゅき、しるでありんちゅー！」

マーレの言葉をさえぎつてありんすちゃんが宣言しました。見るとありんすちゃんは手際よく羽子板二枚と羽根を用意していました。三人は羽根つきをする事にしました。

カチーン……カチーン……

羽子板で羽根を打ち合う音が響きます。ありんすちゃんとアウラの対決はどうやらアウラが優勢のようです。

「……………ありんちゅちやの羽子板小さすぎるんでありんちゅー！」

ありんすちゃんは自分の羽子板をポイツと捨てるとグレーターテレポーテーションで替わりのモノを取り寄せました。

「——わっ！ なんだ一体！ なんだなんだ？」

ありんすちゃんは羽子板替わりの女聖騎士を片手で振り回します。女聖騎士は白いサーコートをひるがえしながらアウラの打つ羽根を体で返します。

「あつ！ズルい！ならあたしも！」

アウラはシモベのドラゴンキンをつかんで羽子板がわりにします。そのうち羽根つきは互いの羽子板？ による叩きあいになってしまいました。

「……飽きちゃったね、羽根つき」

「ちようでありんちゆな……」

ありんすちゃんとアウラはそれぞれが羽子板替わりにしていた女聖騎士とシモベを捨てます。

「……さて、と……次はなににして遊ぼうか？」

アウラが意見を求めます。

「……………あの……………ボクはカル——」

「次は福笑いするでありんちゆ！」

またしてもありんすちゃんの意見で次の遊びが福笑いになりました。

※ ※ ※

「では福笑いしるでありんちゅ」

ありんすちゃん達の前にはかつてナザリックで捕らえられてバラバラにされた少女、アルシエが――

※大人の事情により福笑いの内容は全て削除されました。ご了承ください。

※ ※ ※

「うーん。意外に難しかったね」

「……まさか他の人間のパーツが混ざっているなんて……あの……思わなかったです」

「ありはカルカ棒の欠片でありんちゅ。ちゆぎは初日の出見に行くますでありんちゅ  
！」

ありんすちゃんは二人と手を繋ぐとグレーターテレポーションで何処かに転移してしまいました。

※ ※ ※

バハルス帝国皇帝ジルクニフは寢室で鏡の前に立ちました。そして静かに頭に手をかけると……

なんとという事でしょう！ ジルクニフの髪はカツラでした。カツラの下にある本物の髪の毛はもはや残りわずかなものでした。

ジルクニフは慈しむように微かな自毛を撫で付けながらため息をつきました。

かの魔導王に対してのストレスの蓄積は彼から髪の毛を無情にも奪いさつていったのです。

と、突然空間が揺らぎ――

「――初日の出でありんちゅー！」

ギョツとして立ち竦むジルクニフの前に三人の子供が現れて――

ありんすちやんはジルクニフの残りわずかな髪の毛をつかむとむしりとりました。

「こりて初日の出でありんちゅー」

ありんすちやんは楽しそうに笑いました。仕方ありませんよね。だって、ありんすちやんはまだ5歳児位の女の子にすぎないのですから。

## 〈最終話〉アリンス・ウール・ゴウンよえいえんに

——ナザリック地下大墳墓第十階層玉座の間——

ナザリック地下大墳墓の栄光が具現化したかのような広大な大広間には埋め尽くさんばかりに、主だったシモベ達が集められていました。彼らの静かな熱気は徐々に高まっていき、やがて現れたアインズとアインズすちやんを迎える際にはシモベ達のボルテージは頂点に達しようとしていました。

二つ並べられた玉座のそれぞれに荘厳な衣装を纏い、ギルドの象徴でもあるスタツフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを手にしたアインズと、同じく荘厳な正装を身に纏ったアインズすちやんが座ります。アインズは軽く右手を振り合図をすると、途端にシモベ達が静まりかえりました。

静寂の中、静かにアインズが立ちあがりました。玉座の横に並んだ各階層守護者はみな、真剣な眼差しを向けながら、アインズの言葉を待ちます。

「お集まりの我が同胞諸君、ナザリック地下大墳墓を拠点とする我らアインズ・ウール・ゴウンの名声は今や全世界の知る所となった。これもひとえに諸君らの絶え間なき努力の賜物である。まずはアインズ・ウール・ゴウン魔導国の代表として礼を述べたい」

シモベ達の拍手が津波の様に大広間を揺るがします。アインズはゆつくりとシモベ達を見渡すと満足そうに頷き、静かに右手を挙げました。途端にシモベ達は静かになります。アインズはさらに言葉を続けました。

「さて、この輝かしい日に、私は一つの決断をした。私は後継者にこれからの魔導国を任せる事にした。ありんすちゃん、改め『アリンズ・ウール・ゴウン』、前に」

アインズの紹介を受けてありんすちゃんが立ちあがりました。そして、ドレスの裾をつまみ優雅に挨拶をしました。

「ここに居る者達は誰もが彼女を知っている事だろう。そして彼女がこの世界を我々の支配下にするにあたり、多大な貢献があつた事も皆が知る所であろう。スレイン法国最高執行機関が無条件降伏を申し出てきたのはひとえに彼女の力によるものである。これ等の功績の大きさは、単に階層守護者に留まるべきでは無いであろう」

アインズはゆつくりとスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンをありんすちゃんに渡しました。

「これよりありんすちゃん改め『アリンズ・ウール・ゴウン』に魔導王を譲位し、私はかつての名前、モモンガに戻り、彼女の後見をするものとする」

大広間にシモベ達の熱狂的な歓声が響き渡りました。守護者統轄のアルベドが目を見潤ませながらアインズ、いや、モモンガに抱きつきました。シモベ達の歓声はいつしか

『アリンズー！ アーリンズー！』とアリンすちゃんを讃えるものに変わっていきま  
す。アリンすちゃんは左手のスタツフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを高く掲げま  
した。

「——アリンチュ・ウール・ゴウンに栄光あれんちゅ！」

……ちよつとだけ囁んでしまいました。

各階層守護者達もアリンすちゃんを祝福してくれます。

「……よく似合っているわ。モモンガ様の事は私に任せなさい。私もまた、いとらしい  
方をいとらしい名前と呼べて嬉しいわ」

「おめでとう。かつてのシャルティア復活から今日に至るまでが、全てアインズ様の計  
画だったとはね……さすがは至高の方々のまとめ役、私など及ぶくもありませんね。  
……さて、アリンズ、これからも共に協力していきたいものだね。よろしく頼む」

「……コノ小サナ体デ責任アル立場ニタツトハ凄イ事ダ……コノヨウナ日ニ立チ会エル  
トハ実ニ素晴シイ……」

「アリンすちゃん、おめでとう。あたしはそういうの、柄じゃないからねー。うん、うん。  
良かった、良かった。ペロロンチーノ様に見せてあげたかったね」

「あ、あの……おめでとうございます。ボ、僕もアリンすちゃんが適任だと思います」  
シモベ達のアーリンズコールはいつまでも続くのでした。

※ ※ ※

「それにしても……流石はアインズ様、いえ、モモンガ様。シャルティア復活の際に幼児化したのも全てこの時の為だったとは……このデミウルゴス、まさに脱帽という他ごさいません」

「確かに幼児の姿だからこそ、スレイン法国も竜王国も、更には評議国までが簡単に傘下に入ったと言えるわね。流石はモモンガ様」

ナザリック地下大墳墓を代表する智者、デミウルゴスとアルベドがモモンガの知謀を絶賛します。

「……しかし、ありんすちゃんのアラにはどうして『め』と書かれているのかしら？」  
ありんすちゃん改めアリンズ・ウール・ゴウンの額を飾るプラチナのティアラには確かに金の文字で『め』とありました。

「あれは、二次小説界最強のオリジナル主人公の証しなのさ。これもモモンガ様の深慮遠謀かと……」

アルベドは小さな声で呟いてみました。『め・ありんす』『めありんす』『めありー



すー』

「あつー！ メアリースー！」

そうです。かつてスタートレックの二次小説で登場した伝説のオリジナル主人公 キャラクター……その為にはシャルティアが『ありんすちゃん』にならなくては到達出来なかつたのでした。

まだやむ気配の無い『アリースー』コールはいつしか『メアリースー』コールに変わっていききました。ありんすちゃんは頬を上気させていつまでもいつまでも手を振って応えるのでした。

※ ※ ※

「——さま！ ありんすちゃん様！」

ありんすちゃんはヴァンパイア・プライドに揺さぶられて目が覚めました。あたりを見回すといつもの屍蠟玄室の自分のベッドです。

ありんすちゃんは何だか凄く素敵な夢を見ていた様でしたが、目が覚めた途端に全て

忘れてしまい、何も覚えていませんでした。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## A l i n c e / s t a y n i g h t

ナザリック地下大墳墓 第二階層〈死蝟玄室〉——珍しくマールレがキョロキョロしながら入って来ました。

「マールレ様。ありんすちゃん様は留守にされていらつしやいます」

シモベのヴァンパイア・ブライドが答えます。

「え？　そ、そうなの？　あの……ほ、僕、ありんすちゃんに呼ばれたんだけど……」  
うーん。たぶんありんすちゃん、忘れていきますよね？

「……では、中でお待ちになりますか？」

ヴァンパイア・ブライドに招き入れられてマールレは室内で待つ事にしました。

「……おや？　本……かな？　えつと……ファテ　スタイ　ニフト……？」

背表紙には F a t e / s t a y n i g h t と書かれてありました。マールレはラテ  
ン語の読み方をしたみたいですね。

「魔法書、みたいだね。えつと……告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来

たれ、天秤の守り手よ——！」

突然、天井を壊して赤いフルアーマーを着たありんすちやんが落ちて来ました。

「——えええええ——！」

驚くマールにありんすちやんが訊ねました。

「ちよおう。マールがありんちゅちやのマシユターでありんちゅか？」

マールにはありんすちやんが何を言っているかわかりませんでした。マールがポカソとしているとありんすちやんが怒り出しました。

「マールはちゅかえないでありんちゅ。ダメダメでありんちゅ」

ありんすちやんはスポイトランスをブンブン振りながら宣言しました。

「これからナジャリックSEISSAI争奪戦の始まりでありんちゅ」

※ ※ ※

ナザリックSEISSAI争奪戦とは——ナザリックNPC全ての願望であるSEISSAI。それを叶えるという万能の器を巡り七体のサーヴァントが戦いを繰り広げるといふもの——

で、ありんすちゃんはスポイトランスを持つているのでランサーのサーヴァントなんですって。今までありんすちゃんは他のメンバーとクラスの割り振りをしていたそうです。

ちなみに他のサーヴァントはライダーにアウラ、セイバーにコキュートス、キャスターにナーベラル、アサシンにソリュシャン、アーチャーにシズ、最後のバーサーカーにアルベドですって。

ありんすちゃんの説明を聞いてマーレがモジモジしました。

「……あ、あの……ぼ、僕も参加したいな」

ありんすちゃんはナーベラルの代わりにマーレをキャスターとして参加させる事にしました。

そしてありんすちゃんはマーレと一緒にコキュートスを討つ事にしました。

※ ※ ※

ありんすちゃんとマーレは第五階層にやって来ました。

「コキュートシュ！ 観念しるでありんちゅ」

ありんすちゃんが生ポイントランスを構えて走り出します。と、途端に雪の中に作られた落とし穴に落ちて動けなくなりします。

「フフフフ。アリンズチャンヨ。ソナ事デハ私ヲ倒ス事ハ出来ナイナ」

ありんすちゃんをコキユートスが見下ろしました。

ありんすちゃんは全く身動き出来ません。危うし！

「……こ、コキユートスさん、しよ、勝負です！」

マールが杖を構えます。

「……フム。マールカ。相手ニトツテ不足ハナイ。イクゾ！」

マールがいきなり超位魔法を放ちます。コキユートスは四本の腕に得物を装備して迎え撃ちます。激しい戦いの末——マール、コキユートス、相討ちとなり脱落——残り  
は五名になりました。

※ ※ ※

ナザリック地下大墳墓 第六階層——

「卑怯だ。二対一では？」

「あたしはライダーだからねー。別にシモベに乗らなければならぬって決まりはないよっ。」

「そうっすよ。シズちゃんには悪いっすけど、勝たせてもらおうっす」

巨大な狼に騎乗したアウラがシズを追い詰めます。

「やーらーれーたー!」

シズが脱落して残りは四名になりました。

※ ※ ※

ナザリック地下大墳墓 第十階層――

優勝候補のアルベドは余裕綽々です。そこに先程シズを下したアウラが狼――ルプスレギナに跨がって襲いかかりました。

アルベドはすぐさま宝具――ギンヌンガガプを発動させ、アウラ達の動きを止めます。さらに返す刀で忍び寄ってきていたソリュシャンも返り討ちにしました。

「SEISAI――アインズ様の正妻の座はわたくしのもの――」

アウラとソリュシャンが脱落して残りは二名になりました。

※ ※ ※

「ふふふふ……このSEISA戦争は俺が勝たせて貰うぞ。悪いな、アルベド！」

突然現れた金色のアーチャーによってアルベドが倒されました。なんと前回のSEISA争奪戦に参加していたペロロンチーノでした。

ペロロンチーノは宝具——ゲート・オブ・エロゲーを展開します。これはあらゆるメーカー、ブランドのエロゲーが収蔵されている恐るべき宝具です。

「さあ、もう準備が出来た。聖杯よ！ その姿を現せ！」

ペロロンチーノの呼び掛けに答えるように、ナザリック地下大墳墓 第十階層の玉座の間に巨大な聖杯が出現しました。その聖杯の中には黒いドロドロしたものが溢れだそうとじていました。

※ ※ ※

ナザリック地下大墳墓 第五階層——

その頃、ようやくありんすちゃんも落とし穴からはい上がる事が出来ました。



「コキュトシユ、勝負でありんちゅ！ ……………コキュトシユ？」

なんと既にコキュトスとマーレは脱落した後でした。

そう、残っているサーヴァントはありんすちやんとペロロンチーノの二人だけになっていたのです。

ありんすちやんは玉座の間でペロロンチーノに相対します。

「ペロロンチーノちやま……」

「…………お、シャルティアか？ うーん……俺、ロリコンだけど幼女趣味は無いんだわ。パス」

そんなペロロンチーノに天罰が下ります。

「くおら！ 弟！ エロゲーを積むほど買ってくるなって言っただろー」

ペロロンチーノは突然現れたピンク色のなにかに拐われてしまいました。

「ありんちゅちやが正妻でありんちゅ！」

ありんすちやんは聖杯に手を伸ばしました。すると聖杯がひっくり返り、中身の黒いものが溢れました。

「…………あれ？ 寝てたのかな？ 仕事で疲れていたからかな」

黒いものは背伸びをしました。なんと聖杯の中身はへろへろでした。

「ありんちゅちやが優勝でありんちゅ」

ありんすちゃんは今空っぽになった聖杯を持って嬉しそうです。うーん……たぶん優勝カップだと思つていますよ？ きつと。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

※ありんすちゃんの絵に文字を加えました

——巨乳はパッドで出来ている。

血潮は好物で、頭は空っぽ。

幾たびの任務を重ねて失敗。

ただの一度も成功はなく、

ただのシモベにも尊敬されない。

彼の者は目が据わり、バーのカウンターで泪酒に酔う。

後に、しょうがなく椅子にされ。

その胸はパッド三枚で出来ていた。

A  
l  
i  
n  
c  
e  
/  
s  
t  
a  
y  
  
n  
i  
g  
h  
t

おまけ編　もしもありんすちやんが至高の四十二人目  
だつたら……

ナザリック地下大墳墓　第十階層玉座の間——玉座にはありんすちやんがちよこんと座っていました。

「モモンガしやま、ペロロンチーノしやま、ぶくぶく茶釜しやま、えつと……えつと……たつちやんしやま……しーとべるとしやま、……えつと……ままいかしやま、えつと……えつと……いっばい」

壁にかけられた四十一の旗を指差しながら一人一人の名前を上げていましたが、全員の名前は言えないようでした。

しかし、何故ありんすちやんが玉座に座っているのでしょうか？

ユグドラシル最終日、アインズ・ウール・ゴウンのギルドマスターのモモンガがさつきまでいたのですが、ちよつとの間口グアウトする事になり、代わりにありんすちやんが留守番をする事になったのでした。

ありんすちやんは玉座に座り、足をブラブラさせながらキョロキョロします。隣には守護者統括のNPC、アルベドが立っていました。

ありんすちゃんは手を伸ばすとアルベドの角を触ってみました。

「……ちくちくしるでありんちゅ」

次にアルベドの設定を開きました。文字が多すぎて目がチカチカしてきたのでありんすちゃんは目をこすりました。

「——えくちゅ！」

大変です。ありんすちゃんはいくしゃみをした拍子についてうっかりアルベドの設定を全て消去してしまいました。

ありんすちゃんはコンソールを叩いてみましたが何の反応もありません。次に鼻の穴を髪の毛でくすぐってまたもやくしゃみをしてみますが勿論元には戻りません。

ありんすちゃんは仕方ないので新しくアルベドの設定を書き直す事にしました。

※ ※ ※

「お待たせしましたありんすちゃん。用件を済ませて戻りました。ん？ ……どうかしましたか？」

ありんすちゃんは慌てて玉座から飛び降りるとモモンガを迎えました。

「な、なんでもないでありんちゅ。アルベドが、しえつてい変わってないでありんちゅ

よ

明らかに動揺した様子のありんすちゃんでしたが、いつもの事だった為、モモンガは気にしませんでした。

ユグドラシル終了まであとわずか……モモンガは玉座に座り目を閉じます。隣にはありんすちゃんが入り込み、コックリコックリと居眠りしていました。

……23 : 59 : 57、58、59……

やがてブラックアウトし――

……0 : 00 : 00……1、2、3

モモンガは目を開けました。

「……サーバードウンが延期した？」

隣を見るとありんすちゃんが寝転がってスヤスヤ眠っています。

「……モモンガちゃん、どうちまちちたでありんちゅ？」

モモンガが初めて聞く声に振り返ると、そこには幼女のような表情をしたアルベドが見つめているのです。

※  
※  
※

モモンガが戻る少し前――

「……………えーと……………好きなものは、モンブランつと……………ちよれからお風呂大好き……………お風呂はアワアワのやちゆでありんちゆ。……………でありんちゆ、つと。やつと出来たでありんちゆ」

アルベドの設定を書き直す時にありんすちゃんは自分自身の好物や好きな遊び等を書き込んだ為、アルベドがありんすちゃん化してしまったという訳です。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## おぼろど せいおこくのせいき した

やるだば がわつはつははとわらいます。

れめでお が けんてたたきます。

あたしのこげき やつけてやる。

れでめおす こうげき やるだばとにはききません。

めれでおす はひさつこうげき しまるす。

ねいあ さけびまくす。

れでめおす だんちよしんじやいました。

うわはは と やるだばとわらいました。

おねえちや しんじやた あの おもいます。

けらと なきまくす。

かるかさま あの にげてくたさい。

わかつたわ わたくしにげるわ。

あいんずさま

そこまでだ やるだば わたしがあいて。



やるだばと は かるかもてたたきます。

かすぼん せいおじよ たすけろ。

ねいや さけひまくす。

あいんずさま がんばれ。

やるだばと くらえ かるかぼ だ。

あいんずさま ぴんち。

かるかぼ が ぼちんぼちんあいんずさまたたきまくす。

あいんずさま のぴんちに あかいしやるてあ ぐれたてれほしてきました。

しやるてあ はばさりと かるかぼをきります。

きんきんきんきん

なかなかやりますね。

しやるてあ はあいんずさまをたすけます。

ばみりおのば でやるだばやつけます。

あいんずさま はしやるてあにだきつき おれいにきすします。

よくも やるだばと をたおしたな。わたしはおととの やるばでおと だ。わた

しはおととよりつおいぞ。

きんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきん。





※ ※ ※

お久しぶりです。

私は作者の善太夫です。

ずいぶん太ってしまいました。

私からはイミーナさんの白目を剥いている顔が間近に見えます。

今回はありんすちゃんの記事に空白や句点、改行をしました。

とても大変でした。

え？ 『112ありんすちゃんとおわらないふゆ』でありんすちゃん曰く「……………きつとネイアはちんじやうでありんちゆ。ドツペルはきつとお兄ちゃんでありんちゆ。アインジュちやまがピンチでチャルチエがたしゆけるでありんちゆ。……そうでありんちゆ！」だったじゃないか？ ですって？

うーん。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですか

ら。

では、皆さん生きていたらまたお会いしましょう。  
作者の善太夫でした。

# はたらかない細胞

私たち人間の身体の中ではたくさん細胞たちが毎日、二十四時間休まず働いています。す。

ところでアンデッドの身体の中ではどうでしょう？

人間と同じく赤血球がいました。うーん……なんだか様子が違うみたいですね。

「……あー働きたくね……つか、俺、必要ないんじゃないかね？」

赤血球たちは皆座り込んだり寝転んだりしてしまっています。

「だってよ、アンデッドってそもそも生きていないじゃん。生きていないのに酸素必要か？」

「確かにそうですね。すると先輩、私はどうしたら良いですか？」

赤血球の女の子は困った様子で尋ねました。どうやら彼女は新人みたいです。

「……ん？ いや、俺たちがいるのはアンデッドの身体の中なんだ。新人、お前はアンデッドって知ってるか？」

「……アンデッドですか？」

「——ちがーう！ アンデッドだ!! あぶないあぶない……奴らに聞かれたりした

ら面倒な事に……」

新人の赤血球は訳がわからないようです。

「……あのう先輩。アンデッドとアンデットって何が違うんですか？」

先輩の赤血球は新人の口を慌ててふさぐとかがんで周囲をうかがいます。

「……どうやら奴らには聞かれていないみたいだ。正確には『読まれて』いなかったようだ。いいか？ 絶対にアンデッドの『ド』に濁点をつけ忘れてはならない。それがこのルールだ」

「わかりました先輩。絶対にアンデットとは言いません——あ！」

赤血球の二人はしやがみこんで息を殺します。

「……大丈夫なようだな。そういえば今は平日の午前中か……5ちゃんねるも人が少ないから助かったな」

「……そんなに恐ろしい場所なんですか？ その『ゴツチャンデス』というのは？」

「ああ。恐ろしい。何でも我々の世界の多くがエターナルという魔法で消滅してきたらしい。ある日なんの前触れもなく、な……」

新人はブルリと身を震わせました。

「……そ、それにしても先輩はよくいろんな事をご存知ですね。ここではもう長いんですか？ 私は昨日ようやく一人前に——」

「いや、一週間だ。お前もすぐにわかるさ。何しろアンデッドは死体と同じなんだから。俺たち赤血球が酸素や二酸化炭素を運ぶ必要がない……と。……新人？」

先輩赤血球の話の最中に新人赤血球は好中球の姿を見かけて走っていつてしまいました。

「はっつけつきゅーさーん！ 何しているんですか？」

白血球。好中球のひとつで体内に入ってきた細菌を撃退します。

「……赤血球か。今はする事がなくてな。コイツと酒を飲んでいるんだ」

白血球の隣には銀灰色の細菌がいました。

ケカビ——ムコール属の細菌でタンパク質を分解します。動物の死体に付く事も多く、デンプン糖化力が強いものはアルコール製造に使われることもあります。

「……ケカビです。宜しく願います」

「あ、はい。私は赤血球です。宜しく願います」

ぎこちなく挨拶をかわす二人です。と、突然激しく地面が揺れました。

「……これは……ヤバイな。あいつらが来る……」

先輩赤血球が真っ青になります。とはいえ赤血球はヘモグロビンで赤いのですが。

「せ、先輩。まさか『ゴツチャンデス』が来るんですか？」

新人赤血球の声はたちまちかき消されてしまいました。



「激しい物音と共に空から降ってきたのは大量の——大量の血液——赤血球たちでした。」

「あわわわ……赤血球が一杯……くるし……」

吸血——アンデッドの中でも吸血鬼が行う外部からのエネルギー摂取行為です。たくさん赤血球たちは叫びました。

「……ここが我々の新天地か。さて、頑張つて働くぞー！」

大量に吸血された赤血球たちはどれも新鮮な酸素を持っていました。

「先輩。彼らは酸素をどこに届けたら良いでしょうか？」

先輩赤血球はしばらく考え込んでから言いました。

「この身体の持主は少しばかり脳が栄養不足みたいだから酸素を届けたら少しはまともになるかもしれない。……だが、あそこには……」

「ありがとうございます。脳ですね。……では皆さん私が案内しますから酸素を運びましょう！ 脳へ！」

新人赤血球は大勢の赤血球と共に出かけて行ってしまいました。

「……あそこにはやつかない存在がいるんだが……」

※ ※ ※

脳にやって来た赤血球を待ち構えていたのは――

『ありんす菌』――特定のヴァンパイアにだけ存在する固有の細菌でお風呂と昼寝とお菓子が大好きです。

数えきれない数のありんす菌が赤血球達を囲みます。

「ありんちゅちゅはかくれんぼしるでありんちゅ」

「モンブラン食べたいでありんちゅね」

「ありんちゅちゅと鬼ゴツコしるでありんちゅ」

「お風呂入るでありんちゅ」

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

## 特別編 亡国の吸血娘（五さい）【前編】

ありんすちゃんやんが地上のログハウスにやっ来てると、そこでは戦闘<sup>ブレイク</sup>メイドのユリとシズが何やら悩んでいました。

「どうちたでありんちゆ？ わらわ——わたしが解決<sup>ブレイク</sup>してでありんちゆよ。めいたんで、ありんちゆちやがまああるくかいけちゆしるでありんちゆ」

ありんすちゃんは胸をはりました。

「ああ、ありんすちゃん様。実はナザリック宛にこんなものが……」

ユリはありんすちゃんに小さな小包を見せました。大きさは丁度A5サイズ位でドツシリした重さがあります。

「……爆発物ではない。なんらかの魔法の痕跡もない。だから大丈夫……たぶん」

ありんすちゃんは小包を振つてみましたが何の音もしませんでした。どうやらお菓子ではないみたいです。

ちなみにありんすちゃんの頭を振るとカラカラと音が……ゲフンゲフン。な、なんでもありません。

改めてありんすちゃんは宛名を調べてみました。すると表に『ナザリック地下大墳墓

鈴木悟 様』という宛名書きがありました。

「……えつと、えつと……」

そういえばありんすちゃん漢字が読めないのでしたね。

「……鈴木悟、ですよ。そんな名前、ナザリックにはいないかと……」

「……肯定。ナザリックにスズキサトルというデータは無い。ちなみにスズキゴでもリ  
ンボクゴでも登録は無い」

「……ふ、ふーん」

ありんすちゃんはわかったようなふりで誤魔化します。しばらく考え込む様子を見  
せていたありんすちゃんはいきなり顔を上げました。

「……こりは『ありんちゅちゃ様』と書いてあるのでありんちゅ。ありんちゅちゃを漢字で  
書くところなるでありんちゅ」

ありんすちゃんは胸をそらせ、鼻からフンスと息をはくと小包を手にログハウスを後  
にするのでした。

※ ※ ※

ありんすちゃん屍蟻玄室に戻るとベッドに寝そべり早速小包を開けてみます。中からでてきたのは一冊の本——オーバーロード3の全巻購入特典『亡国の吸血姫』でした。

ありんすちゃんは本をひろげますが、漢字が多すぎて読めません。そこでシモベのヴァンパイア・プライドを呼んで本を読ませはじめました。

ナザリックを出たモモンガは空高く飛び上がります。そして「いくぜ！」というかけ声でたくさんの花火を点火するスイツチを入れます。ありんすちゃんは大喜びです。

つついありんすちゃんは花火代わりに「ヴァーミリオン・ノヴァ」を打とうとしてシモベ達に止められてしまうのでした。

やがていつの間にか廃虚の街にいたモモンガは一人のアンデッドの少女——キーノ・ファスリス・インベルンと出会います。キーノが自分の名前を名乗るシーン——感動的な場面に話があると何故かありんすちゃんは不機嫌になりました。

ありんすちゃんはヴァンパイア・プライドから本を奪うと「なまえはキーノ・ファスリス・インベルン」の一文の上にバツをつけ、『ありんすちゃん』と書き加えました。これで主役はキーノからありんすちゃんに変更です。

すっかり満足したありんすちゃんは枕元に『亡国の吸血姫』を置いて幸せそうに眠りにつくのでした。

※ ※ ※

夜中にふと目が覚めたありんすちゃん「クチュン！」とくしゃみをしました。するとへグレーターテレポーターションが発動してどこか知らない世界に転移してしまうのでした。

ありんすちゃんは立ち上がるとキョロキョロあたりを見回してみます。するとありんすちゃんは誰かを踏みつけている事に気がつきました。

何やらボロ布をマントのように羽織っていてズボンのようにスカートを縫い合わせた服を着た、金髪の十歳位の少女です。どうやら気絶をしまっているようです。

ありんすちゃんは近くの扉の中に少女を押し込めるとなにごともなかったかのような顔をしました。

そこに一人の人物——自称スケルト族の男——がやって来ました。

「……………こんばんは、星が綺麗な良い夜ですね。幾つか聞きたいのですが……………」

ありんすちゃんはコクリと頷きます。

「まずはそうですね。……………私は……………鈴木悟と言いますが、貴方のお名前をお聞きしてもよろしいですか？」

ありんすちゃんはニツコリと笑いました。

「ありんちゅちゅやありんちゅちゅやでありんちゅ」

「……………ん？　ありんちゅちゅやさん？　……………それで早速なのですが、この都市で何があつたのかを教えてくださいませんか？」

悟の問いかけに少女——ありんちゅちゅや五さい——はいろいろ話しはじめました。

「えつと……………モンブランが好物でお風呂が大好き……………ですか。うーん……………その、ありんちゅちゅやさん、誰か大人の人はいないのでしょうか？　お父さんとかお母さんとか……………この世界についていろいろ知りたいのですが」

ありんすちゃんは口もとに指を当てて首をかしげます。

「……………ありんちゅちゅやは5さいだからわかんないでありんちゅ」

「……………」

「……………」

このままでは話が終わってしまう、と思われたその時——

『……………ありんすちゃん様。聞こえますか？　ソリユシヤンです』

ありんすちゃんに〈伝言〉<sup>メッセージ</sup>が届きました。

「ありんちゅちゅやでありんちゅ。チヨリチャ、なんでありんちゅ？」

『……………良いですか？　ありんすちゃん様。ありんすちゃん様は現在夢を見ていますがこ

れはアインズ様のヒロインの座を射止める好機です。おわかりですか？」

ありんすちゃんは首を傾げました。

「飛行機はありんちゅちゃ好きでありんちゅよ」

『……………えつと好機です。…………飛行機ではなくて、ですね…………まあいいわ。ありんすちゃん様には私がセリフを伝えるのでその通りにアインズ様へ言っして下さい』

「…………めんどくちや、でありんちゅね」

『…………私の言う通りにしたら後でおやつを差し上げます』

「——モンブラン！ おっき栗のモンブランがいいでありんちゅ！」

『わかりました。それでは——』

※ ※ ※

「えちよ、こりがわたちの…………ありんちゅちやの物語。…………始まりありんちゅ」

ありんすちゃんはずいぶんいい終えるとホッとため息をつきました。

「…………成る程。そんな事が…………ありんちゅちやさんはこの国——インベリアの王女で父のファスリス王と母のアンネと幸せに暮らしていた。それがある日突然に自らはアンデッドの吸血姫に、父母やメイドを含めて国民がことごとくゾンビになってしまったと



「……それから長い期間、ありんちゅちゃさんは皆を元にもどす研究をしていたんですね」

ありんすちゃんは悟の言葉に目をパチクリさせますが、あわてて頷きました。

「ちようでありんちゅ。……えつと……お城に行くでありんちゅ。怖い怖いをやつちゅけるでありんちゅ」

ありんすちゃんと悟は手をつないで王城

に向かう事になりました。

※ ※ ※

「おんやー……そーちゃん、ここにいたつすか？ アルベド様がお呼びつすよ」

「ルプス、わかったわ。しかし困ったわね」

「どうかしたつすか？ なんなら頼れるルプス姉さんにドーンと任せるつす」

ソリュシヤンは少しばかり躊躇しましたが結局ありんすちゃんのバックアップをルプスレギナに任せる事にしました。

『……つーわけでヨロシクつす。で、ありんすちゃん達は王城つすか？ えつと……んじやドッグ・ゾンビを召喚して口にチェンジリングドールをくわえるつす』

ありんすちゃんはゾンビになった犬を追いかけながら口にアイテムをくわえました。  
「……………んーんーんーんー？」

『……………あ、間違ったつす。さっきのはありんすちゃんじゃなくてアインズ様つす。ああ、アインズ様じゃなくて悟様つすね。……………ええつと……………ありんすちゃんは……………あー！大変つす！ポテチをこぼしちやっつすよ！』

ルプスレギナが大騒ぎしている間にありんすちゃん達は王城を占拠しているアンデッドの首魁——ナイトリッチと対面していました。

〔ヴアーミリオン、ヴワー  
へ朱の新屋へ〕

出会い頭にありんすちゃんが唱えた魔法で首魁は呆気なく消滅してしまいました。

『……………やれやれ。ポテチが半分になったつす。えつと、次はアインズ様からへメッセージ〕がくるんで「嘘だ！」って叫ぶつす。あ、アインズ様じゃなくて悟様だつたつすね」  
ありんすちゃんは隣の悟の顔をじっと見つめました。ですがいつこうに〔メッセージをを使う様子はありません。当然ですよね。

「あーあー。こちらはありんちゅちゃ。メッセージこないでありんちゅ」

『マジつすか？ えつと、本ではアインズ様がアンデッド倒した時にあまりに雑魚などで待たせてたキーノを心配してアインズ様がメッセージ使うすつけど……………』

「……………アンデッドは雑魚でありんちだが……………ありんちゅちゃのバーミリオノバちゅおい

「でありんちゅ」

『……んんん？　ありんすちやん今何処っすか？　もしかしたらアインズ様と一緒にっすかね？　あ、アインズ様じゃなくて悟様だったっす」

「ありんちゅちやはアインジユちやまとお手てちゅないでいますでありんちゅ」  
『わかったっす。じゃ、適当に飛ばして次にいくっす』

『亡国の吸血姫』の内容とは少しづつ齟齬をきたしつつもありんすちやんと鈴木悟の冒険は続くのでした。

——後編へ続く

## 特別編 亡国の吸血娘（五さい）【後編】

※ ※ ※

ありんすちちゃんと悟は城内の探索を始めました。

「えと……埃いっばいでありんちゅ」

「まあ、何年間も使われていなかったわけですしね」

「……床にはちろい埃がちゅもって……なんでありんちゅ？ ルプー？」

『ありんすちやん、それはセリフじゃないつす。ト書きつすよ』

ありんすちやんにルプスレギナがあわてて伝えます。

「ありんちゅちやはちつているでありんちゅよ。トガキは渋い柿でありんちゅ。でも、

フデガキは甘いんでありんちゅ」

ありんすちやんは得意気に胸を張ります。

『……いや、柿じゃ……まあいいつす。……ありんすちやんの次のセリフは『よろしけれ

ば掃除をさせてくださいますか？』つす』

ありんすちやんは悟に向き直りました。

「……………えとえと……………ありんちゅちゃセリフ、よろしく掃除でありんちゅか?……………出来たでありんちゅ!」

ありんすちゃんはうれしそうに手を叩きました。

「うん? よくわかりませんが……………まあ良いですよ」

悟は巻物を取り出すと下級の風精霊と水精霊を召喚して部屋を綺麗にしました。

『……………ありんすちゃん、次のセリフです。』それではどこから調べますか?』つすよ。あ、さつきみたいに『ありんちゅちゃセリフ——』って言っちゃダメつすよ』

「……………えとえと……………ちらべますか? って言っちゃダメつすよでありんちゅ」

悟は一瞬だけ怪訝な表情になりますが、すぐに気を取り直して言いました。

「まずはこの羊皮紙の束から調べてみましょう。あのアンデッドの正体や目的がわかればゾンビになった人々を救う手段がわかるかもしれません」

ありんすちゃんは変な臭いのする羊皮紙の巻物に手を伸ばしました。すると悟は止めようとしません。

ありんすちゃんは悟の手をぎゅつと両手で握り返しました。

「……………アインジユちゃま」

『……………ええ? 違うつす。そこは……………マズイつす。ユリ姉、別にさぼってるんじゃないつすよ。これには理由があるつす……………』

「ん？ いや、罨について調べましたか？ 魔法的な罨がある可能性が……」

悟が上目使いで見つめてくるありんすちゃんに説明します。

「大丈夫でありんちゆ。へナパーム！……こりて罨無くなつたでありんちゆ」

「——え？」

悟は唾然としてしまいました。

『……お待たせつす。ユリ姉を誤魔化して戻つてきたつす。次のセリフは『申し訳ありません。悟さま。私にはこの文字を読むことができません……』つす』

「えとえと……ありんちゆちや読めないでありんちゆ」

「……うん。確かに燃えつきてしまいましたから誰にも読めませんよね」

悟は気を取り直して回収したアイテムを床に並べていきます。

「では、このアイテムを見てもらえますか？」

ありんすちゃんはアイテムを手にとりました。

『……えつと、〃イルビア・ホルダンの仮面〃、〃ロープ・オラ・ファーストインベルン建国王の長外套〃、〃ガントレット・オラ・グリフォンロード鷲獅子王の爪〃、〃ロスト・ホワイต์虹よりこぼれし白〃 つすね。ありんすちゃんは透明な短杖を拾い上げて『これです！ これがあれば！』つて叫ぶつす』

「わかつたでありんちゆ」

ありんすちゃんは床のアイテムを一つ拾い叫びました。

「こりで……ええと……こりでありんちゅ」

悟はありんすちゃんに手にした皮袋を見ながら考え込みました。

（この中身はどうやら金貨みたいだが……この世界での蘇生魔法は金貨が必要という事だろうか？ それとも『地獄の沙汰も金次第』という事なのだろうか？）

悟が考え込んでいるとありんすちゃんがヒョイと床から銀のネックレスを拾い上げ、自分の首にかけました。

「こりはありんちゅちゃんに似合うでありんちゅ」

（ん？ ……なにかシンボルや文字らしきものが刻まれているが……魔法のアイテムではないしまあ良いだろう。しかしあのアンデッドは何故こんなものを身に付けていたのだろうか？）

※ ※ ※

ありんすちゃんと悟は城下でゾンビを一体掴むと〈ゲート転移門〉を使い都市の外に移動しました。そこでゾンビを殺しました。

「それではそのアイテムを使ってくれますか？」

悟がありんすちゃんに振り返りましたが、ありんすちゃんはまごまごしています。

『ありんすちゃん、さっきの透明のワンドを使うつすよ』

困っているありんすちゃんにルプスレギナが〈メッセージ〉ですかさずサポートします。

「ありんちゅちや、持っていないでありんちゅ」

『……え？ さつき透明なワンドを拾ったじやないっすか？』

ルプスレギナは動揺しました。

「……えと、えと、さつきは金貨たくさん拾ったでありんちゅ。ワンドは置いてきたでありんちゅ」

ありんすちゃんは胸を張って答えました。

『駄目っすよ！ それじゃ話が進まないっす。取りに戻るか〈グレーターテレポーション〉で取り寄せるっす』

ありんすちゃんは頷くと〈グレーターテレポーション〉を唱えました。次の瞬間、ありんすちゃんの右手には先程の透明なワンドがありました。

『準備が出来たらそのワンドを使うっす』

ありんすちゃんはコクリと頷き「えいっ」とワンドを使いました。

しかし何も起こりません。

「……あの……私にでなくこのゾンビの死体を使うんですよ」

ありんすちゃんが今度は死体にワンドを使うと死体はゆっくりと起き上がりよたよ



と歩きだしました。

『ありんすちゃん、次のセリフです。』——悟さま。私が研究して努力すれば、みんなを、みんなを元に戻せると思いますか？』つす』

ありんすちゃんはじつと悟の目を見つめました。

「……えとえと……アインジュちゃま。研究したらみんな元気なりまちゆでありんちゆか？」

どことなく棒読みなありんすちゃんの言葉に悟が答えました。

「可能性が絶対にゼロとは言えない。俺には分からないが、この現象を説明できる人物がこの世界のどこかにいるかもしれない。そうすればどうにかできる手段がわかるかもしれない。ただし……かなり困難だろうな」

『ありんすちゃん、ここで泣くつす』

「どうちて泣くでありんちゆか？ ありんちゆちはおつきなつたから泣かないでありんちゆ」

『……あー……ここでお涙頂戴してアインズ様がへ星に願いを』で『この都市の住人たちを元に戻す方法を教えたまえ！』って願うつすけど……飛ばして次に行くつす。じゃ、『共に世界を見に行く、私がついて行つても本当によろしいのでしょうか』って言うつすださいつす。それで手を見ながら『お邪魔に——』って言うつす』

ありんすちゃんは領きました。

「えと……世界を見るいくありんちゆ」ありんすちゃんは手を見ながら続けました。「邪魔でありんちゆ」

「……乗りかかった船だ。もう少し協力するさ。アリンチュチャさん。共に、そう共に旅をしよう」

かくして原作『亡国の吸血姫』とは微妙に異なりながらもありんすちゃんは鈴木悟と一緒に旅をする事になりました。

旅の支度の為に馬車を調達しようとする際に悟が見せた『カボチャの馬車と写るドレス姿のぶくぶく茶釜』の写真を見たありんすちゃんが『どちらでもカボチャの馬車に乗るでありんちゆ』と駄々をこねたりという事がありました……仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

尚、この後ありんすちゃんは悟と一緒にインベリアを死の街に代えた元兇、元、の竜王で現、朽棺の竜王キュアイーリムⅡロスマルヴァーと闘う事になりますが……機会があればまたいつかの話という事にします。

ご注文はうなぎですか？

ナザリック地下大墳墓第二階層にある屍蟻玄室を訪れたアインズは違和感を覚ええました。

「……うむ？ ……なんだこれは？」

屍蟻玄室の入り口には立看板が置かれていました。

「……『らんぷりい はうす』……なんだ？」

アインズは考え込みました。どうやらありんすちゃんは何やらまた、始めたみたいですね。

「………入るべきか………うーむ………」

アインズはこめかみを押さえて考え込んでいました。改めて看板をよく見ると『らんぷりい はうす』の文字の下にかすかに『ラビットハウス』という文字の跡がありました。

「……『ラビットハウス』……だと？」

アインズは思い出しました。これは頭に丸いウサギを乗せた少女が喫茶店で働くストーリーのアニメに出てくる店名です。たしか心がピヨピヨするやつです。

「……………戻るか」

アイنزが扉に背を向けました。どうせ中ではありんすちゃんやんが頭に大きな毛玉でも乗せて待ちかまえているのでしょうか。

※ ※ ※

執務室のある第九階層に戻ってきたアイنزはまたしても変なものを見つけました。  
『ラビットハウスはこちら』

それは通路に置かれた立看板でした。立看板に書かれた矢印は副料理長のピツキーがバーテンをしているショットバーを示しています。

(……………なんだなんだ？ 流行っているのかこれ……………)  
アイنزが看板を前にして考え込んでいると――

『……………これは至高の御方、アイنز様。もしかしてアイنز様もバーにいらつしやるので？』

アイنزが声に戻るとそこには部下に抱えられたエクレアがいました。

「実はピツキーが最近バーの模様替えをしたそうでした……なんでも守護者統括殿の指揮でずいぶん凝ったものにするのだとか……」

「……ほう。アルベドが……」

アインズは少し興味を持ちました。

「他にもプレアデスのナーベラル殿も手伝っているそう。があるずバー、とかいうものだそうですよ」

「……ガールズバー……だと？」

アインズは嫌な予感がしてきました。

「衣装にも凝ったらしいです。ばにいがーるとかいうウサギをモチーフにしたものらしいとか。それではお先に失礼いたします」

恭しくお辞儀をするとエクレアは部下に抱えられたまま『ラビットハウス』に入っていきました。

「……うむ。仕事に戻るか……」

アインズはラビットハウスを後にすると執務室に戻っていきました。

※ ※ ※

『らんぷりい はうす』ではカウンターにありんすちやんとアウラ、マールレの三人が暇そうにしていました。三人とも可愛らしい色違いの制服を着ていてとても似合っています。

ありんすちやんは髪をお団子にゆつて、なぜか頭の上にスピアニードルの子供を乗せています。

「おかちいでありんちゆ。アインジユちやま、来ないでありんちゆ」

「……うーん。この時間には第二階層を通る筈だったんだけどね……」

ありんすちやんの言葉にアウラも首をかしげました。

「ちえつかくアインジユちやまにおいちいコーヒーのましえるでありんちゆに……残念なんでありんちゆ」

ありんすちやんがため息をつきました。

「……あ、あの……いま気がついたんだけど……」

ふと、マールレが口を開きました。

「……アインズ様は、あの、コーヒー……飲めないですよね？」

「——あ……」

仕方ありませんよね。だって、ありんすちやんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

「……コホン。ところで……店の名前の『らんぷりい はうす』ってどういう意味なの？」

何事もなかったかのようにアウラが訊ねました。

「知らないでありますちゅ」

「——は？」

「ルプーが『ありんすちちゃんのお店ならこれっすよ』ってちゅけてくれたんでありんちゅ。きつと『かわいくてかちこいありんちゅ』という意味なんでありんちゅよ」

うーん。ありんすちちゃん、残念ですがランプリーって鰻という意味ですよ……

# (祝) アニメ4期&劇場版聖王国編制作決定

ナザリツク地下大墳墓 第二階層〈屍蠟玄室〉――

「ちやるちえあ・ぶらどほおるる、参りまちた!!」

扉を勢いよく開き、深紅のフルアーマーにスポイトランスを装備したありんすちゃんが入ってきます。

「……うーん……全然ダメつすね。いいですか？ シャルティアはアインズ様にあるまじき失点をしていたんすよ？ そんな時にアインズ様直々に命令を受けてはりきっているんす。もつと必死さが必要つす」

ルプスレギナの駄目出しにありんすちゃんは一瞬、ぐぬぬといった表情になります。が、すぐにやり直しをします。

「ちやるちえ、ぶらどほるる、まいりまちやた!!」

うーん……なかなかうまくいかないみたいですね。

「いいつすか？ アニメはあまくないんつす。私だつて3期の時に『失望した』つてアインズ様から言われるシーンで散々ネットで叩かれたつすからね。やれ、もつと絶望的になるはず、だの、自殺したくなる心情が出なくてはおかしい、だの……」



ルプスレギナの瞳から光が失われていきます。余程辛い事があったのでしようね。  
「がんばりまんちゅー!」

ありんすちゃんはギユツとこぶしを握りしめると演技の稽古を再開するのでした。

※ ※ ※

ナザリック地下大墳墓

第九階層〈執務室〉ではアインズが階層守護者達と一緒にリモートビューイングを使つてありんすちゃんの様子を観察していました。

「……うん、あれは間違いなくアニメ4期に備えての練習……だよな?」

「はい。アニメ4期は帝国とドワーフ国が舞台になると聞いておりますので……」

アルベドの答えにアインズは頭を抱えました。

「……するとありんすちゃんは知らないのだな?」

いならば守護者達は黙って領きました。

「……困ったな。アニメ4期に登場するのはあくまでもシャルティアなんだが……カド●ワはなんと言つてきているのだ?」

「——はっ。我々の予測通り『ありんすちゃんという少女がシャルティアを演じる事は

認められない』との事です」

即座にデミウルゴスが答えます。

「……あれだけ本人がやる気になつて居るのだが……だが、仕方あるまい。ありんすちやんを説得するほかなさそうだな」

アインズの発言に皆の視線がアウラに集まります。

「——え？ あたし？ あたしにありんすちやんの説得？」

「……仕方ないわ。だって貴女はありんすちやんと違つてアニメ四期で活躍するじゃない？ 下手したら恨まれるかもしれないわ」

そして結局、ありんすちやんの説得はアウラがする事になりました。ありんすちやんは泣き叫び、駄々をこね、地団駄を踏み、最後には監督を脅しに行くと言い張り大変だつたそうです。

仕方ありませんよね。だってありんすちやんはまだ、5歳児位の女の子なのですから。

※ ※ ※

「アウラよ。ご苦労だった。……とところでデミウルゴスの姿が見えないが……？」

アインズの問いかけに気まずそうな様子でアルベドが答えました。

「……………それが……………その……………アインズ様。デミウルゴスは劇場版の稽古に張り切っていてまして……………特に聖王国編の後半のアインズ様と戦うシーンをいたく楽しみにしています。今もプレイアデスを連れて……………」

「……………なん……………だ……………と?」

アインズは頭を抱えました。

「……………あのシーンのヤルデバオトはデミウルゴスではないぞ? ゴリラル——いや、憤怒の魔将だぞ? ……それにプレイアデス……………まさかオレオールもか?」

「……………オレオールは初めてナザリツクの外に出れるとそれはもう、大変な喜びようだとか……………」

「……………馬鹿な……………そのシーンのプレイアデスはドツペルケンガーだぞ? オレオールに至ってはパンドラズ・アクターなんだが……………」

アインズにとって胃の痛くなりそうな問題がまだまだ続くのでした。

## かんぜんしんさくげきじょうばんありんすちゃん

ナザリック地下大墳墓 第二階層へ屍蟻玄室——入り口には『かいきちうはいろな』と大きく書かれた貼紙がありました。どうやら中で秘密会議が行われているようですね。

「あー、あー……コホン！」

ありんすちゃんはシモベのヴァンパイア・ブライドを集めて大きく咳をしました。

「こりはありんちゅちやが手にいれちや、オバロドの映画の書かれちやちゅでありんちゅ」

ありんすちゃんは原稿の束を取り出しました。あ、あれはたぶん現在制作中の劇場版オバーロード新作の聖王国編の原稿みたいですな。

「こりはポイしるであります。しよいでありんちゅちやが主役のオバロドの書いたの取り替えしまるすでありんちゅ」

どうやらありんすちゃんは本気の様子です。

「いっばいいいっばいアイデア出すであります。そいでありんちゅちやのファンイッパイイパーイしるであります」

ありんすちやんの視線にヴァンパイア・ブライドの一人がおずおずと手を上げました。

「……あの……そうですね。アニメにするのでしたら人気作品に内容を寄せるのはいかがでしょうか？」

「それは良いでありんちゆ。さつちよくしるでありんちゆ」

ありんすちやんは大興奮です。

「えとえと……まじゆありんちゆちやには妹がいるてありんちゆ。で、ありんちゆちやが町に出かけて帰ってくりゆと妹が鬼になつちえるんでありんちゆ。ありんちゆちやは修行ちて鬼退治の剣士なるますでありんちゆ。ちよちてありんちゆちやが汽車に乗って鬼をやつちゆけますでありんちゆ！」

うーん……それって鬼●の刃ですよね？

「ありんすちやん様。その内容だとアニメ化は無理かと……」

ありんすちやんは腕を組んで考え込みはじめました。

「……あの……ありんすちやん様。今度のアニメ4期は帝国が舞台らしいですが……」

行き詰まったありんすちやんにヴァンパイア・ブライドが助け船を出します。

「わかっちゃでありんちゆ。ありんちゆちやは帝国に追われるですますでありんちゆ。ありんちゆちやはフォーシユの力でちゆよくなりますでありんちゆ。ありんちゆちや

は最後のジエツタイの戦士になりますでありんちゅ！」

「……ありんすちゃん様。それも他の作品に似すぎているのでは……」

ありんすちゃんはぐぬぬといった表情で腕を組みます。

「あ、あの……スポーツもの、はいかがでしよう？」

ありんすちゃんの目が輝きだしました。

「えーと、ありんすちゃん様は女子サッカーのエースで試合で大活躍します」

「ありんちゅちや大活躍してでありんちゅ！」

「ですが激しい動きで胸のパットをなくしてしまいます。タイトルは『さよなら私のグ

ラマー』……」

「——しよなんダメでありんちゅ。こうなっちゃら——」

ありんすちゃんは何やら思いついたみたいですが……

そしてその夜、オーバーロードの原作者である丸山く●ね氏が突如現れた謎の幼女に連れ去られたそうです。

うーん。仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ、5歳児位の女の子なのですから。

# オーバーロード劇場版聖王国編公開記念 ありんすちや ん再放送を見る

ありんすちゃんはトコトコとナザリック地下大墳墓 第六階層にやってきました。

円形闘技場——コロッセウムの中央で足を止めたありんすちゃんはキヨロキヨロと回りを見回しました。

「とあー！」

掛声と一緒にアウラが建物から飛び降りてありんすちゃんの前に立ちました。

突然だったのでありんすちゃんは思わず尻もちをついてしまいました。

「ぶいー……………なんだありんすちゃんか」

両手にピースを作ってみせたアウラは顔をくもらせる。

「……………ありんちゅちやは、おどろいちゃちないでありんちゅ。ちよつとだけ、ビクツてなっただけでありんちゅ」

ありんすちゃんは何もなかったかのように立ちあがりました。

「……………お姉ちゃん、待って…………」

息を切らせてマーレがやってくる、ありんすちゃんはビシツと指を突き詰めて言い

ました。

「マールはおちよいんでありんちゆ。おかげでアウアウにビックリしちやでありんちゆ」

「……えつと……あの、ゴメンなきい？」

戸惑うマールを制してアウラがありんすちやんを指差します。

「——で、ありんすちやんはなんの用なのかな？ 単なる冷やかしなら帰ってもらうけど？」

ありんすちやんはニヤリとすると胸をはります。

「しゅごいでありんちゆ。オバロド映画、秋にやりますでありんちゆ！ ありんちゆちやんはヒロインになりますでありんちゆ！」

ありんすちやんは鼻からフンスと息をはきます。

興奮するありんすちやんとは対象的にアウラはジト目で眩きます。

「……知ってる。それに今、M●TVでアニメ1期の再放送してるし……」

「……再放送……？」

ありんすちやんは小首をかしげます。途端にアウラはニヤリとしながら言葉を続けます。

「……ふうん。なんだ、ありんすちやんは知らないんだ？ 先週から水曜日の夜11時



からオーバーロード1期の再放送しているんだよ？ さっきのあたしが飛び降りたシーンも出てきたんだから」

アウラは得意気にまたピースを作って見せました。

「……ありんちゅちやもいぱーい写るんであるますでありんちゅ。かわいいかわいい、いぱーいでありんちゅ」

「うんうん。だと良いね……まあ、自分の目でみると良いんじゃないかな？」  
ありんすちゃんは鼻息を荒くしながら第六階層を飛び出していきました。

\* \* \*

「……………夜更かし、ですか？」

第二階層の屍蟻玄室に戻ってきたありんすちゃんの言葉にしもべたち——ヴァンパイア・ブライドたちは戸惑いの言葉を洩らしました。

「ちようでありんちゅ。オバロドの見る夜のじゅうち時まで、眠らないでありんちゅ」  
「……………えつと……………で、ですが……………」

ヴァンパイア・ブライドたちの脳裏には夜9時前にはベッドでスヤスヤ眠るありんすちゃんの姿が浮かびます。

——うーん。ありんすちゃんは果たして夜11時まで起きていられるのでしょうか？

マーレから差し入れてもらったブラックコーヒーを脇にオーバード再放送の視聴に望んだありんすちゃんでしたが………

残念ながら睡眠に負けてしまいました。8時を回ったあたりからまぶたが重くなり、9時にはスヤスヤ眠ってしまったそうです。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。